


第44回

# 日米学生会議

## 日本側報告書

地球共同体への一歩  
～ 今果たすべき私たちの役割 ～  
1992. 7 .26～ 8 .23

 財団法人 国際教育振興会  
第44回日米学生会議日本側報告書作成委員会編

## 第44回日米学生会議日本側報告書によせて

第44回日米学生会議実行委員会

日本側実行委員長 遠藤 繁

第44回日米学生会議は1992年（平成4年）7月26日より8月23日までアメリカはワシントンDC、ナッシュビル、コロラドスプリングスをまわりながら行われました。今回は「地球共同体への一歩〜今果たすべき私たちの役割〜Exploring Our Responsibilities to the Global Community」をテーマにボランティア活動や共同声明を作成したりと、「日米学生会議としての」行動を試みました。学生たちの日米学生会議への関心は今日も高く、日本全国から多数の問い合わせが届き、結果として東京近郊、大阪のみならず北海道、四国からも参加者が集まり、学部学生から大学院生まで幅広い年齢層の日本側参加者計40名が会議に臨みました。

ワシントンでは黒人に門戸を初めて開いたというハーワード大学に滞在しました。いわゆる黒人居住区に滞在して、私たちは住みわけをしているアメリカというものを目の当たりにしました。折しもロスアンゼルス暴動などがまだ記憶に新しいなかでの生活は、どんなことに彼らが怒っているのか、そして自分たちには何ができるのかを日常の出来事から深く考えさせる経験となり、さらにこうしたことを考えること自体の再検討を迫られました。

例えば黒人の学生から幼い頃にどんな辛い思いをしたのか、民族共存などについてどう思うのか、ということを知ることができればそれはそれでとても「勉強」になるのかも知れません。しかし、私には「口では聞こえのいいことを言いながらいざというとき、自分はどれだけ真剣に考えることができるのだろうか。」ということがいつも疑問でした。そして答えが出せずにいることに虚しさや恥かしさを覚えるのでした。こうした民族問題を考える、というようなとき「差別は良くない」とかその類いの言葉はよく耳にするわけですが、それが空虚に聞こえてならず、その理由が自分の先の疑問と深く関わっているようで今までの自分の言葉やおこないが深い再検討を迫られました。そして「自分のとるべき道は」と考えあぐねたのです。

テネシーの大学で昼食をとっていたときのことです。私はアジア系の学生と適当に食べ物を選んでいました。するとまわりにいた中学生ぐらいの白人の子が順番を守らず乱暴に食べ物を取り始めたのです。そしてアジア系である彼に対してなにか早口で言うと突き飛ばすようにして去って行きました。それが私にはあまりに好戦的に見えてならず、彼に何を言われたのか尋ねてみました。

「幼い人だからね、しかたがないよ。」

彼はこのような意味のことを言って、話題を他に変えてしまいました。

このことがアメリカの民族問題のことと結び付いているのか、ということには分かりません。しかし、こうしたことから争いごとは起って行くのではないかと、という疑問がおこり、私はこのことがとても気がかりでした。しかしそのことを彼に問い質すのはためらわれ、彼が一瞬見せた嫌悪の表情を気にしながら私はその日の食事をしたのでした。

これらは今回の会議での私の経験のはんの一部です。この経験が今後いろんな意味を持って自分に問い掛けをしてくるような気がしています。もし他の学生たちにもそうであるなら、日米学生会議をやって良かったのだ、と思います。恐らく会議を振り返って幸せな気分になる人もいれば、言葉が通じなくて苦しんだり、自分のことを分かってもらえなかったりしていい思いをもてなかった人もいるかも知れません。しかしこうしたことをどう捉えていくのか、こうした経験を生かしてどう進んでいくのか、というように今回の会議が様々な「考える」契機になっていれば私も嬉しく思います。

これを手にされた方々も読むに従って日米学生会議を擬似体験して頂けるならば、と思います。今回はより多様な意見を知ることができるように一人一人の考えを掲載するように努め、アメリカの学

生からの視点も載せています。参加した学生一人一人の実際の経験や主張、意見が綴られています。この冊子を読んで新たに視野が広がったり、日米学生会議に参加してみたい、アメリカの学生と語りた、と思って頂けたら幸いです。そして皆さんとともに「今果たすべき私たちの役割」を考えていきたいものです。

最後になりましたが、この会議の実現には多くの方々のご助言や賛助があったことを申し上げなければなりません。中でも賛助団体・後援団体各位をはじめ財団法人国際教育振興会の方々、特に会議に同行して下さった水野詠子氏、アメリカ側でサポートして下さったJASC.INC.の دونالد・アルブライト氏、グレッチェン・ホップズ氏、ジェニファー・デミング氏に感謝の意を表したいと思います。



第44回日米学生会議（ナッシュビル市長と面会）

## アメリカ側実行委員長からのメッセージ

我々第44回日米学生会議の参加者がコロラド・カレッジでそれぞれ自分の道を歩き始めて数ヶ月がたちます。我々是一緒に過ごした時の中で何を学んだのでしょうか。我々は何をともに分かち合ったのでしょうか。我々は個々に、また1つのグループとして集散的に何を経験したのでしょうか。あの会議の最後の日、我々一人一人にとってのこれらの質問に対する答えはそれぞれ異なっていました。わたしはあの日の個人的な思いを、ある一人の第44回JASCの経験への洞察として、お話ししたいと思います。

あの日、さまざまな感情の波にもまれながらも、わたしは中でもとりわけ強かったものを覚えています。そう、わたしは泣いていたし、悲しかったのです。しかしそれにもましてわたしはとても誇りを感じていたことを覚えています。太平洋の両側で会うことのできる中で一番傑出した、正真正銘魅力的な人々のうちの何人かと思い出に残るような1ヶ月を過ごすことができたことに対して、そしてこれらの人の多くを今わたしの友人と呼べることに対して、また彼らが生涯の友になるだろう事に対して、誇りを感じました。しかし、何にもましてわたしの誇りに感じたのは、このJASCにおいて達成しようと設定した当初の目標であり、またそれを完全に達成したことでした。

第44回JASCの参加者として、わたしはJASCの輝かしい歴史に新しい一章を書き入れることに参加していたのです。我々が自分たちで設定した多くの当初の目標は第44回JASCにとってはとても自然な目標であるように思えました。長いJASCの歴史の中で、ナッシュビルもコロラド・スプリングスも受け入れ都市になったことはまだかつてなかったのです。この両地域における外国からの投資の拡大の中、我々の会議は両地域から多くを学ぶと共に、彼らも我々から何かを学んだことと思います。我々はMTSU（中部テネシー州立大学）でも、Colorado Collegeでも温かい歓迎を受けることができました。

近年、日本の国会議員によってなされた無神経な発言のためにアフリカ系アメリカ人地域と日本人の間の緊張が高められて来ました。この問題にできるだけ正面から取り組み、アフリカ系アメリカ人地域の人々と会議参加者の会話の機会を増やすため、JASCは、ワシントンDCにおいて歴史的な黒人大学の一つであるHoward大学を滞在先として選びました。スムーズで実りある滞在が確かなものとなるためには、特にHoward大学のビジネス・スクールによって大変多くの時間と努力が払われました。一年を通してJASCが出会う多くの人々や団体の親切に対して、もう一度感謝の気持ちを表すほかに、今となっては我々がお返しできることはほとんどありません。

過去においてJASCでは分科会単位でボランティアの経験をして来ました。しかし、第44回JASCでは、JASC史上はじめてボランティアリズムが参加者全員による考察と経験の焦点となりました。「地球共同体への一步～今果たすべき私たちの役割」というテーマに沿って自分の一部を他の人に分け与えることの意味について重点を置くのはとても自然なことでした。

最後のJASCにとっての「初めて」は、共同声明を作ることでした。会議中、貿易、ジェンダー、民族、環境、ボランティアリズム、そして戦争と平和、といった諸問題について、共同声明の形成に向けて我々の意見、考え、提案などを我々は出して来ました。参加者同士、そしてまた多くの著名な講師の方々との議論を反映した我々の考えを編集したこの共同声明は、第44回JASCの参加者にとってはほかの人々に我々がより広いスケールで学んだことを伝える媒体となったのです。共同声明は参加者一人一人の間だけでなく、我々の声に興味をもつ人すべてに向けられた公式の文書です。私はそれが日米間で行われた1ヶ月にわたる協力と、アイデアや知識を分かち合ったことの象徴となるこ

とを望みます。

私自身にとって第44回JASCは、私の住む世の中で私が成長し、違いを作るきっかけとなりました。他の人にとっても、他の多くのことを意味すると同時に、第44回JASCはこのような意味をもっているかも知れません。しかし我々全員にとって共通の第44回JASCの意義は、JASCが我々にとって重要な問題を我々自身で、あるいは他者を通して探求した「時」であり、またこれらの問題を決して二度と無視することを我々に許さない生涯の友を作った「時」であるということに認識することにあります。

最後に、過去、そして現在においてJASCに貢献して下さった方々と、将来における更なるJASCの成功を確かなものにして下さる人々すべてに感謝致します。また、JASC Incの会長を引退なさる Donald Albright氏にも心からの感謝を述べると共に、ますますのご活躍をお祈り致します。彼のご経験、忍耐、そして指導力をもってJASCは我々のしたいことすべてを行うことができました。全実行委員に成り代わり、貴方とともに仕事できたことは本当に名誉なことでした、と述べさせていただきます。最後になりましたが、アメリカ側実行委員に成り代わり日本側実行委員のみんなへ一言。本当に素晴らしい経験をすることができました。愛しています。連絡を取り続けて下さい。そして、私たちにつきあってくれて、すべてをまとめてくれて、"Hontoo ni, Domo Arigatoo Gozaimashita".

心を込めて、

Kevin D. Kim

第44回日米学生会議

アメリカ側実行委員長

(訳・磯部聡子)

## 第44回日米学生会議 日本側報告書 目次

第44回日米学生会議 日本側報告書によせて	遠藤 繁	(1)
アメリカ側実行委員長からのメッセージ	Kevin Kim	(2)
目 次		(5)
第44回JASCの代表諸君へ	板橋 並治	(8)
日米学生会議の沿革		(11)
第44回日米学生会議 実施要領		(12)
日程・参加者名簿		(15)

### 第1部 第44回日米学生会議の活動

#### 1. 準備活動

準備活動の流れ		3
日本側実行委員長としての日常	遠藤 繁	4
関門地区及び福岡における活動	松井 恵一	6
広 報	鳥越あすか	6
実行委員としての準備活動(広報)	野田 雄輔	8
選考という仕事	猪刈 由紀	10
*エッセイ「病院廻り」	松井 恵一	11
選 考	比企野慶子	12
経 理	佐野日出之	13
財務活動報告	白石 史朗	13
全体合宿について	割石 俊介	14
定例会		
東京定例会	磯部 聡子	15
関西定例会報告	菅 武志	16
札幌定例会	高橋 博	16
フィールドトリップ		
径書房フィールドトリップ	佐野日出之	17
被団協を訪ねて	高橋 直子	18
OCCUR(動くゲイ&レスビアンの会)	坂田亜也子	19
ブリジストン美術館を訪ねて	増井早知峰	19
JETRO(日本貿易振興会)	工藤 博海	21
自由の森学園	増子 聡	21
NHK	西元 宏治	22
フィールドトリップ報告 ~UNHCR~	高橋 香織	22
関西フィールドトリップ(NGO/PHD)	松本 安代	24
関西フィールドトリップ—神戸中華同文学校—	阿古 智子	24
フィールドトリップ・イン・サッポロ	寺澤 美紀	25
関西フィールドトリップ 自衛隊大久保基地へ	田中 剛	25
結団式報告	白石 史朗	26

直前合宿	割石 俊介	26
<b>2. 本会議内容</b>		
ジョイント・オリエンテーション	松井恵一/梶原絵麻	29
開会式	遠藤 繁	30
米国国務省にて	平竹 雅人	32
日本大使館	市川 裕康	33
地球環境フォーラム		
総括	野田 雄輔	34
ワシントンDC	坂口 誠二	34
テネシー (ナッシュビル)	高橋 博	35
コロラドスプリングス	野田 雄輔	37
民族問題フォーラム		
総括	鳥越あすか	38
ワシントンDC	増井早知峰	39
テネシー (ナッシュビル)	福島 紀子	40
コロラドスプリングス	鳥越あすか	41
*エッセイ「FUTURE HOPE」	坂田亜也子	42
戦争と平和セミナー	猪刈由紀/芝崎厚士	44
戦争と平和セミナー パート2	高橋 徳嗣	47
ボランティアセミナー		
総括	比企野慶子	48
ワシントンDC	工藤 博海	49
テネシー (ナッシュビル)	増子 聡	50
テネシー：グループ別報告	比企野慶子/工藤博海/高橋香織 増子 聡/久米恵子	50
貿易シンポジウム	白石史朗/堀部 智/竹井亮一	51
ジェンダー・ナイト		
ジェンダー・ナイトをめぐる雑感	佐野日出之	55
ジェンダー・ナイト	大谷 裕子	56
レセプション		
サンダース氏主催のレセプション	寺澤 美紀	57
テネシーでのレセプション	阿古 智子	57
*エッセイ	田中 剛	58
レストステイ	猪刈 由紀	59
オブリランド	芝崎 厚士	59
*エッセイ「ナッシュビルの友人」	遠藤 繁	61
コロラドを振り返る	五所恵実子	62
ホームステイ	磯部 聡子	64
新実行委員選挙について	猪刈由紀/久米恵子	65
新実行委員ミーティング	松本 安代	67
閉会式によせて	平松 英人	68
*エッセイ「閉会式の日」	遠藤 繁	68

### 3. 本会議後の活動

日韓学生フォーラムとの合同報告会	堀部 智	70
報告会	遠藤 繁	71

## 第2部 分科会報告

マスメディアの功罪	75
第3世界問題	84
教 育	90
現代政治のダイナミクス	97
法と変わりゆく社会	103
芸術創造	109
企業と社会	116
医療と社会	127
哲学と宗教	131
科学技術の新時代	139

## 第3部 エッセイ

エッセイ	149
五所恵実子、増井早知峰、高橋 香織、芝崎 厚士、清水竜太郎、甲斐 順子 Lee Silverman、阿古 智子、高橋 直子、西元 宏治、Andrew Bodziak 野田 雄輔、Jin Gil Lee、田中 剛、Zubin Gidwani	

## 第4部 共同声明

共同声明作成にあたって	長野 宇能	179
共同声明		180

## 補 遺

宮沢首相・ブッシュ大統領からのメッセージ	191
宣言書	192
賛助団体一覧	194
第45会日米学生会議のお知らせ	196
編集後記	197



## 第44回 J A S C の代表諸君へ

板橋 並治

第44回日米学生会議が、この夏ワシントンDCで開催されることになっていたのですが、私はその開会式に出席して、日米両国の代表諸君と話し合う機会を待ち望んでいたが、1月末から悩まされ続けていた激しい腰痛を克服することができず、出席を断念せざるを得なくなりました。

1947年に復活された第8回会議以来、一度も欠かすことなく開会式に出席し続けて来た私にとり、全く断腸の思いがしたが、幸いビデオ・テープのお陰で、一方的ではあるが代表者諸君に次の様に話しかけることができたのは、大きな救いであった。

会議の開催にあたって、この日米学生会議が発足するに至ったいきさつ、特にこの会議が「学生の頭脳から生まれ、学生の不屈の努力によって実現された」という事実とその後の略史について述べたいと思う。そうすることによって、代表諸君がこの会議の誇るべき伝統即ち、「学生の、学生による、学生のための会議」という伝統をよく理解し、この会議の成功に全力を尽くそうという気になってもらいたいからである。

会議の起源は今から59年前の春、すなわち1933年の新学期が始まった頃にさかのぼる。東京の諸大学のESS会員の有志が青山学院大学の中山公威君の発議で集まり話し合ったのが発端である。当時の学生は、会合すると天下国家を論ずる傾向が強かったが、我々もご多分にもれず国際問題特に日米関係について論じあった。

1931年の満州事変、すなわち日本軍の満州出兵以来、米国の対日感情が悪化しつつあったにも拘らず、政府はその感情を和らげるための有効な手を打っていない、と我々は感じていた。

そこで、このような緊迫した日米関係を緩和するため我々は「学生として何をなすべきだろうか」「自分達に何ができるだろうか」と論議を続けた結果、「米国の大学生50名を招いて会議を開き、お互いに素直な意見を交換することによって相互理解と信頼を促進し、友好関係を確立すべきである」という結論に達した。これは「世界の平和は太平洋の平和に、太平洋の平和は日米間の友好関係の確立にある」という考えに基づいている。

会議を実現するにはまず、50名の米国学生の滞在費を確保しなければならぬと考え、大企業の幹部の方々にお目にかかり資金援助をお願いした。しかし返事はいずれも「それは素晴らしい計画だが…」というもので、いつも「だが」で終わってしまうのであった。

「本当に素晴らしい計画と思うのなら、なぜ援助して下さらないのであろう」といろいろ話し合った結果「学生の分際で、米国から50名の学生を招くことは到底不可能だ」と考えているらしい、ということが分かった。そこで我々は学生の力を立証すべきであると考え、日米学生親善使節団を米国に派遣することにした。私を含めた4名の学生が横浜を出航したのは1934年の春のことだった。埠頭では各大学のESSの会員が盛大な見送りをして

くれたので我々使節団員は興奮していささかポーッとしていたが、富士山が水平線に消えた頃にはその興奮からさめて深刻になり、「50名連れ帰らなかったら腹切りものだ」と言い合ったほどであった。

我々4名にとっては、全く初めての海外旅行であり、また米国内の情勢も殆ど分かっていなかったので自分達の計画が実現するかどうかが全く自信がなかった。しかし、最初に訪れたシアトルのワシントン大学で会議の計画を発表したところ、予想外の大きな反響を得ることができ大変驚いた。そしてこの調子なら50名の確保は可能であると考え中山委員長と早稲田大学の遠藤春夫君が募金活動をするために帰国し、慶応大学の田端利夫君と私が米国に残り、できるだけ多くの大学を訪問して代表獲得の活動を続けることになった。

田端君は太平洋岸の大学を20数校訪れ、私は中西部から大西洋岸にあるほぼ同数の大学を訪れて会議への参加を要請した。その結果二人あわせて99名、その内の22名は大学教授及び夫人でオブザーヴァーとして参加することになった。こうして第1回会議は日米両国からはほとんど100名ずつの参加を得て、1934年の夏、青山学院大学で開かれ、大成功を収めることができた。1週間の会議の後、当時の満州国の実状を見て頂こうと米国の参加者99名を関西地方から朝鮮を経て研修旅行へ伴った。この旅行の帰途関釜連絡船上で米国の代表が会合をもち、会議を実現した日本側学生の創意と不屈の努力と好意に報いるため、第2回会議を米国で開くことを決定し、実行委員を選んで帰国した。

こうして第2回会議は翌年の夏、オレゴン州ポートランド市のリード・カレッジで開かれ、日本から62名が参加した。以後、会議は

日米両国で毎年交互に開かれることになった。しかし、1941年の第8回会議が米国で開かれる予定であったが、日本側代表が査証をもらうことができず、会議は止むなく中断されることになってしまった。

こうして数年間中断されていた会議は終戦から2年後の1947年に、第8回会議として日本側のOBや学生の努力で復活された。本来偶数回の会議は米国で開かれることになっていたが当時占領下にあった日本は米国側との連絡が全く取れず、止むを得ず日本で開催することになった。特に米国から参加者を招くことも不可能だったので在日米軍の軍人や軍属の中から大学生の資格のある人を選んで米国代表とし、会議を開催した。日本でこのような会議は1953年の第14回迄続けられたがこの第14回会議に戦後初めて米国から参加したコーネル大学の学生が会議の起源や戦前の会議様式を聞いて、是非次回の会議はコーネル大学で開きたいと申し入れてきた。日本側委員はもちろん大変喜んだが、当時の日本の経済状態では太平洋横断の渡航費を負担できる学生が殆どおらず、それが大変難しい問題であった。そんな時、米軍当局から軍用輸送機に15席だけ無料で提供するという申し入れがあり、学生代表14名とOB1名が監督として第15回会議に参加すべく渡米した。

元来、会議には日米両国から50名ずつ参加することになっていたのに参加できなかった36名は不満を抱き、「日米学生会議は第15回をもって発展的に解消し、代わって第1回国際学生会議を開く」という決定をした。こうして会議は再び中断されることになったのである。

1963年を迎えた時会議の戦前のOB有志が翌1964年が会議の創立30周年に当たるのでは

非会議を戦前の型で復活させるべきであると考え、活動を始めた。先ず、学生の参加費をできるだけ軽くしようという考えから、戦前の会議OBに経済的援助を要請したところ、第1回と第2回の会議に参加したポートランドのウィルヘルム君より「1週間の会議の全費用を保障する」という大変嬉しい手紙を貰った。この手紙に励まされ、復活へ向けての活動が続けることができたと言っても過言ではない。

日本側のOBで、力強い助けの手を差しのべてくれたのは、第6回と第7回に参加した宮沢喜一君（当時、経済企画庁長官）である。彼が外務省や文部省に連絡してくれたおかげで、文部省の援助を受けることができたのである。その上、70余名の代表が日本を出発する前に総理官邸に招いてくれ、当時の池田首相から激励のアドバイスを頂けるように手配して下さったことは今だに忘れられない。

こうして、第16回会議は1964年の夏、第2回会議の開催校として由緒あるポートランド

のリードカレッジで開かれ、その後毎年日米交互に今日まで開かれている。この第2回目の復活がなかったら、日米学生会議は永遠に消滅してしまったにちがいないと考えると、この会議の復活に協力してくれたOB有志の方々にはどれほどの感謝を表しても充分とは言えないほどの気持ちである。

第44回に参加する代表諸君もこの会議を契機にして将来「自分が太平洋の相互理解と信頼の懸け橋になろう」と使命感を持ち努力を重ねて頂けたら幸いである。

最後に、第44回の会議の実現に協力して下さった方々にIECを代表して心から御礼を申し上げたい。そして、会議に参加している学生諸君や準備に時間を費やしてきた実行委員の諸君に対しても然りである。また、会議を支援し続けて下さったJASC Inc. やIEC賛助会、外務省、およびIEE、また会議場を提供して下さったハワード大学や中部テネシー州立大学、バンダービルト大学、コロラド大学他関係各位に感謝の意を表したいと思う。

## 日米学生会議の沿革



日米学生会議は、今から58年前の1934年（昭和9年）に、満州事変の勃発以後悪化しつつある日米関係を憂慮した学生有志によって初めて開催されました。太平洋地域の要石ともなりうる日米間の戦争を回避し、相互の信頼を醸成することが必要であるとの認識と、「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米両国の友好関係にある。その実現のために学生も一翼を担うべきである。」という基本理念のもとに提唱され、実行に移されたのがこの会議です。準備活動は全国の大学の英語研究部、国際問題研究部から成る日本英語学生協会（国際学生協会の前身）の主催によって進められ、資金調達、運営等の面で多くの困難に直面しながらも4人の学生を使節団として米国に派遣するに至りました。一行は各地の大学を訪問して米国側の参加者を募り、その結果、総勢99名の米国代表をともなって帰国、一方で日本国内での受入れ作業の奔走の成果もあり、かくして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、また、会議終了後には満州への視察研修旅行も実施されました。

会議の趣旨に賛同し、日本側の創意と努力

に啓発された米国側参加者の申し出により、翌年第2回会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催されました。その後、会議は1940年（昭和15年）の第7回会議まで毎年日米交互に続けられました。太平洋戦争の勃発により中断を余儀なくされました。なお、この第6、7回会議について取材した城山三郎氏は、『友情力あり』（講談社刊1989年）を執筆されています。

1947年（昭和22年）、在日米国人学生と日本人学生の参加という形で復活した会議は、同様の形式で日本を舞台に1953年（昭和28年）まで続けられました。しかし、翌1954年（昭和29年）戦後初めて米国において、開催された第15回会議後、国際学生会議への一本化をはかるために発展解消することになりました。これに対し、戦前の参加者有志の間で会議復活を望む声が高まり、創設30周年にあたる1964年（昭和39年）に、創始者の一人である板橋並治が理事長を務める国際教育振興会の一事業として再び復活、第16回会議が米国で開催されました。以後、会議は時代の要請に呼応しながらも同時に創設期の理念を着実に受け継ぎ、毎年日米交互に開かれて本年に至っ



ています。(なお、会議の企画運営は創設以来、日米両国の学生によって行われています。)さらに、1973年(昭和48年)以降は、毎回独自の総合テーマを掲げ、特に昨年第43回会議

では、地球社会を構成している一員としての個人の意識の覚醒と形成を目標に「出会いと模索——地球意識の形成に向けて」を総合テーマとしました。

## 第44回日米学生会議実施要領

- ・テーマ：地球共同体への一歩 —今果たすべき私たちの役割—

(Exploring Our Responsibilities to the Global Community)

- ・主催：財団法人 国際教育振興会
- ・後援：外務省、国際教育交換協議会 (CIEE)、日米文化センター
- ・期間：1992年7月26日より8月23日まで
- ・参加人員：日本側 40名、米国側 39名、オブザーバー 1名  
(実行委員 日本側10名 米国側8名)

- ・開催地：

ヘムロック・オーヴァーロック (ヴァージニア州)

ジョイント・オリエンテーション

開催。豊かな自然環境のなかで3日間すごした。

ワシントンDC

滞在先：ハワード大学

黒人居住区に位置する、黒人に早くから門戸を開いたことでも知られる大学。セキュリティも充実した素晴らしい寮であった。

開会式において、地元政府より1992年7月29日(開会式当日)を「日米学生会議の日」に指定するという宣言書を頂いた。また、国務省や日本大使館より歓迎の講演をしていただいたりした。交通はおもに地下鉄だった。





テネシー州 (レストディ)

滞在先：ワフロイ・マウンテン・  
ビレッジ・リトリート

DCが多忙なスケジュールである  
ことから設けられた休息日がこの  
レストディである。緑あふれるな  
かで散歩する人、テニスする人、  
絵を書く人さまざまに過ごした。  
夜にはキャンプファイヤーをして  
楽しんだ。

テネシー州

滞在先：中部テネシー州立大学  
(MTSU)

閑静なところに位置するこの大学  
では夜になるとたくさんの螢を目  
にすることができた。ここは比較  
的アジア系の人口は少ないとかで、  
寮の人も日本語を覚えようとし  
たり、会議そのものに興味を示し  
ていた。

テネシー州の市長も歓迎のスピー  
チを下された。

カントリークラブでは陽気な音楽  
の流れるなか、レセプションが開  
かれたがアメリカの民族問題を考  
えるうえでも興味深いものであっ

た。

コロラド州

滞在先：コロラド大学

広大なキャンパス内ではリスを見  
かけることもできた。夜少々冷え  
込むが澄んだ空気のもと、快適に  
過ごすことができた。市長は歓迎  
の意をこめて1992年8月16日から  
8月23日までを「日米学生会議週  
間」とする宣言書を下された。ま  
た、8月20日には会議を対表して  
両国実行委員長とコロラドコーディ  
ネーターが日米関係についてのレ  
セプションに招待され、記念品が  
贈られた。

・内容

(分科会) 日本側4名、アメリカ側4名  
で各自のペーパーに基づくブ  
レゼンテーションを始め実地  
研修を行なった。

(フォーラム) 「民族問題」と「地球環  
境」について1ヶ月を通じて  
考えるため講師を招き、その  
後ディスカッションをする  
という形式を基本としながら実



地研修も行った。  
(セミナー)「ボランティア」と「戦争  
と平和」について話し合った。  
(シンポジウム) 全ての開催地で開かれ  
「貿易」における諸問題がテー  
マとなった。

日本側では特に初めにニックネームを付け  
合い、年齢や学年を超えて敬語を省いた仲と  
なるよう工夫した。参加者は学部学生から大  
学院生まで幅広かった。



# 日 程

日 月 火 水 木 金 土

					7・24 直前合宿（～26）	7・25
7・26 渡米 ジョイントオリエンテーション	7・27	7・28	7・29 開会式 分科会	7・30 分科会 国務省へ	7・31 分科会 日本大使館へ	8・1 戦争と平和 セミナー
8・2 自由行動	8・3 貿易 シンポジウム	8・4 分科会 民族問題 フォーラム	8・5 地球環境 フォーラム	8・6 ボランティア	8・7 レストディ	8・8 移動 ジェンダー ナイト
8・9 自由	8・10 地球環境 フォーラム	8・11 民族問題 フォーラム	8・12 ボランティア	8・13 貿易 シンポジウム	8・14 分科会	8・15 移動 ホームステイ
8・16 ホームステイ	8・17 戦争と平和 民族問題 フォーラム	8・18 分科会 貿易 シンポジウム	8・19 地球環境 フォーラム (ボランティア)	8・20 自由行動 新実行委員のみ次回への ミーティング	8・21	8・22 閉会式
8・23 解散						



## 第44回日米会議参加者（分科会）

### <科学技術の新時代>

- |                      |  |
|----------------------|--|
| *猪刈 由紀               | 上智大学（英語）                                   |
| 菅 武志                 | 大阪大学（応用物理）                                 |
| 高橋 博                 | 北海道大学（教育）                                  |
| 平竹 雅人                | 成蹊大学（経済）                                   |
| Binzee Gonzalvo      | Wharton School of Business(Business)       |
| * Anastasia Gregoire | University of Texas, Austin(Asian Studies) |
| Rika Kanazawa        | Brown University(Comparative Literature)   |
| Jin Gil Lee          | Columbia University(Political Science)     |

### <現代政治のダイナミクス>

- |                  |   |
|------------------|---|
| 市川 裕康            | 同志社大学（政治）   |
| 工藤 博海            | 学習院大学（政治）   |
| * 佐野日出之          | 一橋大学（経済）  |
| 高橋 直子            | 聖心女子大学（歴史）  |
| Lisa Copeland    | Princeton University(Economics)                   |
| * Maeleen Hamano | Occidental College(Political Science)             |
| Thomas Wrobel    | Miami University of Ohio(International Relations) |
| Sayaka Yakushiji | Vassar College(Political Science)                 |

### <法と変わりゆく社会>

- |                 |   |
|-----------------|---|
| 磯部 聡子           | 東京外国語大学（英米語）                                    |
| 坂田亜也子           | 一橋大学（法律）  |
| * 白石 史朗         | 早稲田大学（経済）                                       |
| 竹井 亮一           | 東京大学（法律）  |
| Jeffrey Bennett | West Virginia University(Economics)             |
| Kathleen Coble  | University of Washington(International Studies) |
| Laurie Cooper   | Dickinson College(International Studies)        |

### <マスメディアの功罪>

- |         |             |
|---------|-------------|
| 久米 恵子   | 聖心女子大学（英文学） |
| 清水竜太郎   | 一橋大学（商学）    |
| 高橋 徳嗣   | 一橋大学（法律）    |
| * 野田 雄輔 | 自由学園（経済）    |

Samara Adler	Yale University(International Studies/Japanese)
Lisa Funabashi	Claremont McKenna College(International Relations)
* Ari Green	Miami University of Ohio(Economics/Physics)
Phillip Pepper	University of California, Berkeley(Undeclared)

<芸術創造>

甲斐 順子	大阪大学 (薬学)
梶原 絵麻	同志社大学 (政治)
**長野 宇能	津田塾大学 (国際関係)
増井早知峰	上智大学 (英語)
* Zubin Gidwani	University of Washington(International Studies)
Sara Jobin	Harvard University(Women's Studies/Music)
Lisa Kim	International Center of Photograph(Photograph)
Joann Lin	Stanford University(Industrial Engineering)

<教育>

* 比企野慶子	慶応大学 (政治)
福島 紀子	成蹊大学 (文学)
増子 聡	慶応大学 (法律)
割石 俊介	早稲田大学 (政治)
Jennifer Burns	University of California, Berkeley(Japanese/English)
Todd House	Wake Forest University(History)
* Corinne Maekawa	University of Washington(Music/International Studies)
Andrew Seaborg	University of Wisconsin(East Asian Studies)

<医療と社会>

阿古 智子	大阪外国語大学 (中国語)
高橋 香織	東京外国語大学 (イタリア語)
平松 英人	上智大学 (英語)
**松井 恵一	下関市立大学 (国際経済)
Kenji Hall	Harvard University(East Asian Studies)
Mitzi Hnizdil	University of Florida(Public Relations)
** Indrani Lall	Princeton University(International Relations)
Senaka Peter	Princeton University(Chemistry)

<企業と社会>

佐藤 正典	東京大学 (政治)
寺沢 実紀	北海道東海大学 (国際文化)
* 鳥越あすか	慶応大学 (政治)
堀部 智	早稲田大学 (法律)
*** Kevin Kim	Stanford University (East Asian Studies)
Walter Hutchinson	Columbia University (Political Science)
Lisa Mizumoto	University of California, San Diego (Undeclared)
Louis Ross	Johns Hopkins University (Financial Management)

<哲学と宗教>

*** 遠藤 繁	早稲田大学 (政治)
芝崎 厚士	東京大学 (国際関係)
田中 剛	大阪大学 (医学)
松本 安代	徳島大学 (医学)
Rajesh Krishnan	Stanford University (Undeclared)
Christopher Pixley	Vanderbilt University of Law (International Law)
Dana Reed	Howard University (International Business)
Sakellariou Panayiotis	Case Western University (Political Science)

<第三世界問題>

大谷 裕子	東京外国語大学 (英米語)
坂口 誠二	東京外国語大学 (国際政治)
* Lee Silverman	早稲田大学国際部 ▽Washington University (Mathematics/Japanese)
西元 宏治	早稲田大学 (法律)
Andrew Bodziak	Augustana College (International Business)
* Emiko Goshō	University of California, Irvine (Sociology) ▽国際基督教大学 (社会学)
Elizabeth Poon	Wellesley College (Economics)

<米国側オブザーバー>

Stephanie Weston	福岡大学法学部講師
------------------	-----------

\*\*\* 実行委員長/コーディネイター    \*\* 副実行委員長/コーディネイター    \* コーディネイター

第 44 回

日 米 学 生 会 議

日 本 側 報 告 書

# 第1部 第44回日米学生会議の活動

## 1. 準備活動

### 第44回日米学生会議・日本側準備活動のながれ

---

1991・8 第44回日米学生会議実行委員会発足

開催地、期間、扱うトピックなど会議の骨子が実行委員で話し合わせ、札幌アグリーメントとしてまとめられる。

第43回日米学生会議終了。第44回への準備活動が始まる。

1991・10 OBである宮澤喜一氏が総理大臣に就任する。この頃、実行委員はポスターの図案から実施要領のまとめ、財団への賛助依頼など準備活動を続け、ときには合宿も行なって内容をつめていった。アメリカ側の実行委員もこの時期に合宿を

行ないスケジュールや内容についての話し合いが行われた。

1992・2 講演会を開く。「マスメディアと日米関係」というタイトルで講師には元・朝日ジャーナル編集長の下村満子氏と社会党議員の秋葉忠利氏を迎えた。

アメリカの駐日大使、M. アマコスト氏と会見する機会に恵まれたのもこの時期である。

1992・3 応募受付が締め切られ、選考が全国各地で始まる。

1992・4 日本側参加者30名が決定する。



アマコスト米・駐日大使との会見（1992.2）於・アメリカ大使館

1992・5 日本側参加40名（うち実行委員10名）が揃い合宿をする。（全体合宿）この合宿の後、東京・大阪・北海道で定例会が初められお互いディスカッションをした。6月にはフィールドトリップを行なった。

1992・7 結団式（九段会館にて）

\*実行委員…前回の会議の参加者から日米それぞれ10名が選ばれる。会議の準備活動や会議の骨子はこの実行委員が決める。アメリカ側は年に2度合宿する他に普段は電子メールで通信をとっていた。  
日本側は毎週土曜日にミーティ

ングを開いていた。

\*選考…一次試験は教養と英語、二次試験は面接であった。

\*結団式…OB・OGを交えて日本側参加者が集まった。



## 日本側実行委員長としての日常

人との会話や態度から学ぶことは多い。私にとって日米学生会議の実行委員長であった時間はまさにそれを体現したものであった。実行委員との議論を通じて、皆の考えを生かすにはどうすればよいのか、ということや「実行委員長」という名前にどういう期待を人々は持つのかということ等、ここで挙げればきりが無いほど考えさせられ、学んだ事柄は多い。たとえ賛成できない考え方や意見で失望することはあっても私にとってそれらは様々な視点を得るという点でプラスであった。こうした「刺激的な」環境に身を置くことができたこと自体にまず感謝をしたい。

実行委員長になって私は時間の許す限り、お世話をして下さる方々や興味を持っている学生に会おう、と思っていた。どうしている

んな方々が日米学生会議に賛同して下さるのか、学生達は何を求めて日米学生会議をやりたいと考えるのか、こうしたことを自分の目と耳で感じたかったのである。いざ始まってみると学業との両立などでこれを実行するのは困難で忙しい毎日であったが、それでも数々の印象的な出来事に出会った。

応募を受け付けているとき、こんなことがあった。私が事務所にいたとき、ある中年男性が広島から電話をかけてきたのである。「息子をぜひこの会議に参加させてやりたいんです。実施要領を送ってください。」その人は時折激しく咳き込み、自分が病床に伏していることを告げて、離れて暮らしている息子が国際問題に興味があると言っていたから知らせてやりたいと言うのであった。親がそ

んなことをして過保護な、という考えもあるだろうが私には親の子を思う強い気持ちをしひしと感じるとともに、自分がこうして学生でありながら同時にこうした会議創りに参加できているのは自分だけの力ではないことを改めて思うのであった。

会議迄はアメリカ側とのコミュニケーションが重要であった。アメリカ開催だからといってベースがアメリカ任せになるのが嫌だったし、両国の学生が意見交換をしてこそこの会議の意義があると考えたからである。コミュニケーションの手段は手紙や電子メール、国際電話であった。顔が見えないため不安がつきまとうこともある。連絡が途絶えると双方で「勝手に何かやっているのではないか」「やる気あるのか？」と半ば疑心暗鬼になってしまったり、ちょっとした言葉のニュアンスが誤解につながって不信感を持ったり、ということも少なくなかった。おそらく双方で「何でそんなことを考えるの？」ということの繰り返しだったのだと思う。しかし、「理解しあう」ということが決して生半可なことではない、というあたり前のことを口論や誤解などを通じて私は初めて実感できたように思う。そしてどんな人間関係においてもそうだが最後には信頼がすべてだとも感じたのであった。

責任ということを最も考えさせられたものの一つには選考の作業があった。選考で参加者を選んでいくということは当然ながら会議に参加できない人をも決めることを意味する。すべての参加者を選び終わったとき、私に会議への情熱を語った人たちの言葉が何度も心の中で繰り返された。自分はこの人たちの会議へのチャンスを奪っているのだ。悶々とした感情に身を委ねて立ち止まろうとしてしま

う誘惑が何度も襲った。しかし、私は会議を創っていかなければならない。「自分に残された道は何なのか。」この問いかけに対する私の答えは、この人たちが求めていることを忘れてはならない、多くの人達や学生に自分の経験をこうして冊子にして届けたり、報告会を開いたりして、会議を擬似体験できる場を設け少しでも学生の本音を伝えるべきだ、ということであった。経験することと、他人の話の伝聞は価値として全く異なるので、偽善と言われても仕方がないと思う。でも私はできるだけことをしようと考えた。こうすることが私の「責任」なのだと感じていた。

選考のことも含めて広報や賛助団体へのお願ひなどについて毎週のように実行委員の皆と顔を会わせ議論する。休みの時期は毎日ということもあった。人と人のぶつかりあいの毎日であるから思い通りにならず悔しくなってみたり、発言に嫌気がさし逃げ出しそうになったりしたことも度々であった。しかし自分の感情のままに怒鳴ったりするのを私が抑えていたのは次の問いかけがいつもよぎるからであった。私はいま「地球共同体への一歩」と自分以外の人々、それも考え方の異なる人々との共存を考えようとしている。にもかかわらず排他的になってみたり、また人の態度に逆上しそうになったりするのはあまりに独善で「暴君」ではないか。常に自問自答して道を進んでいるようで見通しが悪いものであったが、こうした問いで苦悶した事が自分の考えに幅を与えてくれたような気がしている。この問い掛けができるようになったのもすべて仲間からの意見や指摘があったからこそのものである。こうした意味で実行委員の皆との会話はまさに何物にも変え難く自分の未熟さに羞恥し謝罪したくなる気分であ

る。

全てを振り返ってみて、自分が本音のままをぶつけているんな人と対話する機会があったこと、年功序列やその他の「肩書き」以外の部分で生でつき合うことが出来たことに改めて感謝したいと思う。まだまだ十分に語り尽くした気がしていないのだが、日米学生会議を知る前までの虚しく何についても批判ば

かりしていた自分と比べて、特に実行委員長としての毎日は「苦痛だけれども楽しい」もどだった。これは何も日米学生会議だから得られたことなのかは分からない。しかし自分の人生で日米学生会議の実行委員長だった時間はとても密度が濃く、重要な意味を持っていることは確かなのである。

(遠藤 繁)

## 関門地区及び福岡における活動

---

以前に中国・九州地区で参加者や実行委員をする者が中々居なかったためか、日米学生会議の知名度は他の地域から比べると高くなかった。そこで先ず地盤固めとして、北九州大学と下関市立大学で説明会を催した。前者は、事前広報が充実出来なかったこともあり余り人数は集まらなかったが、後者は説明会と講演会を同時開催したこともあり、50名程集まった。講演者は、もとJASCer(何時からか、日米学生会議参加者のことをそう呼んでいる。)であり現在下関市立大学で国際関係を担当されていらっしゃる田村慶子先生(旧姓:辻、第20、30、31参加)に「創造と実験の一年」と題して日米学生会議の体験談を話して頂いた。田村先生は、わが校では熱血先生との定評があり、この日も熱のこもった講演をしてくださり参加者一同日米学生会議について関心をもってくれたようだった。

その他としては、福岡のRKB毎日放送の夕方の番組「ワイド5」のマイポスターというコーナーに出演して日米学生会議の参加を

呼び掛けたり、福岡にある大学を廻りポスターを張ったり、学生会議に関心を持った人が居たら説明に伺ったりした。まるで宗教の布教活動のように、本当にあちこちを廻った。やはり自分は、JASC教の信者だったのかもしれない。

さて関門地区や福岡地区で活動をしてきた感想は、やはり日米学生会議の本部が東京であるので、距離的に遠いので自分たちには関係のない団体といった意識を持っている人が殊の外多かった点である。これは本当に残念なことであると感じた。ともすれば日米学生会議は都市部の参加者だけの会議のように思われているが、実際は様々な地域の学生にも等しく存在しているのである。このことが伝わればなあと思ひ、広報活動を進めてきた。44回は残念ながら中国・九州地区の参加者は惜しくも選考から漏れてしまったが、これから先今までの広報活動が実を結び、多くの参加者が集まってくれることを期待したいと思う。頑張れ地方学生! (松井 恵一)

## 実行委員としての準備活動(広報)

---

日米学生会議における広報活動の意義は二

つある。まずは、会議の成功の鍵となる参加



者を集めること。私たちが理想とする年齢、専門、地域など多様なバックグラウンドを持つ学生による会議を実現するためには、まず少しでも多くの学生たちに日米学生会議の存在を知らせる必要がある。同時に私たちの会議は社会の様々な援助により成り立っている。そうした社会への還元という私たちの責任の一環として、日米学生会議の活動を広く社会一般の人々に知ってもらおうということが、第二の意義である。これらの目標の下で、一年間様々な形の広報を行ってきたが、以下にその活動の概略を記してみたい。

### 1. ポスター作成

例年通り、11月には「第44回日米学生会議参加者募集」のポスターが完成した。今年のポスターは、Lee Silvermanによるデザインである。完成したポスターは、全国の大学、高専、図書館、などに発送、または各大学のOBを通じて各大学に直接貼られた。一枚の紙の中にテーマ、開催時期、選考時期など多くのインフォメーションを含むポスターの効果は意外と大きく、日米学生会議の存在を大学に貼られたポスターで知った人も多かったようだ。

### 2. 大学説明会

12月初めから行われた大学説明会は、実行委員が将来の新参加者になり得る学生と直に話すことのできる貴重な機会である。実行委員またはOBが各大学に赴き、昼休みなどを利用して説明会を行った。大学によって2、3名から20名以上までと集まった人数にばらつきが見られたが、日米学生会議とはどんな団体なのか、第44回会議はどのようなものになるのか、さらに参加者の募集要項などの説明の他、実行委員やOBによる体験談を話す

コーナーでは、それぞれが日米学生会議に参加して何を思ったかを素直に語り、好評であった。これらは主に首都圏のOBなどが在学する大学で行われたが、同様のことが下関や福岡と、OBの協力により関西圏の大学でも行われた。

### 3. フィールドトリップ

フィールドトリップの目的は、会議参加者が各々の関心のある問題に対する認識、理解を深めると同時に、会議参加者以外の学生にも会議と同様の体験学習の場を提供したいというものであった。特に後者の目的には、選考の際に応募者の皆さんが見せてくれた熱意に、少しでも報いることができるという思いが込められていた。また、準備にあたっては、パンフレット作成から、DM発送、訪問先決定と交渉まで全て新参加者の手で行われ、実行委員のいない関西、北海道においても、参加者の協力によって実施された。実際の訪問は六月下旬から始まったが、細かい内容は個々の報告に譲るにしても、それぞれ当事者や専門家に直接話を伺うことができ、その後の討論も熱のこもったものになったようだ。尚、訪問先は以下の通りである。

関東：国連高等難民弁務官事務所、ブリジストン美術館、動くゲイ・レズビアンの会、日本貿易振興会、日本放送協会、自由の森学園、被爆者団体協議会、径書房、イスラミック・センター・ジャパン

関西：自衛隊大久保基地、神戸中華同文学校、PHD (NGO)

北海道：講演会

反省と展望

広報活動を行うにあたって掲げた目標は二つ。即ち参加者募集のための広報と、社会一般への広報である。反省においてもこの二つに分けて振り返ってみたい。

まず、参加者募集の面で見れば、結果的にはある程度の成果をおさめたと言っていいだろう。大学説明会、講演会、フィールドトリップなどを通して少しでも日米学生会議の魅力を知ってもらおうと努力した結果、多く人からの応募があった。しかしながら、その内容を見てみると、まだまだ関東、関西以外の学生の数が圧倒的に少ないし、また応募者の大学も偏る傾向にある。今年は、実行委員が関東にかたまってしまったことも原因の一端であろうが、今後の学生会議を考える上で解決していかなければならない問題であろう。

また私たちが理想とする多様な顔ぶれを考えれば、いわゆる4年制大学以外の学生の応募がほとんどなかったことも非常に狭い範囲内でしか伝えていくことができなかったのではないかな。

社会一般への広報については、マスコミを通して日米学生会議の姿を伝えていくというものが大部分を占めてきたが、年々マスコミの注目を集めることは難しくなっているのが現実である。今年OBの宮澤喜一氏が首相に就任したため、新聞・雑誌各社から黙って

いても取材が舞い込むという幸運に恵まれたが、それも所詮一過性のものにすぎない。

「日米」は「日中」や「日ソ」に比べてニュースバリューが低い、と言い切るマスコミ側のセンセーショナリズム追求の姿勢自体に問題があるような気もするが、とにかく記事になるような切り口をこちらから提示していくことが、今後益々重要なポイントになっていくだろう。ただし、会議準備に忙殺される中で、これらの活動にどれだけ時間を割けるのかにもかかっているのではないかな。社会一般の広報に関しては、広報のために社会にアクションを起こすのではなく、私たちの理念にかなった行動が、結果的に自然な形で社会に伝わるものであるべきだと思う。そういった意味で言えば、マスコミに売り込むことを考えるよりも、今年のボランティア活動のような社会の一員としての活動に力を入れる方が、よほど有益なのではないだろうか。

広報活動を通して様々な方々に会う機会に恵まれたこと、また活動を進める上でよいパートナーに恵まれたことは、私個人にとって非常に実り多いものであった。最後になりましたが、広報に協力して下さった方々、特に様々な形でバックアップして下さいましたOBの方々、本当にどうも有り難うございました。

(鳥越あすか)

## 実行委員としての準備活動（広報）

### 1) マスコミ取材依頼について

日米学生会議の広報理念の大きな柱の一つに、広く社会にその存在意義と活動内容を伝えるということがある。年間を通じて新聞・雑誌・テレビなどの各メディアに取材依頼の交渉を行い、その年の会議の内容、特色を紹

介して頂いている。今回第44回会議のマスコミを利用した広報活動は、結論から言ってこちらから依頼せずとも取材の問い合わせが舞い込んでくるという好運にありえた。その原因として、第6回会議の参加者でもある宮澤喜一氏が首相になったことが挙げられるが、

この「宮澤ショック」のため多数の雑誌や新聞からの取材依頼が結果として相次いだ。そのおかげで今年の広報活動は順調に進み、特に選考試験直前は会議に関する問い合わせが殺到し、その対応に追われることになった。

マスコミに取材依頼をする上で大切なことは、会議の内容、特色をきちんと説明するだけではない。それがどれだけ社会に訴えるだけのニュース性があるのか、ということにも留意する必要がある。そのことに関して、あるマスコミ関係者は日米学生会議についてこう語る。「戦前から続いている学生による手作りの会議で、それも日米の学生が一ヶ月も共同生活をしながら会議をするというのは、他にも例がない。しかし、ただそれだけをこちらに訴えてくるだけではニュースバリューはない。毎年続いているが、パンフレットを見ても少々マンネリ化しているように思う。」実際にこちらから取材を依頼して断られるケースは、こうした理由によるものが多い。何もマスコミに媚びる必要はないが、広く社会に認知してもらう手段としては最も効果があるだろう。マスコミを積極的に使うかどうかはその年の広報担当者の方針だろうが、自分達の作る会議にどれだけニュース性があるのか、そしてそれをどの様にマスコミ関係者にうまく売り込めるかが、重要なポイントであろう。

## 2) 講演会 (2/7)

例年続いている日米学生会議の「伝統行事」の一つに、外部から講師を招いての講演会がある。第44回会議では、2月7日に「マスメディアと日米関係」と題して朝日新聞編集委員の下村満子氏、社会党衆議院議員の秋葉忠利氏を招き、日米会話学院の7Fにて開催された。この時期は、宮澤首相の国会答弁中の

「アメリカ人の労働倫理」に関する発言がアメリカ国内で大きく報道され、日本国内でも日米関係を危ぶむ声が沸き起こり始めた直後だった。期せずしてこの講演会はタイムリーな演題を掲げたため、当日は会場を超過員にし(150名)また、3月の選考試験を前に第44回会議の絶好のPRの機会となったのである。

## 3) アマコスト大使訪問 (2/16)

当初、これは広報活動の一貫としてアメリカ大使館にアマコスト大使を訪ね、ジャーナリストに実行委員と大使との問答を取材してもらう企画であった。しかし、大使館側からジャーナリストの同伴と、日米関係についてのコメントはできないという申し入れがあり、第44回会議のプログラム説明をする表敬訪問となった。実行委員10名は大使の部屋に招かれ、約40分に渡ってアメリカの各訪問地で催されるプログラムの内容を説明した。

大使の子息が以前日本の大学に留学した経験もあることから、日米間でこのような学生同士の交流が行われることに大いに賛同して下さった。大使は私たちに対し、終始親近感を持って接して下さり写真撮影にも快く応じて頂いた。忙しい公務の合間をぬって、私たちに面会してくれたことに本当に感謝している。アメリカ大使館には昨年も会議開催中に訪問したが、大使に面会はできなかった。その意味でも私たちは貴重な経験をしたといえる。

尚、アメリカ大使館への交渉は全て広報担当のLee Silvermanが行った。彼女は日本語の実施要領を全て英訳し、それを大使に資料として送付し、当日も面会の代表者として活躍した。彼女の尽力がなくて、この企画は成功しなかったと付け加えておく。

## 4) 東京圏外での広報活動について

日米学生会議の広報活動が抱える問題点の一つに、東京圏外での広報活動がある。事務所が東京にあること、実行委員の大半が東京在住ということから、参加者募集の広報活動は東京中心に偏る傾向にある。その点を前もって指摘して今年の活動を紹介すると、過去の参加者が多く存在している大都市の大阪、名古屋、札幌では、有志の協力により各大学においてポスター貼り、説明会を催してもらうことができた。また、中国、九州地方は山口県在住の実行委員松井が地元新聞や国際交流誌に紹介記事を依頼し、また各大学を行脚しポスターを貼り説明会を一人で切り盛りした。その他、東京の事務所から全国の大学、図書館、公共施設にポスター、実施要領を郵送した。さらに、全都道府県の新聞各社に参加募集記事をFAXで送信するなどした。しかしながらこの広報活動の結果、今会議の総受験者数に占める東京圏以外の学生の割合は、三分の一弱であった。「東京偏重」は否めないということである。アメリカ側の参加学生が全米各地から集まってくるのに対し、日本側の場合、参加者の大半が東京在住の大学生と

いうのが毎年の傾向なのである。

日米学生会議は東京の大学生のためのものではない。全国的規模で参加者が集まるためにはどうしたら良いのか。ここで従来の広報活動の手法を挙げると、ざっと次のようになる。1) 東京圏以外の大学に通う実行委員、過去の参加者が説明会などを行う 2) 公共施設にポスターなどを送付 3) マスコミに関係記事を掲載してもらい、などが考えられる。しかし、こうした手法が限界を迎えていることは今回の結果が明確に示している。今後の実行委員、参加者の創意工夫で新たな広報活動を模索して欲しいものである。

(一つの案として全国の大学の学生新聞、または国際交流団体(サークル)と協力関係などを結ぶというのはどうか。つまり全国的な学生間のネットワークを構築し、かつ、継続的に当会議の広報・参加者募集を呼びかけられる媒体を持つのである。少しずつでもネットワークが広がっていけば、将来的に全国的な広報活動として期待できるのではないか。)

(野田 雄輔)

## 選考という仕事

---

どうやら物事というものには必ず割り切りというものが必要らしい。とても大事な事項だからもっと時間をかけて話し合いたいと思っても、それが許されないときがある。是非こうしたとか、こうするべきだとどんなに確信していても、それを許さない条件というものは無数にある。いや、しかし「それを許さない条件」といっても、本当に「許さない」のか、こちらの諦めがはやくてそう思っているだけなのかなど…考えるときりがない。ま

ことに「選考」という役職はこうした事を考えさせる要素には限りがないのである。

選考と言うのは会議参加者を選ぶ事である。今回も例年通り実行委員による試験と面接に基づいて選考を行った。その準備に当たり何度となく話し合いを行ったのだが、例の「それを許さない条件」というものの影をいつも認識させられた。話し合うといったところで残念ながら大枠、即ち最も肝心なところはその条件によってはぼぼ決まってしまうこ

とがほとんどで、奇妙な事だが後からそれを肯定する理由を探して行くのだ。話し合いを拘束する条件というのは資金であったり、時間であったり、会議の大枠であったりする。しかし選考について考えれば考えるほど、選考そのものの重大さを痛感させられるのである。そもそも何故人を「選別」しなくてはいけないのか。我々はたくさんの答えを用意したが、それを人に説明するとき、私はいつもなにかしらの後ろめたさのようなものを感じていた。選考という行為は計り知れない意味を含み得る。その意味の重さを最大限に捉えれば、会議そのものの形のほうを選考に応じたものに変える事すら考えられるのだ。つまり参加資格として大層に英語力だの関心の広さだのをかかげては、会議に参加できる人、すなわちその条件に見合った人が実際には何名いようと、会議形式に合わせて30名を選考するというのでは厳正な選考も何もあったも

のではないとさえ思ってしまうのである。

JASCの選考というのは他の学生団体の中でも大がかりな方である。選別というものの権力装置としての機能を認識していればいるほど、可能な限り良識を持って厳しく、公正にと努力をする。しかしそれは皮肉な事にさらに選考の装置としての権威を増す結果となってしまう。では選考そのものをなくせばいいのか。おそらくそれに賛成する人は少数であろうし、それが実現する可能性となるとさらに少数であろう。私には結論は出せない。この議論を突き詰めるとどういふ結果になるかがわかるからだ。

この先おそらくこの選考という制度は続いていくことと思う。毎年新たに選ばれた実行委員がこの難問とどう格闘し、答えを出していくのだろう。ここにわずかに記したのは、一昨年秋、冬、春の私のむなしい格闘を思い返しての表白である。(猪刈 由紀)

## 病院巡り

2月から3月は、日米学生会議の実行委員会の仕事のなかで1、2位を争うほどの仕事の多い時期である。こんな時に、私の身の上には多くの不幸が降りかかってきた。このことで他の実行委員の皆さんには本当にご迷惑をかけたと思う。

あれは2月の中旬後期試験が終わった後、東京へ行く前に古くからの友人が4月から大阪で就職することになり、その引っ越しの手伝いをするために大阪へ立ち寄った。引っ越しは男が3人居たので何とかその日のうちに終わった。ここまでは何の問題もなかった。その後引っ越し祝いをしようと、友人が中国人留学生から買ってもらった「マオタイ」3本を飲み始めた。この酒は、結構強く直ぐに酔いが廻ってきた。普段だったら寝てしまうのに、それにもかかわらずその日は朝まで飲んでた。というのも、翌日に選考準備の為に東京へ行く手筈に成っていたから、自分なりに起きていようと努力していたのであろう。(一応よく解釈してみると)結局酒の大半は自分が空けてしまった。

朝も6時ごろを廻り、そろそろ新幹線が出る時間だから出掛ける準備をした。この時大分気分が悪かったので、出発を遅らせようとしたが何とか頑張って新大阪駅まで向かおうとした。しかし気分が悪さが余りにもひどかったので、近くの病院へ行くことにした。この時から悲劇は始まった。難波の或る病院に到着すると、ふっと気を失ってしまっ

た。何と急性アルコール中毒になってしまったのである。その後話を聞くと、2本の点滴を受て、一日起きなかったとのことだ。友人2人は、本当に死んだかと疑ったそう。それにもかかわらず、友人1人は東京へ戻ってしまった。(この薄情者めが。)翌日目を覚まし、友人宅へ戻り休養した。そして2日遅れにやっと東京へ行けるかと思えば、今度は友人が新大阪まで送りにきてくれた際に、突然の腹痛で倒れてしまい再び家まで戻った。しかし、何時まで経っても腹痛は消えずまた病院へ連れていった。この時友人は、急性盲腸炎に罹り緊急手術をすることになった。友人の両親は、海外駐在員なので日本に居らずまた親戚も何処にいるか分からないので、暫らく友人に付き添うようになった。術後友人の親戚の連絡先が見つからず、結局大阪にもう1週間いる羽目になってしまった。この間JASCと連絡が来ず、東京ではMacchoi(私のニックネーム) 行方不明説まで流れてしまった。



その後何とか一段落がつき、北海道へ選考試験をするために一時東京へ立ち寄った。そして大阪選考があるので、一足先に大阪へ戻るとまた悲劇は起こった。何と今度は

自分の横腹が痛く、脂汗が出てくる始末。余りの痛さに我慢が出来なくなり、救急病院へタクシーを飛ばして行った。すると年寄でもないのに、尿管結石があると診断された。この時、痛み止めの点滴をしてもらい何とか痛みは治まった。この後は何とか病院にお世話になることはなくなったが、この短い間に病院体験が出来たのも一重に、「医療と社会」を担当したからなのだろうかと思っ

た。でも実行委員の皆さん、あの時は本当にご迷惑をかけました。(松井 恵一)

## 選 考

選考は、参加者を募集し選考試験を実施して共に第44回会議を作っていく仲間を迎えるまでの活動を進めていくうえでのまとめがその主な仕事で、猪刈と比企野が担当した。実行委員で第44回会議の理念を繰り返し話し合い、そのための選考の必要性、その方法等を決めていくことに始まり、受験希望者への対応、実施要領作成、配布、試験問題作成、2月の願書受付開始後は、願書処理、選考試験

実施にあたっての諸々の準備を行なった。選考試験は3月10日の札幌会場を皮切りに、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、岡山、福岡の全国8会場で実施し、多くのOB・OGの方々の多大な協力を得て、4月初旬には30名の新参加者が決まった。会議を一緒に作り上げていく仲間を同じ学生であるものが「選ぶ」と言う作業は、会議の理念と深く関わっており、会議への思いと実行委員間の信頼関係なしに

はやり遂げられない。そのために何度も立ち止まり、ぶつかり合いながら、各々が全力を尽くして素晴らしい仲間を迎えるに至った。

選考は精神的に苦しい作業であったが、実行委員を支えて下さったOB・OGの皆様、そ

して最後まで投げ出さずその作業に向かい合ったSilvermanを始めとする実行委員の皆に、担当者として心より御礼申し上げます。

(比企野慶子)

## 経 理

---

日米学生会議の予算は、主として一般賛助団体賛助金（各財団、企業）及び参加者自身の参加費からなっている。日米両主催団体の協定により、第42回会議以降は受け入れ国側が会議中の全諸経費を負担する予算システムとなったため、主催団体である国際教育振興会賛助会賛助金はすべて日本開催時に割り当てられることになった。このため、本年度は準備関係及び渡航にともなうすべての費用をすべて自分たちの手で用意しなければならず、厳しい予算状況が予想された。この賛助金に関する集計、総括、情報収集など財務活動一般を白石（財務）が担当し、準備期間等諸経費支出一般の管理、総括を佐野（経理）が担当した。



前述のような厳しい状況だったにもかかわらず、会議を無事に終わらせることができた。特に景気の後退するなかで多大なる賛助を各方面から頂いたことに、心より御礼申し上げます。ご協力有難うございました。

(佐野日出之)

## 財務活動報告

---

日米学生会議は全ての経費を企業や財団からの賛助金と参加者の参加費で賄っている学生団体であり、予算の作成から賛助金を募る活動、そして経理報告まで一切の財務活動は学生の手によって行われる。実行委員会のなかでこれにあたるのは財務と経理であり、第44回では私（白石）と佐野が担当した。

まず会議の構想を実行委員会で練り、それをもとに経理が大まかな予算を立て、財務が予算にそって募金活動を指揮した。企業や財

団に実際に賛助依頼の説明に行くのは実行委員全員で分担したが、その戦略、資料分析、入金管理、領収書送付などは専ら財務の仕事であった。折りしもバブル崩壊後の不況と重なり、各社経費削減を進めるなかでの財務活動は決して楽観できないものがあった。企業研究を始めた9月、10月の頃は、それまで夜ごと布団を蹴って熟睡していた私も眠れない夜と不安に追い掛けられる毎晩であった。実際景気後退を理由に賛助を断られたり打ち切



全体合宿（1992. 5）於・オリンピックセンター

られたりしたこともあって、苦勞を味わった。「来年再開するからね。」とか「お隣さんならもらえるよ。」とか言われ説明もろくに聞いていただけないこともあり、困ったのは東京から大阪まで面会の約束でわざわざ出向いたのに当日ことわりもなく出張で不在、代わりの人にさえ会えないこともあった。その日は後で同行した佐野君にユース・ホステルの風呂でグチを聞いてもらって溜飲を下げた。しかし一方で私のような不勉強学生の話長時間熱心に聞いてくれ、お茶まで出して下さる方もあった。二十年以上も賛助し続けて下さる企業や日米学生会議の名前だけで了解して下さる財団もあり、会議の先輩たちの築いてきた信頼の厚さに感服すると同時に身の引

き締まる思いであった。また困ったときには国際教育振興会事業課の水野氏、秋川氏、西部氏らが助けて下さりまた、社会人のOBの方がアドバイスを下さったりした。結果的に全額過不足なく集まり、私を焦りと不安から救ってくれたのは、各企業、財団の御理解と御支援、それと様々な人々の協力の賜物であり深く感謝したい。そして財務活動を見事なチームワークで乗り切ってくれた実行委員の仲間達にも感謝したい。特に経理の佐野君には、度々予算をさらに切り詰めて私の負担軽減を図ってもらった。崇高なる理想と遠大なる会議の計画をぶつ他の実行委員を横目に決い顔で金策を練った思い出は生涯忘れないであらう。 (白石 史朗)

## 全体合宿について

参加者が決定されたのは4月上旬だったが、初の顔合わせになったのはこの5月3・4・5日に行われた全体合宿だ。長い準備活動を経てやっと参加者全員が揃うことへの実行委

員の喜び。参加が決まった喜びと学生会議という未知なる沃野を前にしての希望と不安を抱えた参加者。それらが一同に会し、学生会議はスタートを切った。



会議の主旨、日程、各プログラムの諸説明などを聞いているときはおとなしかった参加者も、いざディスカッションが始まると初対面とはとても思えない程活発に意見を述べ、早速「暑くて熱い夏」を想わせた。総合テーマである「地球共同体への一歩～今果たすべき私たちの役割」に対する各人の思いを交換し、分科会ごとにどういものを作り上げていくか熱い議論を交わし、それらの議論の中で各々が「自分もJASCの一人なんだ」という実感を高めていった。

自己紹介や夜を徹しての「雑談」を通じてお互いの理解は深まり、関東人は関西人の自然発生的マンザイに腹をよじらせ、時が進むにつれ数日前まで知り合いでなかったのが嘘のような「仲間」になっていった。また、夜

のパーティーに駆けつけて下さったOBの方々の体験談は参加者のイメージを膨らませた。

そして会議の沿革の説明を受け、又実際にOBの方々の話やその後の活躍ぶりを聞き、戦前から連綿と続く学生会議の歴史と伝統の一部に自分が加わっていくことに大きな責任を感じ、身の引き締まる思いもした。

個性溢れる40名が互いに刺激し合い、知り合った2泊3日だった。そして本番までの2ヶ月間の準備に自分はどう臨んだらよいのか思案しながら、新生JASC40名は全国へ散っていった。

この後準備活動は、再び全員が集まる直前合宿まで関東、関西、北海道の各地に分かれて進められていったのである。(割石 俊介)

## 定例会

### 東京定例会

---

東京定例会は全体合宿後の5/16から毎週土曜日、四谷の日米会話学院の教室を借りて行われた。内容は以下の通り。

5/16

戦争と平和セミナーの準備。数人の参加者が「私の安全保障観」というテーマで安全保障、日本の憲法などについて自発的にスピーチが行われた。

5/23

日韓学生フォーラムの学生と合同で、ロスアンゼルスでの暴動をうけ、在米韓国人などについて色々な話し合いがもたれた。

5/30

2回目の戦争と平和セミナーの準備。前回の知的な内容とは異なった視点である「もっと身近なことから考えよう」という提案のも

と、グループディスカッションが行われ、「平和とは自分にとって何か」など様々な話し合いがもたれた。

6/6

地球環境フォーラムの準備。2つのグループに分かれ、参加者が寄稿して毎週発刊されてきたガイアについての感想、具体的フォーラムの案などについて話し合いが持たれるはずだったが、1つのグループでは環境問題が経済の南北格差などの話とつながり、かなり白熱した話し合いとなった。

6/13

この日の前半では、今回の参加者の佐藤の友人であるクリスさんをむかえ、米大統領選について話し合いがもたれた。また26回参加者で消費者問題研究家の船瀬氏による、電気

自動車など新しい技術と環境問題についてお話をしていただいた。

6/20

民族問題フォーラムの準備。在日外国人、外国人労働者、部落問題などについてスモールグループディスカッションが行われた。

7/11

貿易シンポジウムの準備。参加者数人による、自動車輸出自主規制、系列、コメ問題などについてプレゼンテーションが、基礎知識を学ぶ目的で行われた。(磯部 聡子)

## 関西定例会報告

---

関西においては、定例会を毎週土曜日の午後から阪急十三駅近くのフジヤという喫茶店で行った。関西からの参加者は8人という少人数ということや、理科系の専攻の者が多いこともあって、知識偏重ではなく、個人の素直な考えや意見を英語で表現することに重点をおいて定例会を進めていった。

5月16日

関西で最初の定例会の内容は、戦争と平和についてであった。平和の概念について最初に活発な議論が行なわれ、単に戦争がない状況を平和と呼べるのか？人種差別や抑圧などの構造的暴力が存在している社会を平和と呼べるのか？など各人の意見を交換した。さらに、湾岸戦争を例にとり、正義のための戦争は存在するのかといったことまで議論し合った。

5月23日

今回の内容は、環境についてであった。①環境保護のための新しい目標、②経済開発の構造的変換、③環境保護ネットワークの強化、④国際的法規制の可能性、の以上4つの視点について各人の意見交換を行った。

5月30日

内容は、貿易についてであった。日米の文化や価値観の差から生じている経営方法や経済システムの違いについて考察した。特に日本の系列システムの是非について活発な意見交換を行った。

6月6日

今回は、6月20日から始まるフィールドトリップの最終決定を行った。

6月13日

内容は民族についてで在日朝鮮韓国人の学生を招待し、人種差別問題や異民族共存のためには何か必要なのかといったことを議論し合った。(菅 武志)

## 札幌定例会

---

札幌での定例会は日米学生会議始まって以来初めてということもあって、要領を得るのにかなりの時間を要した。

第1回定例会は、前年の参加者との顔合わせが主たる目的であった。日米学生会議とは

何か、去年はどのような感じだったのか、いろいろと対話を重ねていくにつれ、学生会議の全体像がおぼろげながらつかめていった一日であった。

第2回は、「戦争と平和」をテーマに、そ

それぞれの視点から戦争に関わる問題について話し合った。寺沢は日本のPKO協力問題をとりあげ基本的な事実を確認すると同時に、国際的な安全保障体制のあり方についても言及した。高橋は日本において特に顕著であると思われる絶対平和主義をとりあげ、その正当性に疑問を投げかけると共に、平和というものゝの意義を再考した。

第3回は、北方領土問題をテーマに行なわれた。寺沢は民族という次元からユニークな切り口でこの問題を扱った。高橋は日本と(旧ソ連の両国民の、「固有の領土」という概念に対する認識の違いを問題にした。

第4回、札幌で初めてのフィールド・トリップについての打ち合わせが行なわれた。

第5回は、環境問題をテーマに行なわれた。この日は、前日に東京から応援にかけつけて来てくれた長野をまじえて、環境についての広範な話し合いが行われた。寺沢は、コメと環境との関係に光をあて、水田がいかに保水

その他に重要な役割を果たしているかを報告した。高橋は公園をとりあげ、日本の自然公園、国立公園が国際的な自然・国立公園の概念とどう異なっており、それが日本人の自然観をどのように映し出しているかを報告した。

第6回は、既に提出済みのお互いの英語論文を読み合い、それぞれ見当を加えた。

第7回は、待望のフィールド・トリップであった。ゲストスピーカーが遅れて到着するなどのハプニングはあったものの、全体としてはかなり成功したといえる企画であった。

第8回は、最終確認ということで、出国にあたっての留意点、持ち物の確認その他を行なった。

すべてを2人でやらなければならなかったため、かなりの制限はあったが、札幌で定例会を開く意義は本当に大きなものがあったといえる。(高橋 博)

## フィールドトリップ

### 径書房フィールドトリップ

---

会議も約一ヶ月後に迫った6月22日、一連のフィールドトリップの一環として『長崎市長への7300通の手紙』、『ちびくろサンボ絶版を考える』等の出版物で知られる出版社径書房を訪問した。当日は言論の自由というテーマを中心に、代表の原田氏から同社の設立の経緯から代表自身の人生観まで幅広くお話をうかがった。

戦前は軍国少年だったという同代表がいかにして現在の境遇にたどりついたのか、というご自身の人生に基づいたお話は非常に印象深いものがあつた。玉音放送の日を境に軍国

主義国家から民主主義国家に変わったとされる日本。少なくとも歴史の教科書にはそう書いてあるが、本当にそう何の葛藤もなく人間というのは簡単に変身できるのか？急に民主主義を唱えだす大人達に対し激しい不信感を抱き、右翼活動に携わるようになった同氏が、民主主義を信じ、それを擁護するようになる過程にはまさに氏の生きざまが深く関わっている。それだからこそ、現在強い信念を持つことができるのだと、感心させられた。言論の自由を唱えるのはやさしいが、本当に大切なのはそれを実行することなのであるという

お話は、それ故、強い説得力を以て参加者一同の心に残ったと確信する。こういう風によく、非常に激しい性格の持ち主のように聞こえるかもしれないが、実際には非常に温厚で、かつ気さくな方である。参加者との話も弾み、皆楽しみながら同時に学ぶことができたのではないと思う。最後には、皆話に引き込まれたせいか、同社の新刊本を購入して、

このフィールドトリップは終了となった、といえは大体の雰囲気は察して頂けるのではないかと思う。私事で恐縮だが、この時伺った「自分を大切にする」という哲学は、どうも僕の人生哲学にもなってしまったようである。自分を大切にして、自分に正直に生きよう。いい一日だった。(佐野日出之)

## 被団協を訪ねて

1992年6月27日(土)午後1時30分から「にんげんをかえせ」というビデオを観るために、「平和博物館を創る会」を訪れた。そこは幅5メートルほどのガラス張りの入口に「平和博物館を創る会」とかいてあるだけで大きな看板も表示もなく、そびえたつビルの谷間にあって、つい通りすごしてしまった。入ってみると、数々の原爆関係の品々が展示してあった。

「にんげんをかえせ」では、原爆の恐ろしさと悲惨さを訴えた被爆者のコメントが印象的だった。いろいろな葛藤を克服し、一言一言、言葉を噛みながらでてくる彼らの思いは人間の生死の真をついていたように感じられた。特に、「人間にあんな惨い死に方があっていいのだろうか」という問い掛けに心がふるわせられる。私は改めて人間の「死に方」について考えさせられた。彼らの死は同時に世界の死であった、そして彼らの地獄も同時に世界の地獄と化したことを私達は忘れてはならないとおもう。

今回お世話頂いた「平和博物館を創る会」の方の話によれば、「平和運動をすること」とはそんなだいそれたことではないという。たとえば、土曜日の午後に時間をつくって現

場のビデオを見に足をはこんできたこと、これだって平和運動のひとつとよべるという。平和は頑張って＝「がん」をはってかちとるものでなく、むしろ「Take it easy」と明るくいきたいものである。

午後3時からは場所をかえて被団協の方との懇談にはいった。加良谷恵美子さん(埼玉県原爆被爆者協議会理事)は2歳のとき広島で被爆し、その被爆体験について語ってくれた。加良谷さんはお母さんの胸に抱かれて被爆したという。そのため、体右半分に外傷を負っている。加良谷さんは「髪にかくれてわからないでしょう」などと笑顔で話してくれたが、体に負った傷以上におもいはずであった胸の内の傷をも淡々と話してくれた。

加良谷さんが語ってくれた被爆者ゆえの苦難は想像を絶する。加良谷さんらは親戚のもとに身をよせたが、お母さんは重度の被爆状態であったため納屋に隔離され、そこでうじに体を蝕まれながら亡くなっていったという。

加良谷さん自身、被爆者ということで差別をうけ、辛い思いをしてきた。一つは一度目の離婚であった。もう一つは、体のために二人めの子供を生むのを断念しなければならなかったことである。このときばかりは自殺を

考えたという。

原爆は8月6日と9日の日にだけ死傷者をだしたのではなく、今こうしている間にも人を傷つけ死に直面させている。私達の知らないところで多くの被爆者が差別や苦難と闘っている。加良谷さんは自分が被爆者であることを近所のひとにまだ知らせないでいるという。私に気がつかないだけで、私の近隣にも「加良谷さん」がいるにちがいないと思わされた。

## OCCUR (動くゲイ&レズビアン会)

---

今回のフィールドトリップではOCCUR (動くゲイとレズビアン会)の代表者の方をお招きしてお話をうかがった。OCCURは設立された当初から同性愛への偏見をなくし、正しい知識の普及のために運動を行っている、同性愛者により構成されている団体である。

アメリカでは例えば、ほぼ各大学でこうした同性愛者の権利拡張のため活動しているグループが見受けられるが、日本で大規模なものではOCCURともう1団体の2つのみ。同性愛者の存在そのものに対する認識が非常に低いといえる。が、反面、それゆえ迫害が少なく、暮らしやすいという話を聞き、複雑な気持ちになった。

スピーカーが強調していたのは、同性愛者とストレートの人達の間には何の違いも存在

被団協の方々にはお忙しい中このような時間をもうけて頂いたことに深く感謝をささげたい。皆さんはどんな苦難のなかにあっても、非常にたくましく立ち向かっていこうとしている。しかし、その姿は決して戦闘的でなく和やかで温かみを感じた。これからの御活躍に期待したい。私は、被爆者の痛みを知りそれに打ち勝とうとする生きざまに励まされた。  
(高橋 直子)

していないということであった。特別視する理由は何もないということである。正直に言って同性愛はセクシュアリティの1つに過ぎないというスピーカーの話を完全に理解できたとは思えないが、それゆえ差別を受けるようなことがあってはならない、ということは何分に理解できる。

スピーカーの方はクリスチャンとして、また家族のことなどいろいろ話して下さり、もう一度、そうしたことは何なのか、自分なりに考えさせられることも多かった。

一般の参加も非常に多かったフィールドトリップであった。参加者の中に、自分も同性愛者だという男性がいて、また違った視点でいろいろな話をしてくれたことは、非常によかったと思う。  
(坂田亜也子)

## ブリジストン美術館を訪れて

---

7月5日、私達12人(日米学生会議参加者から5名・一般からの参加者7名)は、東京八重洲にあるブリジストン美術館を訪れた。単に展覧会を見るだけでなく、美術館で普段

から美術と直に接しておられる学芸員の方のお話を聴くことができたのは非常に意義のあることだった。まず初めに美術館の常設展示を1時間程鑑賞し、その後学芸員の貝塚氏を

囲み2時間半程、主に「美術館の社会的機能」というテーマで話をした。美術展、美術館の舞台裏の様子をありありと語って下さる貝塚氏のお話に参加者一同すっかり吸い込まれてしまった。

ブリジストン美術館は、1952年、石橋財団の創設者石橋正二郎氏のコレクションを、広く市民一般が楽しめるようにと設けられた美術館であり、1956年より石橋財団により運営されている。フランス印象派の画家（モネ、セザンヌ、マイヨールなど）の作品、そして近代日本の画家（青木繁、岸田劉生など）の作品など著名な大家の秀作が集められている。そしてなにより、ブリジストン美術館の展示室のスペースの広さと落ち着いた雰囲気は、デパートの美術展によくありがちな慌ただしさとは対照的で、私達鑑賞者に“時間と見方の自由”を与えてくれるような、そんな雰囲気をかもし出している。

戦後日本の経済発展の中で、「芸術文化をも広く市民の手の届くところへ置こう」という西洋近代の美術館のコンセプトと方法をいち早く導入し実現化したのがこのブリジストン美術館だった。ちょうど1960年ごろから日本でも現代美術についての関心が高まりつつあり、当美術館でも当初は海外からの現代美術を招へいし、企画展を催していたようである。しかし、これほどのコレクションを1つの美術館で所有し、近代美術の歴史を感じさせてくれるようなこの美術館の長所を最大限活かすことが考えられた。つまりいわゆる“現代美術”という動めく美術に焦点をおくよりは、むしろ歴史的視野で美術をとらえる機会を提供しようと、常設コレクションをより充実させることに重点がおかれたのである。この考え方は、非常にうまく実現されている

ように思う。私達は、今を生きる人間として、今現在の美術の動き、芸術の動きに敏感であることが望ましいが、もう一方では、それを美術の歴史の中に位置づける作業も必要だろうし、この現代の芸術を導くにいたった芸術の歴史をも理解する必要があると思う。

貝塚氏はまた、学芸員としての仕事の話もして下さった。2年後の“モネ展”の準備は、既に3年前から始めておられる、という話、美術作品を海外の美術館から借りてくるときにかかる絵画への莫大な保険金のこと、絵画を運搬するときの付き添いのお話などなど。経済に組み込まれた芸術の姿を貝塚氏のお話から聴き取ることができた。

現代の美術（館）をとりまく環境は複雑で以前とは芸術の意味・手段も著しく変化しつつある。東京にも美術館が驚くほど多数できているし、その中にはハイヴィジョンを使って作品を見せるなど、美術鑑賞に対する従来の考え方に挑戦するかのように見えるものもある。ヨーロッパやアメリカのように、歴史的な美術作品をまとめて所有しない日本の中小美術館には何が出来るのか。“美術館の統合”という考えもおこっている。生活の豊かさを単なる経済効率や物質的繁栄のみに求めることの少なくなりつつある今日、ローカルな場所でも大都市においても、美術館の人間生活に対する影響力とその提供するものはますます大きくなることだろう。私たちは市民として美術館とのどんなかわりを求めるのか、もう一度考え直してみるとよいだろう。貝塚氏の厚いご協力に参加者一同感謝している。

非常に有意義な実地研修となった。

（増井早知峰）

## JETRO（日本貿易振興会）

---

貿易立国である日本が、噴出する摩擦を乗り越えつつ世界の経済成長、ひいてはJASCの総合テーマでもある地球共同体の形成に向けていかなる方向性を打ち出せるのか、ということはおのづから問題意識であった。

JETROは通産省の所管であり、かつては日本製品の輸出促進のための様々な事業を行っていたが、日本の輸出超過が782億ドル（91年度）に及ぶ現在ではその役割も変わり、バランスのとれた世界貿易の達成のための事業機関となっている。

「一人勝ち」といわれる日本が、一体どのような形で各国との調和を目指しているのか、その全面に立ち活動している同法人を訪れお話を伺うことは意義深いことであるように思われた。

JASCという名を携えての交渉は滞りなく終わり、6月26日（金）午後に参加者7名とともに実現の運びとなった。

## 自由の森学園

---

池袋から約50分。緑、いや山の中にある自由の森学園を我々一行6名が訪れたのは夏も始まろうとする頃であった。まずは教頭先生に案内して頂いて、学校見学のご父兄と生徒十数名と一緒に授業中の教室をまわった。中1の理科の教室では、生徒がうるさくて授業にならなかった様で、先生と生徒の話し合いが行われていたようだった。高2の音楽の授業では、一クラス約30名とは思えない素晴らしい声量での合唱の授業を見せて頂いた。その後、学校の理念等について話して頂き、全て

当日お話しをして下さったのは海外調査部米州課課長の若林寛之氏であった。氏はこの日のためにわざわざレジュメまで用意して下さり、日米経済関係と今後のJETROの役割を主なトピックとして挙げ話された。

現在の貿易摩擦は相互依存関係の深化により文化的要素をも内含した複合摩擦となっており、情報化の一方で、国同士はお互いを知っているようで知らない状況に陥っているといえよう。そうした中でJETROの地道な努力が今後一層重要になると思われる。

とかく日本には叩かれがちなモノ言わぬ国というイメージがあるが、今回の実地研修で日本側の努力や論理が聞けたことは参加者に新たな視点を開くものであり、貴重な経験となった。

最後に、この実地研修を実現するにあたり多大な御助力を頂いた関係各位に心から御礼申し上げたい。（工藤 博海）

生徒たちの企画・進行による卒業式等の行事のビデオを見せて頂いた。自由の森学園には制服はもちろん、通知表も定期テストもない。あるのは自己評価による評価法と暴力・オートバイ等に関するいくつかの「生活のきまり」のみである。ここで先生が強調していらっしたのは、全てが自由である学校だから、中途半端な気持ちで入学すべきではないということだった。

中高生であふれる学食でおいしい伝統食（和食）のお昼を食べ、我々のために校内ア

ナウンスで集まってくれた二十名以上の生徒の話の聞くことができた。我々の質問に自分の言葉で答える生徒たちの声からは、それぞれ自由な学校が好きであり、それぞれが自由であることの不安やつらさを感じている様子が見られた。その後集まって下さった二人の先生方からも同じようなことが感じられた。生徒に対する深い愛情と自分の授業に対する熱心さ、その反面教科書等の既成の教材を使

わずに各先生個人が授業を作っていくことの大変さ、などである。

受身本意の教育を受けてきた参加者たちには、とても考えさせられるフィールド・トリップ（実地研修）であったと思う。自立した人間を育てるといふ自由の森学園の理想のすばらしさと、その理想にむけて暗中模索する先生と生徒たちの姿を見ることができたからだ。

（増子 聡）

## NHK

---

6月27日(土)、人ごみでごった返しているJ R渋谷駅ハチ公交番前に私たち日米学生会議参加者4名と一般参加者4名は集合し、一路、目的地NHKを目指してゾロゾロと移動し始めた。途中、人ごみの中で互いにハグレながらも、なんとか時間通りにNHKに辿り着き、広報室の正田さんに、海外のニュースがどのように収集され、国内に配信されてゆくのか、ということについて御自身の体験を交えて語っていただいた。一通り、正田さんの話を伺った後で、参加者の側からの正田さんの話、マスコミ一般、そして、NHKに関する質疑に対する応答が行われた。特に、マスコミ自身

による報道内容・姿勢に対するチェック機能についての話は、大変興味深いものだった。約1時間半程の質疑応答の後、最後に報道局、スタジオなどのニュース発信の現場を見学させていただいた。皆、珍しい機材と刻々と各地から送られてくる情報の量に驚いた様子だった。

30分程のスタジオ見学を終え、正田さんに休日にも拘らず私たちのNHK見学の企画に協力していただいたお礼を言うと、様々な感想を口にしながら私たちは家路についた。

（西元 宏治）

## UNHCR

---

6月30日と7月15日の2回にわたって、国連高等難民弁務官事務所（UNHCR）の駐日代表であるギイ・プリム氏に、難民に関する問題と国連の役割についてお話を伺った。参加者は、一般学生と会議参加者からの出席者合わせて約20名程であった。

第1回目は、難民の定義やその歴史、難民に関する国際機関の歴史、UNHCRの働きな

どについて1時間程説明を受け、その後参加者との質疑応答を含めたディスカッションに移った。その後、一回目の議論が時間の制約のために十分尽くされなかったのでは、というプリム氏の配慮から第2回目の会合が持たれた訳だが、予想に反して参加者が1回目と異なる顔触れとなってしまったことから、前回とは異なるトピックとしてボスニア・ヘル



ツェゴヴィナの現状を話し合った。

難民とは、1951年の国連・難民の地位に関する条約第一条によれば「人種・宗教・国籍・もしくは特定の社会的集団の構成員であることまたは政治的意見を理由に迫害を受けるおそれがあるという十分に理由のある恐怖を有する為に、国籍国の外にいる者」である。難民という現象が長い歴史を持つことは、キリスト自身がまた難民であったことを思い出せば十分に理解できるだろう。今世紀に於いては、1917年のボルシェヴィキ革命や1933年以後のナチスの圧迫によって何万人もの亡命者が発生し、その保護にあたる国際機関が国際連盟によって設立された。第二次世界大戦を経て1951年にUNHCRによって仕事が引き継がれる迄に、何度か名称を変えつつも、国際的難民機関は、150万人以上の避難民に援助を与え、7万人以上を母国に帰還させた。現在世界情勢が様々な変化を見せ民族的対立が顕在化する中で、全くの人道的見地からすべての人に基本的人権を保障すべく活動するUNHCRの仕事と権限は、拡大の方向にあると行ってよいだろう。難民の状況がメディアに取り上げられると、一時的には世界各国から物質的な援助が集まる。しかしそのようなブームに関係なく、持続的に食糧・教育・難民の諸権利の保護など各方面からUNHCRは援助活動を行なっている。また最近是人種・宗教・国籍・政治的信条の理由からよりも、貧困・人口爆発・経済の失敗・人権の侵害によって難民が生じている。そのことから、開発援助にも関わるようになったのが最近の傾向である。

参加者に感想を聞いてみると、難民に関する知識を増やすことが出来てよかった、という他に、プリム氏のヒューマニズムに対するコミットメントに感動した者も多かったようだ。世界情勢がめまぐるしく動き、融合に向かう今、難民と18年間接してきたプリム氏が参加者に訴えた言葉は胸に留めておく価値があるように思われる。それはおおよ次のようであった。「私は皆さんのような若い方々に特にお願いしたい。難民が自国に流入してきたらどうしよう、などと恐れなくて欲しい。異なる国籍を持つ難民の両親との間に、そのどちらの故郷でもない第三国で生まれ、自らも難民となり、イギリスで教育を受け、今やっとUNHCRの助けでフランス国籍を取得した私の友人の例を引くまでもなく、国を越えた人と人との結びつきが進みつつある現実にもっと目を向けて欲しい。あなた方が、難民のよき隣人となることを願って止まない。そしてもっと、世界各地で起きている人権侵害に敏感になって欲しい。人権は、すべての人が生れ乍らにして持つ権利である。これからの世界は、あなた方が築き上げる。希望を持って相互理解を通じて世界に平和がもたらされるよう、頑張ってください。」

自分が自らの鈍感さのゆえに見逃していることってあるのではないか、もしそうだとしたら、どうしたら自分とは異なる境遇にいる人（この場合は難民）の立場を理解出来るのだろう、またよりよい解決に向けてのどんな援助活動が出来るのだろう、そんなことを考えさせられた2回のフィールド・トリップだった。  
(高橋 香織)

## 関西フィールド・トリップ (NGO/PHD)

---

関西定例会では、第三世界問題、日本におけるNGOの働きを学ぶために5月30日、神戸のPHD協会を訪問した。

お忙しい中を総主事の草地先生にNGOとは何かということから始めてPHDの働き、日本のNGOの現状、援助および協力のあり方に至るまで約三時間にわたって質問を交じえながらお話しして頂いた。日本のNGOはまだ、「赤ん坊」だとの草地総主事の言葉からも察せられるようにNGOは活動面で「本当の」協力とは何か、また個人の問題としてはNGOワーカーの生活保障はどうなるのか、といった様々な問題を抱えている。NGOの理念と現実の厳しさをかい間見て改めて活動の難しさを感じずにはおれなかった。

6月20日、PHDの紹介で、先ず個人で有機農業経営を行っている牛尾さん宅を訪れた。汚臭のない鶏舎で餌をあげたり、有機栽培のおいしい野菜を頂きながら、餌の発酵や経営

内の物資の再利用など数々の工夫や試みをうかがった。また彼は外国からの研修生の受け入れを行っており、スリランカからの研修生であるシャンタさんから、経済格差や文化の違いが農業や生活状況に与える影響を聞いていた。日本で学んだことが必ず現地の技術や農業に対応できるわけではない。しかし牛尾さんとシャンタさんは共に相手の文化を学び把握しようとしており、人間の根本的な成長のために助けあっていた。

その後集団で有機農業経営を行っている「ふえろう村」を訪ねた。社会に対して様々な考えをもった人達が、共に生活しながら農業を行っているが、3年以上そこに住む人はほとんどいない。経済分配や共同組織に問題があるようだが、その生活で何かを得て疑問を抱き、答えを探しに社会に出ていくことは確かだと思われた。(松本 安代)

## 関西フィールド・トリップ

---

### —神戸中華同文学校—

民族教育を行う学校は、日本にも何校かある。しかしそういった学校を訪れたり、そこで行われている教育、子ども達の様子などを知る様会はほとんど無いということで今回日本社会における民族問題学習の一環として神戸にある在日華僑の学校を訪れた。

その日はまず、先生方の御案内で小・中学校の授業を見学させて頂いた。子ども達はこの学校に入学する前まで全く日本人の子と同様に育ってきている。それを一から中国語など教え始める訳だから大変だ。小学校低学年

の授業では日本語と中国語を聞きとったり話したり出来る様になれば、授業は中国語をベースに行われる様になる。中国語の修得、それに中国の歴史・文化の学習がこの学校で重要視されているのはもちろんだが、それだけに集中しているわけにはいかない。この生徒達も一般の日本の子ども達と同様の高校受験をする中学3年生にもなると、今まで使っていた中国語で書かれた教科書に代えて、日本の教科書を使って受験対策をする様になる。

学校の運営についていえば、一般に民族学

校は日本の公立、私立学校などと同じに扱われておらず、専門学校などと同じ各種学校として分類されている。よって国や地方自治体からの補助もほとんどなく、財政も相当苦しい様だ。そういった諸々の大変さにもかかわらず、先生方は本当に熱心で、子どもの教育に意欲的であった。近隣の小・中学校との交

流や中国帰国子女の受入れを行うなど、地元との交流も盛んだ。

このすばらしい学校で学んだ子ども達が将来日本と中国をつなぐ架け橋になるのだと思うと、とても熱い気持ちでした。

(阿古 智子)

## フィールドトリップ・イン・サッポロ

---

6月27日に、札幌で初めてのフィールドトリップが行われた。在日朝鮮人の人権を守る会の事務局長である北大の山本玉樹先生をお迎えして、「基本的人権と日本国憲法一強制連行と在日朝鮮人の人権」というタイトルの講演をして頂いた。大学において物理を教えていらっしゃる先生は、日本人として人間として過去を見つめたいという思いから、自分の足で北海道における大戦中の強制連行の傷跡をリサーチなさっている。炭鉱でのタコ部屋労働、在日朝鮮人の方々の体の傷や心の傷、

日本国憲法そして国連憲章に謳われた基本的人権の精神を踏襲していかなければならないことなど、我々が知らなかった事実、新しい視点を垣間見ることができた。

当日は、我々を含めて13名の学生が集まった。それぞれの思惑はあったようだが、ディスカッションを通じて新たな友情が芽生え、おそらく札幌では初めてと思われる、大学を超えた学生の手によるアカデミックな集まりを楽しむことができたのではないだろうか。

(寺澤 実紀)

## 関西フィールドトリップ 自衛隊大久保基地へ

---

市川の企画で、「戦争と平和」における安全保障問題を考えるため、自衛隊の大久保基地（陸上自衛隊）を訪れた。現在日本が東アジアにおいて、どの様な位置を占めているのか、日米安保は今後も堅持すべきかなどを話した。

現在、日本は世界のトップクラスの経済力を持つ様になり、政治的にも、少くともアジア地域でリーダーシップを発揮せねばならない状況にあるといえよう。それ伴って海外に影響力を持つためには、軍事力も必要であろう。PKO法案成立は日本の弱点である「外

庄」を利用した、うまい口実であったといえる。だが私はこれは明らかに憲法に違反していると思う。国会における法案成立過程も日米安保の時同様、数で押し切る強引なものが見られた。（ただし、もう日本人にはデモをする気力もそれ程無かった様だが。）北米地域以外特にアジア地域において、日本がなぜ自衛隊の海外派兵を望むのかが明確でないことが問題といえよう。ECとは違った形でのオリエンタルな何かを基調としたアジア地区の経済・政治的統合が将来不可欠となってくるであろうし、日本はそのリーダーシップを

取り得る数少ない国であろう。アメリカはいまだに日本が忠実な番犬でいてくれると思っているのであろうが、これを機に日本は独自の外交を持った「アジアのなかの日本」として成長していくのではなかろうか。

突っこんだ話は何もできなかったが、前述

のようなことを考える機会ではきたし、普段は会うことさえできないと思っていた自衛隊の人々に会えて良かった。存在してしまっているものを認め無視することなくその実態を捉え、それから考えていくことが必要だと思った。(田中 剛)

## 結団式報告

---

会議本番を目前にした7月4日、東京九段会館にて行われた第44回日米学生会議結団式は、国際教育振興会理事の板橋並治氏を始め二十数名に及ぶOB/OGの方々の出席を得て盛会となった。

今回、初めて行なわれた結団式の意図は現役の学生達と、過去の参加者であるOB/OGの方々との交流を図る点にあった。私達は会議に参加するにあたって、世界でも有数の最重要二国間関係の一つといわれる日米関係をテーマに自分たち学生は何をすべきかを常に自問自答している。しかし、たかが学生に一体何ができるのかと行き詰まることがしばしばである。今、学生同士で集まり会議をもつことの意義は何か、学生でなければできないこととは何か。会議後とて答えはひとりひとり違うだろう。そこで、毎回今の私達と同じ立場で同じことを考えて来られたOB/OGの方々の御意見をお聞きする場としてこの結団式が企画されたのであった。

はたして、城戸崎清氏、加茂康郎氏、船瀬俊介氏ら三氏に「日米学生会議と私」と題し

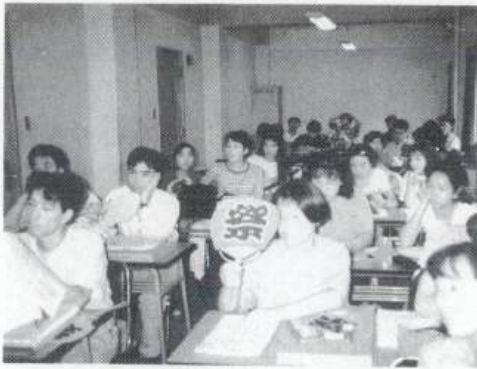
てお願いしたスピーチでも、その後行われた立食パーティーでもそのことは出てきた。間違いなく会場にいる全員が共通して考えていたことであった。自分たちの当時を振り返り、学生であったが為にできた自由な発想、議論、純粋な情熱、感動、そしてある面悲しくもあった生真面目さを語って下さったのである。ときに笑い、ときに肩をたたきながらの思い出話は年代を感じさせない親近感を私たちに抱かせた一方、単なる思い出ではなく教訓として身に響いてくるものでもあった。学生会議の意義、それはつまり学生であることの特権をフルに活用することであり、そうしてきた先輩の方々は社会人となった後も分別くさくなく、今なお情熱とパワーを秘めているように思えた。風雲急を上げる戦前の第一回が既に劇的であった日米学生会議は、その後五十有余年毎回変わることなく我々学生たちによって続けられ受け継がれてきた。その力強さと若々しさのわけが私たちは分かったような気がした。(白石 史朗)

## 直前合宿報告

---

アメリカ出発の直前である7月24日から、準備の最終段階として都内で2泊3日の合宿を

行った。地域ごとに進めていた定例会とは異なり、久しぶりに全国から参加者が一同に会



代々木オリンピックセンターでの直前合宿

した。合宿終了後そのままアメリカへ発つというので、重いスーツケースを引きずりながら三々五々の集合。殆どの参加者は大学の試験が終了した開放感と目前に迫る会議本番への期待でナチュラル・ハイな状態であった。

合宿の内容は会議日程の説明、アメリカでの生活の為の諸注意、諸業務(写真撮影・救護等)の役割分担、会議終了後に作成する報告書の編集・執筆作業の分担などといった事務連絡、調整、確認といったものが殆どだった。

今回の学生会議で初の試みである共同声明については、それを作り上げる過程、又で上がったものに対する参加者のイメージが共通のものとなっておらず、今後はアメリカ側参加者も交えての一層の打ち合わせが必要なことが浮き彫りになった。又、この話し合いの中で、総合テーマである地球共同体への一歩一今果たすべき私たちの役割、そのものについてももっと話し合わなければ総合テーマを敢えて設定した意味が稀薄になるのではない

かという指摘もなされた。又、日本側報告書に関しては、単なる事実の「報告」と留まらない、参加者各人の顔が見える「読んで楽しい報告書」を作ろうという方向で活発な議論が行われた。

全体としては休憩や自由時間も多く、ゆったりとした雰囲気の合宿だった。そんな中で参加者の会議への期待とヤル気も見られたが一方で「初心」を忘れたややるズな行動も垣間見られた。遅刻・部屋の片付けの不徹底 etc…。様々な方々の理解と善意によって学生会議は成り立っている。一種特異な雰囲気に呑まれ、大所高所に立って議論する間に、いつの間にか足元を見失ってしまうことがある。それを避けるのは結局各人の自覚と責任感だろう。そんな当然のことを改めて確認した。

いずれにせよ、この直前合宿で日本人参加者の結束は強まり、「イザ出陣！」と7/26夕刻成田を後にしたのであった。

(割石 俊介)



成田へ向けての出発前

## 2. 本 会 議 内 容

### ジョイントオリエンテーション

ジョイントオリエンテーションとは、その

名の通り日米双方の参加者が本会議に入る前

に親睦を深めていこうとする場である。つまり、お互いにリラックスして信頼関係を結んでいくことが大きな目的である。一ヶ月の間寝食を共に活動するのであるから、そういった意味ではこの最初の出会いは、これから先の本会議の方向性に大きな意味を持つものと思う。そこで今回の特色としては、2日間に分けてゆっくりと行なわれたことだ。

さてジョイントオリエンテーションは、Hemlock Overlookという人里離れた場所で行なわれた。特に日本側の参加者は都市部の出身が多かったためか、この緑豊かな場所を気に入ったようだった。そこで、自己紹介は屋外で催した。前日に到着後歓迎パーティーがあり、その時各々が既に自己紹介をしていたので和気霽々と進んだ。自己紹介が終盤に差し掛った時に雨が降ったので、会場を中へ移した。その後今回の総合テーマについて話され、各自がどのようにテーマや日米学生会議について考えているのか意見交換をした。一人一人の会議に対する思い入れが強かったからか、予定の時間を軽くオーバーしてしまった。

この後は、日米文化紹介と題して日本からは、先ず最初に能を松本が披露し、引き続き茶道を大谷が、書道を増井が、香道を松井が、折紙を増子を始めとする有志がそれぞれ担当して各場所で披露した。日本人でも普段目にすることはあっても、中々直に体験することはないので、お互いに楽しめたようだった。このような伝統文化のみの文化紹介で終わってしまうと誰しも思っていた。その時「ちょっと待って。」コールがかかった。後を振り向くと、浴衣姿になった久米、高橋、福島の3人娘の姿が目に移った。一体何を始めるのかと聞けば、日本の宴会芸を紹介するとのこと。

何といきなりキャンデーズの「年下の男子」をアカペラで歌い始めた。もう会場は拍手喝采の熱気で一杯になった。



さて一体アメリカ紹介は何なのかと期待すると、Rajeshの都会的な司会のもといきなりミュージカル的なダンスが始まった。最初はアメリカ側だけで行なわれていたが、その後近くに居る日本人参加者も手をひかれ仲間に加わった。それから昨年の会議で大好評を博し、JASCの公式ダンスになったと思われる位親しまれたハワイアンダンス「フキラ」をハワイ出身のメイリーンが担当し、先ず最初にハワイアンダンスの基本形である「ウエヘ」等を学んだ後音楽に合わせて行なわれた。彼女曰く、これが踊れたらもう立派なハワイアンになれるとのことだ。

夕食が終わると日本人有志が何人が集まり、いきなりKarate Dance Brothers（注：名称が不明の為適当に名付けました）が組織され、空手の型を基調としたダンスを管の振り付けのもと始められた。最初は空手の型を教えているのかと思っていたのだが、最後の方には空手ミュージカルのように出来上がったのには本当に驚かされた。この時またJASCerのエネルギー的な点を再確認させられたようだった。



この後夕食を挿んで、アメリカの伝統芸能のスクエアダンスをダンス講師を迎え楽しく行なわれた。このスクエアダンスは、フォークダンスのように円になって踊るのではなく、2人ずつが組みん何組かが方形を作って踊るのである。久しぶりに踊るこのスクウェアダンスは、何となく高校時代を思い出させてくれたのは、私だけではないように思えた。

一見楽に見えるこのスクエアダンスは、結構ハードだった。ダンスが終わる頃には汗でびしょりになってしまった。昨年の日本の盆踊りとは大違いであった。それでもやはり皆楽しかったようだ。

この日はこの後キャンプファイヤーが行なわれ、めらめらと火が燃え盛るなか怪談、歌

ありと誠に忙しい一日だった。

翌28日は、ハワード大学へ移動する前にRopes Courseをグループ別に廻った。これはグループ内での信頼感を募るために意図されており、屋外に仕掛けてあるものを使い参加者が力を合わせて一つ一つ熱していくものである。中には、高さ3メートル位の板を参加者10名が何も使わず越えていくような大変なものもあった。このお陰で、一人一人の協力が得られて、多くの困難を乗り越えて行くことが出来た。この時に何とかこの会議も困難があってもこのメンバーで遣っていけるような気がした。 (松井 恵一)



## JOINT ORIENTATION

開会式の前に、日米参加者の親睦を深めようという目的で、ワシントンDC郊外のヘムロック・オーバールックにおいて、ジョイント・オリエンテーションが行われた。これが会議の始まりなのであった。

飛行機の故障で、予定を大幅に遅れ7月27日の未明に到着となってしまった。そんな日本側参加者を、未明というのに起きていてくれたアメリカ側が歓声をあげて半ば興奮気味

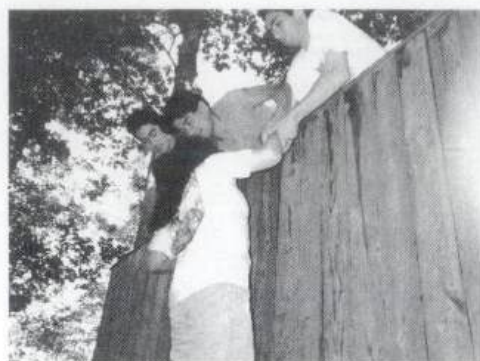
に迎えてくれた。それから明け方まで、歓迎レセプションが開かれた。私たちが来るまで食べ物を残してくれたそうである。初めて会って、初めて言葉を交わし、それなのに長いつき会いのように微笑み返してくれる！喜びと興奮のうちに第一日は過ぎていった。

天候や前日の疲れなどを考慮して予定を変更し、昼まで睡眠をとった後、午後には全員が、一人ずつ自己紹介を行った。その後、小

グループに分かれて、第44回日米学生会議の総合テーマ、「地球共同体への一歩～今果たすべき私たちの役割～」についてのテーマ・ディスカッションを行なった。これは、日米両方の参加者が、共同で行う初めてのディスカッションであったわけで、これからの1ヶ月のこの会議での生活を前にして、非常に印象的であったろうと思われる。何よりも皆が憶することなく自分の意見を述べているのが心地良かった。

さて、その後は日米文化紹介と題して、日米の文化を互いに紹介しあう時間を持った。日本側から能や茶道、習字、香、折り紙などを披露した後は、アメリカ側からの陽気なダンスに夢中になって、とても楽しい企画であった。

森の中で、夜中までキャンプファイヤーを囲んで歌ったり、怪談をしたりと騒いで明けた次の日には、待ちに待ったロープス・コース！これは、10人程のチームを組んで、アスレチックの数々（壁を越えたり、綱をつたったり…）をこなしていくものである。大事なことは全員で考えて知恵を出し合って、全員でやりとげるという事で誰か一人でもこけたら成功しないものである。チームワークを深めるのが目的であり、実際、何度も失敗したり、池に落ちたり(!)しながらも、助けあったりして、そうするうちに自然と会話が活発になり、笑いが絶えなかった。各チームとも心から楽



しんで、一段と交流が深まったのは間違いない。何故なら、その後にバレーボールをした時の盛り上がりには、すごいものがあったから。（遠藤のプレーには全員注目?!）

それは日本側、アメリカ側など区切るのが陳腐なほどに皆が楽しんでプレーしていた。こうして、ジョイント・オリエンテーションは終了し、7月28日の午後には、ワシントンDCでの滞在先となるハワード大学に到着した。だが、その時には既に、出会い前の不安は何処へやら、皆うちとけてきて、これからの会議での日々を共に過ごす仲間としての意識が生まれていたのであった。

多少の変更はあったにせよ、実行委員の努力もあって、大変有意義な時間を過ごすことができた。参加者全員の心の中に、会議の貴重な思い出の一つとして、ジョイント・オリエンテーションは残るであろう。そしてこれが会議の最初にあったということがまた良かったと思っている。（梶原 絵麻）

## 開 会 式

よく晴れた夏の日、第44回日米学生会議の開会式がワシントンDCのコスモス・クラブで行なわれた。上品な街並みを歩きながら、会場に向かう皆の気持ちはどういうものだった

のだろうか。私にはふみ出している一步一步がアメリカにつき「たどり着いた」という喜びを感じさせ、これからどんなことが起こっていくのか期待させるのであった。



前日までのジョイントオリエンテーションのおかげで、よそよそしさは見られず、またすっかり打ちとけた中で、思い思いに着席していった。会場には、米国側で賛助をして下さった方々や過去の参加者の姿も見られ、当時の思い出を私たちに語って下さった。

真紅の服に身を包んだ米国側副実行委員長のIndraniが進行役を努め、開会式は始まった。まずKathleen Hom氏が歓迎の意を込めたスピーチと、Sharon Pratt Kelly市長による「(開会式当日である)1992年7月29日を日米学生会議の日とする」という宣言書を読み上げた。さらにIndraniから、ブッシュ大統領(当時)のメッセージも読み上げられ、この会議の実績が広く認知されていることを改めて痛感した。こうしたクラブで盛大に開会式をすることができるのも、これまでの会議の成果が認められているからこそなのだろう。こうした期待に応えるべく、かつ焦点を見失わず会議を開いていこう。私は強く心に誓うのであった。

式ではその後、ビデオスクリーンが用意され、財団法人国際教育振興会の理事長であり、第1回日米学生会議の創設者である板橋並治氏が当時のエピソードをビデオで語られた。平和のために自分にできることは何か、考えただけでなく実行をおこした氏の言葉は、力強く胸に響き、今まさに始まろうとしている第44回日米学生会議に対する私の思いと重ねあわせた。静かな感動と可能性を信じる心が体の中で波打つを感じた。

そして、アメリカ側でJASC Incのプレジデントとして支えて下さったDon Albright



氏がさまざまな賛助へのお礼や、会議への期待を述べられた。そして両国の実行委員長のスピーチとなったのである。

バルセロナ・オリンピックを皆で見ていた時に感じたことから話し始めたアメリカ側実行委員長のKevin Kimはどんな時も協力し良い会議にするよう頑張ろうと呼びかけ、日本側実行委員長である私は、1人1人イメージや外見にとらわれずに話していくことと問題解決の方法でなく何故おこるのかを焦らずに考えていこう、と話したのであった。

そして、昼食をかねた会食を挟み、最後にコスモスクラブのオーナーからの話をもって、この式は幕を閉じた。歓迎という形を受け戸惑った学生もいたようである。しかし戸惑っていることばかりでは一体何がもたらされるのであろうか。むしろ何故ここまでして頂けたのか、ということを考え、そしてこの歓迎を謙虚にうけとめ自分は何をすべきか考えるべきだと私は思う。こうしたことにも「私たちの果たすべき役割」への問いはあったのであり、十分に考えるべきことなのではないだろうか。(遠藤 繁)



タクシーの窓から流れ込むワシントンDCの空に一面に広がる芝生。これらの風景は、明るく開放的で、ふと自由の国アメリカを感じさせるものであった。高速道路を疾走しポトマックを越えるとすぐに国旗の立ち並ぶ正面玄関が目止まった。パスポートを提示し金属探知ゲートを通して初めて中に入ることができ、その保安チェックの厳しさにまず驚かされた。同時に、きびきびとした職員の方の様子から、世界に影響を及ぼす重要な決定のなされる国务省の存在が実感として伝わり改めて厳肅な気分になった。緊張した面持ちの中、日本局長ラスト・デミング氏による講演が始まった。新国際秩序形成期の米国として日本の役割、両国協調についてさらにアジア、太平洋地域における安全保障等、広範な分野にわたって、手ぶり身ぶりでお話された。刻々と伝えられる現実の情報データに基づいた鋭い分析は興味深いものであった。参加者との質疑応答の中で『これからの時代は日米両国が信頼関係を背景により一層協力してゆかねばならない』と言われたその言葉に改めて日米学生会議の意義を認識すると共に、これからの時代の平和と共生に向けて、我々

一人一人の果たすべき役割の重要性を再認識した。

この後、国务省の最上階に位置するベンジャミン・フランクリン・ルームにて歓迎レセプションが開かれた。リンカーンやジェファソンなど歴代大統領ゆかりの品々、ベルサイユ条約調印の際に用いられた机など時代を創った出来事を生んだものが並べられ、身のひきしまる思いがした。

このレセプションは米国コカコーラやモービル石油、日産ノースアメリカの三社がスポンサーとなって開かれ、ユージン・コープ氏のホストですすめられた。

過去の参加者や、両国の外交官も加わり華やかな雰囲気となった。普段は、大統領をはじめとする最高首脳、国賓クラスのパーティーを催す会場だと聞いて様々なことが私の脳裏に浮かんだ。バルコニーからの眺めがとても素晴らしくリンカーン記念館やその他ワシントンが一望できるものであった。「もう二度とこんな所に来ることはないなあ」「また来るだろう」皆が様々な感想を述べる中、会場のあちこちから、「湾岸戦争の意味は」「日本の宇宙開発の状況をきかせて下さい」といった



幅広い質問が次々と会話され、こうした何気ない時間にも本音で語ろうとする皆の心意気を感じずにはいられなかった。

こうした歓迎を受けたことに対して、会議を代表して遠藤は「様々な問題がなぜ起きているのか、現実を見つめながら考えていこう」とスピーチし、こうした場を開いて頂いた方々

に感謝の意を表した。私も、デミング氏がヨーロッパ共同体に関して造詣が深いと聞き、EC統合の歴史的意味、国民国家の印象などについて尋ねる機会に恵まれ、示唆に富む話をして頂いた。大変思い出深い一日は人々との会話のうちにこうして過ぎていった。

(平竹 雅人)

## 日本大使館

7月31日。本会議が始まって3日目、開会式、国務省訪問と正装が要求されるイベントが続き、この日我々が実際訪れたのは、JAPAN CULTURAL CENTERと大使公邸であったが、大使始め駐在員の方の手厚いもてなしを受けた。個人的なことになるが、私が昨年、一旅行者として大使館を訪れた際には、受付のロビーしか入れなかった事を考えると、一年後、ブリーフィング、及び、レセプションを受けるといふ形でこのような機会を得ることができたことはとても幸せであった。

まずブリーフィングでは、現役参事官である松富茂夫さんから日米関係を中心に幅広く国際情勢についての話をしていただいたが、



日本大使館で栗山尚一大使と

外交官という立場上の制約からくるのであるなんとなくしっくりこない意見に対しては、質問の時間において、皆容赦せずの質問を矢継ぎ早に浴びせ掛けていて、参加者のとても積極的な姿勢を感じることができた。

場所を移して我々は栗山尚一駐米大使夫妻のホストによるレセプションのため大使公邸に招かれた。官廷外交という言葉を思い起こさせるような目を見張るばかりの美しい建物、食事、庭、調度品、雰囲気によって圧倒されつつ、大使による日米の若者に対する期待と励ましの挨拶の後、ワインなどで舌を濡らせながら語らいの時間を過ごした。実際に外交官になることを希望している人も何人かいて、熱心に話を聞く姿がみられたり、また、我々学生がこのような身分不相応なところにきてしまってもいいのだろうか、また、招かれる意義とはなんなのだろうかというようなことを話す者も多数見られた。とにかく、各人にとって、いろいろな意味において、とても貴重な体験をすることができたことは確かであると思われる。

(市川 裕康)

## 地球環境フォーラム

### 総括

---

ここ数年、発表された地球環境をめぐる科学データは、ほとんど例外なくその事態の悪化を伝えている。地球環境の悪化は生態系だけでなく、今後、長期に渡って私たちの社会生活に重大な影響を与えることが分かってきた。私たち人類が生活を営み、また多種多様な生物種が共存する地球は、21世紀を目前にして深刻な状況を迎えようとしているのである。それでは具体的に何が地球環境の悪化現象として現れているのか。例として挙げればオゾン層の破壊、地球温暖化現象、熱帯林の減少や砂漠化、海洋汚染、など枚挙に暇がない。地球上で暮らす私たち人間は、こうした問題を引き起こした当事者としてそれに対処し、克服する努力をしなければならないであろう。

第44回日米学生会議では「地球環境に国境なし」という観点から、国家を越えて一人の人間として地球環境問題を考える場を持つという主旨で、このフォーラムの開催を決定した。日本人、アメリカ人という立場ではなく「地球人」としての立場で取り組もうということがその底流にある。また単に地球環境の悪化状況を知り、それを論ずることだけにとどまらず、私たちが何をなすべきなのか、何ができるのかという議論から、今回の総合テーマ「地球共同体」の形成に向けて新たな一歩が踏み出せる、そう考えたのである。

さて、第44回日米学生会議は開催地として、ワシントンDC、ナッシュビル、コロラドスプリングスの三都市を訪れた。今回の地球環境フォーラムで目指したものは、一言で「頭と身体を使って参加」するフォーラムであった。その内容を簡単に説明すると、ワシントンでは地球サミットに出席した日米の政府高官、温暖化を調査している科学者を招き、「地球温暖化現象」をもたらす原因をデータをグローバルに用いてレクチャーして頂いた。第二の都市ナッシュビルでは現地の環境ボランティア団体、州政府の環境問題担当官、地元企業関係者などそれぞれ立場の異なる人々を招き、地域社会と環境問題について考える場を持った。そして最後のコロラドスプリングスでは、建設中の州立自然公園で歩道作りの手伝いをし、コロラドの美しい自然を満喫しつつ汗を流すというボランティア活動を行った。(各都市でのプログラムの内容は、後のページに詳細が出ているのでそれを参照されたい。)訪問する三都市それぞれの土地柄にあったプログラムを準備したい、ということと一年間かけて日米双方のコーディネーターが知恵を絞ってきた。特に現地で講演者の選定、交渉を一人でやってのけた僚友のZubin Gidwaniには本当に感謝している。

(野田 雄輔)

## ワシントンDC

---

8月4日、ワシントンDCのハーワード大学にて環境フォーラムが開催された。会議中、

環境フォーラムは3回開かれたが、ワシントンDCでの環境フォーラムはそのうちの第1



回目当たる。当日、第一部では日米の環境政策に関する講演があり、第二部では「地球温暖化防止への政策とエネルギー効率化への技術革新」というテーマの下でパネルディスカッションが行なわれた。

第一部では、日米両国の政府から、環境政策にたずさわる西窪氏とRobert Ryan Jr氏からの講演があった。西窪氏からは、日本政府の国内の環境問題への取り組みの歴史と、日本のエネルギー消費量の変遷についてのお話があった。また、ブラジルの「地球サミット」へ米国政府の代表として参加したRyan氏からは、「地球サミット」における米国政府の立場や、NGOの役割、そして米国の環境政策の現状などについての講演があった。Ryan氏の講演は、アメリカで環境保全への取り組みを行うことの難かしさを改めて感じさせた。氏によれば、アメリカでの環境庁にあたる環境問題委員会は、他の省庁や利益団体の意向が反映されやすい、権限の弱い機関であるため、「地球サミット」においても条

約締結に至らない場合が多かったようだ。

(選挙前を意識してか、ブッシュ大統領の意向については触れていなかった。)

第二部では、世界資源協会からのHammond氏をはじめ、三人のスピーカーをむかえてのパネルディスカッションが行なわれた。

はじめにHammond氏が科学者の立場から地球温暖化現象の原因について述べ、世界各地でCO<sub>2</sub>の排出量の多い国を挙げ、それらの国々がかかえるCO<sub>2</sub>排出規制上の問題点を指摘した。続いてグローバル・チェンジ・センターからのMiller氏が日本のエネルギー政策と省エネの技術について述べ、その上で日米間のエネルギー政策の相違と、日本がより効率的なエネルギー政策をとっていることを指摘した。最後に天然資源保護協会のLashof氏から、アメリカのエネルギー政策について、特に省エネの必要性についての指摘があった。氏は、省エネの効果的な方法として、市場システムに公害税、CO<sub>2</sub>税等による規制を儲けることや、エネルギー効率上の基準を儲けることを提唱した。

この第二部でのパネルディスカッションでは、各パネリストから、かなり専門的な議論が展開されたためか、JAScerからの質問が続出した。それらの質問に対し情感を排しつつも誠意を持って答えておられたパネリストの方々の態度が印象深かった。

(坂口 誠二)

## テネシー (ナッシュビル)

8月10日、会議も中盤を迎えた頃、我々はテネシーの緑あふれるMTSUキャンパスにおいて、半日のスケジュールで第2回の環境フォー

ラムを行なった。今回は「地域レベルでの環境(保護)活動」に焦点をあて、4人のゲストスピーカーに、それぞれが関わっている活

動あるいは仕事について忌憚なく語ってもらい、残りの時間でQ&Aセッションをもった。

フォーラムの口火を切ったのは、テネシー州の自然保護運動家、Mach Prichard氏である。氏は、我々は昔自然に依存し、それを共有しているという点で、基本的に環境保護主義者であると考えている。その文脈の中で、アメリカン・インディアンが、ほぼ理想的な形で環境と関わっていたことも指摘された。氏はまた、自然公園・国立公園の発祥とその歴史にも言及され、アメリカがその種の公園の普及において、先駆的役割を担ったこと、そして、それが推進力となり、今では国立公園の概念が世界的な規模で浸透していることを話された。その後、テネシー州の美しい自然の断片を映し取ったスライドとともに、テネシーの河川が、水銀、DDT、放射能などに汚染されているという冷徹な事実が描写され、デュポン、TVAがその最大の元凶であることが示された。また、テネシー州の大気汚染が、全国レベルでも3、4番を争う程の深刻な事態を迎えていることも同時に指摘された。最後に氏は、こうした悲劇的な側面だけではなく、より明るい材料として、有機農業への関



心の高まり、その中で日本のテクノロジーの役割の重要性などについて述べられた。

2番目のスピーカーは、非営利団体である「リサイクル・ナッシュビル」のBart Bryant氏。この団体は、急速に許容量の限界を超えつつある埋立地問題と、ますますその脅威の爪をとがらせる公害問題に対処するという目的で1987年に設立された。発足当時は、10～12人という少数のスタッフで稼働していたが、次第に規模を拡大し、今では地域の住民を対象に、リサイクルについて（リサイクル可能なもの、リサイクルの方法、リサイクル商品とのつきあいかたなど）の教育・普及活動も行なっている。氏によると、ゴミは従来、埋立と焼却によって処理されるのが常であったが、リサイクル概念の誕生は、在来のゴミ処理の概念に新たな選択肢を提供することとなった（コンポスト、企業内リサイクルなど）。

テネシー・ビジネス・アソシエーションの政府担当は、上記の二氏とは全く異なった立場にいた。すなわち氏は、環境問題に関わる件について、約1,100という企業側の利益を代表しているのである。氏は、議員たちと会合をもつことを日課とし、高まりつつある環境保護優先の声の中で、なおも自分の代表する製造会社が操業を継続できるよう、不断の交渉を重ねている。その活動の中軸をなすが、環境保護関連法案の成立または施行の遅延をはかることであり、そうすることで、企業側にその法律に対応できるだけの十分な準備期間を確保し、工場閉鎖といった最悪の事態を回避させ、同時に雇用の安定という効用をも副産物として獲得することが可能になる。また、企業側の利益が公正な形で政策に反映されるように、議会にパイプとなる議員を送り込むという活動も行なっている。

最後に発言されたのが、Johnson氏と対極の立場にあるテネシー環境評議会のJohn Sherman氏である。氏は、非営利団体の政府環境政策に対する影響力について言及された。氏の活動母体であるテネシー環境評議会は、大規模なロビー活動を展開し、環境保護関連の法律に抵触していると思われる企業に対し、訴訟という手段に訴えることも少なくないという。政策決定の領域では第三者的立場にある非営利団体がその影響力を発揮するには、こういった手段が最も効果的であるとの考えからである。氏は同時に、一般市民に対する教育・普及活動もそれに劣らぬ重要性をもつが、しかし正しいことを単に主張するだけでは十分ではなく、現状を変革するだけの影響力をもった実践的な行動を同時にとることが不可欠な条件であると指摘された。

以上の4者の興味深いお話のあと、我々はQ&Aに移った。そこでの質問の1つが、「個人個人がリサイクル運動に協力することが重要なのは分かるが、リサイクル商品というのは現段階ではどうしても割高になっており、その点、消費者の道徳的基準に全面的に依存しなければ発展しない形態になっており、非効率的ではないか、何かコストを抑える方法などはないのか」というものであった。B

ryant氏は、確かにリサイクルにはそのプロセス上、どうしてもコストが割高になってしまふという内在的な要因が存在するが、多くの人が長期的な視野をもって、リサイクル商品を積極的に買うことによって、いずれ価格は安くなっていくであろうと返答した。(私自身は、一般市民の善意を全面的にあてにするという性質のものは、ほとんどが道徳の衣をまとった欺瞞であると考えているので、まったく効果的でも、現実的でもないと考える。リサイクルをすること自体が直接的な利益に繋がっていくような構造を作りだし、企業に十分なインセンティブを与えなければ、このリサイクル運動も頓挫してしまうのではないか。) そのほか、環境保護関連法に違反した企業を訴えた実際の訴訟例に関して、薬品のボトルの処理方法に関して、企業と環境保護団体の利害対立に関して、など多くの質問が出、それに対する各ゲストスピーカーの返答とその後のやり取りも非常に活発、かつ有意義なものであった。最後に、リサイクル・ナッシュビルのTシャツ販売などがあり、ゲストとの歓談も交え、我々は、心地好い疲労感とともにこのフォーラムの幕を閉じた。

(高橋 博)

## コロラドスプリングス

---

美しい自然に恵まれたコロラドスプリングスでは抜けるような青空の下、日米の学生が一丸となり“肉体労働”をする機会を持った。ワシントンから継続してきたボランティア活動の一貫であるが、全員が手に鍬や鋤、ツルハシを持って自然公園の遊歩道作りの手伝いを一日だけではあるが、地元の人々の協力も

あって行うことができた。土砂を削り、運び、固めるという作業を午前、午後4時間ずつ40名交代で行った。黙々と汗を流し働く者、地面に座りこむ者、泥を投げつけて遊ぶ者など様々であったが、何はともあれ気持ちのよい汗を流すことができたと思う。地元のテレビ局(チャンネル13)が取材に訪れ、私たちの

労働風景を撮影し、数名の学生にインタビューをするという一幕もあった。

これまでワシントン、ナッシュビルといわば密室の中で環境問題についてレクチャー、討論を行ってきた。しかし、本当に地球環境の貴さを実感するには、外に出て新鮮な空気を吸い、風を感じ、陽の光を浴び、土の匂いの中で大地に立たなくては分かつる筈がないのではないか、という思いがこのボランティア活動を実現させたのである。その意味で、コロラドの筆舌に尽くしがたい自然の美しさは、百人の専門家のレクチャーよりも雄弁に地球環境の貴さを語ったと思う。そしてそのことは何よりも、働いて汗を流した参加者の心に強く刻まれたのではないだろうか。

### 準備活動について

会議開催までの準備活動としては講師を招いてのレクチャーを行った。招いたのは、第27回日本側参加者で、消費者問題研究者として執筆活動をしている船瀬俊介氏である。氏は、フリーランスとして独自の取材活動を行っており、環境問題を考える上で私たちが当然とされていることに多々間違いがあることを、豊富な事例を挙げながらユーモラスに語って

## 民族問題フォーラム

### 総 括

世界全体がボーダレス化に向かう現在、私たちは人種や民族の違いを超えて共存への道を模索していく必要に迫られている。しかしながら、実際の世界に目を向けてみると、民族主義の台頭に伴う分裂が頻発している。また、分裂まで至らなくとも、各国内での異なる人種や民族による対立、差別問題は減少するどころか、1992年の米国での「ロス暴動」のようにより深刻化している印象を受けるの



くれた。特に電気自動車普及に纏わる、自動車業界と通産省の「怪しい」関係についての話などは刺激的であった。

参加者同士の準備活動は、GAEAという名の機関紙を5月から会議直前まで有志数名の手によって毎週発行した。内容は、アメリカ側がフォーラム準備をどの様に進めているのか、講演者、トピックスはどうなるのかを随時掲載してきた。また、各人が自分の問題意識から自由に環境問題を論じる自由投稿の場を設け、会議に備えた。ほぼ全員が毎週何らかのかたちで投稿をすることができ、環境問題に対する関心の高さを窺わせた。

(野田 雄輔)

である。

こうした状況を踏まえて、今年度の民族問題フォーラムにおいては、私たちを取り巻く人種・民族問題の歴史や現状を認識する上で、特に開催地である米国の問題に焦点を当てた。ワシントンDCでは黒人問題、コロラド州では先住民族問題を取り上げたことで、教室での講義だけでは得ることのできない体験ができたのではないかと思います。特に、日本側参加



者にとっての民族問題は、これまでどうしても「対岸の火事」的な受け止め方しかできない部分があった。また、米国側参加者の中にも出身地域や個人のバックグラウンドなどによってかなり認識や体験に差が見られた。しかし、講演や会議中の様々な体験を通して、米国の人種問題は法律上解決されたように見えても、未だに真の解決、つまり共に生きる道へは至っていない現実が明らかにされた。教育や職場でアファーマティブアクションが導入される一方で、白人の男性しか入会を許されない会員制クラブが堂々と存在している。そうした現実を目の前に突き付けられて初めて、自分たちの問題として認識することになったのである。

それらの問題に対する解決への糸口を我々個人レベルで探っていくという次なる目標については、民族問題と切り離すことのできな

い「差別」をいかにしてなくしていけばよいのかを考えてみるのが重要である。それは私たちひとりひとりの心の問題である。私たちは人種・民族をはじめ性別・学歴・国籍など様々な属性に縛られて生きているのだが、これらの属性が、人間を差別に向かわせることもある。ナッシュビルでは、そういった個人のアイデンティティとは何かを考える機会も設けられた。

民族問題は貿易や安全保障といったテーマと違い、「人間」つまり私たちが当事者になる問題であり、客観視することの困難な時もあった。だが、そういった中で、真剣な討議を重ねることができたことを非常に嬉しく思っている。最後に、「民族問題フォーラム」をお手伝い下さった方々に心からお礼申し上げたい。(鳥越あすか)

## ワシントンDC

8月4日、ワシントンDC、ハーワード大学にて、第一回目の民族問題フォーラムが開かれた。ハーワード大学は黒人の大学であり、設立以来米国における黒人の社会的地位向上のため、教育と研究の分野からの様々な提言や訴えを行ってきた。当フォーラムでは、この



ハーワード大学で行われるという機会を利用し、主に米国における黒人差別の歴史と現在の状況について、4人の黒人のスピーカーが短い講演を行い、後にそれに対する質疑応答があった。

最初に、ハーワード大教授のRussell Adams氏が、黒人差別の歴史とRacism(人種差別)の4つの形(信条思想からくる人種差別・制度的人種差別・態度として表れる人種差別・状況に応じて表れる人種差別)を説明した。そして人種差別が単純なものでないこと、様々な形で私たちの社会に現われていることを示された。

次に、赤十字のHarold Boykin氏が、今日さかんに行われつつあるアファーマティブ・

アクション（社会差別撤廃のための被差別集団への積極的優遇措置）について話をされ、その起こってきた背景と意義について説明された。

次にNational Association for the Advancement of Colored PeopleからのJack Gravelly氏が、日本人とアフロ・アメリカンの関係について、特にお互いの相手に対する認識のあり方と問題点について話をされ、ステレオタイプを通して見ることの危険を協調された。

最後に、G.Watson氏がアフロ・アメリカンの社会的差別とその克服を主に氏自身が経験されたスポーツ界での状況にもとづいてお話をされた。

質疑応答では、日本側、アメリカ側から多くの質問が出された。黒人差別の撤廃は果たしてどのような方法で可能になるのか？黒人の優遇措置という方法により、白人の側から“逆差別”だという反発が起こるが、それはどうしてか？講師の中の1人から、「逆差別なんてものはない。あるのは差別だけだ。」という意見が出されたが、この意味を考えてみる必要があるだろう。

このフォーラムでは実に多くのことが学ばれたと思う。問題が極めてデリケートなものであること、自分の生き方やアイデンティティが問われる真剣なトピックであったために、雰囲気緊張していたのは事実である。“差別発言”と言われるものの多くは、「そんな意味で言ったのではない」という本人の否定をとまらう。これは、人間とコトバについての、さらに認識と発言についての複雑な疑問を私たちに提供する。これは決して“差別”という問題と無関係ではない。

フォーラムでは、黒人差別の問題を主にとり扱ったが、これを私たち人間の差別する心の1つの表れとしてとらえ、その他様々に形を変え、場所を変えて表れる差別の普遍性についても考えられた。

このフォーラムの場に限らず、夜にはもう一度ディスカッションがもたれ、また日本語によるディスカッションも後日もたれるなど、自分の問題としてこの人種・民族問題を考え直そうという、皆の真剣な態度がこのフォーラムをより意義あるものにしたと思う。

(増井早知峰)

## テネシー（ナッシュビル）



会議開始後、第2回目の民族問題フォーラムは、テネシー州ナッシュビルのヴァンダービルト大学で行われた。

National Christian and Jews「キリスト教徒とユダヤ教徒の全国会議」地域局長のKatherine Linebaugh氏が、この日の主旨とおおまかなスケジュールを紹介し終えた後、我々は無作為に8人のグループに分けられた。この日、午前中はそのグループごとにメンバー

が順に1人1人個人的バックグラウンド“名前の由来”や家族・先祖について、過去20数年間における異文化体験、など様々な視点から紹介し合った。

午後になると、ヴァンダービルト大学ジョンソン黒人文化センターの副局長Sheila Deunie氏によって与えられた命題「理想的な社会とは？」について、再びグループディスカッションがもたれた。そして各グループの意見は、用意された模造紙にまとめられ、全員の前で発表された。模造紙の使い方、紹介の仕方などそれぞれ趣向がこらされており楽しみながらもあるべき世界の姿が様々な形で提案された。

このフォーラムでは、「RACE」を考える上で、人種や民族の側面からのみでなく、それらを構成する私達1人1人の、個人としてのアイデンティティを認識し、それを互いに認め合うことに重点がおかれていたように思



う。属するグループとしてではなく、一個人の歴史背景を理解する、という原点に立ち返った上で、より身近になった仲間達と世界を見直してゆくという作業は、日米学生会議自体の目的の1つでもある。希<sup>き</sup>有<sup>う</sup>なチャンスと仲間達を与えられた1ヶ月の生活の中間地点で、このフォーラムはそれを再認識するよい機会であったと同時に、構えて考えがちなRACEという主題に、地に足のついた糸口を与えてくれるものとなった。(福島 紀子)

## コロラドスプリングス

8月17日、私たち一行はバスでManitou Cliff Dwellingsへと向かった。ここは、もともとネイティブ・アメリカンたちの居住地があったところであり、その居住跡は現在彼らの文化を紹介する観光施設として利用され



ている。ネイティブ・アメリカンのリザーベーションが数多く存在していた歴史を持つコロラドでは、特にこの問題に焦点を当て、民族のアイデンティティとは何かについて考えてみることになった。

到着するとまず、ここでリーダーを務めるMike Little Deer氏による簡単な自己紹介があり、続いてインディアン(彼ら自身が使っていたのでここではこう呼ばせていただく)の伝統的な衣装を身にまとった彼らのダンスを鑑賞した。赤や青のカラフルな羽をつけて激しいダンスを踊るのは、Mike氏の弟と息子であり、後に彼の父親も舞台に登場した。ダンスの合間の話によると、彼らは日頃は別

の地でインディアンとは無縁の生活を営んでいるが、夏の間だけここへ来てダンスを披露したりしているのだ。言ってみればサマータイム・ジョブである。素晴らしいダンスを堪能しながらも、彼らにとってここでダンスを披露することが、果たして商業的な価値からくるものなのか、それとも純粋に文化を保存していくためなのか複雑な気持ちにさせられた。

ダンスの後は、各自インディアンたちの居住跡を見学したり、ビデオを鑑賞したりと自由な時間を過ごした。民族問題フォーラムではワシントンDC、ナッシュビルと常に自分自身と人種・民族問題を突き詰めて考えるという緊張した時間が多かったが、ここでは久しぶりに客観的な目でアイデンティティの維持という問題を見詰めることができたのではないかと思う。

Mike Little Deer氏の御好意による夕食が出された後、しばしダンスと歌が披露された。

その後のMike氏との一問一答では、やはりまだまだ教育水準・生活水準の低さなど問題が山積していること、彼も若い頃はインディアンの地位向上のためかなり過激な活動を行っていた時期もあったが、戦うだけでは益々孤立を招いてしまうことなどが話された。

第43回会議では北海道でアイヌの方からお話を伺ったが、彼らを取り巻く状況は不思議なほどアイヌが抱える問題と一致していた。つまり、それは少数民族全体が抱える問題ではないだろうか。一方で民族独自の文化や習慣を守っていこうとしながらも、もう一方では社会の一員として生活していくため、徐々に多数民族の方に同化していくことを避けられない。また、世代間でのギャップも広がる一方である。民族としてのアイデンティティを維持しながらも共存していくにはどうしたらいいのかを考えさせられる一日であった。

(鳥越あすか)

## FUTURE HOPE

8月17日、我々Jascer一行はManitou Indian Cliffを訪れた。ここは、ネイティブ・アメリカン、つまりインディアンの観光用居留地のようなものである。赤っぽい土で覆われた公園のようなそこは、西部劇映画のロケ地にも思えるようなたたずまい。会議もそろそろ終盤であることも手伝ってか、抜けるように青いコロラドの空の下、私はすっかり遠足気分であった。

始めに、色とりどりの美しい羽根でできた頭飾りや足飾りをつけたインディアンの青年のダンスを見た。天空を舞っている鷲の姿を表現している、雄大で素晴らしいものだった。私は素直に感嘆し、拍手を送った。こうした伝統文化を継承しているのはとても大事なことだ。いうなれば、父の故郷で若者たちが、伝統の和太鼓の音を絶やさぬ努力をしているのを知ったときのように。

けれどもそれは、そうしたものはレベルの全く違う願いの込められたダンスであったのだった。夜、私たちはManitou Cliff内で、何人かのインディアンの人と夕食を共にすることができた。そこでいくつか、スピーチが行われた。ユーモアを交えた、楽しいものもあった。が、中年のインディアンの男性が語った、彼らの現状についての中

一言、今も胸に焼きついている。彼らには、「No future, No hope」だというのだ。未来がない、と考えるのは何と恐ろしいことか。私なども、冗談にせよ、「日本では、大学出たら女はもうおしまい」などという言葉を書く度にその理不尽さにどうしてよいかわからない気持ちになる。それは乗り越えて乗り越えられぬ壁ではなく、彼らの感じているような圧力とは比べ物にならないものであるにもかかわらずだ。それは何と簡単に「絶望」と結び付いていくだろう。インディアンの人々の間では、アルコール依存が高まっていると聞くが、そんな彼等を責められはしない。

今回アメリカを訪れて最もショックであったのは、人種・民族の壁がまだまだ残っていたということだった。新聞・TVなどそうした問題が残っていることは知っていたけれど、なんとなくアメリカというのはそれを超越した一種のパラダイスであるところか無意識に思っていたのだ。しかし、ワシントンDCで滞在したハーワード大学のあったところも、完全な黒人居留地であって、白人はもちろん、アジア人の姿も我々Jascr以外には全く見かけなかった。地下鉄でほんの2・3駅いけば、いわゆるスーツ姿のエグゼクティブばかりが闊歩している官庁街だというのに。

人種の壁、それは乗り越えられないものなのだろうか。Jascの中では果たしてどうだったろう。人種的偏見は全く無いつもりで私だったが、同じアメリカ側参加者といっても、日系やアジア系の学生のほうに、つい話し掛けやすいという気持ちを持ってしまいはしなかつただろうか。

いや、しかしJASCにおいては、全員と最後に仲良くなれた。私のこうしたネガティブな問いに対する答えとして、一つの光景が脳裏に浮かんでくる。閉会式のときのことだ。日本側実行委員長が、日本語で涙を交えたスピーチをしたとき、日本語を全く解さないアメリカ人学生の頬に涙が伝っていた。最初、親しくなれるかな、と少し不安を感じてしまった彼女だったが、そうだ、ほんの少し、わかり合おうとする気持ちさえあれば、必ず理解しあえる。その光景は私に繰り返し語りかけている。

今、世界には様々な問題がある。民族問題、人種問題、そして、あらゆる差別の問題。それらはすべてリンクしあっているだけに、簡単に答えは見出だせない。けれども、何より気をつけないければならないのは、わかりあうのは無理だと思ってしまうこと、諦め



てしまうこと、無関心になってしまうこと。口で言うのは簡単だけれど、現実では、これを続けていくのは大変な努力がいる。例えば、自分にかかる社会的圧力を跳ね除けるのは、どんなに力のいることか。

しかし、JASCは、みんながお互いの、そして、世界のそうした

問題をなくすため、お互いの価値観をできるだけシェアしようとしてくれる。他ではなかなか得られないことである。私も今まで考えもつかなかったものの見方、人生観をこの素晴らしい人々から教わった。日程的には、44thJASCは終わってしまったけれど、ひとと人の交流は決して終わらず、それはこの世のすべての問題を解決する可能性を秘めている。そう、JASCとは将来的には、すべての人々にFutureとHopeを伝えていくきっかけとなる場の一つである、と信じている。

最後になったが、この素晴らしい仲間たちと、私の一夏を共有できたことを心から感謝したい。  
(坂田亜也子)

## 戦争と平和セミナー

戦争と平和セミナーは8月1日、ハワード大にて行なわれた。民主化後も依然問題を抱える東欧地域、火種の絶えることのない湾岸地域、そして何よりも冷戦の終結によって新たな秩序構築が全世界的課題となった現在、日米両国に求められる役割は何か、というセミナーの趣旨のもと、二人のスピーカーが招かれた。アメリカ・ディフェンス・モニターの主任であるStanford Gottlieb、ジョンス・ホプキンス大学外国政策研究所のディレクター、Michael Green両氏である。Gottlieb氏は国連の機能、指導権の拡大を提唱、一方Green氏は国連の役割には懐疑的な見解を示し冷戦期の二超大国体制はなくなっても依然先進国主導の秩序維持が現実的とした。両氏の講演に続いて質疑応答が行なわれ、中でも国中で論議を呼んでいたPKOについて日本側参加者が各々の意見を述べた時にはアメリカ側参加者、ゲストスピーカーとも興味深げに聞き入っていたのが印象的である。その後テーマごとに10のグループに分かれて話し合いを行なった。

安全保障について語る場合、どうしても政治的問題が対象とならざるを得ない。趣旨に

基づいて選ばれた10のディスカッションのテーマも安全保障と経済、軍備競争、地域紛争など硬質で難しくなりがちなものであり、参加者がどこまで自分に引き寄せて考えることができたかには残念ながら疑問が残る。

その反動としてだろうか、所詮政治学の文脈では中心にすえられる事の少ない戦争被害の問題を取り上げようとする動きが参加者の中から自発的に生じたことは特筆すべきであろう。しかし今年の会議に於ける「戦争と平和」をめぐる二つのイベントは互いに補完しあうというよりもその間の断絶を強調する様な形であったように思えてならない。二つの極を止揚する作業をこそ今後の会議に望みたい。  
(猪刈 由紀)



「名は体を表す」という諺が現在どれだけ有効かはさておき、「戦争と平和」セミナーは、従来「平和」セミナーないしは「平和と安全保障」フォーラムという名前で開催されていた企画であった。そして、その内容は、日本開催の際は必ず広島あるいは長崎を訪れ、アメリカ開催の際も「原爆」に関する映画をアメリカに持ち込んで、全員で鑑賞していたようである。(注：詳細は各回の報告書を参照のこと)そして、そこで話し合われていたことは、どちらかという「核兵器」をキーワードに、「平和」をいかに追求するかが中心であったようである。

ところが、近年このフォーラムに変化が起きている。1990年の第42回会議ではこのような問題を話し合うセミナー自体存在しなかったし、翌91年の第43回会議では「安全保障」フォーラムとして復活したものの、その名称からこの15年ではじめて「平和」の文字が消え、長崎・広島を訪問することもなく、核兵器に関する映画も上映されなかった。

各回における企画決定の際の事情を十分調査したわけではないので、あまり断定的にはなれないが、この変化は、ある時代の人々の意識を深く規定していた「核戦争の危機」と「冷戦」という状況認識が、大きく変わりつつあることを示している。と同時に、参加者の「戦争」観・「平和」観にも変化あるいは動揺が起こっているということでもあろう。

そして今回の名称は、「戦争と平和」セミナーである。初めて「戦争」という言葉が登場してきたことにも、いろいろな義務付けが可能だろう。トルストイや猪口邦子さんの同

名の著作にインスパイアされたのでは、とも思われる。その謎解きをするのは本稿の目的に反するので、ここではぼく自身の当セミナーに対する次のような見解を示すのみにとどめておこう。

いわゆる「冷戦以後」——この言葉を使うのは、かならずしもぼくがこの言葉を適切と思っているからではない。現代、一般的にはほぼ共通した時代認識に、とりあえず従ったままである。——の時代において、我々は初めて「戦争」と「平和」について真っ正面から意見を交換することができる・せざるを得ない時期に到達したのではなからうか。したがって、相互確証破壊戦略やソ連の脅威やナガサキ・ヒロシマや憲法第9条と自衛隊・日米安保問題といったことだけでなく、各自が等身大で「戦争」と「平和」についてより自由に、より範囲を広げて語る段階をむかえたのであって、その際は国際政治学的にだけでなく、より根源にたち帰った哲学的な再考察が必要とされているのである。

戦争は、かつては、あまりにも重大であるがゆえに将軍たちに任せざるわけにはいかなかった。しかし、今は、あまりにも重大であるがゆえに無知な人々——軍服を着ていようがいまいが——に任せざるわけにはいかないのだ。ぜひ強調しておきたいが、平和についても同じことが言えるのである。

(A・トフラー&H・トフラー、『アルビン・トフラーの戦争と平和』、pp18~19)

未来学者の議論自体は一顧だに値しないか

もしれない(「かもしれない」は不要だった!?)が、我々とはとにかく「平和憲法の護持」や「清貧」を叫んだり、ハイテク戦争に夢をはせたりする前に、ぼくらにはもっと深いレベルにある何かを考え、行わなければならない気がして仕方がない。とにかく、「戦争と平和」という題名自体は今の時代に実に適切である、という印象を持って、ぼくは本会議に臨んだのだった。

8月1日の「戦争と平和」セミナー・パートIは、ワシントンDCのハーワード大学のビジネス・スクールで行われた。まず、センター・フォー・ディフェンス・インフォメーションのStanford Gottlieb氏と、ジョンズ・ホプキンス・フォーリン・ポリシー・インスティテュートのMichael Green氏の講演があり、その後で、7つのグループに分かれてスモール・グループ・ディスカッション&ラップ・アップを行った。

Gottlieb氏のお話は、「冷戦の終焉と国際的安全保障体制作り」といったようなことがテーマであった。その内容を要約すると、次のようになる。

民主主義対共産主義(独裁体制)の対立である冷戦は終わった。これからは二極対立の時代から多極構造の時代になるであろう。しかし、アメリカが依然世界の警察的な役割を果たしうるだけの力をもっているということと、軍事力のコントロールが依然として最重要の安全保障政策のテーマとなるということは、日本やドイツの経済的成長による米国の相対的地位の低下や、科学技術の急激な発達や「パワー」の多様化が進行中であっても否定し難い現実である。

さて、そのような現状認識に立って、国際社会において安全保障を確保するのは、幾ら

かの欠点があるとはいえ、やはり国際連合であることが最も望ましいし、その規範になるのは、当然国連憲章である。安全保障理事会においては、その経済的実力に応じて日本とドイツの発言力をより尊重するべきである。国連憲章に関しては、国連軍を機能させるためには、ガリ事務総長のアジェンダ・フォー・ピースなどを斟酌し、憲章改正も選択肢にいられた上で、例えば各国から千人ずつ軍隊を出して武力紛争の解決に当たるなどのより実効的な対策をたてるべきである。日本に関しては、国連を通した非暴力・非武装の平和外交を行ってゆくべきである。

Green氏の話は、「地域紛争の危険性の高まるアジア」といったようなテーマであった。その内容は以下のように要約できる。

冷戦以後の東アジアでは、二大イデオロギー対立のなかで蓋をされていた地域紛争が激化するおそれがある。特に「金日成以後」の体制変動が心配される北朝鮮、北方領土問題を抱え依然強大な軍事力を持つロシア、そして質的にも軍事力を増強してきている中国が大きな不安定要因である。

それらの問題に対応するためにはいかにしたらよいか。まず、今まで強大な軍事プレゼンスによって同地域の「平和」に貢献してきた米国、たとえ経済面での相対的衰退が大きな問題になっているとしても、手を引くことはできない。かといって、CSCEのような形での地域的安全保障システムが近いうちに機能するとは思えない。文化的・民族的な複雑さがそれをいっそう困難にしているし、APCEのような協力体制は今のところ経済的な面に限られている。

結局のところ、「冷戦以後」の東アジア地域をより安定化させるためには、日米同盟を



いっそう強化することがこれからも根本になるだろう。そして、それは「平和憲法」を標榜する日本と安上がり軍事プレゼンスを維持したいアメリカの双方の国益を最大化することになるであろう、というものである。

両者の講演は、国際関係にかんする本を読んだり、新聞の国際面を気にしたりしている人にとっては実に常識的な内容であったと思うが、それだけに安全保障というものの基本的な観点が指摘されていたので、その後の話し合いのきっかけにはなりやすかったようである。ただ、両者に共通していたのは、アメリカの「相対的衰退」に対する危機意識のようなものであったようで、「平和」の問題や「戦争の原因」といった面での考察がたりなかったような印象を持った（ぼくのメモには「アメリカの人は経済のことで頭がいっぱいなんだね」とある）。いってみれば、「受け身の平和維持」にしか視点が向いていなかったようであったのがやや残念であった。

講演を受けて、スモール・グループ・ディ

スカッションが行われたが、そこでは一般的にいて日本側の理想を背景にした「美しい平和主義」と、アメリカ側の愛国心を背景にした「現実的な実用主義」とぶつかる、といったパターンがみられ、お互いの「戦争と平和」観の食い違いを実感した向きが多かったようである。

安全保障政策に関しては、個人レベルでの知識の多寡が、言語のギャップとともにお互いのコミュニケートを困難にしていたようである。また、「戦争そのもの」「平和そのもの」に対する考察に関しては、この日のフォーラムでは話を深める機会があまりなかったようであり、加えてこの段階では、参加者は突っ込んだ話し合いをするにはまだ親密度が十分であったとはいええず、お互いにもどかしい感覚が残っていたような気もする。その物足りなさのちのナッシュビルやコロラドでのパートII・パートIIIの開催へとつながっていったのであろう。（芝崎 厚士）

## 戦争と平和セミナー パート2

戦争と平和セミナーの二回目はコロラドスプリングス三日目の午前11時30分から行われた。前日はホームステイが終った日でありこ



の日は眠い眼をこすりながらの参加者も多かった。

このセミナーはDCでの戦争と平和セミナーがいわゆるナショナル・インタレストの視点からの話であったため、今後は是非パーソナルな戦争と平和セミナーをもちたいと提案した参加者達によって企画された。

具体的には、日本側参加者三人がヒロシマ・ナガサキの原爆の被害や戦争責任などについてプレゼンテーションを行うという形で進められた。

まず最初に、あらかじめ容易されていたバ

ソフレットと、米国の大学教授が「原爆は多くの日本人を救った」と国際会議で発言したことについての新聞記事のコピーが配布された。

次に増子から、被爆者がどのような苦しみをもっているのかについてのプレゼンテーションが行われた。被爆者の苦悩とはまず第一に身体的苦痛—病気(ガン・白血病等)や出産など—であり、第二に精神的苦痛—死・放射能に対する不安、被爆者に対する社会的差別など—であるという。さらに、多くの人が自殺を考え、また、それらの苦痛はほとんど他者に伝えられることはなく、被爆者の数が減少していく中で、被爆者の苦痛が益々世の中に伝えられにくくなっている、とのことだった。

次に高橋(徳)からのプレゼンテーションは、日本が占領下においても独立後も被爆者

に対する配慮が充分になされていなかったことについてであった。特にGHQは故意に被爆者の医療を妨げ、また、被爆によって死んでいった人の中には放射能の存在を知らなかった人も多かったと指摘し、被爆者に対する十分な保障がなされるべきだと主張された。

最後に割石は韓国人の強制連行などの話を通じて日本の戦後責任や社会の在り方についてプレゼンテーションを行った。在日韓国朝鮮人や従軍慰安婦らに対する日本政府の対応をみるにつけ、日本社会における“平和”とは欺瞞に満ちたものではないか、それはアジアの一員としてあるべき姿といえるか、と問題提起された。そして最も恵まれない人々やマイノリティに対しいかなる配慮を与えているかによって、その社会の質が問われるように思うと述べて結ばれた。(高橋 徳嗣)

## ボランティアセミナー

### 総 括

---

ボランティアリズムセミナーはワシントンDC、ナッシュビルの2ヶ所で行われ、各地で79人が5つほどの小グループにわかれて、ボランティア活動を行った後、ディスカッションをし、ボランティアというものについて考えるというスタイルで行われた。

そもそもこのセミナーは、企業や地方自治体、多くの人々の協力を得て毎年実現している日米学生会議として、我々から社会ヘフィードバックするものという気持ちと、今回のテーマと関連して、様々な社会問題をただ傍観者として論じるのではなく、自らの身体を動かし解決へ向けて行動を起こすことの必要性を深く感じたことから始まった。

しかし、その過程で「このセミナーが単なる自己満足に終わるのではないか」「単発的

ではなく会議後も続けなければ意味がないのではないか」「決められた所へ行ってもちょっと体験してみることが果たしてボランティアと言えるのだろうか」と、様々な疑問がでてきたという事実もあった。

だが結論から言えば、私たちが暑い日射しの下公園整備をする中で、また子供たちや老人、社会にうまく適応できないとされる人々と接する中で考えたことに、何一つ無駄なこととはなかった。どの参加者もこのセミナーを通して、驚き、怒り、感動、新たな発見、出会いを得たであろう。それを私たちが会議を離れ、各々の住む社会へと戻っていった時、どう活かすか、もっと言えばどう生きるかということが最も大切なことで、会議中の達成感や充実感をその目的とはしていなかったか

らである。「いつ自分が人から助けられる立場になるかわからない。だからやるのです。」あるコーディネーターの方が言った言葉が忘れられない。このような心が社会の自浄作用

となるのであろう。最後に「ブレイクアウェイ」の方々をはじめ、私たちを受け入れて下さり、またアドバイスを下さった関係者の方々に深く感謝致します。(比企野慶子)

## ワシントンDC

本年度日米学生会議の大きな意義として位置付けられている当セミナーは、我々が様々な援助に支えられていることを鑑み、社会に対し何らかの貢献ができないかという問いに答えるものである。

8月6日ワシントンDCにて我々は5つのグループに分かれ活動を行った。第1グループはフードバンクを訪れ、企業から集められた食べ物(賞味期間が切れていたり、破損している為に店頭では売れないもの)を貧しい人の為に施設に分配する仕事の一担に加わり、食品を種類ごとに分類した。

第2グループは、精神薄弱の人々が社会復帰を果たすため職業訓練やパートタイムの仕事の斡旋を行う、Green Poorという施設を訪ねた。そこでは、メンバーの方々と話したり、共に昼食を食べたりした。

第3グループは老人のデイケアセンターであるイオナ・ハウスを訪れ、歌を唄ったり、書道、茶道・能など日本の伝統文化を紹介し



た。初めは無関心だった老人も帰る頃には打ちとけ、別れを惜しんでくれた。

第4グループの訪れたセントラルキッチンでは、ホームレスの人々の食事のサービスを行っている。社会復帰を図りここで働く人もいる。会議参加者は寄付された食物の仕分け、食事の下ごしらえの手伝いを行った。

第5グループは、DC郊外にあるジュビリー・ハウジングを訪れた。このアパートは貧しい人々に居住と仕事を与える団体により運営されている。我々は子供の遊び場の整備を行った。作業のあと、ただの空き地がずっと遊び場らしくなった。

しかしここまで書いて、私はJASCの目線の高さに気付く。日常生活の中にボランティアを組み入れていくには、いいことをしてあげている感覚では続かない。ボランティアは自分を映す鏡である。学生会議は皆にとって始まりであることを切に願う。(工藤 博海)

## テネシー（ナッシュビル）



テネシーでは各グループでのボランティア活動のあと、スピーカーに来ていただき、ディスカッションの時間も持つことにより、ボランティアリズムについてより深く考えた。

一人目のスピーカーであるアロン氏はバンダービルト大学でかつて学生のボランティア活動のコーディネーターを行っていた。一人の人間が社会を変える力がいかにバンダービルト大学でボランティア活動のパワフルであるかをアロン氏は説き、特に学生は自由な身を活かし、その原動力であるべきだと説いた。

Parker氏とRainboardさんは現在コーディネーターを行ってる。大学のボランティアセンターでは、活動の紹介をするだけでなく、様々なアイデアを学生から集め、それを実行に移す手伝いをしている。どちらもバンダービルト大学の卒業生であり、学生の頃からボ

ランティア活動を熱心に行ってきたうえで現在の職についている。

“BREAK AWAY”という団体の副コーディネーターであるManさんは、団体の活動について紹介した。“BREAK AWAY”は全米に参加大学を持つボランティア活動サポート団体で、大学内での活動サポートだけでなく、大学間での交流さらには長期休職中の海外でのボランティア活動の企画、紹介も行っており、特にアメリカ側参加者の高い関心を集めた。

その後小グループに分かれてボランティアリズムについて、ワシントンDC、ナッシュビルでの活動をもとにまとめのディスカッションを行った。ボランティア活動は初めてという会議参加者もあり、感想をシェアすると共に、ボランティア活動の重要性と意義について話し合った。（増子 聡）



## テネシー：グループ別報告

グループ1はナッシュビルにあるセカンドハーベストフードバンクを訪た。当団体は企業等から寄附された食糧を困っている人々に

届けるために仕分し、発送する施設である。参加者はクラッカーをビニールに仕分けする作業を行った。（比企野慶子）

グループ2は家庭の暴力で虐待された女性とその子供が暮らすシェルターを訪れた。家具の移動、ヤード・セールの準備のための値札つけの手伝いを行った。またこのシェルターの職員自身の経験談も混えまたシェルターの見学もさせてもらい問題の現状をつぶさに伺うことができた。彼女達の目は忘れることができない。(工藤 博海)

日時；1992年8月12日

行き先；マーフィースポロ ヘルスケアセンター

グループ3は、ナッシュビル郊外のマーフィースポロ・ヘルスケアセンターを訪れた。ここは高齢者が治療を受けながら老後を送る施設である。私たち日米17名の参加者は、30名程集まってくれたお年寄りの前で、ピアノの演奏・ハワイアンダンスの紹介・日本の童話を浴衣を着て歌う・折り紙を折ってプレゼントするなどの文化紹介を行った。かなり重度の病気で寝たきりの人や言葉をうまく発音出来ない人なども中には居て、コミュニケーションをとるのが難しかった。果たして歓迎され

ているのかそれとも迷惑なのか分からず、始めは双方に戸惑いがあった。しかし1時間半の訪問で、お互いに信頼関係のようなものが出来始めると、手を擦るなどのスキンシップを通じて少しは心を通わせることが出来たように思う。帰らないでもう少し居て、と言って手を離さないお婆さんの目は彼らの持つ孤独やさみしさを訴えかけているようで、なかなか別れが辛かった。(高橋 香織)

第四グループは、身体的・精神的に障害のある子供達と大人の為の施設を訪れ、子供の為の遊び場にあるブランコやすべり台にペンキ等を塗る仕事をした他、実際に子供達とふれ合い機会を持つことができた。

(増子 聡)

ボーイズ&ガールズクラブでは、小学生の子供達が安全な環境のなかでレクリエーションを楽しんでいる。簡単な日本語教室、かぶとを全員で折る折り紙教室などを行い、子供達と共に楽しい時間をすごした。

(久米 恵子)

## 貿易シンポジウム 報 告

ワシントンDCでおこなわれた貿易シンポ



ジウムは、三部構成で8月3日、米国議事堂内の一室で開催された。第一部は国際経済協会首席顧問Ellen Frost博士による基調講演「これからの日米関係」が行われた。同博士は日米間の経済的依存関係はもはや不可分であると、これからの両国のありかたや自由貿易とガットの今後について言及した。また上院の国際関係委員会委員のRichard博士もあいさつに立たれた。午後の第二部は場所をアメリカ企業協会に移し、日米友好協会会長

でありアメリカ企業協会首席経済学者であるJohn Makin博士、日米センター国際経済部々長のYoshihide Kimura氏、そしてブルックリン協会外交政策研究部のEdward Lincoln博士三氏によるパネルディスカッションが行われ、テーマの「保護貿易対自由貿易」について活発な議論がなされた。夕食を済ませ、第三部は宿舍のハワード大学に戻った後、「知的所有権について」と「日米構造協議について」の2テーマにそれぞれ日米4名ずつの学生によるプレゼンテーションが行われた。これは事前に有志を募り、日米協力して研究を行い、テーマについての知識を他の学生につけてもらうだけでなく日米の立場の違いを理解し摩擦の焦点を鮮明にする目的で行われた。学者ではなく同じ学生が説明するとあって分かり易く、個性的なプレゼンテーションで盛んに拍手をうけていた。

8月13日にはテネシー州スミルナ市にてアメリカ日産自動車工場を訪問した。工場内見学後日産広報部のJanne Reed氏を工場側代表にむかえ、地方新聞社記者、スミルナ市助役、スミルナ市民代表、スミルナ市奉仕団体代表の方たちを交えて日本企業のアメリカへの進出について社会的にさまざまな立場から意見をうかがった。

貿易シンポジウム最終日の8月18日は、コロラド州コロラド・スプリングス市にて開催された。まず第一部として日米有志3名ずつにより、三都市にわたるこのシンポジウムの総括のプレゼンテーションがなされた。第二



部は学生がスモールグループにわかれ、アメリカ空軍士官学校経済学教授のAlen More中尉、同じくJim Brock少佐、同じく空軍士官学校の経済戦略研究客員教授のEd Stewart中尉の三氏にそのなかに加わっていただいてアドバイスを受けながらさらに個々に総括を行った。

とかく数字の上での議論に終始しがちなこのシンポジウムでは、さまざまな貿易摩擦やその問題に実際に直面している人の話に耳を傾け実感として捉えることを念頭においた。また経済学の知識のない学生でも参加し興味をもてるように計画し試みたが、学生によるプレゼンテーション、学生による総括を有志を募って行ったのが成功し、満足いく結果に終わったと言えよう。しかし、事前の日米の学生による準備段階では言葉の誤解から思わぬすれちがいもあり、言葉と異文化の壁を再認識させられる結果となった。最後になったが、協力を惜しまなかった学生諸君にコーディネーターから深く感謝したい。(白石 史朗)

## 貿易シンポジウム

冷戦システムが終焉した今、経済問題が日米間の最大の懸案であることは、両国間で明

確に意識されている。折しも米国大統領選挙と重なり、その焦点が経済再建であったこと



が、両国の学生の貿易シンポジウムへの問題意識をさらに高めた様である。しかしながら、社会に出る前の学生にとって、貿易問題は困難なテーマであり、議論が抽象的になるきらいがある。この難点への配慮から、今年は学生の主体的な参加とグローバルな視点のみならずローカルな視点へも目を配ったシンポジウムが目指された。

8月3日、首都ワシントンで行われたシンポジウムでは、ワールドワイドな視点で、「世界経済に於ける日米関係」や「自由貿易と保護主義」といったテーマでのパネルディスカッションが開催された。第一線で政策立案に関与されている方の話には、大いに刺激を受けた。しかし、その夜のモック・トレードネゴシエーションは正に我々の手作りという点で実に有意義なものであった。知的所有権と日米構造協議とを扱い、特に後者では、米国側が、「日本は排他的取引慣行、系列問題などの市場アクセスを改善すべきだ。」と主張すれば、日本側が日本市場の歴史的背景、合理的な面を説明し、さらに「日本側の市場アクセスが改善しても、米国側の輸出競争力

が強化されない限り、米国からの日本の輸入は増加しない。」と応酬するなど、あたかも両国を代表しているかのように堂々と意見を述べ合っていたのが印象的だった。しかし、この裏には、担当者の涙ぐましい努力があったことを忘れてはいけないだろう。

ナッシュビルでは、ローカルな立場で考えるべく、米国日産の工場見学をし、さらに地域代表、地元新聞記者、日産広報部の方々とディスカッションをした。日産では、いわゆる日本型経営なるもので運営されているが、個人主義の国、米国の労働者が、組織の中の強調性を極めて重視する日本式システムの中でどのような活動をするのか。日本式と米国式の融和した経営システムとは、どのようなものなのか興味ももたれた。欲を言えば、現場の労働者にもインタビューしたかった。聞く所によると、日本的経営を取り入れる米国企業が増加しているとのこと、米国日産が、コミュニティ、市民社会の一員としてメセナ、フィランソロビーなどの社会貢献に並々ならぬ力を入れている点は、日本企業は大いに学ぶべきだろう。

最終地コロラドスプリングスでは、これまでを総括して日米各三名がプレゼンテーションをした。私も発表した。学生という誰に対しても責任を負う必要のない自分の立場に感謝しながら、大いに理想論を述べさせてもらった。しかしながら、我々は、この立場を盲目的に甘受することは許されない。実社会を知らぬが故の空理空論の愚を犯さないために、常に本質に迫ろうとする気迫を忘れてはならないと思う。 (堀部 智)

## Mock Trade Negotiation



コーディネーターの白石の発案による当企画は、ワシントンでの貿易問題に関するレクチャーに引き続き行なわれた。2つのテーマ（日米構造協議問題と知的所有権問題）について、それぞれ日米の参加者から4名ずつが出て、各問題に対する日米の認識の違いを明確にしようとするものであった。

まず、知的所有権問題について。共通の問題として、情報・流通の高度化に伴う保護の必要性の増大、国際化の流れの中での法的調整の難しさ、及び知的所有権保護の南北問題化等が挙げられた。一方日米間の相違・対立点としては、先願主義対発明者優先主義の構図及び模倣という行為への両国間（両文化間）での認識の不一致等が挙げられた。「模倣への認識の不一致」とは、「日本での感覚としては、模倣とは学習の為の基本であり重要視されるのに対し、米国では創造力若しくはオリジナリティの欠如・不足を意味する」ということである。先願主義対発明者優先主義（諸国の趨勢は先願主義にある）といった制度的相違もさることながら、「学習」の在り方といったものが知的所有権という高度に法的・政治的な問題に影を落としていることを

知ったのは有益であった。

次に日米構造協議問題について。この問題は政治的でかつ二国間問題の色彩が強いため、日米4名ずつの代表者間の事前打ち合わせに於ても、早くから論点等で認識のズレが生じ、危うく企画が成立しなくなる所であった。尚このズレ違いにはコミュニケーションギャップが好まれざる形で寄与したのであり、意志疎通の難しさ、コトバの壁をつきつけられる事となった。

さてその内容だが、日米間の共通の認識としては、世界の資本主義経済をリードする日米両国間の貿易の安定化、及びそれを実現する為の自由貿易の拡大・普通化等が挙げられる。日米間の相違対立点としては、産業政策やいわゆる「公正」概念の是非、米国の大量消費・過少貯蓄や日本の流通・分配システムへの相互批判等があった。特に相互批判については、反省を促すものとはいえ、交渉というよりは干渉的であったことが、代表としていささか残念であった。

総じて言えることは、貿易問題という一見我々とは離れたところで進行しているかの如く映るものが、我々の生活に深く根ざしたも





のであり、それがゆえに一度問題が起こると社会毎の価値やそこに居る人間の性質といったものが、その問題にとって重要な位置を占めることになるのである。今後の国家間の質

## ジェンダーナイト

### ジェンダーナイトをめぐる雑感

43回の会議の終わりに実行委員が44回の骨格を決めた時、この企画案は出ていなかった。

米国側参加者の一人であるSara Jobinの提案によりこの企画が正式に決まったのは4月の終わり頃であったように思う。こういう経緯もあって、自由参加の非公式な企画として行われることになったが、実際にはほぼ全員が参加する形となった。日米双方から4名（男女各2名）ずつがプレゼンターとなり、ワシントンで自由時間を割いてうち合わせを始めた。この時、米国側の女性参加者の一人であるJennifer Burnsから男性には部屋をきれいに掃除できない、といった趣旨の発言が飛び出し、男性側が日米共闘で反論するという一幕もあった。この発言の真憑性はいささか気になるところであるが、会議中の部屋の様子を見る限り、それは正しかったとする説もある。それはともあれ、準備の方は順調に進み、早寝早起をモットーとする日本側コーディネーターだけが早々と床に就く中、各プレゼンターは、夜遅くまで自分の原稿を練っていた様である。

ナッシュビルに到着した8月8日、各々が自分の部屋に入り一段落した後、夕食をとりながらジェンダーナイトは始まった。ここでは、無作為に日米1人ずつのペアを作り、夕食を共にしながら自由な雰囲気話してもらった。

そして、それからプレゼンテーションである。テーマは、職場における女性の地位、人

易に関する交渉の場が、自己の立場の押しつけ合いという形ではなく、問題の解決を目的とする共同作業の場たらんことを切に願うものである。（竹井 亮一）

工妊娠中絶、同棲など事前のアンケートをもとに、多くの参加者が関心を持っていると思われるものを扱った。これらの問題は様々な点で日米、あるいは男女間に意見の相違があり大変興味深いものであった。全てのプレゼンテーションが終わってから、one to oneのディスカッションを始めた。日米かつ男女で2人のペアを作り自由に話し合うというものである。これは、今まであまり話したことのない相手と話せるということや、2人だけなので相手の意見をよく聞けるという点で好評だった。15分という時間を設定したが、短過ぎるとの声も聞かれた。この1対1の討論を2回（即ち、2人の異なる相手と話す）行った後で、小グループによるディスカッションを行い締めくくった。時間が十分であったとは言えないが、懸念された感情的な意見対立もなく、各々が相互の立場を尊重して話ができているのではないかと思う。筆者自身は、この一対一ディスカッションで前から関心をもっていた米国での高い離婚率についてどう考えるか尋ねた所、平均寿命が大幅に伸びた今日の社会では、一生一人のパートナーと共に暮らすのは難しく、それは自然の成り行きだと言われ考えさせられるものがあった。もっとも、彼女は「この国では何でも使い捨てなのよ。」とも言っていたが。

会議が終わりに近づいた頃、私はコロラドカレッジで共和党大会のTV中継を見ていた。

そこではブッシュ大統領が保守色を前面に出し、「家族の価値」をさかんに説いていた。

私はその時、離婚率50%というこの国実態と、彼が理想と考える家庭像とのあまりの乖離に強く驚かされた。これは、この国の変化の速さを表しているとも言えよう。そしてそれが、ある意味でこの国の強さでもあったのだ。

だが、これからはどうなるのか。今まで通り、それは強さであり続けるのか。それともこのTVに写し出されている政治家の言う通り、社会の価値観が退廃してきたのか。ひる返って日本を見てみると、米国の後を少し遅れて追いかけて来たようなこの日本も、米国



と同じ経路を巡ることになるのであろうか。それとも、日本のもつ伝統的な文化はこれとは全く別な方向へ国を導くのか。問いかけは一層深まっていくのであった。(佐野日出之)

## ジェンダーナイト

8月8日、テネシーでの最初の夜に行われたジェンダーナイトは、夕食を食べながらのペア・トークで始まった。男女のペアを作って、ジェンダーの問題を素直に語り合おうというわけである。

夕食後、日米の参加者各4名がプレゼンテーションを行った。それに先立って、プレゼンターの一で女性学を専攻するSaraが、ジェンダーというごく個人的でセンシティブな問題を話し合うときに注意すべきことについて話した。プレゼンテーションのトピックは「米国における中絶」「日本における中絶」「デート・レイプ」「同棲」「家事における男女の役割」「ビジネスでの女性」「男性に対する社会の期待」「男性問題」である。ジェンダーというと、社会的に不利な立場にいる女性に眼が向きがちだが、男性のかかえている問題を指摘したプレゼンテーションが行われたことは興味深かった。忙しいスケジュールの中で、夜遅くまで努力したかいあって、示

唆に富んだ力作ぞろいであった。

その後、プレゼンテーションを問題提起として、再びペア・トークが行われた。それぞれのペアが思い思いの場所で熱のこもった話し合いを行った。参加者の多くは、近い将来に自分の身に起こりうる問題として、ビジネスの場での男女の平等や、男女の家事の分担などに関心を持っていたようである。中絶の問題に関しては、参加者の多くはリベラルな意見だったようである。合計3回のペア・トークを経て、最後にグループ・ディスカッションを行い意見を交換した。

ペア・トークは他のイベントでは見られない試みだったが、身近な話題についての密度の濃い話し合いを通じて、相手の考え方や人となりを知ることができて非常に有意義だった。また、日米のペアを作ったことで、それぞれの文化的背景の違いによる考え方の違いが浮き彫りとなって興味深かった。

(大谷 裕子)

## レセプション

### サンダース氏主催のレセプション

---

ハワード大学からバスに約一時間揺られて、バージニア州にあるオールドタウン・アレキサンドリアに到着した。サウンダース氏は、サウンダース&カンパニーの社長を務められていて、我々80人の会議参加者を快く招待して下さった。

レセプションはオフィスの庭と油絵や彫刻が展示してあるギャラリーで行われた。焼き鳥がご飯の上に乗っていたり、パスタのような味のするうどんや豆腐らしきものなど、様々な珍しい料理を頂いた。サウンダース氏やゲストの方々とお話をしたり、ギャラリーを拝見したり、楽しいひとときを過ごした。最後にレセプションのお礼を述べ、サウンダース氏にCerfikcote会議参加証明サーティフィケートとJASCピン（会議参加者のバッジ）、

Tシャツを差し上げた。サウンダース氏は、「歴史は切り開いてゆくものであり、新しい物事やスタイルに挑戦していくべきである。」とおっしゃり、会議の意義や会議そのものについて改めて考えさせられた。

ワシントンDCに戻る前に、バージニア州のウォーターフロントに立ち寄った。ワシントンで見られるような荘厳な古い建築と新しい近代的なビルのある町並みとはまた異なる古いレンガ造りの建物が並ぶ通りは、同様に魅力的であり、趣きがあり、たいへん印象的であった。約一時間程の自由時間にそれぞれ町を歩いたり、アイスクリームを食べたりして、ワシントンDC最後の夜を満喫した。

(寺澤 美紀)

### テネシーでのレセプション

---

テネシーでは、総領事補佐のエド・ネルソン氏のご厚意により、カントリークラブで歓迎レセプションパーティを開いて頂いた。広いゴルフ場、プール、テニスコートなどを完備したすばらしい屋敷に招かれ、品のいいカントリーミュージックの生演奏をバックに、私達はすばらしい夕食の時間を過ごすことが出来た。やわらかい室内の照明のせいだろうか。ほんわりとした雰囲気のためよう中、友達と話を咲かせる者、おいでになっていた客人方と交流する者、それぞれが有意義な時間を過したにちがいない。

そして又、このレセプションを通して様々な意見を聞くことが出来た。

この様な豪華な場所で、立派なレセプションを（たとえ招いて頂いたにしても）行なうことは、果して私達にとって必要なことであったのか。私達の身の程を越してはいないか。又、今回のネルソン氏のおかげでカントリー



クラブというメンバー制の施設を使わせてもらったのだが一部の富裕な人々が集う場となっているカントリークラブの在り方に疑問を抱き、参加を拒否した者もいた。夢の様な夜にただ酔いしれているだけではなく、各々が自分なりの視点を持って、このレセプションをとらえていた様だ。

ともあれ、やはり私達を受け入れて、その

活動に賛同しこんなにすばらしい会を開いて下さった方々に、心からお礼を言いたい。私達に、そして私達の未来に、期待して下さる方が大勢いるのだということを忘れずに、その有難さをかみしめながら、日米学生会議を私達自身を見直していかなければと再認識した夜であった。(阿古 智子)

## エッセイ

民族問題フォーラム(於ナッシュビル)のあった昨日は、小学生でも赤面するような「理想の社会とは」について話をさせられ、英語はわからないし、蒸し暑かったし、僕にとってはろくなことがなかった。その後には例によってレセプションが待っていた。

バスはスカーレット・オハラ邸のようなカントリークラブに着き、ゴージャスな食事が始まった。ここは白人の残された帝国であり、プール・ゴルフコース・テニスコートが完備している。年老いた南部人独特のレッドネックがバターをしている姿が妙に印象的であった。南部には農業従事者が多く、襟首を日焼けしている人が多いのでこう呼ばれる。

中ではバンジョーでハンクウィリアムスが弾かれ、給仕は黒人であった。排他的な白人社会の象徴ともいえるこの空間は、僕にオープニングセレモニーのコスモスクラブで感じたものと同じ憤りを感じさせた。だが私は前日と同様この時もやけになって、うまい料理をむさぼり食い、日本人同士でばか話をしていた。

しかし今回は違った。Saraがいた。彼女は典型的なWASPであるが、父親が公民権運動に関わっており、キング牧師がかの“I have a dream.”演説をした時にボディガードをしたらしい。彼女は、そうした自分の信念から食事をとらずに外に出た。それだけなら私にもできたかもしれない。ところが彼女は、自分の考えを支配人にははっきり伝えたのだ。彼の答えはかえって好意的であり、黒人はまだまだ難しいが昨年ユダヤ人の家族が入ったそうだった。彼女自身がWASPだったから聞けたことかもしれないが、内部から変えようとする動きがあることを知り、彼女は連絡を取り続けたいと言っていた。

たった一つのクラブが少々変わろうが、構造が変わるとは思えない。だがJASCer一人が一つのクラブを変えれば、80のクラブを変えることができよう。私にとって感動させられたことは、彼女が実際にタブーを口にだし、それを責任主体にぶつけたことだった。勇気が小さなきっかけを作り、それがブレイクスルーを生み出す。そんな構図が垣間見られたようで、私の中で何かが変わった気がした。(田中 剛)

## レストステイ

八月六日の深夜ワシントンDCを離れナッシュビルへ向かった我々は、途中ワフロイにて一泊のレスト・ステイをした。出発の際高熱を出した三名をDCに残し、バスの車中で夜を明かすという強行軍にも拘らず、ワフロイに着いて朝食を済ますや否や水泳、frisbee、ハイキング、テニスへと散っていく仲間、そのエネルギーには全く驚かされた。私自身はさすがに疲れには勝てず、宿舎に入ると昼夜も取らずに眠ってしまった。目を覚ますとSara（参加者）の見事なピアノ演奏（ラブソディ・イン・ブルーを暗符で弾いていた！）に耳をかたむける人、聞きほれて(?)眠り込む人その横でコンピューターに向かう人、外ではスポーツに興ずる人々・・・めいめい思い思いに自然の中で休日を楽しんだよ



うであった。

夜にはキャンプファイヤーを囲んで中間反省会が開かれた。個人的に印象に残ったのは出席者のほとんどが自主的に発言をしていたことである。主に挙げられた内容は言葉にまつわる問題と参加者の提案で自主的に行われた民族問題フォーラム・ミーティングに関してであった。

不思議な鳥の声、焚火の明かりのもと行われた中間反省会。ワシントンという場所柄もあってか慌ただしく過ぎて行った会議前半をふり返り、うまく後半戦へ続けていく機会になったようである。一言で要約すればあちこちにあふれる“コミュニケーション”なる言葉の意味のつかみ難さに気づかされた反省会だった。  
(猪刈 由紀)

## オプリランド

テネシーに到着して2日目のこの日の朝、ぼくは宿舎の前の芝生の木陰に寝そべって、ラジカセでベートーベンの「田園」を聞きつつ、D.C.で買ったAndrew Hackerの“TWO NATIONS”を読んでいた。

D.C.と比べこの辺は人気も少なく、とても静かだった。会議の生活に慣れるのに精一杯だった今までの自分を振り返る余裕もでき、青空をのんびりと眺めつつ、時折宿舎から出てくる友達に挨拶しながら、ぼくは日本でも

長いこと味あわなかったようなゆったりとした落ち着いた気分になって、ほんとに快適だった。

昼過ぎに何人かと連れだって近くのコインランドリーまで洗濯にでかけると、突如として雲行きがあやしくなり、あっという間に激しい雨が断続的に降り始めた。せっかく洗濯した物を台無しにしてしまった人もいたが、ぼくらは運よく雨の止んでいるうちに帰ってこれた。しかし洗濯物よりも心配だったのは、この日に予定されていた遊園地 (OPRYLAND PARK) 行きのことであった。

不安は的中し、バスで目的地に向かっている間も、雨は降り続いた。午後2時半すぎ、OPRYLAND PARKについたときには雨は止んでいたが、上空で雷が物凄い音を立てていた。落雷の恐れがあるのですべてのアトラクションは中止、ということだったが、いまさら後には引けない。精一杯楽しもうと思って意気揚々と中にはいった。ふとチケットを見ると、"HAVE A NICE DAY・JAPAN/AMERICAN・STUDENT CONFERENCE"と書いてある。なんだかうれしい気分になる。

ぼくはこういう時は一番に仕切り役を買って出るMitziの後を付いていくことにした。Rajeshとぼくは、彼女に "We will follow you, Mitzi! Today, we are your sors!!" と言った。Mitziはぼくの腕をとって引っ張って行き、地図を皆に配ってくれたりして期待通りの張り切りぶりだった。しかしさしもの彼女もアトラクションが何一つ動いていないのではお手上げのようだった。何か動いてやしないかと彼女がいろいろ探し回っているうちに、ぼくは彼女たちの一行とはぐれてしまった。

また雨が降り始めたので、仕方なく売店に

寄ってマルガリータ風のシャーベットを食べながら、他の人がくるのを待った。近くを見て回ると、子供向けの射的をやっている所がある。早速みんなでやってみる。すぐにコツをつかんで、百発百中という感じになって夢中になっていると、隣りでやっていたアメリカ人の男の子がお婆さんらしき人と一緒に僕を見ている。ぼくが "I'm John Wayne!" と言ってポーズをつくと、その男の子はにっこりと笑った。そばにいたリカは、「しばさん、最高だよ!」と言った。小学校の頃からおしゃべり・ひょうきんな人ナンバー1の異名を取ってきたぼくとしては、久しぶりの面目躍如だった。

そのあとぼくは、けいこ・あすか・Phillipの3人と一緒に、遊園地を一周する汽車に乗ったり、ケイジャン・フードを食べたりした。そのころからようやくアトラクションが動き始め、ぼくたちは、THE OLD MILL SCREAMという、一種のウォーターライドに乗った。みんなびしょ濡れになって、お互いの姿を見て心の底から大笑いした。ぼくとPhillipは調子に乗って2回も乗った。

遊園地の中には小さな動物園が点在していて、餌を与えたりして遊んだりできる。またあちこちでカントリー・ミュージックのショーをやっていて、音楽好きのぼくにはこたえられなかった。夕方にメインのショーがあるらしいので、それまでは一人で土産物の店などを冷やかしていた。ぼくが欲しかったのはカウボーイ・ハットだったが、こには本式のものがなさそうなので、黒いパナマ帽を買うことにした。しかしその前にKevinに会い、二人でFUNNEL CAKESというお菓子とレモネードを買って食べた。ぼくはあまり彼と話をしたことがなかったので、なんだかうれし

かった。売店のバイトの女の子は地元の大学生で、日米学生会議の話をしたら、結構興味を持っていたようだった。

メインのショーは、ベガス風の歌と踊りのヒット・パレードといった趣向だった。お世辞にも第一級とはいいい難かったが、そんなことはぼくには関係なかった。生でショーをみる時の楽しみは、演者の技術の程度や好き嫌い以前に、出演している人々の表現する喜びと、ショーに生きがいを見出だしているひたむきさが感じ取れればそれで十分なのだ。ジョージタウン大で見たミュージカル、『南太平洋』のシークエンスが出てきたときには拍手にも思わず力が入った。

ショーが終わる夜9時近く、オプランドも閉場となる。慌ててお目当ての店へ行き、帽子を買おうとすると、店番のヒスパニック系の女の子がいろいろと親切に教えてくれた。かくしてぼくはみんなと同様久々に童心に戻り、パナマ帽を手にして帰途についたのであった。これ以後、ぼくが「カウ・ボーイ」と呼ばれ、その帽子がトレード・マークになったのはいうまでもない。ただし、帰国後そのパナマ帽を親友の一人にあげてしまったので、もはやそれをかぶることもなからう。楽しいうちに思い出にしておけばその経験はいつまでも美しくあり続けるものなのだ。

(芝崎 厚士)

### ナッシュビルの友人 (MTSUでの暮らし)

「テネシーには強い訛があるよ。」

ワシントンD.C.での開会式で出会った人が私にこう教えてくれた。レストデイを経てテネシーの大学に向かうのはまたバスだったので、私もこれには閉口していた。窮屈さを感じながらも私はワシントンで店から土産としてもらったエチオピア料理をはおぼり、それに飽きると眠ったりしてナッシュビルに着くのを待った。

大学は中部テネシー州立大学といい、閑静なところにあった。緑にあふれ、敷地も広く夕方には辺り一面に螢が飛び交う、そんな環境だった。

この寮で生活している時、私は一人の青年に出会った。彼は夜間、寮の見張りをするバイトの学生で、ちょうど私たちの滞在期間中に当番となっていたのだった。私が彼と話すようになったのはふとしたことからである。

「君たちは一体何の団体なんだい？」

夜間、見張りをするといっても支関のカウンターに座り、机に足を伸ばして起きているだけである。言われた通り訛が強く、始めは全く理解できなかった。例えばトゥデイはトゥダァイに聞こえる、そんな具合だったのだ。

知り合ってから毎晩話すようになった。暇だから、と言って持ってきているカードでゲームを教えてもらったりした。私はある時、ものの興味で訪ねてみた。

「日本、っていうと一体どんなイメージを持っているの？」

彼は言葉を選んでいふふうでもなく、分からないと答えた。近年は日本企業がナッシュビルに多く進出していることもあってビジネスのイメージがある、とその後で加えた。

こんなことがあった。彼は日本人と生活をしたり、友人を持ったりしたことがないと

いので、日本語を教えてあげることになった。簡単なあいさつだ。「ハロー」「グッド  
モーニング」から「お帰りなさい」「こんばんは」まで6種類を教えた。

「もし明日皆が帰ってきた時、カウンターから“お帰りなさい”って言うとかびっくり  
するだろうね。」

彼は照れくさそうに笑って、きれいに発音した。日本語を話せるようになってみたいなあ、  
彼はこう言うのだった。

生まれてからずっとテネシー州に暮らしているのだと言う。これからもテネシー州を  
離れないだろう、と彼は言った。「エンジニアになりたい」彼はこの中部テネシー州立  
大の学生だったのだ。

「ついに最後の日だ。」

知り合ってすぐだったが彼はこう言った。月曜から金曜までが彼の当番だったのであ  
る。

彼はこう言った。

「日本は遠い気がしたけど、近くなったような気がする。」

日本語は使うにも恥ずかしくて試さなかったようだが、私は彼と話をすることができて  
嬉しかった。今、彼がこの時のことを覚えているのかは分からない。しかし私にとって  
はとてもさわやかな、テネシーの緑をわたる風のような彼との語りであった。

(遠藤 繁)

## コロラドを振り返る

飛行機でコロラド・スプリングスへ到着したのが夜の7時半。コロラドでの最初の日程であるホームステイのためにファミリー探しを全面的に協力して下さったMayumiさんやJASC OBのGuy, Barlの顔を見つけてホッとす。空港で待っていてくださったホストファミリーとみんなをベアにして送り出し終える頃には外はもう夜の闇に包まれ始め、夕暮れの中、目の前に広がる大きな空と山々の美しい雄大な景色を見ながら「ああ、ここはコロラドなんだ。」ということをしみじみ感じた。

テネシーでの会議もすでに半ば過ぎ後数日でコロラドに移動するというのに、まだ全員

を受入れてもらえるだけ十分な数のホストファミリーが確保出来ていないという状況は、私にもしかすると全員ホームステイするのは無理かもしれないという一抹の不安を感じさせた。運の悪いことに丁度日本からきた200人の高校生のホームステイが一週間前に終わったばかりということで当初期待していた家族2人、計40組の受入れ先が思っていた程スムーズに見つけられなかったのである。私自身の中に昨年の札幌ホームステイがとても楽しく良い思い出となった経験があったので、本当にみんなにホームステイをしてもらいたかったしさせてあげたかったが、その夢はどうしても実現出来なかつた。全員が無理とい



うことがハッキリした段階で今集まっている受入れ家庭、協力してくださっている方々の善意を無にせず、また出来ることなら一人でも多くのJASCersにこの素晴らしいチャンスを与えたいと思い、他のECとも相談して一体どのようにしてホームステイに行く人を決めるのが一番良いか、みんなの考えや意見を聞くことにしたのだが、これは私にとって「他の人のことを思いやること」の素晴らしさを感じさせてくれた忘れえぬ出来事となった。というのも多くのアメリカ側参加者が、自分はコロラド大学に残る組で構わないからその分日本側の参加者を行かせてあげて欲しいと進んで申し出てくれたからである。結局みんなの意見を尊重してこれまでにアメリカでのホームステイ経験が一度も無い人から優先的に決めていき、最後に残ってしまった人達はコロラド大学で休息をとるところに落ち着いた。ホームステイを終えてコロラド大学に集まってきた何人もの人達から次々に「とても楽しかった。」「素晴らしい経験ができた。本当にありがとう。」と声をかけられた時は嬉しさのあまり胸が一杯になり、ホームステイをやれてよかったと心から思った。その夜のコロラド大学主催のWelcome Receptionでは共にコロラドRegionのコーディネーターを務めるKeikoと一緒に会を進めることが出来、最高の夜だった。

緑が鮮やかで広々としたキャンパスのなかにどこかヨーロッパ的な歴史を感じさせる建物が点在するコロラド大学。すぐそこには山が見え、真っ青な空がどこまでも広がっている景色に自然の美しさというものを改めて感じさせられる。毎朝カフェテリアに行く途中の横断歩道では信号が無いにもかかわらずどの車もいつも必ずとっていいほどスッと止



まってくれるのには多くの人（日本側の参加者）が私と同じように感心していた。さすがコロラド。東京とは違って親切なんだなぁといった具合に。そうそう、親切といえば車だけでなく人々の温かさが今回何よりも心にしみた。中でも宿泊から食事、バスなど私達のコロラド大滞在に必要な準備のすべてを快く引受け、常に何か困ったことがないかと気をつけていてくださったMr. David Lordにはいくら感謝しても足りないほどだ。それからこんなこともあった。夜を徹しての大事な話し合いの翌朝みんなすごく疲れているし寝不足だからきっと眠っていて起きられないだろうと思い、80人分の朝食を無駄にしてしまうのが申し訳なくてキッチンにいったところ、もうすでに準備がすすんでいて時すでに遅し。悪いことをしてしまった、どうしよう。と一瞬胸が痛んでしまっていた時、親切なコック長のDavidは“No Problem”と言った上に「お昼まで取っておけるものはランチとして出せるから大丈夫」と答えてくれた。またManagerのEricはDavidと相談して24日の早朝朝出発する人達のためのBox of Breakfastを朝4時までに宿泊している寮の方にとど

けてあげましようかと約束し、実際まるで魔法のようにその通りにしてくださったのである。

多くの人々の親切、“Hospitality”の御陰で何とか無事に終わることが出来た日米学生会議最後の開催地コロラド。コロラドに一度も行ったことがなく、何の知識も持たなければ情報の集め方、連絡方法もよく知らなかった私でも何とか大役を果たせたのは、これらの温かい心を持った人達の大きな支えがあったからこそであり、多くの人の協力で日米学生会議は成り立っているということを私達は

決して忘れてはならないと思う。最後に一緒に力になってくれたKeiko、ECのみんな、ありがとう。そして誰よりも、素晴らしく美味しいカフェテリアと美しいキャンパスのコロラド大学を選び、その下準備を全て整えておいてくれたPaigeに感謝したい。理由あってECをやめざるをえなかったとはいえ、彼女が私達のコロラドでの素晴らしい思い出作りに陰で大きな努力と貢献をしてくれたことに変わりはないのだから。ほんとうにありがとう、Paige。 (五所恵実子)

## ホームステイ



ホームステイは8月15日から16日にかけて、コロラドスプリングスで行われた。この日に先立って、コロラドスプリングスの姉妹都市である富士吉田市から施設団が300名ほど、この地を訪れたばかりであったため、参加者全員のホストファミリーを見つけることが出来ず数名はコロラド・カレッジにとどまることとなった。

8月15日、テキサスのダラス・フォートワース経由で、コロラドスプリングスの空港に到着すると、ホストファミリーが出むかえてくれた。ファミリーの中には色々な方がおり、中には一人暮らしの女性が、お友達と共に世

話して下さった、ということもあった。空港の待ち合い室でそれぞれのホストと対面すると、2・3人ずつ、引きとられていった。この夜は、日本側がお土産として持参した日本についての写真集をかこみ、日本についての会話に花をさかせたり、久しぶりに手づくりの料理を頂いたり、またバーにつれて行って頂いたり、それぞれの過ごし方をした。また次の日も、コロラド・カレッジに全員が集まる時間まで、ホストの方々に、コロラドスプリングスの観光案内をして頂いて過ごした者が多かった。特に目立ったのはやはり、Air Force Academy, Olympic Center,



Garden of the Gods, といったコロラドスプリングスの名所であったが、中には温泉につれていって頂いたり、ジェット・スキーを楽しんだ者もあった。

この二日間は、アメリカの家庭を見るのが

初めての者には、新しい経験であり、他の者にとっても80人の共同生活から離れた、リラックスした時をすごせ、また新たな出会いの機会ともなった。(磯部 聡子)

## 新実行委員選挙について

毎回の会議についてもあてはまる事なのかも知れないが、やはり次回第45回の企画・運営を行う新実行委員の選挙は、私にとって非常に印象深いものだった。選挙の形式を決めるため第44回実行委員が集まったとき、日本側から出された意見は、「来年も会議を行うのかどうか」をまず話し合うべきだ、というものだった。日本側がこう切り出したとき、米国側はその意図が理解できず、困惑した表情を見せた。しかし、会議は続いていくものだという事を自明な事として選挙は行えない、むしろその点を考えた上でそれぞれ立候補してほしいし、また投票してほしいというのが我々の真意であり、やがて米国側委員もそれを理解してくれた。こうして始まった選挙形式決定の話し合いは、忙しいスケジュールの合間に何とか時間を捻出しながら続けられ、しかしその作業は選ぶべき選択肢を明確にするにとどめ、最終的決定は全員参加者に



委ねられる形となった。

そしていよいよ会議参加者で、翌日の選挙をどのように行うかを話し合った。ここでも同じ問い、「来年も会議を行うのか」が全員に対する問いかけとして提示された。一瞬皆静まり返り、その後「なんでやらないんだい？」の一言に続き数名が「この会議は良いチャンスである」等の意見を述べた。結果としては実にすんなりと最初の一步が踏み出されたわけである。(個人的には一晩位費やしてこの点を話し合ってみたかった。)あとは日米両国間のバランスの問題として、委員の人数(日米の比率、男女比率等)、立候補の資格などが決められた。選挙自体は日米別々で行われる事となったので、日米に別れて立候補の表明方法、投票数、演説ならびに質疑応答の方法などさらに具体的な点を深夜まで話し合った。

こうして選挙は前提を持たない参加者全員による手作りのようなものとして準備され、実行された。実際の選挙に関しては詳しく書く必要ないだろう。みんなで決めたように演説・質疑応答・話し合いが行われ、投票をし、そして委員は選出された。正直言って私にはその選挙結果よりも、過程の方がずっと大事だったし、今でもそう思っている。JASCの抱える大きなジレンマ、それは一言で言えば運営の形態であり、実行委員なるものと参加

者との関係である。ここで民主主義をどうこういうつもりはないが、直接民主制が必ずしも真理に近いものでないにしろ、集団構成員の決定権が曖昧に区別された形で与えられているという事は有形無形の害をはらんでいると言わざるを得ない。しかもその区別そのものが曖昧な合意に基づいているという場合はさらに問題は面倒である。まどろっこしいといわれても、信用しているからといわれても、

ありがた迷惑だといわれても、あの実行委員選挙のプロセスは数カ月前から考えてきた私にとって、数少ない試みのひとつだった。別にそれが正しいとは思わない。しかしそのような議事決定の仕方がその性質上限りなく不可能に近い会議の中で、最後の最後に行なえた事は個人的にはとても大切な意味をもって  
いる。 (猪刈 由起)

## 新実行委員選挙について

会議の日程も残すところ二日となった晩、第45回の会議を託す実行委員を決めるためのミーティングが開かれた。とは言うものの、来年の会議を開催するかどうか、またそれをどのような形態のものとするべきかは、全て今年の参加者に委ねられるべきとの判断から、この前日に新実行委員決定のプロセスを決めるために皆で集まって話しあった。その結果、来年の会議開催については全員が賛成、新実行委員については、次の日まで貼り出した紙に自薦、他薦共に氏名を書き、ミーティングの際にやる気の有無とその理由を表明することになった。

さて、ミーティングの日、各自薦、他薦者が所信を述べ終わると、今度は全体で輪になって、実行委員になるにあたって必要と思われる事柄を質問し、候補者がそれに答える時間が設けられた。自分が実行委員になったらどういう会議を作りたいのか、という理念的な問題から、大学の勉強や、就職活動と両立しながら自分がどの程度の時間を割いて会議の為に働けるかという実際の事まで幅広く話し合われた。最後に一人ずつに紙が配られそこに自分が実行委員として働いてもらいたい

人物を十名書き並べるという形式で投票が行われた。

この新実行委員選出は日米それぞれ別で行われたが、アメリカ側が例年通りの形式にのっとなって、ある意味で手際良く事を運んでいたのに対し、日本側が決定までのプロセスに重きを置いて多くの時間を話し合いに費やしていたのが印象的だった。また、アメリカ側に選出の時の様子を後から聞いたところによると、投票前のスピーチの善し悪しが激戦の明暗を分けた、とのことで、この国での自己アピールの手段としてのスピーチ能力が重要であることを改めて認識した。

日米双方で様々な紆余曲折を経た後、十名ずつの新実行委員が晴れて決定した。新実行委員の名前が一人ずつ読み上げられ、前に並んでいる現実行委員と交代していく様子は、第44回という一つの達成と、第45回という未来が交錯する何とも言いようのない素敵な光景だった。実行委員にはならなかった者も、自分はその場にいらないにせよ、来年新たに今度は日本で繰り広げられるであろう“暑い夏”を想像し、その頃の自分がこの一ヶ月の経験からどのように発展した時間とをと生きている

かに思いをはせていた。

(久米 恵子)

## 新実行委員ミーティング

---

8月19日夜、新実行委員選挙の余韻冷めやらぬうちに、第45回日米学生会議への準備は始まった。コロラドスプリングスでの最後の3日間、翌年の会議の骨子を決めるための日米20名の新実行委員による話しあいが行われたのだ。1年後の会議までアメリカ側と日本側の実行委員が会うことはない。この3日間で決めたこと—Colorado Springs Agreement—が20名全員が準備を行っていくにあたり、すべての原点となるのである。

日米相方の実行委員長長の進行に従い、人数、日程、テーマ、開催地を決め、そして内容(分科会、フォーラム、シンポジウム、ワークショップなど)について話しあいが行われた。それぞれ、まさしく十人十色の日米の実行委員たちの意見や考えをまとめていくのは並大抵のことではない。当然、意見の相違や時には衝突もあったが、これらは20名全員の第45回日米学生会議にかける意気込みの表れであったともいえよう。

第45回のテーマとなった“Sharing Our Visions and Working for Harmony in the Global Community”をいかに会議に生かすかを常に念頭におきつつ、話しあいが行われた。実行委員各々が第45回で何を考えたかアイデアをだし、その事柄を取りあげるにはどのような形が良いかを考えるという順で進行した。

まず全体で取りあげる事柄として決まった

のが、環境、戦争と平和、民族問題の3フォーラム、貿易、新国際秩序の2シンポジウム。そして第44回で好評だったジェンダーと多くの者が問題を感じたコミュニケーションをワークショップとした。各自の意見の共通項を結びつけてできあがったのが10分科会で、“Shaing Our Visions”のためにテーマディスカッションや、インターテーブルディスカッションを持つことを決めた。また、社会におけるJASCの意義を考え直そうとアカデミックペーパーの企画、社会に対するアピールとして44回に続き共同声明を行おうといったことも決まった。

50余年の時の流れの中で、日米学生会議はいかに歩んできたのか、そして“現代”を生きる上で次代の日米学生会議はどう歩むべきなのか—この問いかけに20名が全力で答えようとしている。3日間を通じて、新実行委員各々の胸中にはいかなる思いが過ったのだろうか。44回日米学生会議によって得た経験、知識、感動…それらすべてを糧に45回を創っていこうという各自の思いの結集が“Colorado Springs Agreement”といえよう。44回と45回日米学生会議が共にした3日間、それが新実行委員会議であった。44回は終わるが、そこから45回が始まるのだと身の引き締まる思いで話し合いを終え、閉会式に向かった。

(松本 安代)

## 閉会式によせて

今年の会議も今日の閉会式をもってすべての公式日程を終了することとなる。天候に恵まれた今年の会議を物語るかのような一日である。澄みきった空の下、モノクロの西部劇の一コマを想起させる記念館のかつて実際に法廷として用いられていた一室で、一ヶ月に及ぶ会議が成功裡に終了するという安堵感と張りつめられていた神経とが参加者の意志とは関係なく解き放たれるその瞬間の最後のささやかな抵抗とでも言うべき圧迫感と静寂の支配する中、或は進行していく。様々な思いが思い出という形をとっては参加した者すべての心に浮かんで消えを繰り返している。日米の両実行委員長のスピーチは決定的に生かされた会議を思い出の枠組みに押し込んでしまうものである。そして会議は終わった。



新たな会議が始まりつつあった。第44回の参加者の思いとは必ずしも関わりのない場所で、確実に会議は受け継がれ、装いも新たに再び繰り返される。私たちの会議は終わりなき一ヶ月のうちにとり残されたままになっているのかもしれない。（平松 英人）

### 閉会式の日

それはよく晴れた日の午後だった。静かなコロラド大学の寮の一室で私は机に向かった。ルームメイトはしばし昼寝で心地良い寝息を立てていた。

閉会式、果たしてどんなことを言おうか。

「会議が終わってしまう。」

不覚にも目頭が熱くなってきた。すべて振り返って自分の心に揺さぶりをかけた言葉や出会いがそうさせたのだ。いけない、このままでは何も言えなくなってしまう。焦るほどに激しい思いが募っていった。自分が実行委員をやろうと決めた時のこと、実行委員長になってからの日々のこと、いろんな場所でいろんな人であったこと、すべてがよみがえった。

出発の時間になった。何も言うことがまとまっていないのに私はバスに乗った。会場のオールド・コート・ハウスは石造りの素晴らしい建物であった。音を立てるとこだまするような、そんな所であった。

「ねぇ、どこでやるの」

と尋ねる声を耳にしながら、私は今日が最後なんだ、と実感していた。

閉会式の直前、席に着いた時から心臓の高鳴りが始まった。いつもはこんなことはな

いのだが、曲度に緊張するうちにやがて共同声明が発表された。暗中模索で創りあげ難しい作業であったこの共同声明を聞きながら私はさらに胸が熱くなった。そして、45回の会議の内容がいきいきと発表される中で、私は昨年の自分を思い出していた。

「お前に会議を造ることなんてできるのかよ。」

声にならないそんなまなざしを凌駕する気分で44回の会議を発表した時から一年が経っていることに驚き、それを味わう間もなく自分のスピーチとなった。

大方の予想通り、私は皆の前に立った瞬間何も言えなくなった。大きなうねりが繰り返して起きるだけで言葉が出なくなってしまった。共に一年間を過ごした実行委員たちが周りに駆けつけたのに気づかないほど、私は言葉を失ってしまった。

自分をどのくらい見つめることになるのか、それはまさに自分を試す一年だったのだと私は思った。利己的な感慨なのかもしれないが「私」という人間がこれ程までに叩かれ、暴風にさらされたことがあったらどうか。こうした感慨に加えて、参加した学生たちは何を感じているだろうか。

私はスピーチを終えると「静」に入った。穏やかな気持ちで会議の終わりを迎えた。この仲間が今の感情と言葉と経験で議論をすることはもうないのだ、ということを知りながら、そして時の流れを止めたり増やしたりなどできないことを察知しながら、私は会議が終わっていくのを感じた。

"I declare the 44th is officially closed."

最後にスピーチをしたKevinの言葉がとても淋しく誓いた。

(遠藤 繁)



### 3. 本会議後の活動

#### 日韓学生フォーラムとの合同報告会

平成4年10月3日、日米学生会議と日韓学生フォーラムの合同報告会が催された。お互い極めて貴重な経験をしながら、その交流が形式的なものか個人的なものに留まっていた両団体を有機的に結びつけ、その成果を共有し合える場として、さらにより親密な人的交流の場として企画されたものである。

当日は日米側13名、日韓側10名の計23名が集まり、午前中は自己紹介をし、次にビデオ・スライドを使いながら夏の会議・フォーラムの全体報告をした。初顔合わせの人もかなりおり、開会当初は緊張した雰囲気もあったが、昼までにはかなりほぐれたものになった。昼食を挟んで、午後はⅠ自由貿易と保護主義、Ⅱ日本において共存は可能か、Ⅲ戦争とは、平和とは、という三つの分科会に分かれてグループディスカッションを行なった。私自身Ⅰのコーディネーターをして感じたのは、日

韓問題は、日米問題の過去の姿と類似する部分もかなりあるが、両国間の過去の歴史、地理上の近隣性により極めて根深い独自の課題を抱えているということであった。さらに日米関係はグローバルな視点で考える傾向が強いのに対して、日韓関係にはリージョナルな問題が幾重にも横たわっており、如何に日本の国際的地位が高まろうとも足元の問題に迫らずして、国際社会のリーダーはおろか「地球共同体」の一員としての責務も果たし得ないということを痛感した。分科会Ⅱでは、「共生」をキーワードにして、差別や人権を我々自身の問題として考えた。自分の体験、実際見聞きしたことをもとに白熱した討論が繰り広げられ、どのように自分自身が異質なものを認め対処していくかについての認識を互いに深め合ったようである。分科会Ⅲでは、各参加者による問題提起により、自衛隊の





PKO参加の問題に入って、両国間での受け取め方の違いから教科書検定問題にまで話が及び、日韓間の認識ギャップが改めて浮き彫りにされた。また参加者の一人からは、「戦争と平和」というテーマを政治家同志のかけひきや学者の論ずる机上の空論とせずに、私達自身、あるいは戦場で実際死んでいく兵士達のレベルで考える必要があり、その際必ず「人間性とは何か」という命題に立ち向かう必要があるという鋭い意見も出された。

この様に各分科会とも著しい時間不足を引き起こす程、充実した議論をすることができた。最後に各分科会による総括発表がなされたが、各分科会ともこれら巨大な怪物の様な

テーマに対する「結論」は見出せなかった。しかし、参加者各人は、ともすれば日米、日韓と各々偏ったソースにより物を考えがちである所に新しい視点を加え、さらに確かな問題意識を芽生えているようであった。なお当日は、OB・OGの方々の参加もあり、討論の幅もより広いものとする事ができた。大成功に終わった合同報告会だったが、参加者の中には、本会の様な両団体の親睦を計る場、参加者一人一人の研鑽を計る場が毎年定期的に催されることを希望する声が多く聞かれた。

尚、今回の報告会には、別冊の報告書が印刷されておりますので、興味のある方は日米学生会議事務局までどうぞ。(堀部 智)

## 報 告 会

---

10月31日、東京四ツ谷の日米会話学院7Fにおいて第44回日米学生会議報告会が開かれた。

今回の報告会は集まった方々にも日米学生会議を擬似体験して頂こうという意図があった。この日のためのパンフレットを作り、アメリカ側実行委員長からもメッセージを送ってもらった。

報告会は鳥越と松井の司会で進められていった。会議の中でも特に環境、民族、貿易、ボランティア、ジェンダー、戦争と平和、共同声明作りについてコーディネーターや参加した学生から経験をふまえての意見が発表された。

より会議を知って頂くために、当日来て頂いた方と参加者によるペアトークも行なった。一対一の話し合いなので、会議に対して様々な質問が素直に出され、なごやかな雰囲気となった。会議の運営のしかたから、アメリカ

とはどんな風なのか、ということまで話の内容は各ペアできまざりだつたようである。

そして会議の様子をビデオでも見て頂いた。梶原、松井、坂田、遠藤、福島がユーモアも交じえてそれぞれエピソードを語り、会場の人たちも初めて会議を「味わう」ことができたようである。

このビデオ上映の後に参加した学生が、今振り返って感じていることを述べていった。

「会議が終わってから、もっと勉強したいと思えるようになった。」

「問題を自分のこととしてどれだけ捉えられるかが大切だということを痛感した。」

心の底から沸き出てくる言葉に、聞いていた私も鮮やかに会議の記憶がよみがえってくるのだった。

最後に第45回実行委員長の平竹から来年へ向けての意気込みが熱く語られ、この報告会は幕を閉じた。

日米学生会議に関心を持って参加できなかった学生は数多くいる。そういう人たちに自分たちが感じたり、悩んだり、学んだりしたことを伝えていくことも、「私たちの果たすべき役割」の一つと言えないだろうか。当日配布されたアンケートでも、参加した学生たちの声に興味を覚えた人が多かったようで

ある。

報告会で日米学生会議に参加しようと思った方々も多いと思う。その参加しようと思った動機をいつまでも大切にしてほしいし、私たちもこの日語ったことを忘れずにまた一步ふみ出していきたいものである。

(遠藤 繁)

第 2 部 分 科 会 報 告

## 第2部 分科会報告

### マスメディアの功罪

総括

(野田 雄輔)

学部や専攻を問わない日米学生会議において、特に誰もが自由な視点で臨める分科会がこの「マスメディアの功罪」であろう。私たちの日常生活に深く浸透しているマスメディアの存在について、各人が自由に問題提起し、更に、活発に議論することを目指した分科会である。考える材料は日常に転がっているという認識から、統一したテーマなどは設けずにあくまでも日米の学生「八人八様」の問題意識を議論にぶつけることを心がけた。八人が様々な角度からマスメディアを斬って見せ、そして自分自身はどの様に向き合うのかを論じた。今回は特徴として、ニュース報道の分野からマスメディアの役割を論じたペーパーが日米共に目立った。また、実施研修先もニュース報道に携わる人々との出会いが多かったと言える。分科会討論の詳細については、各人

の英文ペーパーの要約を参照されたい。

冷戦崩壊以降、世界は先行きが不透明となり、予測困難な時代に突入した感がある。連日、マスメディアから流されるニュースは刻々と変わりゆく世相を反映して、多種多様かつ膨大なものとなっている。「一体何が真実なのか、何を信じれば良いのか」圧倒的な情報量の前に、途方に暮れることもしばしばある。マスメディアが作りだす情報の渦は、時として私たちから冷静な判断力を奪う。思考を停止し、無反応に流される情報に接することは容易である。しかし巨大化したマスメディアがどれほど私たちの考え方、行動に影響を及ぼしているか反芻したことがあるだろうか。私たちが自らの頭で情報を「咀嚼」することを怠った時、マスメディアは煽動という名の魔力を発揮する。良くも悪くも高度情報化



(左より) Ari Green, Lisa Funabashi, Phillip Pepper, 野田 雄輔

高橋 徳嗣, (1人おいて), Samara Adler, 久米 恵子, 清水竜太郎

社会>で生きる私たちは、「マスメディアの虜」であると言わざるをえない。

そうした強大なマスメディアの影響の下にあって、如何にして揺るぎない信念なり、主張を己が胸の内に秘めることができるのか。「たかが日米の学生8人で議論したぐらいで、偉そうな事を言うな」と嗤う人もいるだろう。しかしそれは違う。真剣な議論を重ねる中、私たちは自分の頭で考え、そして自分の言葉で伝えることの難しさを学び取っていった様に思う。幸いに、自らの問題意識をストレートに伝えることのできる人達が集まったため、単なる「マスメディア論」で終ることもなかった。先の見えない不透明な時代に事情は異なれど複雑化していく日本、米国社会。そこで生き抜いていかなければならない一人の人間として、真摯に自分自身の生き方を問うことができたのではないかと確信している。あとは会議の終了した今、どれだけこの分科会で学んだもの、得たものを自分自身で具体化していくかだろう。

#### 活動内容

分科会の主な活動は、参加者の英文ペーパー発表・討論、各訪問都市での実施研修である。渡米前は各自ペーパーの作成に殆どの時間を費やし、かつ直前にアメリカ側のペーパーを受け取り、討論に備えた。また今回は渡米前6月上旬に、第35回アメリカ側参加者だったジェームス・インボコ氏（USニュースアンドワールドレポート東京支局長）を訪問した。東京での特派員としての仕事内容、日米の経済摩擦問題などについて語って貰ったが事前の下調べが不十分だったため、氏を苛立たせる場面も少々あったが会議開催前の良い刺激となった。

さて今夏、44回目を数える日米学生会議は

アメリカを舞台に開催された。ワシントンD.C.、ナッシュビル、コロラドスプリングスの三都市にそれぞれ滞在した。今回、アメリカ側コーディネーターであるAri Greenの尽力により、様々な立場でマスメディアに関わる人々に会い、話を伺い、時には議論を交えた。忙しい合間をぬって私たちと時を共にして頂いた人々全てに、心から感謝している。以下に、掲載上の規定から簡略して各実地研修先とその内容を記す。

#### ワシントンD.C.

##### 1) NEWS WEEK(7/29)

日本でもお馴染みのNEWS WEEKでは、フリーランスの政治記者であり現在ホワイトハウスの取材を中心に仕事をしている、Ann McDaniel氏から話を伺う機会を得た。大統領の記者会見にも度々出席している氏は、政治家がメディアを政治の道具として使っていることを認識しつつ、ジャーナリストは如何に取材を敢行すれば良いのか自らの体験を通して語ってくれた。政治家とジャーナリストの虚々実々の駆け引きがあること、そして政治家の言ったことをそのまま伝えることがジャーナリストの仕事ではないことを強調されていた。

参加者から「日本では政治家とジャーナリストとの“馴れ合い”が時として問題になるが、アメリカではどうか」という質問に対して、アメリカでも同様の問題はありますが「都合の良い政治家の広報官」にならないよう、氏自身その事には特に気を使っていると明快に答えていた。そして最後に、「政治の取材において大切なことは、何が真実であるかを導き出すために、可能な限り幅広いニュースソースから情報を自分の足で取ってくること」と

述べ、取材のため再びホワイトハウスに戻っていった。

## 2) ACCURACY IN MEDIA(7/30)

ACCURACY IN MEDIAは1969年からReed Irvine氏により設立された「マスメディア監視」機関である。ワシントンD.C.で取材活動をするジャーナリストを“監視”するという意図から、独自の視点で刊行物を出版している。氏は巨大メディアが時として、ある特定の団体や政府の権益を守るために情報操作を行うことを、環境問題から酸性雨、湾岸戦争からイラクの民間人死傷者数の報道を例に出して説明した。‘Harmful truth is better than useful lie’ という言葉を何度も繰り返し、巨大メディアが触れたがらない、あるいは見落としがちな問題を同機関が取り上げていることを強調した。

ところが、ACCURACY IN MEDIAの記事に目を通した、あるアメリカ側学生が「掲載されている記事の内容が根も葉もない噂話のようなもので、これではただのゴシップ紙ではないか」という指摘が出て、激しい議論になった。詳しく読んでみると、民主党大統領候補であるクリントン氏のプライベートに関するスキャンダラスな記事が並び、私たち日本人が読んで明らかなに彼への中傷記事と分かるものであった。つまりは、自称「マスメディア監視」機関ではあるのだが、その名を借りた怪しげな政治団体ということになるのか。

「実地研修先としては明らかにミスチョイスだった」と、アメリカ側コーディネーターであるAri Greenは反省しきりだった。しかし、日本側にとっては刺激的な議論が展開さ

れたということと、まさにマスメディアの“功罪”を考える恰好の機会であったということで、興味深い研修だった。

## 3) 全米黒人メディア協会(7/30)

全米黒人メディア協会のPlauria Warchal氏をワシントンD.C.の事務所に訪ねた。アメリカ社会における黒人差別は現在も深く根を下ろしている問題であるが、氏はマスメディア界において黒人差別撤廃運動を推進する一人である。アメリカのマスメディアがほぼ白人によって独占されている状況を説明し、黒人に関する報道に偏見があることを私たちに熱っぽく訴えた。白人のジャーナリストが黒人についての事件、ニュースをリポートをする場合に事実の掘り下げが浅いこと、黒人に関して良いニュースがなかなか取り上げられない背景には白人による「アメリカメディア支配」があるというのである。

そこで氏は、黒人からアメリカ社会に向かって発信できるマスメディアの確立、さらに黒人ジャーナリストがより多く、既存のマスメディアで働ける環境整備のために尽力しているのである。この協会は1973年に設立され、黒人でマスメディアの最前線で活躍している人々はほぼその会員となっているという。また設立以来、同協会主催で黒人社会とマスメディアの関わりについて大規模なフォーラムを催している。

この実地研修は特に日本人学生にとっては、人種の垣塙と称されるアメリカ社会の複雑さを見る思いであり、また民主主義の旗印で有るはずのマスメディアという領域でも厳然と「差別」は実在するというを知らされたということで、大いに考えさせられた。

#### 4) THE NEW REPUBLIC(7/31)

日本では馴染が薄い、アメリカでは知識人層の間でよく読まれているニュース週刊誌にこのTHE NEW REPUBLICがある。そこでコラムニストとして執筆しているMichael Louis氏を訪問した。ここでは主に、商業主義とジャーナリズムの関係が話の焦点となり、ジャーナリストの活動にそれがどの程度影響を与えるものなのかということが話題となった。

氏はまず、ジャーナリズムと商業主義という二律背反する命題に挟まれつつも、ジャーナリストは読者に正確で公正な情報を提供する使命があると語った。しかし一方で、アメリカのジャーナリズムが全面的に商業的基盤の上に成り立っている以上、ニュース報道から商業主義を排除することはできないと説明した。また、学生から「この雑誌社で執筆活動をする上で、言論の自由はどこまで守られていると考えるか。」という難しい質問に対し、氏はTHE NEW REPUBLICでは社主に関すること、イスラエルに関すること以外（この雑誌はユダヤ系の会社）は記者は何でも書けると説明し、ジャーナリストとして、言論の自由が侵害されるほど商業主義に陥っている訳ではないと語った。

最後に私たちにに対し特に活字メディアと接する場合は、自分の頭でよく考えながら「批判的に」記事を読むことを薦めた。どんな記事であっても人間が取材している以上、その記者の思い込みや特定の意思が滲み出るからだという。民主主義社会を支える一つの柱としてメディアの存在が重要であることの反面、その受け手である私たちもその存在意義を認識し、「賢く」ならなければいけないと実感した研修であった。

#### 5) 朝日新聞ワシントン支局(7/31)

日本ではアメリカに関するニュースの報道が流れない日はないが、アメリカにおいて実際にその当事者に話を伺うという貴重な機会を得た。この日訪問したのは朝日新聞ワシントン支局で、支局長の野村彰男氏に話を伺った。

氏は、主に日米関係に及ぼす日本メディアの影響力の大きさについてまず語られた。膨大ともいえるアメリカに関するニュースは、逆に日本人の対米観を歪める結果にもなりかねず、自己反省も含めて日本メディアの報道の在り方を問い質した。しかし、マスメディアが日米関係に与える影響力の大きさを認める一方で、ある程度ニュースがセンセーショナルでなければ東京の編集部が原稿を受け取らず、読者に対してもニュースバリューがなくなることも事実であると、簡単に割り切れないメディア側の事情も覗かせた。ただ、出来るかぎり読者に多様な判断材料を提供する努力をしていることを強調された。

学生からは、アメリカのニュースはかなり日本に入ってくるが、「日本のメディアは、一体アメリカに対してニュースを発信しているのか。今後、対等な日米関係やパートナーシップを築くなら、双方のマスメディアから発信する情報量は偏ってはならないと思う」といった意見も出て、国際関係とマスメディアの役割というグローバルな問題を考える研修となった。

#### 6) ワシントンポスト(8/4)

「ニューヨークタイムズ」と並び、アメリカの最有力紙として挙げられるワシントンポストでは、田中角栄内閣時代に日本で特派員

を務めたというDon Oberdorfer氏を訪ねた。氏はまず私たちを編集部に招き入れ、ワシントンポストに関する一般的な説明（設立、規模、発行部数など）をし、また紙面編集についてアメリカの新聞の特徴を挙げながら解説した。今回の話題は氏がかつて日本で特派員だったことから、当時の取材活動を中心に思い出話を交えながら話をされた。面会時間が短かったことから一時間程でお暇し、刷り上がったばかりの朝刊を頂き、研修を終えた。

#### ナッシュビル

・第二の訪問地ナッシュビルでは、8/14の一日を使ってテネシーの主要メディア（新聞・テレビ）を駆け足で訪問した。まず、テレビではCBS系のローカルテレビ、チャンネル6で朝のニュース番組のスタッフ・ミーティング（どのニュースをトップに扱うかなどニュースの取捨選択をする会議）を見学させてもらい、更にそのオンエアにも立ち会うことができた。ミーティングでは、手際よく一つ一つ

のニュースが記者たちによって議論され、ニュース報道の裏側を覗いた気分であった。しかし、議論のスピードがかなり早いペースで進んでいたのも、日本人学生は内容把握に苦勞した次第である。

次に、アメリカ副大統領のゴア氏も社会部記者として勤務していた、テネシーの最有力紙THE TENNESSEANを訪問した。ここでも次の日の朝刊のトップで扱うニュースの編集会議を見学した。各部署の担当記者はやはり自分が取材してきたニュースには思い入れがあり、その扱いをめぐる激しいやり取りが編集者との間で見られた。

アメリカのテレビと新聞の双方の編集会議を見学するという貴重な体験をすることができた。日本のマスメディアではニュースの編集会議の見学などできるかどうか分からないが、渡米前に日本の各メディアも見学してニュースが編集され視聴者や読者の目に触れるまでのプロセスを正しく認識しておくべきだったと感じた。

## 新時代に向けて～メディアの大いなる可能性～

(Ari Green)

現在の世界的な情報化社会と自由市場経済においてはあらゆるものが国家の枠を超えてしまう。なかでも情報は人々にグローバルな英知を養わせる原動力となっている。21世紀に向かってこの情報を伝達するマス・メディアの責任はますます重くなってきたといえる。なぜならメディアの影響力は個人の意識を変革してリードできるほど大きいものであるからだ。

本来メディアは言論の自由、そして市民の知る権利と政府の情報公開の義務から考えて市民の唯一の味方であるはずだ。しかし現実

をみるとメディアは今だかつてないほど国家権力に近づきコントロールされ、逆に市民の統治に利用されている面もある。これは市民にとって最も恐るべき関係である。一旦政府とメディアが癒着してしまえば、もはや市民の手におえない事態になってしまう。戦争時の報道はその最も顕著な例であろう。政府がメディアをコントロールしやすくさせている背景はそのシステムにある。永田町やワシントンの閉ざされたシステムの中で互いに慣れ合いが行われやすいのだが、メディア自身がこれを変革しなければいけない。メディアが



権力と距離を置いてこそ初めて民主主義が確保されるのだ。市民が第一だという順番を忘れてはならない。また、メディアは特に政治において事実と離れた象徴的なイメージをつくり出す単なる道具になっている。メディアは政策と信念に重点を置かなくてはいけないのである。そして事実は何か、問題は何か、影響は何か、その解決法には何かあるかを公平に伝えなくてはならない。

このボーダレス化した世界では国家単位からの観点は小さすぎるといえる。つまり国民国家を超えた人権に基づいたグローバルな観点をメディアはもたなくてはならない。メディアこそが現実存在するあらゆる差別や偏見や文化などの障害を克服し、自由貿易圏の拡大、ひいては世界の平和と民主主義を促進させる役目を果たすことができるものだ。

一方メディアは市民の側に立ち、市民に情報を伝達し、市民の意見を代弁するのが基本

である。しかし商業化かつ画一化したメディアにとって世論が多様化するにつれ、ますます民衆一人一人の声を反映することが難しくなってきた。その結果メディアは個人や少数派の市民の声を抹殺することになってしまった。すなわち国家と同様、メディアも民意を反映させるには大きくなりすぎてしまったのだ。だからメディアには多様化が必要であり、そのためには小さな地域単位に直接入り、普遍的な問題について地方の視点から切った意見を提供しなければならない。

以上のようにメディアは現在の死にゆく国民国家主義から生活市民が中心となるボーダレス時代の地域国家主義という新段階への移行を導く大きな可能性を秘めているのである。下のレベルでは政治を中央から地方の市民に戻し、同時に上のレベルでは世界人類の一体化をもたらすのである。

## 公民権運動におけるメディアの動き

60年代後半の公民権運動においてメディアが世論に対して与えた影響は何であったのだろうか。最初メディアは公民権運動と同調して人種差別と闘うことで白人層の同情を勝ちとっていった。しかしこれを変えたのがテレビの普及であった。メディアは話題をセンセーショナルにするために報道の主流を非暴力主義派から必要暴力公定派へと変化させていった。そこではメディアは黒人社会の実生活や不満、複雑な問題などの事実を伝えないで、黒人原理主義や彼らの暴動を強調したのであった。その結果、白人層は運動に対して恐怖を抱き始め、逆に法と秩序を求めるようになった。そして偏ったメディアがもたらしたのは

(清水竜太郎)

平等な権利と責任をすべての米国市民に保障するという目標ではなく、人種間の亀裂と公民権運動の破綻であった。



## メディアは真実を伝えることができるか

---

我々は日々多くの情報があふれる中で生活しているが、果たして本当に物事の真実の姿をつかめているかどうかは疑問である。湾岸戦争の際には、世界中のマスコミ関係者が総力をあげて取材に臨んだにもかかわらず、政府による巧みな情報管理がしばしば障害となり、結果として一般の人々は戦争のごく限られた、選ばれた部分についてのみ知らされることとなった。

政府は厳しい検閲によって戦争に関して否定的なニュースの報道を控えさせ、その一方でピンポイント暴撃の映像等を効果的に使用する事により“きれいな戦争”のイメージを広げようと努めた。こうした政府のメディア対策の背景として考えられるのは、これまでに彼らが経てきた歴史的体験である。特にベトナム戦争の際、自由報道の原則の下でジャーナリスト達が次々に戦争の悲惨さの実態を伝えた事が、アメリカ中を巻き込んでの反戦運

(久米 恵子)

動の原動力となり、それがあの戦争の失敗にもつながったのだとする認識が、後の厳しい報道管制の下地になっていると考えられる。

ただし今回の湾岸戦争ではメディア側は戦争終結後速やかに政府の対応に対する不満を表明し、今後の戦争報道の在り方について協定を結ぶという成果を得た。一方で、情報を受け取る一般の人々の方は、政府の情報管理の在り方を支持するような世論を形成する傾向を見せており、メディア側の意気込みの足を引っ張るような形となっている。

我々が受け取っている情報は、その送り手によってゆがめられていることも多い上、そうでないにせよ、テレビや新聞という枠を通してでは、どうしても量・内容共に限られたものになってしまう。したがって、そうした情報に対して、信頼と疑いの良いバランスを保つ事が、高度情報化社会に生きる我々にとって必要不可欠なのである。

## スチュアート殺人事件にみるメディアの影響力

---

(Samara Adler)

1989年、ボストンで起きたスチュアート殺人事件は、メディアがその報道姿勢の基本である懐疑的態度を忘れて、真犯人がでっち上げた悲劇を鵜呑みにしてしまった所から重大な問題を引き起こした。黒人が白人を殺害したとして伝えられた悲劇は、単に大衆の同情を引いただけではなく、『白人を脅やかす黒人の暴力』という民族的偏見を広げ、固定する結果をもたらした。また、他人に仕立て上げられた黒人、ウィリアム・ベネットがこの誤った、しかし広範囲に広がった情報故に、

アメリカにはびこる暴力犯罪のシンボルとなり、真犯人(白人であった)が判明するまで、無罪者としての基本的人権を取り上げられてしまったという事実も見逃すわけにはいくまい。

結局この事件がもたらした事実、とはメディアは本当に大衆の感覚、世論を支配するということである。しかも、アメリカという国においてはメディアを通して伝えられる情報が、送り手の民族構成を反映することがしばしば問題を引き起こす。つまり、メディアに携わ

る人々の多数を占める“中産階級白人”の視点  
点が、アメリカという国全体の感覚を代表し  
ているように受け止められ、マイノリティー  
の人々、例えば黒人やアジア系の人々の立場  
がないがしろにされてしまうのである。

メディア、それも特に衝撃的な情報を扱う  
ことの多いニュースメディアに携わるジャー

ナリストは、できる限り客観的で正確な取材  
報道を期すことがその使命である。そうす  
ることによってメディアは、大衆が偏った情報  
に扇動されずに、偏見のない視野で問題その  
ものについて考えようとする方向へと導く先  
導的役割を果たすことができるだろう。

## 民主主義とマスメディアの役割

(高橋 徳嗣)

マス・メディアは、政策決定者と一般大衆  
との間の意思疎通をはかる機能を持ち、いわ  
ば窓のような役割を果たす。それ故、民主主  
義の実現にとって重要な存在であるが、しば  
しば政府は情報を操作して、その窓を曇らせ  
ようとする。

例えば、第二次大戦中の日本のジャーナリ  
ズムの状況は、政府による情報操作の極北で  
ある。ニュース・ソースの制限はおろか、検  
閲や紙面制限にも屈していた。これは確かに  
極端な例ではあるが、現代においてもさまざ  
まな形で情報操作が企てられている。

湾岸戦争時には、ニュース・ソースの操作  
によって、ペンタゴンは戦争から「血の匂い」  
を拭い去ることに成功した。これは、ベトナ  
ム戦争のときに強烈な戦争報道によって反戦  
運動がおこったことに対する反省から生まれ  
たものであり、戦略としての情報操作であっ  
た。

また、アメリカには「インナー・サークル」  
とよばれるメディアのグループが存在する。  
これは、ホワイトハウスからの情報を、リー  
クなどによって、実質上優先的に獲得できる  
特権的なメディアの集合のことである。これ  
が少数になるほど情報操作が行ないやすくな

る。

情報操作の方法を分類すると大きく三つに  
わかれる。一つは誤情報を流す方法であり、  
二つめに情報の一部だけを公表し残りを隠す  
方法であり、三つめは公表の時期を遅らせる  
方法である。

真の民主主義実現のためには、マス・メディ  
アは社会の窓としての機能を果たし得るよう、  
不用意な情報操作をできる限り排さなければ  
ならない。

メディアは国内のみならず海外からの情報  
も一般大衆に伝達し、一国の民主主義に影響  
を与えている。国際的な情報の流れをみると、  
先進国から発展途上国への一方的な流れが確  
認される。このような状況においては、一国  
の意思形成や文化的発展が阻害されることに  
もなりかねない。

ユネスコで採択された「マスメディア宣言」  
では、マス・メディアが国際平和や国際理解  
を助長するものであるとうたわれているが、  
一方で、言論の自由を有する人々は世界人口  
の20%にすぎないといわれている。マス・メ  
ディアを支配の道具ではなく、国際理解のた  
めの道具とするにはどうすればよいのらう  
か。

## To Grow Bigger, We must Become Smaller

---

(Philip Pepper)

世界は時とともに小さくなっている。もちろん、地球の円周の話ではなく、人の交わりのことである。そして、世代間にギャップがあるように、地域間にもギャップがある。この後者を「文化的ギャップ」と呼ぶことにする。文化的ギャップがなくなることは永遠にないだろうが、世代が進むにつれて、それは収斂しつつあるように思われる。

では、文化的ギャップの起源とは何か。ここでは、空間・言語・文化の三つをとりあげる。第一に空間について、地理的遠隔によって人々は孤立を余儀なくされ、ギャップを生んでしまう。第二に言語について—これは空間の障壁からの派生なのであるが—、異なる言語はコミュニケーションを阻害し、ギャップを生むことになる。第三に文化について、空間・言語の障壁からの当然の帰結として、いったん人の間に区画が引かれてしまうと行動や文化の様式に差異が生まれ、それがギャップにつながる。ここで、後の二つの障壁(言語・文化)は空間の障壁からの派生であることに注目すべきである。

これらの要因から文化的ギャップは発生するが、しかし、いずれの要因も小さなものになりつつある。まず、特に飛行機や通信衛星

などの発明によって空間の障壁はほとんど存在しない。空間の障壁がなくなるとともに他の言語の習得の必要が生まれ、外国語教育(特に学校教育)が進むにつれ言語の障壁も低くなりつつある。また、これらとともに文化の障壁も、食物や服装といったところから低くなりつつある。

そこで、より一層の文化的ギャップの収斂を促進するために三つの提案をしたい。一つめは、海外旅行などを通じて自分の文化圏から踏み出すことである。二つめは、孤立主義や民族主義を捨てて国際的にものを考えることである。例えば、自国の文化を傷つけるからといって海外からの移民を排斥することは文化的ギャップを永続化するものである。およそ文化的ギャップをなくすとは、伝統的文化を捨て、新しい世界文化を創り出すことである。三つめは世界の共通語を生み出すことである。多様な外国語教育をすすめていくことによってそれは可能となるだろう。

最後にこのペーパーのテーマは、メディアというにはやや根源的すぎたかもしれない。しかし、文化的ギャップをとらえることなしに、効果的なコミュニケーションを考えることは不可能であろう。

## 日米情報摩擦について

---

(野田 雄輔)

日米関係に与えるニュースメディアの影響力を考える目的で、このペーパーを書いた。主に日本の活字メディア(新聞)を用いて、アメリカに関する報道の量、事象の取り上げ方などを簡単にではあるが分析した。具体的

には日米構造協議に関する報道を取り上げ、アメリカに関することならば、どんな事でも大きく扱ってしまう日本のニュースメディアの性向を問うた。また「嫌米」などという言葉を作り、悪戯にそれを用いることは、日米

関係の危機という共同幻想を世論に抱かせることになる、日本のニュースメディア特有のセンセーショナルリズムを批判した。そして冷戦が崩壊し、新しい日米関係が始まるのなら、日本のニュースメディアも、これまでのアメリカに対する報道の在り方を見直さなければならぬのではないかと提言し、発表を終えた。

討論では、日本側から「アメリカ人は日々メディアから（新聞、雑誌、テレビ）どの程度日本に関する情報を得ているのか」という質問が出された。これに対し、国土の広いアメリカでは州ごとのローカルメディアが発達しており、取り上げるニュースもその地域に関するものが中心となるという。ワシントンD.Cやニューヨークなど政治の中核や大都市圏などでは情報はことなるが一般的に、日本に限らず国際情勢に関するニュース報道量自体少なめであるという。（そういえば、ナッシュビルのTHE TENNESSIANの編集会議でもほとんどローカルニュースが中心であった）また、巨大メディアでも日本に関する話題が

紙面の第一面、ニュース番組のトップを飾ることはまずないという。

お互いのニュースメディアから伝達される情報量のギャップを確認した上で、メディアに左右されない「ナマの意見」を日米の学生が、一ヶ月にも渡って交わせる機会を持てたことに感謝しつつ討論を終えた。そして、私たちはジャーナリストになるわけではないが（中には目指している人もいる）、機会を見つけて絶えず自らの足で必要な情報を得ていくことが大切なのではないかという結論に達した。



## 第 3 世 界 問 題

### 実地研修

ワシントンDCにある世界銀行のオフィスにおいて、アジア地域の責任者に、アジア経済の現状や世銀のアジア向け貸付の現状について、お話を伺った。

まず、アジア各国に対する世銀の貸付の詳細を、資料を参照しながら、約1時間に渡ってお話いただいた。現在のところ比較的好調なアジア経済ではあるが、さらなる発展のために日本がよりいっそう貢献することが期待されているのが感じられた。その後、私達

（大谷 裕子）

の側から、貿易と開発援助の関係、環境破壊と開発との調整、開発援助をする際の政治情勢への配慮などについて質問した。

ワシントンDCの一区画に居並ぶ世界銀行やIMFのビルを見上げていると、世界の政治・経済の中心地に来たのだという実感がわいてきた。その中心地に一步踏み入れることになった世界銀行の訪問は、ワシントンDCならではの企画であった。

<ピース・ワーク>

ピース・ワーク (PW) とは、年に1、2回、アメリカ・ロシア・日本の3カ国から学生を募って、開発途上国に出かけて行き、様々な援助活動を行うという事業を行っている組織である。そのワシントンにあるオフィスの担当者に、PWの歴史、理念、活動内容の詳細について語っていただいた。

PWの歴史はまだ浅く、数年である。開発途上国への援助活動を通じて、各国の学生が交流し友情を深めるとともに、開発途上国に

貢献することを目的としている。次回の活動はニカラグアで行われる予定で、活動内容は現地の要請に基づいて行われるが、過去には、住宅の建設を手伝ったりしたそうである。

もともと米口の2カ国で行われていたところへ、最近日本が加わったこともあって、私達は興味深くお話を聞き、その活動内容、参加者の現地での生活、活動の問題点などについて様々な質問した。

## 地球社会における中国の役割

中国は現在、旧ソ連に変わる第一社会主義国として世界の発展途上国の中で最も興味深くかつ重要な国になりつつある。特に過去20年間の都市部における経済成長は目ざましく、人々との生活水準は新婚夫婦がかったの三好(腕時計、自転車、ミシン)ではなく八大(バイク、洗濯機、家具一式、カラーテレビ、ビデオ、カセットプレーヤー、冷蔵庫、カメラ)から自分たちの生活をスタートさせられることからもうかがえる。その一方、中国の人口は増加の一途をたどり、11億人とも言われる人々が環境に及ぼす影響は世界第二の人口をかかえるインドと共に深刻な状況になることは避けられない。これからの中国の行方はどうなるのか。また日本とアメリカはどのようにして世界における中国を助けていくべきなのか。ディスカッションでは旧ソ連の政治発展(民主化改革)優先政策が中国の経済発展政策に必ずしも負けたと言い切れないのでは?という意見が出され、考えさせられた。

(五所恵実子)

ロシアは現在経済の破綻による深刻な食料不足で国民は苦しみ、中国では人々の物質生活が豊かになりつつある。が、果たして中国国民は資本主義的経済発展を共産主義の精神下において真に成功させることが出来るのだろうか。この他にも話題は世界の人口爆発の問題に広がり、人口抑制のために行われている中国の一人っ子政策の是非、そしてこの政策の結果として中絶を強制されている女性の苦悩といったことも指摘された。発展途上国において中絶ではなく家族計画による人口増加抑制を促進している国連人口基金によれば、アメリカが1985年以来ブッシュ政権の中絶問題と関連して全く援助を行っていないのに対し、日本は現在人口基金に対する援助額では世界一だそうである。日本がその地理的条件、経済力からみても政治、経済、人権といったあらゆる面で中国の発展を助けることは、冷戦終了後の世界の秩序を保つ上で不可欠なのだろう。

## アメリカのビルマに対する外交政策

「もしアメリカが真の民主主義提唱国家であるならば、アメリカはビルマの民衆が望むようにビルマの民主化に積極的に力を貸すべきである。」この論文はアメリカの外交政策がその民主主義、人道主義といった理念に基づいてではなく、どうも自国にとって利益を得られる国にしか協力の手を差し延べていないのではないかと、といった疑問をアメリカのビルマと中国に対する対応の仕方の違いを比較しながら述べている。この二国の違いとはブッシュ大統領がとった人道主義の解放宣言が1989年の中国、天安門事件ではすぐに執り行われた一方で、それ以前に発生していた1988年のビルマ民衆蜂起では何の人権保護も行われなかった点を指す。ビルマの現状についての意見として、二人の人物、U thet Win (Myanmar Embassy)とMs. Elizabeth Dzeattiewicz (US Embassy)がそれぞれ「ビルマでは共産主義の理念がまだまだ強い。」「人々は感情的に激しい状況の中では一握り

(Lee Silverman)

のデモ参加者の指揮によって軍に体当たりし、命を落している。」と指摘しているようにビルマの政情は一向に安定せず、民主化への改革は遅々として進まない状況にある。ビルマ政府のアウン・サン・スー・チーの投獄に対し、本来ならアメリカ政府はカーター政権に見られるような人権保護主義的な外交政策を取り、彼女の解放に力を貸すべきところが、実際はスー・チーの解放が実現するまでビルマへの援助を一切行わないとし、これに対し、ビルマ政府はスー・チーがこれ以上民主化の火に油を注がないことがハッキリするまで、たとえ世界から切り離されても現状を維持する覚悟であることが伺える。ディスカッションでも出た意見だが「結局のところアメリカの外交政策における言葉上の表明と実際の行動との間のギャップは湾岸戦争におけるクウェートの保護にも見られるように、自国利益追求が政策の根底にあるから」が本当のところなのだろう。



(左より) 西元 宏治, Lee Silverman, 五所恵実子, 坂口 誠二,  
大谷 裕子, Andrew Bodziak, Elizabeth Poon

## 東南アジアにおける発展問題

---

東南アジアにおいて、植民地化・独立という近代国家形成の過程で行なわれた近代化や開発というものが生み出した伝統的社会的破壊、権威主義的体制のもとでの新たな抑圧や経済格差といった問題を、折からの経済発展の中で民主化運動が未曾有の盛り上がりを見せていたタイの場合を例にとりて発表した。

タイの例をもとに、ただ単にこれらの問題を遠い国にある問題としてだけ捉えるのではなく、“近代化”や“発展”というものが先進国といわれる国に生きるわたしたちにとって何を意味するのかということを考えてほしい、発表を行なった。しかし、他の分科会参加者の発表の際にも見られたが、実際は、日米間のみならず各参加者間の提示された問題に対する認識の違いから、議論は噛み合ったものにはならなかった。ただ、ある参加者は、近代化とは普遍的な発展過程であり、東南アジアを始めとする途上国が抱えている問題は近代化がより深められることによって解

(西元 宏治)

決される、という趣旨の発言をし、また、別の参加者は、近代化に対する疑問を呈するよりも先に、途上国に現実に存在している絶対的貧困と呼ばれている状態を改善するべきであるというような意見を述べ、各参加者の第三世界問題そのものに対する認識を知ることが出来るような発言をきくことが出来、非常に興味深かった。

全体の討論を通して感じたことでもあるが、一つの問題を議論する以前に、問題の認識そのものですれ違うことが非常に多かった。当初、そのことに非常に苛立っていたが、次第に、わたしたちの分科会のテーマであった第三世界問題の解決を困難にしているのは、こうした認識のギャップなのであり、まず、これを乗り越えることなしに問題の解決はありえないのではないかと思うようになった。そして、それが分科会を通して得た最大の成果だったように思う。

## 日本企業のアジア近隣諸国への直接投資

---

1970年代に入って、日本における公害規制が厳しくなるにつれて、資源確保のために、あるいは安価で豊富な労働力確保の容易さから、東南アジアに対する日本企業の進出が急激に増加した。

このような海外直接投資が、投資受入れ国の雇用の創出、部品調達を通じた技術移転、経営ノウハウの伝播などを通じて現地企業や産業の活性化をもたらす、受入れ国の経済発展に多大な貢献をしているのは事実である。

(大谷 裕子)

しかし、現地において公害規制のないこと、もしくはあっても規制が緩いことなどから、生産活動により様々な公害を発生させ、環境破壊をもたらす、住民に健康被害をも生じさせていると言われる。この論文では、インドネシア、マレーシアでの具体的な被害例を紹介すると同時に、今後の政府の規制のありかたについて検討した。

アジア近隣諸国と日本との関係を考えるとき、政府開発援助や民間企業の投資といった



経済分野に偏りがちである。政府あるいは企業レベルで考えると、アジアの国々を国としてとらえてしまい、その国で生きている人々の姿が見えてこない。しかし、論文執筆のため資料を調べる中で、企業の水質汚染の証拠を手に入れるため、公害発生企業の制止を振り切って海に飛び込んで、汚染水のサンプルを手に入れたインドネシア人の女医、日本企業による環境破壊を調査に来ているアメリカ人学生、環境破壊停止のために活動している現地住民グループなどのなまの声を聞くことができたのは興味深かった。

また、会議開催直前の7月初頭に、具体例として取り上げたマレーシアで操業する日本

企業に裁判所から操業停止命令が下された。このことは、被害を知る者を安堵させると同時に、問題が現在も進行中であることを強く認識させた。

討論においては、政府の規制を待つのではなく、公害発生企業と同じ日本人として、また同じ地球上に生きる人間として、自分達も何かをするべきだということでは意見が一致したものの、具体的に何ができるのかを考えると無力感を感じざるをえなかった。しかし、少なくとも、環境破壊の事実を認識し、企業の行動に眼を向けて監視することはできるだろうと考えた。

## 援助ではなく貿易を

先進国は、第三世界に対して、毎年莫大な資金を直接もしくは世界銀行やIMFといった国際機関を通じて援助している。米国と日本は、第三世界に対する最大の援助国であると同時に、重要な貿易相手国でもある。援助は資金や知識を開発途上国に提供し、先進国との経済的格差を縮小するが、貿易は、開発途上国をより早く、効率よく発展させると、この論文は論じている。

援助の目的は、途上国における貧困や飢餓をなくし、生活水準の世界平準化を図ることである。しかしながら、世界銀行のデータによると、海外からの援助は途上国のGNPにはあまり貢献していない。援助の目的が生活水準を向上させることであれば、援助は最貧国に向けられるべきである。が、現実には、援助の多くは米国が政治・安全保障上利害を持っている、必ずしも貧しくない地域に向けられている。日本も援助を外交上の手段と位

(Elizabeth Poon)

置づけている。かろうじて低所得の途上国に届いた援助も一部のエリートに牛耳られた政府のために、なかなか貧しい人々に届かない。援助には、いわゆる「ひも付き」の問題もある。

援助が政府の政治的手段となっている現在、政府からは自由である貿易こそが、途上国に知識や富を提供する効率的な方法であり、韓国や台湾は貿易で急激な経済発展に成功した良い例である。従って、日米両国は途上国の貿易の機会を増やすような政策をとる必要がある、とこの論文は結論づけている。

討論においては、貿易が途上国の経済発展に有効であることでは皆の意見が一致したものの、めぼしい資源ももたない最貧国が先進国と貿易を行うことは困難であり、援助が不可欠であるとの意見が出た。また、この分科会においては常に議論されてきたことだが、途上国における開発の必要性、開発の意味についても話し合われた。

## 人口増加のインパクト

2050年に世界の人口は100億人に達すると予測されているが、その増加の大半はアジア、アフリカ、南米諸国で占められている。そこでペーパーでは第三世界諸国における人口増加のインパクトについて報告した。

人口増加がもたらす影響には、食糧生産の増大による土壌の劣化や都市人口の膨張などさまざまであるが、中でも高い人口増加率が経済成長のマイナス要因としてはたらいっていることは強調すべきことである。

分科会の議論では、発展途上国の女性の社

(坂口 誠二)

会的地位、および教育水準の低さが、出生率の低下をさまたげる要因となっているという指摘もなされた。

人口抑制の難しさは、国際機関や政府が、民衆に家族計画をおしつけても効果がなく、生活水準や教育水準の向上、民衆の自主的かつ継続的な参加が同時に求められるところにある。途上国の人々の参加と自主性に支えられた家族計画のプロジェクトを実現していくための財政的支援が必要であることを指摘した報告となった。

## アフリカの人口増加と食糧問題

(Andrew Bodziak)

アフリカは世界でも人口増加率の最も高い地域であり、その人口爆発は薪炭需要の増大による森林伐採と、食糧生産の増大による深刻な土壌侵食を引き起こし、農業生産に悪影響を与えている。

植民地時代に導入された、一次産品に依存する経済や、低い農業生産性など、アフリカ諸国が十分に食糧を供給できない構造では、現状のままていくと人口増加にともない栄養不足人口も増え続けるだろうと思われる。

今後アフリカで起こりうる食糧危機を回避するには、バイオテクノロジーによる穀物の品種改良で農業生産性を向上させることや、女性の社会的地位を向上させ、家族計画を実効性のあるものとする事で人口増加に歯止めをかけることが重要であると考えられる。

だが、討論では既存の技術革新と世界の食糧貿易構造の延長で、食糧危機が回避できる

かどうかについては、否定的な意見が出された。なぜなら、そのような方法では結局、アフリカ諸国は先進国の技術・資金物資に依存せざるをえなくなり、一方、供与する先進諸国側の「利益に合致」する範囲内での支援では限界があるからである

総じて、アフリカの人口増加と食糧危機が止められるか否かについては、悲観的な意見が相次いだ。



## 教 育

### 総 括

(比企野慶子)

日米の教育制度の違いはその社会をどう反映しているのか、互いのどこが学ぶべき点であるのか、21世紀の教育はどう変わっていくべきか、そもそも教育とはいったい何なのか—このような様々な問いの下に生まれて当分科会では多種多様な実地研修が生まれ、積極的な意見交換が行なわれた。一口に教育といえども、平和教育、環境教育、英才教育、障害者教育、異文化教育等々、トピックは広範に及び、別のセミナーやフォーラムで話し合った事柄にまでディスカッションが発展することも多かった。話し合いは常に個人の経験を話すことから始まり、それ故に日米間の比較が多く行われ、各々の問題点が顕著になったのは有益であった。私たちが当たり前のこととして学校や家庭で教えられてきたことやそ

の教えられ方が、いかに形を変えて社会に「文化」として一時にはその歪みとして一現れているか、感じざるをえなかった。よい意味でも悪い意味でも「教育」の力の大きさを感じた。何よりも、現在高等教育過程に学ぶ私たちにとって、この分科会の場で発した疑問は常に自分自身へ戻ってくるものであった。

「これから」を語る時、教育がその礎となることは否定できない。次世代に何をどう教えるべきかは人間の永遠のテーマなのだろう。私たちにこのような機会を与えて下さった以下の関係者の方々に深く感謝し、ここにお礼申し上げます。

#### 実地研修

##### ①ギャラデット大学（聴覚障害者教育）



(上段より) 福島 紀子, 割石 俊介, Jennifer Burns, 増子 聡

(下段より) Andrew Seaborg, 比企野慶子, Corinne Maekawa, Todd House

ワシントンDCにある美しい緑の芝が広がるギャラデット大学は1世紀以上もの聴覚障害者教育の歴史を持つ教育機関で、聴覚障害のある学生のためのコミュニケーション、教育学等の学士課程、修士課程、博士課程のほか、聴覚障害を持たない者のための手話通訳者養成コースもあり、構内には小学校、中学校もある。米国内では1988年の学長選で初の聴覚障害者の学長が選ばれる過程での学生のデモなどでニュースになった大学でもある。夏休み中にも拘らず、訪問した私たちを大学職員の方々は快く迎えて下さった。歴史、設備の説明、学長選中の学生運動のビデオ上映の他、同大学生リサ＝ジーンと通訳の2人がキャンパスを案内してくれ、またアメリカ手話・聴覚障害者文化協会のコーディネーターのデニス＝ベリカン氏とのミーティング、聴覚障害者用に開発されコンピューターネットワークの試用など聴覚障害者教育がどのようなものであるか、聞くだけでなく実際に自分たちで見て、また学生と話すことができた。そこで触れたもの全てが私たちには驚きであった。特に弱者がなかなか社会の表舞台に出てくることのない日本社会に住む日本人学生にとっては、百年も前に既にこのような教育の始まっていた米国社会の寛容さを目の当たりにし、ショックさえ受けた。モノ、技術に関しては日本は世界の最先端をいくであろうが、こうした対人間に関することとなると日本はまだ米国に及ばないのではないかと感じた。

②ロック・クリーク・インターナショナル・スクール（二ヶ国語教育）

この学校は小学生から英語－フランス語もしくはスペイン語の徹底した二言語教育を行

うと同時に言語だけではなくその背景にある文化をも教えていき、真の国際人を育てるという目標を持った米国でも非常にユニークな教育を行なっている私立の学校である。私たちが見学したのは、夏休みであったため就学前の3－7才の子供のサマーキャンプがあった。先生はネイティブスピーカーでフランス語のクラスではフランス語でしか決して話さない。子供同士は英語で話すものの、フランス語で話しかければそれを理解し、無意識のうちフランス語で答えているようであった。同時にその国の習わし、遊び、歌等も習い、学校全体が2つあるいは3つの文化がミックスされた空間であった。確かに幼いうちからこのような環境の下で育てば、自分と「違う」ものをもっと自然に受け入れられるようになるのかもしれない。子供たちは日本という国からの訪問者にも興味を示し、日本語や日本の歌について知りたがった。ただ、このような私立のユニークな学校へは裕福な家庭の子供たちしか来られないことが残念であった。しかし、ヒトの流れが国境を越えつつあるこれからの時代にはこのような教育が日本にも米国にももっと必要となってくるのではないか、そうした点でこの学校の実験的試みは非常に興味深かった。

③シンシア＝フック氏 ミラコスタ大学国際センター所長（留学生政策）

日本の大学の留学生受入れ政策についてのペーパーを書いた比企野の発表の後に、わざわざハーワード大学までいらして下さったフック氏が、氏が留学生受入れの面倒を見ているミラコスタ大学のケースについてお話し下さった。政府が留学生受入れ数を増やす政策を打ち出している日本と違い、世界の「留学生大

国」米国ではこの問題が政府の手を離れ、民間レベルに広く根付いていることを感じさせた。大学で積極的にPR活動を行ない、留学生の抱える問題を扱う独立した機関が大学内に存在し、専門のカウンセラーがおり、勉強の面だけではなく社会生活の面でも様々なサポートを提供する。何より、交流の場を設け地域住民との接触にも積極的であることが日本との違いであると感じた。米国でも日本と同様、人種偏見が存在することが指摘されていたが、一方それを是正しようとする動きがあることは日本の見習うべきところであろう。

#### ④中部テネシー日本人補習校

日本人補習校は日本人学校と違い、日本企業の海外駐在員の子弟が毎週土曜日、日本語能力維持と帰国後の受験に備えて日本の学校教育のレベルの維持を目標として設立されたものである。テネシー州に三校ある補習校のうちの一つである中部テネシー日本人補習校は、偶然にもテネシーでの滞在先である中部テネシー州立大学で持たれていた。教師は主婦であったり大学生であったりするが教科書は日本から送られてくるものを使い、各学級15名程が国語や算数を勉強していた。1年と6年の学級を見学した後、松本宗次郎校長にお話を伺い、日本に戻ってからの受験の苦勞や教師を集める苦勞等を聞き、教育方針などについて積極的な質疑応答があった。私たち日本人学生は海外に来てここまでやらねばならない程の日本の受験戦争の教育システム

を考える機会であったが、米国人学生にとっては全校揃っての朝礼やラジオ体操などの日本の学校教育のスタイルが珍しかったようであった。

#### ⑤全米教育委員会

全米教育委員会 (Education Commission of the States) は、米国では各州の州知事、政策決定者、教育関係者らの代表により成り立つ1965年発足の団体で、教育制度が州レベルで異なるが、州を越えて情報交換を行い、各種問題を討議することによって互いに参考にしあい、米国全体の教育の質の向上を図ろうということを目指した団体である。

コロラドスプリングスから車で1時間半程のデンバー市内にあるオフィスを訪ねた私たちを、全米レベルの会議が開催された直後であるにもかかわらず、10人近いスタッフの方々が話し合いに参加して下さった。団体の意義や活動内容はもちろんのこと、現在の米国教育界で問題となっている教育予算の問題（連邦政府からの補助金を各州内でどのように振りわけ、子供たちに均等な教育の機会を与えるということ）や、米国教育改革の1つの手段と目されている学校選択制度について専門的な立場を伺った。話はまた日米の教育制度の違いにまで至り、スタッフの方々からも逆に日本学生は多くの質問を受けた。様々な問題を抱える米国で教育に携わる人々が知恵を出し合い「より良い教育」を追求する姿が見られた。

### 「戦争をどう考えるか」

1992年は日本政府がその直接関与を認めるなど、従軍慰安婦問題が話題を呼んだ年でも

(割石 俊介)

あった。ペーパーでは、第二次世界大戦の際日本(軍)がアジアの近隣諸国で行ったとき

れる強姦・略奪・虐殺といった数々の残虐行為にスポットをあて、それら日本の歴史の恥部が学校教育の現場でどのように教えられているか具体例を挙げつつ検証した。総じて言えば日本は戦後終始一貫して「恥部教育」に不熱心な「臭い物にフタ」的態度、もしくは被害者の立場をとり続けており、その結果国民の正確な近隣諸国との関係史への理解を妨げ、未だ近隣諸国の不信感を払拭できずにいるという状況が明らかにされた。また、歴史教育における文部省、自民党文教部の「介入」ぶりも検証し、大統領自らが音頭を取り、積極的に「恥部」教育を行っている（西）ドイツとの比較検討も行った。

米国でも、州により教育内容に差があるも

の、ベトナム戦争などの恥部は子供には教育されていないらしい。「恥部を教えることは大切だが、愛国心の涵養という目的とのバランスをとることが難しいのではないか」「過去に行われた戦争において日本が（米国が）悪者だと指摘することはあまり意味がないのではないか」といった意見も出された。

歴史学習を「より良い未来を構築するための回顧作業」と定義づけるならば、安直な「被害者・加害者分類作業」になってもいけない。討論の最後には「この問題を一国の教育行政のありかたという問題ではなく、自分が将来自分の子供にどのように歴史を教えていくかという身近な問題としてとらえたい」という意見も聞かれた。

## 地球環境教育

(Andrew Seaborg)

地球環境問題。92年6月にブラジルで地球サミットが開催されたこともあって、世界の注目は「我々の母なる地球がいかに病んでいるか」ということに注がれた。日本でも地球環境問題は大きな話題となり、「地球にやさしい」が流行語とも言える様相を呈し、「ジース」 という名のビールまで登場したりした。

まず地球環境問題解決の為には教育が非常に重要であるとの認識に立ち、プレゼンテーションが行われた。「戦争の際は国の全ての資源、才能が最大限の実力を引き出すべく集約される。地球環境が危機に瀕している今、我々は地球を救うための新たな「戦争」に立ち上がるべきではないか」「世界に甚大な影響を及ぼす日米の二国が、その教育制度のそれぞれの長所―規律の正しさ、学習熱心さ、柔軟性、個人の積極性、進取の精神―を活かし、充実した環境教育を行うべきである」と

いった見解が披露された。

地球環境の問題は一夜にして解決可能なものではなく、「地球環境問題について討議する会議の為に膨大な量の文書が必要だ」と擲論されるように、我々の経済に内在化する構造であるために問題は極めて複雑である。

問題解決のためには（少なくとも程度の緩和のためには）いままでの成長神話経済を見直す必要にさえ迫られる。炭素税を巡る環境



庁と業界の軋轢なども従来路線見直しの際の不可避の「産みの苦しみ」なのだろう。「自由」経済にタガをはめるのは政治の役割であるが、日本でも米国でもその政治を担うのは国民である。その国民が正しく考える為には

教育の果たす役割はやはり大きい。討論でも意見が表出されたとおり、今こそ我々は「landを巡る闘争ではなく、landのための闘争」に粘り強く取り組まねばならないのだろう。

## 夢を失った時代に——理想を希望をどう教えるべきか

(福島 紀子)

物質主義的価値観は、人生の理想をお金で形づくることを促し、男女の役割の変化は家族の崩壊への一要素でもある。また、国外への過度の意識は都市問題など国内問題を放置する結果を招いた。そして今のアメリカが抱えるこれら全ての現実が生んだ最大の犠牲者は子供達である。彼らは愛情に飢え、社会的圧迫から自分の人生の方向づけもできずに暗

闇に置きざりにされている。大都市における退学や未婚の母は驚く程の数に達し、貧富の差はますます開き悪循環のくり返しである。

この状況の変革は、まず私達大人が一元的価値観を捨てることから始まる。抽象的なこの命題に対し、アメリカ側参加者からは特に興味深い意見が聞かれ、充実した議論となった。

## アメリカにおける教育改革への選択

(Todd W, House)

現在、アメリカの学校は、改善、という言葉ぬきに語ることはできない。その改革の具体案として、学校選択制 (School choice) が提案できる。実際にその選択の例として様々の可能な形を紹介したが、この方法を成功させるためには、各々の学校が自治権を持つこ

とが重要である。そしてそのためには、国ではなく、市場で競い合う営利団体に主導権をゆだねるべきだと考える。論文中、都市内部における公立学校の環境のひどさも紹介しており、一番身近なこれらの教育の現状はアメリカの現実をよくあらわしている。

## 教育と人権—校則のあるべき姿—

(増子 聡)

グローバル コミュニティー、地球共同体の構成員である我々一人一人に求められるもの、それは様々な文化や価値観の差異を認めそれを受け入れる柔軟性ではないか。国際化が叫ばれて久しく、日本の教育にも変革が求められている。しかし多くの学校教育の場では、個性を尊重することよりも、画一化を目指していると思われる様な校則が存在し、ま

たその存在に疑問をはさまない傾向がある。

画一化が進むということは、「同じ」であることを評価し「異なる」ものを排除する思考につながるのではないか。

学校という「社会」の中に規則、つまり校則は必要であるが、問題はそのあり方にある、という見地から、自らの体験も考えに入れ、校則の制定と実施のためのガイドラインとし

て次の様なものを考えた。

①校則は必要最小限に。校則は生徒の権利または親の教育権を犯すものであってはならない。

②校則は生徒、保護者、教師の話合いにより制定され、改定されるべきであり、生徒は入学前に学校からその内容を十分知らされるべきである。

③各規定の存在理由が明確にされるべきである。校則があるからそれに従うのではなく、従うべき合理的理由を明確にするべきだ。

ディスカッションでは日本側参加者がそれぞれの学校での校則を発表、アメリカ側参加

者を驚かせた。また校則がほとんど存在しない上に学校の荒廃が問題になっているアメリカの学校に、対策として校則を導入するべきだと思いか、という日本側参加者の問いに、アメリカ側参加者は学校の秩序回復は家庭教育の充実、教師の待遇向上等、別の手段で実現させるべきだ、と答えた。

校則という存在が日本の文化や社会に合ったものであるということを感じると共に、文化、社会の変化に対応して校則も変わるべきではないか、というのがディスカッション後の感想である。

## 体験学習—教室外での教育—

(Corinne Maekawa)

「教育を受けた」とはどういうことを指すのであろうか？

Corinneのペーパーはそんな素朴な問いかけから始っている。例えばこういうことだ。有名四年制大学を優秀な成績で卒業した人物と、大学にこそ行かなかったものの長年職場で経験を積み、世界中を旅し、たくさんの人と知り合い、自分の経験を本にまとめることができる程の人物がいる。後者もやはり、前者の様に「素晴らしい教育」をいけているとは言えないだろうか？

大学でのクラブ活動や寮生活を通して、教室では学ぶことのできない、それでいて社会に出てから最も求められるもの—リーダーシップ—を身に付けたCorinneは、教室外での教育の重要性を訴える。学問的探求に専念することのみが求められる大学と、様々な経験を

要求する実社会。このギャップを埋めるものは何であろうか。それは学問以外に教室の外で体験する様々な活動—学生自治会、ボランティア活動、スポーツクラブ等—であることコリーは指摘している。学問のみでは実社会での成功はおぼつかないし、体験だけでは、その体験の本当の重要性をとらえることはできない。二つは互いにその意義を深め合う関係にあり、さらに必要なのは二つのバランスである。

ディスカッションではCorinne自身を始め各自がそれぞれの経験を語り、それらがどう現在に影響しているかを話し合った。クラブ活動、転校、環境教育の助手、ボランティア活動等がそれぞれの人生をいかに豊かにしているか、ディスカッションによりCorinneのペーパーの内容はより深められた。



## 日本の大学の外国人留学生

(比企野慶子)

1983年中曾根内閣が「留学生10万人受け入れ計画」を発表してから10年が経とうとしているが、私の学校である慶応義塾大学を例にとり、国際化に取り組む各大学レベルが抱える問題を検証した。慶応は国際センターが留学生関連の事務を行なうが、そこで調査したカリキュラム、カウンセリング制度等がどう機能しているかを調べるため、実際に3人の留学生にインタビューを行ない、制度と現実の双方を見比べてみた。そこから分かったことは、留学生受け入れ初期を過ぎた現在、受け入れをより充実させるための留学生側の視

点を取り入れた改革の必要性という大学が取り組むべき問題と、留学生を受け入れる日本国民の意識変革の必要性という日本社会の問題の二つであった。そして、留学生が日本から何かを学ぶと同時に、受け入れる側も「違うもの」と触れることで多くを学んでいるという認識の必要性を説いた。

以上の発表の後、ミラコスタ大学国際センター所長のフック氏から今後はアメリカの大学の例を伺い、留学生受け入れに対する日米の相違、日本社会に依然として存在するアジア人蔑視の風潮などについて話し合った。

## ローパースクールでの英才教育の体験から

(Jennifer Burns)

彼女は自らが中学までの7年間を過ごしたローパー英才学校での非常にユニークな経験と、そこで受けた教育の理想とその問題点を述べ、教育とは何かを考えさせるレポートを行なった。ローパースクールは、どんな人間も社会の中での役割というものがあり、その役割は互いに依存しあっているという「自己実現と相互依存」の哲学のもと、子供達に生命の教育をする。読み、書き、計算はもちろんのこと、アイデアを出し合い、物事を決定し、それを実現させていく能力を養うことまでを訓練していく。その過程でコミュニケーション能力や他の尊重と言うことを身に付けていくのである。そしてまた、子供達に多くの自由を与えることで各自の得意な分野を伸ばし、育てていくことも目標としている。このような「個」を尊重した教育を行っていたローパースクールであるが、彼女はその素

晴らしい点も認めた上で、授業料が非常に高いこと、IQの高い子供しか受け入れないことから、この学校が現実の社会とは掛け離れた狭い世界でしかないことを指摘する。そして人間の平等を教えるこの学校をでた後の子供達が階層社会にうまく適応できない例を挙げ、教育とはどうあるべきか疑問を投げかけた。

続くディスカッションでは、能力のある子供にもそれを伸ばす権利があること、しかしその能力イコール学力と考えると子供達に優劣を付けることにもなりかねないことなど、「英才教育」自体について考えた。ディスカッションを通して、どんな子供も自己を尊重できるような教育環境が必要であること、つまり多様性を容認できる社会が重要であるということを思わずにはいられなかった。

## 現代政治のダイナミクス

### 総 括

本分科会では、政治と我々の関わりを考えることを目的として、ディスカッション、フィールドトリップを行なった。分科会の性質上、フィールドトリップがワシントンに集中し、全体的に見てもかなりのハードスケジュールになってしまった感は否めない。

7月30日には、ハンク・クインズィー氏の案内で連邦最高裁判所を見学し、その歴史について説明を頂き、連邦議会を見学し下院議事を少し傍聴した後、午後には共和党下院議員であるクレーン氏を訪問し話を伺った。翌31日には、連邦選挙委員会を訪問した。ここは、大統領選挙を含む米国の連邦レベルの選挙資金に関するすべての情報が管理されている機関で、すべての情報が、すべての人に公開されているという。(もっとも、ほとんどの人がその事を知らないともいっていたが。)このあたり、非常にタイムリーであり、また

(佐野日出之)

日本と比較するうえでも非常に興味深かった。引き続いて、午後には2名の政治学者に日米両国の政治についてレクチャーを受けた。そして8月4日には、国際人権グループという主に途上国での人権抑圧を監視しているNGO団体を訪問し、5日には民主党の有力議員であるハワイ州選出Daniel Inouye議員を訪れた。いずれも、貴重な経験でありこのすべてを用意してくれた米国側実行委員Hamanoに感謝したい。

さて、こうした素晴らしいフィールドトリップの一方で、我々の議論もそれにふさわしい物であったかどうかは、果たして疑わしい。これに関しては、実行委員として責任を痛感している。限られた時間のなかで、どの程度満足のいく議論ができたか、各参加者はそれぞれがそれぞれの答えを持っていることであろう。つとまらぬコーディネーターであった



(上段左より) Thomas Wrobel, 市川 裕康, 工藤 博海, 佐野日出之  
(下段左より) Maeleen Hamano, 高橋 直子, Sayaka Yakushiji, Lisa Copeland

にもかかわらず付き合ってくれたテーブルのメンバーには、この場を借りてお礼を言いたい。一つの結論が出るまもなくまとまらずに

終わってしまった感があるが、僕自身楽しんだのも事実である。この経験を、各々が今後の人生に活かしていければ幸いである。

## 政治に関する一考察

(佐野日出之)

政治学の最も古典的な問いの一つに、徳治政治と民主政治のどちらが優れているのか、というものがある。現代社会において、『民主主義』は金科玉条とされているが、問題も少なくない。日本あるいは米国においても、民主主義が完全に実現されているかどうかは検討を要する。

旧社会主義圏においてようやく行われるようになった民主選挙では、有権者の多く、殆んどが投票所へ足を運んだ。一方、日本では戦後、投票率は低落傾向にあり、先の総選挙では三分の二を下回り、補欠選挙ともなれば三割台となることさえあるのは、いささか皮肉なものである。米国も同様で、88年の大統領選挙では有権者の半数近くは投票をしていない。開明化された個人の存在を前提とする民主主義の危機だとも言えよう。先進資本主義国に住む我々は、民主主義にもはや満足しなくなったのか。

資本主義国に住む我々は、溢れんばかりの物質に囲まれ、常に購買欲が満たされない、一種の中毒状態に陥っている。こうした状態は、資本主義社会の当然の帰結である。消費を増やすことが生活の改善である、という信仰が完全に根付いてしまっているのである。日本の議員の主な役割は、戦後一貫して選挙区への利益誘導にあったと言ってよい。このため、票を獲るために過剰な地域サービスを約束するという構造が生まれ、このサービスの消費者である選挙民はまたも欲求不満とな

るのである。この欲求不満はさらなる追加サービス以外によっては解消され得ず、人はそれを期待できないとなれば、投票にさえ行かなくなるのである。

社会が発達するにつれ、その複雑さも増してくる。税体系一つを取っても、非常に複雑で、全体像を把握しようとするれば相当量の知識が必要である。現代社会の特徴である分業化は、専門家と一般人の距離を広げつつあり、技術的な問題だとはいえ、政治的無関心の遠因になっていると言えよう。全ての人が、全ての分野において専門家になることは不可能であり、この複雑性はますます人を政治から遠ざけてしまっている。

この意味において、民主主義というのは一つの幻想であり、実際には官僚による寡頭政治といった方が適切かもしれない。実際法案の殆んどは官僚によって作られ、国民は国会を通じて間接的にそれを承認しているに過ぎない。しかも、選挙においては多くの争点があるにもかかわらず、一つの政党（日本においては党議の拘束が強く個人を選んでいるとは言えない）を選ぶという極めて不自由な方法によってである。この中で、満足できる選択を行える人は、そう多くないであろう。こうしたことから、もはや人々は自分の一票が政治を動かすなどと、とても考えていない。

今後こうした点を改善するためには、大胆な地方分権化が必要だろう。住民によるイニシアチブが中心となるべきであり、長期的に

は職業政治家は廃止されるべきである。また同時に民主主義とは、まさに人がいて初めてそれが成り立つのだということを改めて認識しなければならない。民主主義は、個人に相当の責任を課しているのである。ヒトラーが

民主選挙によって合法的に選ばれたことを忘れてはなるまい。民主主義というものが存在するなら、それはシステムによってではなく、それを動かす人間によって成り立つものなのである。

## The Price of Cosumption

### Japanese Consumers Debate High Prices

(Maeleen Hamano)

戦後日本人は貯蓄と投資を奨励され、米国の4倍もの、可処分所得の20%を貯蓄してきた。この他に類を見ない高貯蓄のおかげで、日本はGNPの3分の1以上を投資に回し経済発展を成し遂げたのである。しかし、世界第二の経済大国となった今も、多くの日本人は豊かさを実感していないでいる。内外価格差、貧弱なインフラ、暴騰した地価、長い労働時間。日本には商品が溢れているが、物価は他国の2、3倍もしている。

戦後長い間一貫して政権の座にある自民党は財界、農民、中小小売業者、大企業の利益を代表している。自民党は財界から財政的支援を受け、農民、商人から票をもらい、彼らを保護している。日本の選挙区の定数配分は著しく農村部分に偏っているため、農民の影響力は大きい。このため、自民党はコメの自由化に反対している。また、通産省を中心に政府は産業界を育成、保護することに努めてきた。政府は消費よりも生産を重視してきたのである。また、中小自営業者の利益を守るため、大規模小売店法が制定されており、より安い価格で商品を提供するスーパーマーケットなどの進出を阻んでいる。一方で、消費者は特定の強力な圧力団体を持たず、自分達の声を政治に生かすことができない。

日本の小売価格は、米国と比べて48%も高い。日本の流通機構は多数の小売業者からで

きている。自営業は全労働力の29%を占め、その殆んどが4人以下の小規模なものである。小売業者は、90日たって売れなかった商品は返品できるので、在庫過剰を心配する必要がない。入荷したうちの70%が売れば良く、売れ残りを処理する費用は全て価格に転嫁されている。そして、この数多くの小売業者と製造業者を結ぶために、複雑に系列化された卸売業者が存在する。輸出(された日本)製品はこの複雑なシステムを通らずに済むため、日本でより安く売られている。また、日本人は安いスーパーマーケットよりも、昔からつきあいのある地元の商店を好んでいるのである。

こうした流通システムは非効率で、価格を必要以上に上げているが、日本の消費者は、自民党が今の政策を変えようとは考えず、また改革によって失業が増えるのではないかと危惧するのである。

1985年からの円高によっても、輸入品の価格は一向に下がっていない。自由貿易には、物理的、心理的な障壁が未だに存在している。

だが、事態は少しずつ動き始めている様だ。

日本政府も貿易黒字削減を目指し重い腰を上げ始めた。日米構造協議など含め、いわゆる外圧によって、いくつかの貿易障壁も取りはられようとしている。

また、日本人の消費者も動き始めた。消費

税を導入しようとした自民党は、世論の猛反発により参議院で過半数を失った。米国の玩具メーカー、トイザラスも、遂に日本進出を果たした。

しかし、今後日本の政治がこれにどう対応していくのか、日本の消費者がそれにどう応えていくのか。それらの問いに、まだ答えは出ていない様である。

## 暴力装置使用の正当性

多様な人間が集まった時、そこには異なった考え方や利益が必然的に生まれるわけだが、そこから生じる問題を解決する際に、多くの場合、権力と呼ばれる強制的な手段が行使され、人間の尊厳が否定されることがある。そこで彼女は政治の世界において、そのような権力がいかに、どのような目的を持って使われるかを、マルクス、ウェーバー、ミルズなどの古今の思想家の述べていることを分析しながら、暴力的手段が正しい目的のために使われているかどうかはだれも保証ができないものだから、武力とその使用の宿命について考察をすることは、我々市民の責任であると結論づけた。湾岸戦争、ロドニー・キング裁

(Sayaka Yakushiji)

判なども引き合いに出されながらのペーパーで非常に興味あるトピックであったが、時間の都合で議論が十分にできなかったことが悔やまれる。



## アメリカに於ける人種問題を考える

永いあいだ問題とされている人種問題を、特に今回はアメリカで会議が行われること、ロス暴動の発生などもあったので、アメリカの抱える人種問題についてペーパーを書いた。アメリカ人が真のアメリカ人になるにはどうすればよいのか。また、民主主義社会の中で文化多様主義的な社会をどのようにしたら保っていくことができるか。というような問題提起から、メルティング・ポット理論、サラダ・ボウル理論など、過去の移民パターンを眺め

(市川 裕康)

た後、個々の民族が共通して追い求めることができ、またそれによって調和がもたらされるような人類共通の敵（例えば環境問題）に対するような形での統合・共存がなされる希望を述べた。議論は、実際の黒人問題などを体で感じた事が少ない日本側からアメリカ側に質問をぶつけるといった形で行なわれ、改めて人種問題の持つ複雑さを考えさせられる機会となった。

## 「政治へのアクセス」

(高橋 直子)

私は政治社会を構成する個人個人がいかにかして「政治」の場に参加していくかをテーマに、アメリカ政治史を検証しながらその解明に臨んだ。

第一部では、三権分立によるアメリカ政治システムの特徴から「権力」の所在について考察を試みた。

建国期以来の大統領の執行権の重要性は指摘できるが、アメリカ政治は執行部と立法部との緊張関係・協調関係で成り立っていることは着目に値する。その均衡を保つ司法部の権限がアメリカ政治では優位にあるという学説を基に、アメリカ型立憲主義、リーガリズムのイデオロギーについて分析を行ってみた。

その結果、独立戦争時に培われた「人民の権力」という概念を導き出し、アメリカ政治の権力の根幹は「人民」にあるのではないか、という論理に達した。しかし、第二次世界大戦後の高度先端技術の発達、大量消費型文化の到来の中、「権力」は一部のエリートによっ

て掌握されてしまったことは否定できない。

それを背景に、第二部では一九六〇年代の各草の根運動を通じて、戦後の大衆管理社会にも「人民の権力」が死滅していなかったことを示した。その一例としてラルフ・ネイダーの消費者運動を挙げた。彼の報告書『内部告発の倫理』では、企業と政府という官僚組織の内部において、公然と個人の信念を貫くことのできる内部告発の倫理を育てる必要がある、と提言しているという。

私は、彼の示した哲学と倫理がアメリカ国民に再び「人民の権力」について再考させる契機になったであろうと論じ、「人民の権力」を信じる個人の勇気が政治へのアクセスの源であるのではないかとまとめた。

その後の討論では、実際の現実政治ではいかに市民の政治意識が低いか、市民が政治参加に無力感を抱いているか、日米両側から同じような意見が交わされ、その前途策を暗中模索した。

## 「1992年選挙—財力の年—」

(Thomas Wrobel)

Thomasは今日繰り広げられているアメリカ大統領選挙の動向について、何が焦点となっているかを分析しながら、各候補者の政策案とその信憑性について論じた。

まず、選挙の焦点を合衆国経済の現状にあててみる。合衆国経済は、第二次大戦を契機に繁栄を遂げたものの、国際市場経済の競争の中でその趨勢に陰りを見せる。さらに、冷戦のための外交政策が国内産業・経済に影響を与え、軍事費の増強は1980年代の赤字予算

を絶対化した。多国籍企業の進展、自由貿易の奨励などによる「グローバル経済」への変遷は、アメリカ国内の労働コストを海外との競争にさらすこととなり、これも国内産業を弱体化させた一因となった。

合衆国の将来の健全な経済の回復のためにも、債務と赤字予算の解決にあるが、その件に関してブッシュよりもクリントンがより積極的な姿勢を示していると指摘する。税に関しては、両候補者とも中産階級の減税を確約

する。投資、研究・開発については「国民第一」と謳うクリントン案が長期的な展望をもち合衆国産業を活性化させるだろうとの見通しである。貿易については、自由貿易を前提に教育改革と勤労奨励を推進しながらの、アメリカ自由競争の重要性を説くクリントン、ペロー両氏の案を支持している。

結論では、クリントンの政策案が財政案に具体性を欠くものの、企業と労働者間の均衡を保ち、福祉への貢献、国内経済の活性化の

火つけになるだろう、と予測した。最後に、まだ打ち出されていない財政案こそが、短期による経済成長に拍車をかけ、長期投資を生み出す鍵となることを知るのもクリントン候補であることを見逃すことはできないとした。

分科会時点では、ペローが出馬を辞退していたので、討論の焦点は二者の政策案の比較的が絞られた。Thomasからの最新情報を基に各人が選挙戦の行方について熱く語った。

## ～望まれる政治システムとは～

(工藤 博海)

今日のように経済がグローバル化され、社会もボーダレスになってくると、国際関係における利害もゼロ・サム的に単純化できないはずである。

しかし日本はその特質故に“異質”とされて、他の先進国と呼ばれる国々との拠って立つ土俵の違いが強調されることがある。

ここでは、そうした理由の一つに日本政治における意志決定過程の不透明さを挙げ、自民党研究と併せ論議した。

戦後日本の政治システムを支えてきた政・財・官による三位一体構造が、政権の年功序列人事と共に族議員や派閥を生み、自民党はその組織管理者としての役割を果たすべく国会審議を形骸化させ政務調査会のミニ国会化を定着させてきた。

こうした中央政権的なシステムが現在、様々な問題をはらんできている。必要悪的な政治資金の増大と既得権益の維持強化がその典型

的な例であろう。

議論もここに集中し、儀礼化・制度化された政治過程・日本型政治システムの現状が主に問題とされていたように思う。

だが考えてみれば、政局の激動化と現政治勢力が苦境に立たされていることはかなりの国にあてはまるといえないだろうか。

現在、我々が享受している政治・経済のシステムは、常にサプライサイドの論理で動いてきた。折からの不況はケインズの改革の挫折という構造的な要因を持ち合わせてはいないだろうか。また経済的な豊かさは同時に政治的無関心を助長してはいないか。

JASCが終わって、政治改革・政界再編論かまびすしい日本に帰ってきてからも、消費がゴールで終わってしまう経済のしくみや、民意と政治との乖離を考えるにつけ、生活者優先の新しいシステムをいかに構築すべきかが求められているように思えてならない。

## 中南米諸国がなぜ社会主義化するのか

「ラテンアメリカの民衆はずっと支配されてきたこと、そして彼らに与えられてきた民主主義は我々のものとは別のものであった、これがこの論文の全てよ。」

ヴァンダービルトのカフェテリアで、プリンストン大2年のLisaは話しはじめた。

この日の分科会は、ラテンアメリカの歴史・現状を足がかりにして、人権が守られるという意味での民主主義政体に、いかにして普遍的な価値を付与し、世界に展開させてゆくことができるのかについて話し合うまでに議論が進展した。

1960年代より唱えられてきている従属論にみられるように、第三世界の政治経済的低迷の原因は国際社会の構造的な暴力にあるという。Lisaが例示したウルグアイやチリ、ニカラグアで“人間が人間として扱われる”ために社会主義化するという背景にはやはり世界システムの中心一周辺構造がある。

民主主義の問題として討論されたのは選挙制度についてであった。現在のように社会が複雑になり直接民主政が不可能になると、い

(Lisa Copeland)

かに効率よく民意を政治に反映させるかが不可避の問題として浮上してくる。

票のための政治が逆に、市民意識としての世論に悪影響を与えている現状が話し合われた。冷戦に勝利したといわれる西側の政治・経済システムを過大評価すべきでないとの意見も出た。

デモクラシーはポスト近代を切り開くパラダイムのキーワードとして意識されなければならない。我々が享受している生活を、いかに世界に敷衍してゆけるのか、その責は我々に課せられているのである。



## 法と変わりゆく社会

### 総括

分科会「法と変わりゆく社会」では、広く社会一般にテーマを求め特に細かい法律の条文など専門的な法律学にあえて立ち入らなかった。むしろ社会と法律の接点、人間同士の確執などに焦点をあて、学生の専門にはこだわらず、様々な視点から論議を深めていった。

(白石 史朗)

法は普遍の真理と原則をあらわし、不変でなくてはならない。しかしそれと同時に、ますます複雑化し激動する社会に十分合致したものでなくてはならない。新しい事象に対し現行法をどう適用していくのか。拡大解釈か、改定か、廃棄か。またそれ以前に社会はどう



あるべきなのか。自然、議論は時として個人の価値観や文化、歴史、宗教、主義などにおよんだ。また学生の論題も多岐にわたった。アメリカ社会のモラルの変質、アメリカと日本の社会構造の違い、南アフリカ共和国の人権問題、死刑の是非、臓器移植に伴う脳死に関する法律案、夫婦別姓、GATTのウルグアイラウンドについてなどが発表された。なかでも死刑の是非についての発表では、賛成派と反対派に分科会が真っ二つに分かれ激しい議論の応酬となり、刑法そのものの意義や犯罪心理学的観点からの意見などもたびたび印象深いものとなった。また夫婦別姓では、女性の権利を十分認めない古いイメージがあるのか日本側男子学生が特に質問せめにあう一幕もあった。しかし習慣と伝統を重んじる比較的保守的なアメリカ側女子学生があらわれて事態はようやく収拾へむかった。

実地研修では最高裁判所内特別見学、二人の議員訪問、スミソニアン博物館「第二次世界大戦中の日系人強制収容所展」見学、空軍士官学校見学などをおこなった。最高裁判所見学では、特別のはからいで一般には非公開の部屋まで見学する幸運をえた。また議員訪問では、「日本に行くとは東洋の穏やかさで自然と合掌したくなる」などと言って学生を仰天させる共和党下院議員に会った。いずれも貴重な経験であり忘れ難いものとなった。

この分科会での各人の専門にこだわらない自由な視点と発想は、かえって現実の社会の複雑さを浮き彫りにし、新たに多くの知的関心を生むきっかけとなった。これは学生にとってさらに勉強を深める動機となり、いろいろな社会事象を法律に照らし合わせて考察する方法を確立するのに成功した。



(左より) 竹井 亮一, Jeffrey Bennett, 坂田亜也子, 白石 史朗,  
Kathleen Coble, Laurie Cooper, 磯部 聡子

## 臓器移植に関する法案

---

早稲田大学で経済学を学ぶ白石は、医学の進歩に伴う法律問題をテーマに、臓器移植と脳死についての現行法に代わる法律案の作成を試みた。脳死を人間の死と定義する世界の趨勢は脳死患者からの臓器摘出を可能にし、さまざまな難病を克服している。論議の末だ熟さない日本は、心臓停止、呼吸停止、瞳孔拡散の徴候を死と定義し、脳死患者からの臓器摘出を認めていない。これが故に世界一流の医療水準にある日本において、治療可能な患者を死亡させる結果になったり、海外から臓器を輸入したり、患者が海外で移植手術を受けたりするケースが頻繁になってしまった。裕福な患者のみ治療が受けられるこの状況は法によって是正されるべきであり、そこで、臓器移植はそれが必要な患者には施されるべきであり、脳死を死の定義と認める方向での

## スティーブン・ビコー—その生涯と死

---

ウェストバージニア大学Jeffreyは南アフリカ共和国の黒人人権運動家、スティーブン・ビコーの生涯とその悲劇的な死を通して南アフリカの人種隔離制度、アパルトヘイトについて説明した。スティーブン・ビコーは1946年南アフリカのジェームズタウンに生まれた。少年時代の彼はあまり政治的活動に関心が無かったが、大学を卒業した1966年ナタール医大に入学してから急速に人権運動に接近していった。当時最も辛らつだと言われた南アフリカ全国学生連盟に所属していた彼は、やがてさらに行動的で民衆への啓蒙活動も行う南アフリカ学生機構を彼自身創設し、初代の議

(白石 史朗)

法案を作成した。しかし同時に、心臓が動いているうちは人は生きていると考える日本の文化的背景や、医学的に統一を欠く脳死の判断基準の問題点にも配慮し、死の定義は脳死と三徴候のどちらかを本人が生前に選択する方法をとった。また一般の人には脳死がわかりにくく医師による判定となるため、死のブラックボックス化を招く恐れがある点については、患者の脳死判定は担当医以外の第三者の医師によるものとし、臓器摘出の可否は本人の意志以外違法とさだめた。分科会では脳死状態から人の死の及ぼす法律上の問題、脳死判定の難しさなどにわたりまず説明され、次いで、自分は臓器提供するか、自分の死を自分で確定する権利を我々は有するか、延いては安楽死、尊厳死を認めるかどうかなどにわたって議論された。

(Jeffrey Bennett)

長に就任した。当時永い白人支配の下で洗脳された黒人民衆は支配されることに慣れ、黒人が国家の政治、経済、行政に関わることなど考えなくなっていた。ビコーは演説集会、出版などを通じて積極的に白人支配や人種隔離政策などを社会に問うていったが、政府による妨害も激しさを増し、四回の逮捕拘留の後、1977年8月18日、ポートエリザベス市の近郊で彼はその生涯最後となる逮捕拘留を受け、死亡した。彼は逮捕後26日間も裸で牢に鎖でつながれ、意識不明のままプレトリア市の刑務所まで760マイルも護送されたが、到着した時は既に死亡していた。事件後に開か

れた調査委員会では、なぜ26日間も裸のまま牢に鎖でつながれたか、またなぜ760マイルも護送されたのか、そして死因は何なのか、これらの点が全く解明されずに終わった。スティーン・ビコーの生涯についてJeffreyは次のように論評した。

ビコーの業績は黒人の人種的意識を高めたことであり、その活動から死に至るまでの全てが黒人の人権運動のシンボリック的存在となっ

て世界中に影響を及ぼしたことである。彼の死が謎に満ちていて常に疑問視されるからこそ15年経った現在でも大きな意味がある。

これを受けて議論はロサンゼルス暴動に移り、未だ解決されないアメリカの黒人問題について社会福祉、教育、経済などの様々な観点から活発な意見が交わされた。人種問題については日本側はよく勉強してあっても感覚的に疎く、教えられることが多かった。

## GATT体制はどうあるべきか

(竹井 亮一)

近年経済上のグローバル化・ボーダレス化が進み、それを支えてきたGATT体制にも変化が見られるようになってきた。殊にIMF体制が崩れ、価値が多元化していく中で、或いはケネディ・東京ラウンド迄の工業製品の関税障壁排除の一応の成功の中で、次なる課題にいかに対処していくのか、或いはそもそも次なるステップに進むべきなのか、ということが争点として浮き彫りにされてきたのである。

非関税障壁の撤廃、知的所有権問題の解決、農業交渉の成功を目指して各国が行動する中で、本来GATT体制が予定していたワクを超える問題への着手が迫られ、体制内に矛盾が生じてきているのである。現在に至るまでのGATTに於ける交渉の成果が十分に評価に値するものであるだけに、今後の在り方を検討する必要がある。

GATTは1つの法体系であり、法実現の体系である。しかし、現在の国際社会に於ては、国内に於けるような法の強制執行体系は十分に発展しているとは言えず、合意の枠内での各国の自主的判断に委ねられる。

しかし、扱う対象が、代替性の高い工業製品等から、農産物・知的所有権など、代替を

妨げる要素の大きいものに広がるに至り問題が生じたのである。

私見として、ここでは法体制としてのGATTを見直すべきと考える。これまでのGATTでの成果は当面このまま残しておいて、今後は、2国間交渉の舞台としてあるべきではないだろうか。農業や知的所有権、非関税障壁といった問題は2国間交渉に於ける地道な努力を積み重ね、ICJ判例も集積した、成熟した段階で多国間交渉或いは法的体制に切り換えないと、システム自体の信頼を低下させることになるように思われる。

また一方で、別のアプローチの重要性も指摘できる。

そもそもGATTは、IMF体制と共に、経済に於ける均質化を世界的にはかろうとする、戦後の平和を希求する思想から生まれた。しかし、このような条件もしくは内容の均質化は、文明的物質については可能といえども不可能な場面・分野も少ないからである。両者も分けようとせず同時に地球レベルでの均一化をはかろうとするのは、平和に資するどころか、かえってナショナリズム、リージョナリズムという形で反動となって現れる。

GATTの理想の根幹にある、「経済関係の好化による平和の推進」を実現する為、今何ができて何ができず、何をすべきで何をすべきでないかを慎重に見極めながら、人的交流殊に国際的「共同作業」の増進により、次なる世界像を探求していくべきであろう。

— 以上、発表の要旨を以って報告とする。



## 自分の名前を使いつづける権利

磯部は、「自分の名前とは自分にとって、一体何を意味するのか、読む人それぞれが考え直す機会にしてほしい。」と前置きした上で、日本における夫婦別姓問題についてのレポートを行った。

レポートではまず、結婚に際して女性に名前を変えることを強要する法律が存在しないにもかかわらず、ほとんど（約97%）の女性が夫の姓に変えるという現在の日本の状況を、歴史的に「家制度」と国家の「法律」が結びつき、さらに「習慣」へと変わった過程をふまえて、意識調査の結果や、磯部自身のまわりの友人の例などをまじえて説明している。さらに諸外国の姓に関する法律や、「家名保存」「男女平等」という相対する立場から起きている日本での法改正への動きを紹介した上で、現在の日本の結婚改姓に関する法律が不十分であること、また法改正はすべての人が、改

(磯部 聡子)

姓、あるいは非改姓を結婚に際して選べるようになるのみならず、非嫡出子などに対する差別なども生み出している戸籍制度をも見直す形で行われるべきであると主張する。

ディスカッションにおいては、それぞれの結婚観や家族観に基づいた素直な意見の交換が行われ、日・米間、あるいは男・女間、そして個人個人での考え方の違いが、それぞれのバックグラウンドの違いと共に、はっきりと浮き彫りにされ、竹井の「家名保存」を重んじる考え方が興味の対象になったり、女性は特に自分の問題として直面しているためか、坂田からは「自分が結婚するまでに法律が変わるのを望む」という素直な意見も出されたりした。また、「何をもって結婚は成立するのか」という疑問も持ち出され、ディスカッションは、名前の問題にとどまらず、様々なことについて話された。

## ヒエラルキーの中の柔軟性

西洋の考え方では、「ヒエラルキー」と「柔軟性」というものはお互いに相反するも

(Kathie Coble)

のとされている。しかし、Kathieは彼女のペーパーの中で、縦の階層的な社会を動かす

のは、見えないところに存在する横の柔軟性ではないかと主張している。

そこで、まずはじめに日本社会を例にとりあげ、Chie Nakaneの「日本社会に縦型の社会である」という主張と、対してEshun Hamaguchiによって、示された、より柔軟な日本社会のモデルを紹介し、この二つを使いながら、日本社会には縦のヒエラルキーと横の柔軟性が同時に存在するとし、ヒエラルキーの要素が「表」の社会を支配し、柔軟な要素が「裏」の社会を支配するとしている。また、これを裏づけるために、様々な研究者による

著書をあげ、それらを紹介しながら、日本の社会における「表」と「裏」また家庭における柔軟性を例として示した。さらに、日本社会と同様に縦型社会であるとされるアメリカの軍隊の社会を日本社会と比較し、やはりこの社会もまた見えないところにある柔軟性によって動いているとしている。

ディスカッションでは、日本社会とアメリカの軍隊の社会における「裏」の柔軟性の具体的な例が、その両方の国で生活した経験を持つCobleによって、数多く示された。

## アメリカ社会の道徳的変容

アメリカという大国のパワーが縮小しつつあると言われ出して久しい。書店に行けば、その手のことを論じた本を数多く見つけることができる。Laurieはその1つであるArt Careyの『The United States of Incompetence』という本をもとに、アメリカの社会変化について論じた。

ペーパーではまず、ペーパーのトピックをさがすために訪れた地域の図書館と書店で彼女自身のうけた不親切な対応から、このトピックをとり上げるに至った過程を述べている。そして、Careyの本の中に出てくる様々な“*Incompetence*”（彼女は この言葉を「やる気のなさ、やるべきことをわざとしないこと」と解釈している）の例を紹介しながら、アメリカ人の仕事に対するプライドの喪失がアメリカの社会変化だとし、さらに現代のアメリカ社会におけるモラルの低下、家族の解体、

(Laurie Cooper)

教育の質の低下などが、その変化に拍車をかけているとしている。そして、そのモラルの低下は、「明日」のためよりも「今、ここで」という自己中心的な生活を多くの人がおくるようになったこと、麻薬乱用等の社会問題、テレビ番組の変化などに見られるとしている。

ディスカッションは、特にアメリカの社会変化、家族の解体の問題を中心に、果たして実際にアメリカ人のモラルは低下しているのかということ等をアメリカ人参加者の個人的体験をもおりませつつ行われた。それぞれのバックグラウンドをもとにつくられた家族に対する価値観の違いなどが浮き彫りになったディスカッションとなった。また、両親の離婚を経験したクーパーの「自分は絶対に離婚しない、と思う人が見つかるまで結婚しない」という言葉が非常に印象的なものとして残った。

## 死刑制度の是非

私のプレゼンテーションは、我々のテネシーでの宿泊先のミドルテネシー州立大学のそばの、大変美しいキャンパスを有するヴァンダービルト大学のカフェテリアで行われた。

テーマは「死刑制度の是非」である。20年前の浅間山荘の事件で死刑宣告を受けた坂口弘の短歌につよい感銘を受け、また、大学で刑法を学んでいることから私はこのテーマを選んだのであった。私は死刑制度反対の立場から、プレゼンテーションを行った。「刑罰とはあくまでも制裁では無く、その個人に、もしくは社会に、何等かのよい影響を及ぼすためのものでなくてはならない。しかし、死刑にはそうした機能は全く無い、」というのが私の主張であった。また、死刑には恣意性、ヒューマニズムといった、様々な問題を含んでいる。文化的背景や国家の仕組みが異なっている以上、刑罰に国によって違いがあるのはやむをえないことではあるが、死刑、という時間刑ではない、取り返しのつかない絶対的な刑罰である場合、それは許されないのではないか。

ところが、私以外のテーブルメンバーは全員、死刑存続に賛成であった。とくにアメリカ

(坂田亜也子)

カ側参加者はそれを強く主張していた。アメリカでは死刑執行件数も日本よりずっと多く、また死刑を宣告された人々が、雑誌やTVのインタビューに応じることもよくある。そうした事ゆえ、死刑制度は無くし得ないものとして、アメリカ人に認識されてしまっているのだろうか。しかし、アムネスティ・インターナショナルなどの活動も日本とは比べ物にならないほど活発なはずである。

「では、どんな凶悪な犯罪が起きたとしても、死刑にされるべきではないのか。」という質問をきっかけに話は日米両国のそうした事件の報告に飛んでしまい、いろいろとショッキングな話も聞かれた。中でも、私が最も衝撃を受けたのは、アメリカでは、凶悪事件の犯罪者のカードが(まるでバスケットボールのスタープレイヤーのそれのように)子供達の間で売られているという。そうした行為は、犯罪の根本的解決から、社会的関心を最も遠くにそらせてしまうものである。

惜しむらくは時間の足りなかった事であるが、同世代の学生の、犯罪というものに対する様々な意見を知ることのできた、有意義な一時であった。

## 芸術創造

### 総括

学生会議でなぜ芸術創造なのか？

この分科会の名は“The Performing Arts”であり、これは普通舞台活動に限って使われる表現である。が、準備を重ねるうちに

(長野 宇能)

参加者の中では、Artsにより焦点が当てられていった。

人間の感情・思想の表現形態としての芸術を見ることは、芸術そのものだけでなく、時

にそれが作り出された時代の人間の思考様式・生活から社会背景や思想をも見ることになる。芸術自体、私達の生活や人生に影響を与える可能性を大いに持つ存在でもある。また文化交流での舞踊などのように紹介・他者理解の手段ともなっている。

8人が実地研修や討論を重ねていく中で、時には個々の内面と向き合い、また別の時には芸術を通しての歴史の見方、体制と芸術との関係、ある芸術界のジェンダー、現代の科学技術が及ぼす影響、などを見つめることとなった。

学生会議のプログラムの中では趣味的とでも捉えられたのか、時に好奇のまなざしを向けられることもあった。しかし、これまで芸術一般について余り縁がないと考えていた学生が卒業論文に芸術と社会に関するテーマを取り上げたり、自分の進路を大きく揺さぶられた学生もいたようである。このような機会に恵まれたこと、そして私達の分科会活動にご協力くださった方々に心から感謝致します。

この総括を私たちの分科会参加者の一人であるSara Jobinの言葉で結びたい。

「芸術創造分科会があったことで私は私自身の会議の中での存在の場、私の貢献できる場があったと思えた。私たちは私たちの非言語的（言葉に抛らない）ことばで語り合った。また他の人々のペーパーを通して、コミュニケーションと理解の手段としての芸術の有効性、多くの新しいアイデアにも触れることができた。」

実地研修：

1. 国立美術館見学
2. ハーシュホーン野外彫刻庭園見学
3. J. Frommayer氏訪問

—National Endowment for the Arts  
(芸術振興基金)の前理事長

一般観衆・聴衆にとってふさわしい芸術とは何か、国家による援助、芸術振興の役割と芸術活動の検閲、といったこと



(左より) 梶原 絵麻, Sara Jobin, 甲斐 順子, 増井早知峰,  
長野 宇能, Joann Lin, Zubin Gidwani

について考察した。これは増井の取り上げた討論テーマとも重なる部分があり、Fronmayer氏宅では前衛芸術と古典的芸術活動・作品では国からの援助にどんな違いが出てくるか、などについて話を伺った。

#### 4. ミュージカル『サウス・パシフィック』 (ジョージタウン大学主催)

ミュージカル鑑賞後、舞台裏で二人の出演者にインタビューを申し出た。このミュージカルは第二次世界大戦期の南陽諸島でのアメリカへ意図現地の娘の恋愛物語を扱ったものだが、劇中、時代を反映した対日本人差別観がむき出しになっているところがあり、出演者は観客中に私たち日本人を見留めかなり緊張したと述べていた。また作品の文脈や時代背景の理解を私たちに促し、さもないとエンターテイメントの価値を誤解することになると語ってくれた。

#### 5. コンウェイ・トウィッティ・ショウ —於オプリアンド

ショウ終了後、歌謡曲が単なるエンターテイメントではなく社会関係や人間関係への助けとなり得るか、また歌手は（特にトウィッティは）歌を通して私たちを共感させようとしているのか、といったことについて討論した。

ワシントンD.C.からテネシーへ移ってきた直後であり、またショウを見に来ている人々からここが南部白人社会であることを印象付けさせられる機会でもあった。

#### 6. 自画像作成（分科会参加者による）

分科会最終日に甲斐の討論テーマの中で彼女自身の発案によって企画実現されたもので、でき上がった8人の自画像は会議閉会時までコロラド大学の寮のインフォメーション用のボードに展示した。

## 他者理解のための芸術活動とは

全分科会中のレポートの最後に『芸術活動で文化的ギャップは越えられるか』をもとにプレゼンテーション、ディスカッションを行った。

分科会の討論を会議のテーマに結びつけることを目標に、会議の中の実地研修の体験や、学校教育における芸術活動などを振り返った。

他者を理解しようとするなら、自らと向き合い自分の文化を理解する。自分の文化では何をどう表現するかを知る姿勢を持つべきである。芸術活動においては、自分が何かを表現する立場にあれ、情報を受け取る立場にあれ、そこには、作者との対話がある。作者と

(長野 宇能)

の対話が自らと向き合うことにもなり時には、感動を呼び起こし、また時には誤解すらひき起こすものになるもので、これらの体験を積むことで学びとるものの多さ、大切さを考えた。日本人は、とかく自己表現が下手だと言われるが、他を理解するために自らを棄てる傾向があったと推察し、社会や教育の中で身体技法を含めた芸術活動の推進が役立つであろうという考えのもとに発表を行った。

分科会の討論では、芸術作品の解釈についての世代間におこるギャップや、日本の教育における身体活動による自己表現の少なさなどが論じられた。



自らを知る基盤あってこそ、異文化間関係が国内であれ、民族を越えてでも、高められ

るはずである。

## 生きるために働くのか 働くために生きるのか

(Zubin Gidwani)

～ストリート・パフォーマーの生活～

とかく経済の動向が注視される、物質文明の中で生きる人々は、まるで働くために生きているのではなからうか…? そのような現代の風潮とは一種異なる生活を営む人々をストリート・パフォーマーの中に捉えた。シアトル市在住のZubinは、実際に彼が取材したビデオも用いながら、ストリート・パフォーマーと社会との関わりについて紹介した。

歌や演奏、ダンスに曲芸と、何かを訴えるために、または、ただ単に人々を楽しませるために、様々な活動が路上で行われる—それがストリート・パフォーマンスである。だが、なぜ彼等は路上にとどまるのか? 別に著名なアーティスト達に技術が劣っているわけでもない。ただ彼等の目的が、富や成功に無いかからである。流行や現代の風潮に流される

のを好まず、ただ自分の感情を表現するチャンスを求め、その日その日の生計が立つ範囲だけ稼げばよい、という人が大半を占めるのである。その点で、同じ路上でも、ただ物乞いをする人々と、何かを与えようとするストリート・パフォーマーは、全く異なるものと言えよう。

このように、“生きるために働く”人々とは対象的に、物質に取り囲まれ現代社会に生きる殆どの人々は、“働くために生きる”という生活を、当然のように過ごしてはいないだろうか?

ストリート・パフォーマーは、現代社会の状況に満足できず、その感情を表現する場を路上に求めた人々である。彼らが織りなす芸術の中に、社会に対する何らかの問いかけというものを、我々は見ることができるのである。

## 「美の象徴について」

(甲斐 順子)

美には客観的に知覚される表面的な美もあるが、それとは別に主観的な経験により発見しうる美もあると考えられる。私は、ペーパーの中で、それらの美の内に人類が追求すべき理念があることを前提とした上で、その美が人間の実生活とどのような関わりをもつかを論じた。芸術的価値をもつとみなされるあらゆる表現の形態が、違った価値をもち違った影響力を与えると考えながらも、どの人間の中にもその美を享受する器があり、だから時間的に空間的に人類が共通の意識をもって、

生命の価値を尊びあうのだと考えている。そしてまた真の芸術とは存在するものに対する精神的愛情のもとになりたつのだと解釈している。戦争の残虐さを表したPicassoの“Guernica”等を例にあげ、人間が芸術に、芸術が人間に与える力を論じた。発表の場では分科会のメンバー1人1人に自画像を描いてもらい、触れることのできなかつたお互いの考えや、客観的に見つめた各自の人間性を確かめあった。出来あがった自画像は様々な形色彩で描かれ、主人とは違う姿をしながらも、各

自の個性を主張し意志を示していた。

## 音楽で我々が知るモノ・出来るコト

---

音楽—それは国境を越え、世界中の人々の生活に潤いを与えている。その音楽がもつメッセージ性について、特に社会的なメッセージを表現する曲は、人々にどのような影響を与えるのか、という事に注目した。

ホームレスの人々について歌ったフィル・コリンズの「アナザーデイ・イン・パラダイス」や、かの有名なジョン・レノンの「イマジジン」、環境保護をテーマにしたシカゴの「ゴッド・セイヴ・ザ・クィーン」等々を例として挙げ、そのような曲を通じて、その背景に存在する社会問題を“知る”ことが出来る、音楽によって把握する事ができる、という点を捉えた。

そして次に、“知る”と同時に、そのような問題に対して、音楽を通じて我々が“できる”ことは何かと考え、チャリティー・レコー

(梶原 絵麻)

ドの歴史を追った。70年代から始まって、反アパルトヘイトやアフリカ難民救済、反核、人権保護、環境保全、そして近年はエイズ患者救済基金のためのレコードも数多く出されている。その中から特に、世界的に話題となった、「ウィ・アー・ザ・ワールド」を取り上げ、チャリティー・レコードの意義やその影響を考察した。

分科会の発表では、実際にテープを流して曲を聴き、様々な意見を聞くことができた。同じ“知る”とは言っても、個人によって曲の捉え方は異なるし、また、それが必ずしも何か“できる”という行動には発展しない場合が多いにせよ、音楽が人々の感情を豊かにしてくれると同時に、このような社会問題へのアプローチもなり得る、ということを考える機会となった。

## 5人のアメリカ人マエストロ女性指揮者

---

Saraは5人の女性指揮者をとりあげ、彼女たちの立場から、現存するジェンダー問題について鋭く追究した。19世紀から20世紀にかけての歴史的背景を説明し、女性音楽家への理解も深まってきたものの、依然存在価値は低く、特に女性指揮者に対する差別が大きかったことを述べている。また優れた能力と努力により、第二次世界大戦後アメリカで活躍した女性指揮者の経歴をあげ、その現状と実在するジェンダー差別を呈示した。その差別が起こる要因として、教育や文化的背景、出産、それをとりまく社会事情等をあげ、女

(Sara Jobin)

性や母親としての立場を考慮しない限り、女性指揮者が個人的犠牲を強いられることになるとしている。そして彼女達に共通する最も重要な資質は、女性としてではなく音楽家としての才能であり、現在増え続ける女性指揮者により、その才能は認識されるだろうと主張した。Sara自身が女性指揮者、ピアニストとして現在活躍している。発表では彼女が実際に指揮する場面をビデオで披露した。彼女のテーマは、指揮者だけではなくジェンダーとしての問題に、さらにあらゆる差別問題に焦点をあてており、現存する社会問題を厳し

く批判している。実際に活躍している女性指揮者からの意見はとても貴重であり、発表の際も彼女の経験、芸術家としての認識や考え

方なのに対する、他の人達からの強い関心が寄せられた。

## 1990年代のテクノロジーと音楽的美学

Joannは現代の錯綜する音楽における技術の位置・役割と、その審美的意義に焦点を当て、幾つかの観点から論じた。音楽技術の近年の発達については、質の向上を目的とした録音技術や人口変声、シンセサイザーやコンピュータ、伝統的な技法を用いずボタンを押して音を調節するハイパー楽器、また自然界や他の曲から抽出した音やリズムを作曲に用いるデジタル・サンプリングをとりあげており、その発達の方向性、また音楽や人間性にもたらす功罪について論じた。そして、音楽家は芸術による音楽的才能の表現とその危険性を正しく認識し、細心の注意を払うべきであること、同時に聞き手もそのふるまいを

(Joann Lin)

監視すべきであることを提案している。1990年代において、発達した技術が音楽作品の創作に利用され、濫用されていることは、世界的にも注目を浴びている。発表の場では、Vanilla・Ice, Mariah・Carey等の曲をテープ披露し、現代のミュージシャンによるヒットソングの実状を示した。Joannは、技術がもたらした音楽的な質の向上や、奇跡的な音楽家の出現に疑問を持ち、その意義を論じている。彼女のテーマやその内容は、現在関心を集めている問題を音楽面からとりあげたもので、反響も大きく、44回JASC最優秀論文に選ばれた。

## 写真による自己表現 (スライド発表)

4人目の発表者Lisa Kimは、彼女の専門分野である写真芸術についてプレゼンテーションを行った。彼女は、自分の撮ったいくつかの作品をスライドを使って紹介し、彼女自身の写真芸術に対する取り組み方、考え方、表現の内容などを新鮮に語ってきかせた。

被写体としては、主に自分自身の顔(セルフ・ポートレート)が中心で、様々な角度から、また様々な装飾を加え、感情や思想の微妙で複雑な様相を巧みに表現しているように見られた。セルフ・ポートレートを中心としていることの理由を彼女は、「今は、自分がいったい何なのか、自分自身の探求が、第一

(Lisa Kim)

課題だからだ」と言う。写真芸術ではよく社会問題の直接の現場や自分以外の人間の姿を被写体とすることがあるものだが、その中で彼女の自分を見つめる真摯な眼は、芸術家としての意気込みを別の形で表しているように思われた。また、社会的な意味では、彼女は、彼女自身を含めたアメリカ(ニューヨーク)におけるアジア系女性の社会での、あり方に焦点をあてているということだ。

発表の後の討論では、写真芸術にかかわる様々な要因がとり上げられた。その中でも特に、いわゆる「わいせつ」だと言われるような写真やホモ・セクシュアリティの性の姿を

表現するものなど、芸術と現実の人間のあり方、その表現、芸術を通して主張される人権などなど、興味深い討論がなされた。人間性の隠された部分、抑圧された部分を解き放ち人間の他面性を私たちに示してくれるのも、芸術のもつ一つの大きな働きだろう。

Lisaは、写真芸術が作品として現われるまでに複雑な工学的過程を経なければならず、それが絵画との大きな違いである、という点も説明した。

芸術家（写真家）Lisaの自信に満ちた新鮮

なプレゼンテーションだった。



## メセナ～ロレンツォ・ディ・メディチとの対話から

(増井早知峰)

私は分科会一人目の発表者としてPatronage and Today's Mécénat : Dialogue With Lorenzo de' Medici(「パトロネージュと今日のメセナ:ロレンツォ・ディ・メディチとの対話」)に基きプレゼンテーションを行った。

ペーパーの内容は、歴史の中でも芸術活動支援に最も積極的であった人物の1人として有名な、15世紀フィレンツェのロレンツォ・ディ・メディチと増井本人が対話をし、そもそも芸術支援(パトロネージュ)は芸術活動にどんな影響(ポジ・ネガ両方)を与えておりまたロレンツォの時代の芸術を囲む環境と今日の東京のそれとを比べ、もう一度、今日の芸術支援のあり方を考えてみようというものである。

芸術家自身が豊かになった今日でさえ、歴史的な大作を芸術家が造り出そうとするとき、その製作や発表の機会を得るためのバックアップが必要になることは極めて多い。そのとき、政治的拘束を支援者から受けることなく芸術活動(創造)を行うことは可能なのだろうか。

この問いが討論の骨子であった。

幸い前日のフィールドトリップで、芸術表現の支援者からの自由(表現の自由)を主張したためにNational Endowment for the Arts (NEA)(米国連邦政府に属す公的機関であり、芸術家や団体への資金援助を約束するもの)を解雇されたFroynmayer氏を訪ね、芸術表現の自由と芸術支援のあり方について話をしたこともあり、このテーブル討論の参考になった。

討論は更に、果たして良い芸術と悪い芸術というものがあるのか、メディアの力が強い今日、私達は本当に自分の意志と判断で芸術を享受しているといえるか、など芸術をとりまく様々な問題を扱い、結論などももちろん出たはこないものの、大変内容豊富な刺激的な討論となった。

“芸術表現の自由”という問題は芸術が実社会に生きるものである限り、永遠の問題として私たちは議論していかざるを得ないだろう。

## 企業と社会

### 総 括

日米両国における企業は、今や国内社会だけでなく国際社会においても最も影響力を持つアクターにまで成長した。それゆえに、摩擦を作り出す最前線ともなり得るし、また企業の在り方自体が社会に与える影響も計り知れないものとなってきている。日本企業による海外直接投資に関わる様々な問題点や、企業の社会的責任がクローズアップされるようになったのも、それだけ企業の役割が以前と比較して増大していることを示しているのである。

こうした状況の中で、当分科会での論点は大きく三つに分けられる。第一に、日米双方の学生から見た両国企業の改善点の提示である。討論を通しては、自国の企業の体質に対する鋭い批判も飛び出した。特に、米国側学

(鳥越あすか・佐藤正典)

生が日本企業の経営システムを予想以上に高く評価しており、米国企業もこれには学ばなければならないと考えている点が印象的であった。

第二に、これからの企業と社会の在り方についてである。海外直接投資が増加するにつれ、経営スタイルや文化の違いから現地社会との軌轢や問題が生まれている。また国内でも企業の社会貢献の在り方が問われ始めているが、企業は果たして社会とどのような関係を構築していくべきなのかについて、議論が交わされた。

第三に、より大きなテーマとして、日米両国の経済協力体制の強化の必要性である。協力の仕方には様々なオプションがあるが、ともかく経済的に対立するよりも強固な協力体



(左より) Stephanie Weston, Kevin Kim, 鳥越 あすか, 佐藤 正典, 寺澤 実紀, 堀部 智, Lisa Mizumoto, Louis Ross, Walter Hutchinson

制を築いていくことに力を注いだ方が、日米両国の将来にとってより有益であることでは意見が一致した。

(実地研修)

#### ①米国証券取引委員会

国際問題担当のL. アルブレヒト氏をはじめ、委員会を構成する各部署の方々に次々とお話をしていただき、ホワイトハウスからも議会からも独立し、自ら不正の捜査にあたることなど強い権限を持つ委員会の機能が紹介された。

#### ②White House Executive Office

7月31日 10:30-12:00

White House Executive Officeを訪ね、日米構造協議の担当官、W. マルヤマ氏からお話を伺った。最初に協議の目的に対する米国の考え方、日本政府の対応に対する評価などについて25分程説明を受け、その後質疑に入った。質疑では日本の系列に対する米国側の指摘に一部誤解がある、などの点について30分ほど議論が行われた。分科会メンバーは日米構造協議に関心を持ち、日本側の要求項目である(1)米国の高金利 (2)その要因である過剰消費性向、また米国側の要求項目である(1)系列 (2)流通、等の問題を議論してきたが、政府担当官から直接話を聞くことができ、一同にとって有益でエクサイティングな機会となった。

#### ③商務省 (Department of Commerce)

8月3日 3:00-4:00

商務省では、5人の担当官から対日貿易のポリシー、米国政府の考え方などについてお話を伺った。この中で、政策担当者が米国の産業競争力の低下に強い危機感を抱き、重要な政策の転換が不可欠であるとの認識を持っ

ていることをあらためて強く印象づけられた。日本の通産省が採るような産業政策を導入する意志があるか、との質問に対しては、消極的な印象を受けた。

#### ④ブリジストン・ファイアストーン株式会社

ブリジストンは、日産と並びテネシー州で最も成功した日系企業の一つである。広報担当マネージャーのR. Thomas、J. Tayler両氏のお話から、日米双方の社員の協力体制、従業員教育、地域社会における奉仕活動への積極的参加など、成功の要因の一端を垣間見ることができた。

#### ⑤ビルズベリー工場

家庭向けのパンケーキのもとや冷凍パイなどの商品で有名なこの工場では、1990年から「チームシステム」を導入し、従来よりも個々の従業員により大きな責任を任せることで活性化を図り、成功している。実際に工場を見学し、生き生きと働く従業員の方々からお話を伺うことができたことは、大きな収穫であった。米国の企業が変わりつつあるのを強く感じた訪問であった。

(おわりに)

内容が非常に高度であり、かつ参加者の知識や経験の差がかなりあったため、時には議論が噛み合わないこともあったが、それぞれのレベルで少しでもこの分科会で得るものがあったことを祈るのみである。また、米国側学生の尽力のおかげで、実地研修では貴重なお話を聞くことができた。最後に、この経済分野に全く無知であった私をサポートしてくれた参加者の皆さん、そして一緒に分科会を引っ張ってくたれ相棒、Kevinに心から感謝を捧げたい。

## 米国における日系企業

(Kevin, D, Kim)

～ミシガン州・マツダを例として～

日本企業による米国への直接投資は、米国人に様々な疑問を投げかけている。例えば、労働者と経営者の関係、日本的な経営システムの流入、地域への影響、そして地域と企業の依存関係である。ミシガン州に進出しているマツダを例として、日系企業が米国社会に受け入れられるかを考えてみたい。

マツダではブルーカラーの労働者も経営に参加する。独自の品質管理を行い、生産過程の向上に貢献している点で、米国のビッグ・スリーによる経営形態とは異なっている。労働組合は工場内に存在し、合同自動車組合とは別組織である。米国人にとって労働者と経営者の密接な関係は、生産力向上に伴う解雇を想起させるが、日本企業は企業内の効率を念頭に、両者の良好な関係の維持を重要視している。

米国工場では、生産過程における欠陥は重

視されない。しかしマツダは生産過程に着眼し、効率化への「改善」を重ねている。トヨタは生産に必要な最小限の労働者と材料を用いる「ジャスト・イン・タイム (JIT)」を導入し、効率化を追求している。JITの欠点として、労働者の訓練不足や負債の多発が挙げられる。また、生産過程における一部分の改善は他の個所にプレッシャーを与え、労働者にフラストレーションが鬱積してしまう。

日本的な経営システムを受け入れる際に、二国間の文化や社会の相違、特に米国人が日系企業の一員になれるかどうか、ということは考慮されるべきである。経営レベルの信用に関わるこのような相違は、労働者への素直な対応によって解決の糸口をつかむことができる。そういったプロセスを重ね、地域社会の一員として認められることによって、日系企業はやっと米国での成功を収めたといえるであろう。

## 企業の社会的貢献

(鳥越あすか)

今日、企業は国際社会と国内社会の双方で最も影響力のあるアクターへと成長した。そうした変化にしたがって、企業がとるべき「社会的責任」の範囲についての議論も注目されるに至っている。この問題に関しては、次のような代表的な対立意見がある。

1. 企業は規制や法律を遵守して、消費者ニーズに合った商品やサービスの生産・供給を効率的に行い、消費者の利益、株主利益や従業員の利益を増進させる責任のみを負う。

つまり、利潤追求を第一義的に優先することが、結果的に最も効率的な社会への貢献だとする考え方である。

2. 現代社会において企業は資金的にも、人的資源、情報やノウハウの蓄積においても最も力を有する組織であり、そうした力に見合った社会貢献が求められている。また、企業が社会において力を持つようになったのも、社会全体の恩恵があったからである。したがって、企業は自らの資源を公益の為に積極的に活用する責任

があるという考え方である。

こうした社会的貢献に関する議論の中で最も意見が分かれるのが、最近注目されている「コーポレート・フィランソロピー」についてである。フィランソロピーとは、元来市民個人が自らの公益活動を進めていく考え方であるが、近年では、企業も社会の一員として、企業本来の業務と無関係の分野～社会福祉や文化・学術分野への寄付など～においても積極的な貢献をしていくことが求められる傾向にある。

討論においては、こうした既存の意見をもとに、日米両国のそれぞれの状況にあった企

業の社会的責任の在り方について意見が交わされた。日本においては社会保障などの行政サービスがかなり進んでおり、他方米国においては相互扶助の伝統が企業にも当てはまる。こうした社会構造の相違によって当然企業の社会的貢献の在り方も変わってくる。だが、いずれの場合にせよ、資金による貢献だけではなく、従業員であると同時に市民社会の一員である社員による地域への活動をバックアップするような、人材面からの貢献をもっと推進するべきであろうという意見が大半を占めた。

## DUO～日米企業合併の必要性～

米国にとって、経済の競争力低下は今や非常に深刻な問題であり、11月の大統領選挙においても重要な争点の一つになることは間違いない。経済再生への処方箋については議論百出だが、一つの鍵を握るのは「日本市場への参入」であると言われている。

米国企業は、近年、日本でのシェア拡大の為に日本企業との合併に力を入れているが、その効果については疑問視する向きも少なくない。日本市場では外国企業を排除する直接・間接的な厳しい規制があること、また合併による米国の先端技術の流出が、かえって日本の競争力強化を促進する結果になっていることなどがその理由である。こうした論調が現実を直視していない、いわば「固定観念」であることは、今日徐々に証明されつつあるが、一方、そうした考え方が多くの人々に浸透していることもまた事実であり、その原因として以下のようなことが考えられるのであろう。

1. 日本という国は、米国の優れた技術を模

(Lisa Mizumoto)

倣し、それを応用し製品化することによって貿易黒字を稼ぎ出しているだけである。つまり自前のアイデアを出すことができない「猿真似国家」だという、日本の高度経済成長時代の頃からのイメージが拭い去られていないこと。

2. 通産問題の交渉に臨んでいる米国政府の高官達は、日本の市場解放努力には目をくれず、規制が緩和されていない分野に焦点を絞り集中攻撃しているため、日本の「アンフェア」な部分が過大にクローズアップされてしまうこと。
3. 日本で成功している米国企業は、競争相手が増えることを恐れて自分達のサクセス・ストーリーを語りたくないどころか、むしろその特殊性を協調していること。
4. 日本人は欧米と違い、新しい技術の発明や発見をあまり公開したくない性質があり、「一人勝ち」あるいは「技術タダ



乗り」のレッテルを貼られやすいこと。  
討論においては、米国経済にとって緊急の課題は、こうした誤解を取り除いた上で、技

術、ヒト、品質管理など様々な点で高水準を維持している日本企業と、より一層の協力関係を推進していく必要性が指摘された。

## 日米関係の新しい地平線——協調と調整

### 1. 叩かれる商人国家ニッポン

#### (1) 戦後日本—サムライ国家の方向転換

日本は、戦後、吉田保守党政権以来、それまでのサムライ国家から脱却し、商人国家ないし町人国家としての道を追求するようになったといわれる。保守党の構想は、軍備を最小限にとどめ、民生中心の経済主導型国家を建設するというものであった。こうした基本政策は、戦争を憎む国民各層の強い支持を集め、それが保守党の長期政権を可能にした決定的な要因ともなったのである。官民は実によく協調し、日本の経済的繁栄の基盤作りのために邁進した。

しかし、軍備増強に走らず、他国に武力介入をしないという平和国家日本の国是は、諸外国から見ると、国際社会において先進国クラブのメンバーとしての政治的責任を放棄した孤立主義として映った。また企業の経済活動によって繁栄と安定を確保するという日本社会のプラグマチックなあり方は、危険な経済侵略として強い批判を浴びるようになった。そうした批判は、近年特に強まってきており、日本人の間に不本意な思いと、やるかたないフラストレーションを惹き起している。

こうした現状を打破するためには、新しい国際環境に則した日本の進路を確定することが必要である。しかし日本人自身の間に、今後国際社会とどのように関わっていくべきかについて、国民的なコンセンサスがあるとは

(佐藤 正典)

いえない。指導者の間にも国民に理念を提示するといったポジティブな姿勢よりも転換期特有の方向感覚の喪失にも似た現象が見えるような感じを受けるのである。

#### (2) 商人国家ニッポンに対する批判

日本に対しては、これまでさまざまな批判が寄せられてきたが、それらはおおむね、国際社会において先進国としての応分の責任を果たしていない、企業行動・産業政策が国際協調的でなく、公平・公正の観点からみて問題がある、といった内容に要約できる。いずれにしても商人国家ニッポンの姿を反映して経済問題が突出している。

これまで米国から寄せられた日本批判には、次のようなものがある。

- ①日本の企業集団は、排他的な「系列」を形成し、「系列」内取引を優先させるため、外国企業にとって機会均等が与えられておらず、不公平である。
- ②日本は、官民一体となって強力に産業政策を推進しており、官が民を主導ないしバックアップする構造は外国企業との競争上不公平である。
- ③日本企業は、株式の相互保有による法人間の相互支配が強力で、そうした法人株主との話し合いによって経営方針が決定されており、個人株主、外国人株主は株主としての権利を無視され、経営から排

除されている。

### (3) 日本の企業系列

#### ①系列とは

1990年代に入って日本企業の海外進出が加速されると、日本企業の巨大な組織間関係が海外から注視されるようになった。次の数字を比較してみたい。

	生産台数	従業員数
General		
Motor	500万台	780,000
トヨタ	400万台	65,000

系列270社

「ケイレツ」という言葉は、今や欧米の雑誌にそのまま登場し、日本の高品質と低価格を支える「魔法の杖」という取扱いを受けているのである。

#### ②系列をめぐる問題

日本経済の中で系列の果たしてきた役割を忘れることはできないにしても、系列の中核企業が協調、長期的な発展、共生のために必要な枠を越えて下位企業に無理を強いているとすれば日本の系列システムは現代的な意味を持ち得ないであろう。合理性や創造性を導入することによって日本経済が弱体化するというものであれば、そのような日本経済は今後変容しなければならぬと思われる。

## 2. 病める大国米国—日本人の見る大国の姿

国家の力を経済力、軍事力、文化的な影響力などの総計として測ることができるならば、米国は、今日もなお、総合的な力において世界最大のパワーであると言える。事実、米国は冷戦終結後も引き続き国際問題の解決に指導力を発揮している。しかし、外交面におい

て他国に向かって指導力を発揮する時の米国の顔と、内政問題に取り組んでいる時の米国の顔は明らかに違って見えるのである。外から見ると、米国はひどく病んで見えるのだ。病める大国アメリカ—日本人の持つ最近のアメリカ観は、苦悩し、自らの問題に容易に解決策を見いだせないでいる大国の姿である。そうした米国の姿は、ブルーカラーに対する処遇と経営者の高額報酬の問題に浮き彫りになっていると言えるだろう。

### 3. 新しい日米同盟

ソ連・東欧が崩壊し、東西冷戦構造が終結する前後から、アメリカ人の日本に対する意識が確実に変化しているように見える。新聞報道によれば、米国人の多くが米国最大の脅威は日本の経済力であると感じている。東京に住むある米国人は、最近私に次のように言った。「米国が日本に強い関心を持ってきたのはソ連に対抗するという目的があったためであり、ソ連が崩壊した以上、日本に対する意識が変化するのは当然である。」この言葉は鋭く現実を語った言葉だといえよう。しかし、もし、この言葉が、日本を米国の新たな敵に据えることが当然だという意味ならば穏やかでない。なぜならば、こうした見方は、米国が常に敵を必要としているように聞こえるからである。

イギリスのサッチャー前首相は、ソ連崩壊直後に次のように語っている。「米国はついに冷戦に勝利を取めた。しかしこの勝利は、米国一国で得られたものではない。西側同盟の結束があって初めて可能となったものである。日本は、西側同盟諸国の経済発展の牽引役として、冷戦勝利を促進する上で貢献した。今、共通のゴールを達成した日本と米国が何

ゆえにいがみ合わなくてはならないのだろうか。」

## (2) 日米共同の敵

重要なことは、ソ連が崩壊したことにより、日米両大国が共同の敵を喪失したと考えることは重大な事実誤認である、ということである。

今日の国際社会は、貧困・難民問題や環境破壊、さらには大国のくびきから解放されたことによる地域紛争の多発に悩まされている。難民や貧困の問題は、今後ますます国際社会の不安定要因となっていっくだろう。これらの問題が日米両大国が立ち向かうべき共同の敵でなくて一体何であろうか。

日米両国は、地域社会全体を視野において、冷戦の時と同じような強固な同盟を組んでこれらの問題の解決に指導力を発揮しなければならない。そうした同盟関係こそ、国際社会の指導者の名にふさわしいものである。強力なパートナーとなるべき両国が、お互いを叩き合い、敵に仕立てあげるようなことはもうやめなければならない。

国家が叩きあい、抗争する背後には、相手を打ち負かし、自らNo.1になろうとする意識があるはずである。しかし、相互依存関係の高まった今日の国際社会において、ひとつの国境線の内側にいるひとびとが、別の国境線の内側にいる人々を圧倒するということは、無意味なことなのだ。日米関係について言えば、両国は特にその経済的な関係において国境線を越えて相互に強く依存し合う関係にあり、一方の破滅はすなわち他方の破滅を意味する。日米は、お互いに相手をノック・アウトしようなどと考えるべきではない。Your Problem is Our Problem, and Our problem is Your Problem.——この精神でつき合っ

ていくことが大切なのだ。

## (3) 調整と協調

今日、国際社会にかかわる主要な問題を米国だけで解決することはできない。Pax Americana（米国による平和）の時代は去ったといわれている。湾岸戦争を米国一国で戦うことができなかった事実は、その象徴的な出来事として理解されている。世界の新秩序は、西側主要国が「調整と協調」を通じて維持しなくてはならない時代となったのである（Pax Consortis）。

## (4) 経済主導型の国際社会の課題と展望

安全保障における軍事力の比重の低下とともに、今後主要国は、民生中心の経済主導型国家に移行していっくだろう。主要国が経済的影響力を重視し、経済面の競争力を高めようとすれば、国際社会は相互依存関係を通じて安全保障を高める一方、以下のような新たな問題を惹き起こすことが考えられる。

- ①主要先進国は、産業経済の死活を制する科学技術の開発にしのぎを削り、科学技術の情報戦において優位に立つためにあらゆる手段を尽くすであろう。今後主要国の緊張・確執が科学技術の情報戦をめぐって発生する可能性はきわめて高い。
- ②経済主導型の国際社会においては、加速度的に富の偏りと経済権力の集中が起こるため、貧困・難民の問題が恒常的に発生する可能性が高い。さらに、富の配分と国際システム維持のコスト負担をめぐって、先進工業国と発展途上国との間に構造的な緊張関係が発生し、国際社会の重大な不安定要因となるおそれがある。

まず、②については、富の偏在を是正し、再配分するためのシステムを導入しなければ恒常的な緊張の発生を吸収することはできない。そうした努力を怠れば、主要国は将来にわたった貧民・難民救済のための資金援助、現物供与、軍隊・医療チームの派遣、難民受け入れ体制の整備等、循環的に高いコストの負担を強いられることになるだろう。

①については、国家間の緊張の発生を未然に防止するために、次のような理念に従って制度整備を行うことが必要である。

#### ①規制の国際的調和

各国の立法・行政上の基本的な規制を国際的に調和させることが、国際摩擦を緩和する上でも国際関係維持のコストを最小化する上でも重要である。国際的な調和が進展しなければ規制のゆるい国に操業・営業利潤が集中し、不正行為や公害

輸出を誘発することにつながるだろう。

#### ②各国の制度・慣行の透明性の確保

各国が経済活動の面では相互の信頼を醸成するためには制度や慣行を公開し、透明なものとしなければならない。これは、公正な取引を確保するための前提としても重要である。

#### ③公正取引のための原則の確立

国際取引において、不公正な取引を排除し公正な取引を確保することは、不可欠の前提である。しかし、ダンピング、移転価格税制、知的所有権侵害、独禁法違反等のケースにみられるように、公正取引の概念には立証・認定の困難が伴うばかりでなく、相手方企業との抗争のために不公正取引を理由として闘う場合もあり、この問題の解決を一層困難にしている。今後取引慣行の中から、公正取引のための諸原則を確立していく必要がある。

## The Slowing of an Industrial Juggernaut? (巨大産業国家の衰退) ——

(Walter Hutchinson)

はじめに

米国はこれまで軍需産業の育成を図ることに注力してきたが、日本は民間・非軍事ベースの技術発展に力を注いできた。こうした両国の政策の相違点は重要である。今後、基本政策の変更をしないかぎり、米国は産業技術のあらゆる分野において日本の後塵を拝することになるであろう。

米国機械道具産業の衰退とその原因

米国の「機械道具産業 (machine tool industry)」に焦点を当ててみると、米国産

業のこれまでの問題点が浮かび上がってくるように思われる。すなわち、米国政府は、民間用の機械道具産業分野に対して何の政策も持たなかったために、産業の自壊作用を招き、世界経済における地位を喪失するに至ったのである。この点について、製造業の衰退は米国だけでみられる現象ではなく、世界経済全体の中で製造業全体がその重要性を失いつつあるという見方は、誤りである。なぜなら、米国の衰退に反し、外国企業の優勢は景気後退にもかかわらず続いており、米国の機械道具産業が後退させたシェアを獲得しているからである。米国は、もはや世界経済の中で唯一の強者ではあり得ない。この衰退の原因には、

低い生産性や拙劣なマネージメント、技術の立ち後れ、などがあると思われる。しかし、それは同時に、政府の過った産業政策、すなわち、軍需部門には巨額の資金を投入し将来の計画を策定するが、民間部門においては活性化のための適切な政策を取らず、無為に任せるという姿勢にも起因するものである。こうした観点から見て、米国の軍需関連産業は長期的かつ国家全体としてみても、必ずしも良い効果をもたらしてきたとは言いがたいように思われる。現に、世界をリードする機械道具の生産基地であった米国がその地位から転落したのは、この業界が軍需関連だけに活路を見いだそうとし、民間用・汎用性の高い部門においては競争力を失い、自滅したことによる。パーグマスター社の例は、米国政府の過去の誤りと今後の産業国家米国の基本指針について、重大な警告を与えるものである。

日本では、民間・非軍需の汎用性の高い機械道具が重視され生産されてきたため、民間活力が促進され、この分野に健全な市場原理が機能してきた。これに対し米国では、機械道具産業は軍需に直接関係する分野として発展してきたために、価格形成にも市場メカニズムは機能しなかった。こうした背景のために、今日、米国の機械道具は民間用には適さない高価格なものになってしまった。

## ユニバーサルな経営システム

日本企業及び日本的な経営システムは、不正であるという理由で批判を受けている。日本的な経営システムは、不正行為なのであるか？真相究明のために日本的な経営システム及び、日米の視点から見た理想的な経営シ

米国政府は、これまで、この分野に民間活力を導入し、健全な市場原理を導入することを怠ってきた。それが機械道具産業の競争力を弱めることになったのである。こうした米国政府の政策のあり方及び問題点は、米国産業全体に通用するというのを思い起こす必要がある。

米国も日本もこの分野においては産業政策というものを持ち、それを実施してきた。しかし、米国が専門化した特殊な道具に特化しようとしたのに対して、日本は民間の大量消費市場をターゲットにしたのである。そして、今や、大量消費市場こそがこの分野において世界戦略を推進する上で重要であることが判明したのである。米国は、こうした基盤を無視したために、世界におけるリーダーシップを喪失することになった。しかし、こうした事態に対処するために米国政府がただちに保護育成の政策を取ることは誤りである。

## 結語

米国は、引き続き世界最強の経済力を誇る。我々は、機械道具産業の衰退の原因を踏まえ、政府の政策ないしは無策が米国産業界の将来に大きな影響を及ぼすことを認識し、米国政府が今後長期的な観点から産業界に対して取るべき政策を探ることが必要である。

(寺澤 実紀)

システムを検証し、ユニバーサルな理想的経営システム論じてみることにしよう。

日本的な経営システムにおける三種の神器は、終身雇用、年功序列、企業内労働組合である。集団主義の及ぼす影響も大きい。螺旋

状の昇給を促す人事にも特徴があり、企業内の水平的なつながりを強くしている。経営システム以外に、品質管理や雇用者間の協調促進による、効率的で安くかつ良質な製品の生産が日本経済の成功要因として挙げられる。

Robert B. Reichの『The Next American Frontier』を参考に米国的な経営システムを年代別に考えてみると、1870年～1920年は資本や労働が極めて流動的な「流動の時代」であり、英国の産業革命に便乗して生産力の増加に成功した。1920年～1970年は科学的な経営が発案され、経営上のヒエラルキーが構築された「経営の時代」であり、情報収集が重要視された。1970年以降、米国経済は「袋小

路」に入り、雇用が減少し、経済循環が悪くなった。今後は「日本資本の時代」であり、全体的な視野からフレキシブルな対応ができるシステムが理想的である。

日本では、理想的な経営システムとしてこれに似た「人本主義」が考えられている。これは経営戦略として、人を重要視するものである。利益の均等配分を重視すべきだ、という意見もある。

経営システムの目的及び成功基準は、生産力アップである。過去には生産力として搾取され、現代に至っては生産力増大のために搾取されている「人」が、今後重視されるような経営システムが理想的ではないだろうか。

## 理想の企業像を求めて

(堀部 智)

世界のGNPの半分を占める日米経済は、その相互依存性の高さとは裏腹に、激しい摩擦を抱えている。現在に至るまで、繊維、自動車、半導体等多くの方野で貿易摩擦が生じてきたが、孰れも日本側の逞しい競争力が火種であった。いったい日本のどこにそんな強さがあるのかという疑問が出発点であった。

私が学んだ所によると、以下の解答らしきものが浮がび上がって来た。通産省主導の産業政策が産業界に超長期的ビジョンを与え、優遇税制、補助金、政府公認カルテル等の手段を通して産業育成を計る。系列、株式相互保有という日本独自のシステムにより安定した継続的取引基盤を築き上げた経営者は、産業政策の恩恵を最大限に生かしつつ、長期的経営戦略を練る。貯蓄率の高さを反映して銀行に集まった資金が長期的視野に立った企業の経営戦略実現の為に、R&D、設備改良に投資されて行く。終身雇用、企業内組合が生

み出す労使協調体制が、絶え間ない技術革新を可能にし、さらに研究開発、設計、製造、販売といった各々のセクションが互いに情報を共有し合い、チームワークを重視してその成果を高品質低価格の商品という形で生み出す。これに対して米国企業は、産業政策の混迷、短期的利益重視の経営、労使対立による技術革新の遅れ、情報の共有とチームワークとの欠如等から生ずる非効率性といった欠点を抱えている。さらに、放漫財政、過少貯蓄、教育政策の不十分性といった外部的要因や企業家精神の衰退といった致命的な要因も加わって結果として生産力を落としてしまったということである。

出発前の私は、日本企業＝優等生、米国企業＝劣等生という拭い難い印象を抱いていた。しかし、会議での議論や現地の企業の視察を重ねるごとにやはり問題は、そんなに単純ではないと改めて強く感じるようになった。確

かに米国企業は、M&A、LBO等に現を抜かしてきた過去を反省し、前述の欠点を改善すべく大いに日本から学べきだろう。しかし、逆に日本企業も大いに米国企業より学ぶべき点がある。組織にあって個性を最大限に尊重し合おうとする意識、フィランソロピーやメセナに見られる企業の社会構成員の一員としての確実な自覚等々である。さらに問題だと思ったのは、米国側は欠点を自覚し改善に向けて動き始めているのに、日本側は米国側は自らの欠点に対する自覚が改善が乏しいという所である。私が考えるに、企業の責任は、(1)高品質低価格な製品、サービスの提供、(2)社会の構成員としての利益還元、(3)従業員一人一人に満足と幸福とを与えること、の三点

に尽きると思う。多くの人が人生のかなりの時間を会社で過ごす現代社会に於ては、(3)を実現することこそ最大の社会貢献であり、最重要経営目標の一つであるべきだと思う。なお、発表時には、互いに自国の欠点を認識している両国の参加者が、改善のための手本として相手国（つまり、日本側は米国に手本を求めて）の事例を挙げ、それを本国の側が否定するという奇妙な現象も見受けられた。社会に出る前の学生として、些か空論気味の所もあるだろうが、持てる知識と経験とを尽くして両国の学生が企業のあるべき姿を議論し合えたことは、私にとって有意義なものであった。

## 変わりゆく米国企業～日本企業に学ぶ点～

(Louis Ross)

長らく世界経済の雄として君臨し続けたアメリカは、日本やNIES諸国の輸出攻勢に晒され、国際競争力の大幅な低下に苦しんでいる。大統領選挙の最大の争点が「経済」であったように、アメリカ最大の問題は、産業の再生にあると言えよう。これに対する処方箋が様々なアプローチで模索されているが、Louisは、マネイジメントの立場から活路を見出そうとした。日本式経営に強い関心を抱いている彼は、米国人ビジネスマンの人間関係に光を当て、「今、米国に欠けているものは、企業内に於ける協調・信頼関係と情報の共有体制の欠如にある。」と結論付けた。高給を取り、企業を自己のキャリアUPの為の単なる手段としてしか考えない、MBA取得者に見られがちな最近の風潮を、彼は戒め日本企業に見られる家族共同体的性格を見習うべきだと主張した。彼は、議論の中で根回し、

稟議、和など豊富な日本に関する学識を披露しながら、コンセンサス重視の経営スタイルが日本企業興隆の基礎にあると力説していた。

最近、米国ではこのような主張が広がりつつあるようだ。コロラドのホームステイでのホストファミリーの方も述べておられていたし、実際米国企業にもこの日本式なるものを取り入れる動きが出てきている。实地研修で行ったビルズベリー工場も一例で、「チームワーク重視の姿勢が大きな成功を生み出している。」と満足気に語っていた従業員の姿が印象的であった。

LouisはNUMMI等日米のジョイントベンチャーの例を挙げて、企業に対する責任感、忠誠心を重んじる方針が生産性の向上に資していると述べた。さらに、彼は仕事の後、同僚と飲みに行きカラオケ等をする日本の習慣を美德だと称え、本音と建て前とを使い分け

る日本社会の特徴には学ぶべき点が多いと述べていた。

片や日本では、会社人間としての従来像からプライベートも重視する個性的な人間への脱皮が唱えられているのに、手本の一つであっ

たアメリカで日本の流れと逆行する方向性が唱えられるのは些か不思議な気がした。今後、個人主義の国アメリカで日本式経営が如何なる形で受け入れられて行くか大いに注目して行きたい。

## 医療と社会

### Everything But Medicine & Society Table

(松井 恵一)

医療と我々の生活とは切っても切り離せない状況がある。つまり医療の目的は、社会構成の一人一人の生活活動の最も基本である健康を維持することにあるからである。また近年科学技術の発展が我々の間のなかで倫理的承諾を得るのが難しくなっている。以前は科学の向上が我々の生活を向上させるとして位置付けられていたが、最近では科学技術の専門家以外の者も技術向上に関して、実社会とどのように関わりを持つかを考えるようになってきた。こうしたことは、技術の多様化に対する監視機能が働いたものであり、医療科学技術向上が本当に我々の生活を豊かにしていくか見直させてくれるように感じる。臓器移植や脳死といったような、科学技術の向上だけが医療の問題ではなく、AIDSのような不治の病に対する偏見も大きな社会問題になってきている。以上のような点を、日常生活から直接自分が感じとったことから自由に意見が交わされた。

実地研修

① 医学博物館：(医学の成立と予防医学について) ワシントンDC

医学博物館では、如何にして近代予防医学が成立に関する話を聞き、その際に行なわれてきた臨床実験についても、興味深い話も耳

にすることが出来た。その後現代の黒死病と呼ばれているAIDSに関しても、正しい情報を知っているかどうか確認をとられた。つまり巷でよく云われている誤報一例えばAIDS感染者の血を吸った蚊に刺されるとAIDSに感染するというようなこと等である。

また同時に旧い時代の医療機器が展示されており、現代の機器との比較が出来たのも興味深かった。

② FBI：(応用医学について)

FBIでは、先ずその歴史と組織について紹介を受け、如何にしてFBIが犯罪と対処しているかの説明を聞いた。その後応用医学である、如何にして犯罪人が残した毛髪、体液等からDNA分析をして犯罪者を発見するかその実験過程を見学した。話では聞いたことがあるが、実験を目の前にして一同非常に驚いた。この後誰もが悪いことをしたら、捕まってしまうと感じたことであろう。

付記：この日、担当者が来れなかったためにそのお詫びとして、拳銃の早打ち場を特別に見学させてもらい、実際マシンガン(実際には使用できないモデル)を持たせてもらい記念撮影をした。



③ マハリー大学病院産婦人科：（先端医療と医療倫理について）ナッシュビル、テネシー州

マハリー大学病院産婦人科では、先ず最初に産科を見学しアメリカの出産から退院までの過程を紹介してもらった。この時日米の健康保険制度について話された。つまり、日本で出産する際に1週間ほど入院するに対して、アメリカでは1～2日で退院することについて話された。これは言うまでもなく長期入院すると高額な医療費を払わなくてはならないからだ。

その後産婦人科の現場の先生から、羊水搾取、人口受精、代理母に関する現状や問題点について話してもらった。この時、倫理問題が大きく取り出されてきたがその際日米間では社会構造の違いによりその捉え方が異なった。アメリカでは本人の意志が一番大切であり、その意志を尊重するから手術を行なう土壌がある。また日本のように戸籍や「家と云った概念」が存在しないので、日本で代理母を

を行なったときに産んだ側が母親になるのか、それとも卵子提供者が母親になるのかといったことが問題にならない等等、非常に為になった。

④ オリンピック委員会：（先駆医療について）コロラドスプリングス、コロラド州

1992年は、バルセロナオリンピックの年だった。毎回オリンピックで絶大な力を見せているアメリカのオリンピックは、世界的に科学的なトレーニングの下で準備されているとき、その先駆医療とオリンピックとの関わりを見学した。噂には聞いていたが、実に素晴らしい施設で、それが寄付によって成り立っていると聞き同時に驚いた。施設見学では主にリハビリから、精神訓練、或いは選手のフォームの研究所を廻った。

—最後に—

前にも書いたように医療と我々の関係とは一体何かと問われたとき、一瞬戸惑ってしか



（上段左より）Kenji Hall, 平松 英人, 松井 恵一, Mitzi Hnizdil  
（下段左より）高橋 香織, 阿古 智子, Senaka Peter, Indrani Lall

も知れないが、暫く考えると実際自分たちとの関わりが大きいことに驚かされる。今回参加者が一人一人、普段何気なく捉えている医療問題について話されたことは本当に良い機会だったのではないだろうか。ともすれば重いトピックスも、楽しいメンバーが集まって

くれたことで、前向きに対処できたことを嬉しく思う。最後にこの分科会を支えてくれた、協力者の皆さんそして分科会のメンバーLall、阿古、高橋、平松、Hall、Hnizdil、Peterに心から感謝致します。

## 告 知

---

日本では中々、ガン告知がされず患者は何となく「自分はガンではないか」と含みを持ちながら亡くなっていく。それに対して、欧米でガン告知を始めとするインフォームドコンセントは非常に普及している。この差は一体何であろうか。死に対する接し方の違いであろうか。現在AIDSのような不治の病が告知さ

(松井 恵一)

れなかったら、病気の蔓延化が心配される。しかし、日本では患者の心を癒すものかないのが告知後の問題である。こうしたことを踏まえて一体告知についてどうしたら良いか、また自分のまわりの人間に告知する状況に成った際にどのように対処したら良いか、厳しい現実に考える点が多かった。

## これからの老人社会に向けて考える

---

先進国では、出生率の低下が急速に進み社会における高齢者の割合が像か傾向にある。こうした状況は日本やアメリカでも例外ではなく、老人が社会に投げ掛ける問題は数多く存在している。Indraniは、世界でも有数の長寿国でもあり、急速に高齢化社会に向いつつある日本を例に挙げて、これから自国ではどのようにして高齢者と社会が関係を維持していくのが良いのか考えていった。自分たちにも何れ関わってくる問題なので、白熱した議論が交わされた。

(Indrani Lall)



## 医学界での研究詐欺はなぜ起きるのか ～アメリカ医学界の現状と改善点～

---

Kenjiのペーパーは、アメリカの医療分野における研究開発現場でのいわゆる知的所有権・オリジナリティーをどのように保護すべ

(Kenji Hall)

きか、という問題を扱うものであった。この論文の中でKenjiは、過去実際に発生した研究開発におけるスキャンダルを取り上げた。

そしてその問題を審査・告発すべき公的機関が全国的に統一されないことが誤審や研究の妨げになっていることを指摘、一元的な公的審査機関の必要性を強調した。

オリジナル／コピーといった非常に微妙で困難な問題に医学の視点から取り組んだ興味深い論考といえることができる。

## 生殖技術と現代社会の生命管理について

生殖技術の発達、不妊の悩みを持つ夫婦に光を与え、多くの人に喜びをもたらし、社会において、何の疑問もなく受け入れられている様に見える。しかし、人口受精などの技術により、よりすぐれた生命づくりがますますエスカレートし、親のない受精卵の扱い、人口受精児の法的地位の問題など様々な困難

(阿古 智子)

をひき起こしている。私はペーパーでこうした問題を取り上げ、分科会での発表時には生命の大切さを再考する必要を重ねて訴えた。又、日本の優生保護法が、中絶をいくつかの例外をわけて認め、生の基準が政府により定められているおかしさを指摘し、生命管理について様々な角度から討論を行なった。

## ベビィファクトリー：生殖技術の意味すること

生殖技術のめばしいアメリカでは、様々な形で“生命づくり”が法などによる規制はなく無秩序に行なわれている。Senakaはこうした生殖技術がどのように使われているのか、その実情を調査実際にはその成功率が低く、女性の体を傷つけることを訴えた。又、精子

(Senaka Peter)

バンク・代理母あっせんなど、商業ベースにのせて、技術を発展させていることに対し批判の目を向け、倫理的な側面から、生命の扱いに対する根本からの問題を見直す必要性を説いた。

## アメリカにおける“古い”の問題

Mitziはアメリカで歳をとることが何を意味するのか、植民地時代下のアメリカから現代までの歴史的な考察を行い、“古い”は現代社会において不当にもマイナス評価しか与えられないと言う。人々は少しでも若さを保つ為に様々な努力をする。そこには老人を必要としない現代社会の病理性が見えるのではないか。また歳を重ねた人々を“老人”としてステレオタイプ化するマスメディアの影響も大きいと指摘する。老齢化の進むアメリカ

(Mitzi Hnizdil)

社会は今、老人の地位・役割・福祉を見直して人が死ぬまで独立した一個人として生きる事の出来る道を見出だす努力を開始する必要があるのだ。

報告の後、アメリカと同様に高齢化社会を迎えつつある日本の現状を交えて、人が歳をとるとはどういうことなのか、自分はどんな歳の取り方をしたいと思うか、またそのためには社会をどう変えていくべきか等について日米双方から活発な議論が交わされた。

## 医療面から見る南北格差

私は医療という角度から南北間の問題を考察した。平均寿命・栄養摂取量・医者一人当りの人口・死因・下水道の普及の国際比較、インドと日本での人口における男女比、そしてイギリスでの階級別ガン死亡率のチャートを用いて、国の経済的豊かさ・文化・性別の違いが各国で個人の健康をどのように決定しているのかを分析した。医療の面から見た時に、南北格差の問題はいっそう明らかになる。作成したチャートでグループ1に入る日本・アメリカを始めとする先進国は、グループ7のいわゆる最貧国（エチオピアなどアフリカ諸国）の約1.5倍の栄養を摂取し、約1.6倍長

（高橋 香織）

生きをし、受ける医療の量は約7倍である。先進国の人々が、臓器移植など先端技術の恩恵をうけてより長く生きる機会を与えられる一方で、5ドルの予防接種を行なう余裕もない後発発展途上国の人々は、低い生活水準の中最低限の医療も受けられずに軽い伝染病で命を奪われている。人の命の重さは平等だと言い切れる現状なのか。ODAなど北側から南側への国際援助における、開発からBHN（基本的人間ニーズ）への重点の移行などが論じられ、人間の生命・健康・医療といった視点から南北間の不平等更正への道が模索された。

## 哲学と宗教

### 総 括

日米学生会議に集まった人たちは何を求めているのだろう。

「日本とアメリカとの友好を育てていきたい。」

「アメリカの学生の本音を知りたい」

「日本の学生と出会い、語ることで共通点や違いを見つきたい。」

しかし、その奥にある目的は何なのだろうか。

「自分の人生の充実」ということと結び付いていないだろうか。

この分科会ではサブタイトルを『The Search for the Meaning of Life』とし、とくに「哲学」「宗教」という言葉を広義にとることでメンバーひとりひとりがどんな人間なのかを本音に近い部分で語る事ができたのではないか、という気がしている。つまり、自

（遠藤 繁）

分なりの信念やこだわり、人生観、人間観、物の考え方などをすべてこれらのカテゴリーに含めることにより議論はより身近なものになったのである。

進路やその他のことでの決断にはそれなりの考えに基づいているだろうし、自分の身近な例を語ることで人間というものの面白さを考えることができた。話された事柄は哲学と宗教そのものから民族と偏見について、さらに戦争や平和、愛、死など根源的なそして改めて問い直されて然るべき問題にまで広がった。そして人間というものの奥深さを改めて考えさせられたのである。

自分の納得するまで質問をするマイキーこと田中、サイケなファッションにも関心があり

顎に手をかけるポーズが会議でもお馴染みになった無神論者のDana、トルストイの「戦争と平和」に感銘を受け、人生観にも影響を及ぼしたと言うシバこと芝崎、敬虔なクリスチャンで真剣に人の話を聞くChristopher、ギリシア正教を信じ心の優しいPete、そしてコーディネーターの私。アメリカに於ける実地研修のための指導や連絡は、初めての経験なので戸惑うことも多々あったが、皆に助けしてもらったことに感謝している。さらにお世話になった実地研修先の方々にも感謝の意を表したい。

日米各4名が用意したペーパーに基づく発表の他、1つのテーマを自由に語り合うジェネラル・ディスカッション、そして哲学や宗教にまつわる所へ実地研修へ行った。会議期間中に開かれた分科会は10回、詳細は以下の通りである。

#### <ワシントンD.C.>

第1回 ハワード大キャンパスにおける自己

紹介と分科会の説明

第2回 実地研修 「B'nai Bith Kulzhick Museum」(ユダヤ人博物館)

第3回 ジェネラル・ディスカッション「ユダヤ人博物館を訪ねて」

第4回 ペーパー発表：松本、Rajesh

第5回 実地研修「ワシントン大聖堂」  
<ナッシュビル>

第6回 ジェネラル・ディスカッション「愛について」

第7回 ペーパー発表：田中

第8回 ペーパー発表：遠藤(死について)、芝崎

<コロラドスプリングス>

第9回 実地研修「空軍士官学校 哲学・芸術科部長Mal Wakin氏の講演」

第10回 ペーパー発表：Christopher、Dana

・自己紹介

Peteと芝崎はあいにく体調を崩し欠席、と



「ワシントン大聖堂にて」 Rajesh Krishnan, Christopher Pixley, 松本 安代(一人おいて), 遠藤 繁, 田中 剛

いなかで行われた自己紹介には次のような意図があった。ジョイント・オリエンテーションでの自己紹介を経て、さらにお互いを知り合おうというものである。ハワード大のキャンパス内で陽射しを浴びながら質疑応答を交えて行われていった。

本音での語らい、がモットーであったがこんなエピソードがあった。肌の色に関する質問がこのときに出たのである。自らが選ぶことのできない出生の問題についての質問は日米学生会議そのものを考えることにもつながった。聞いてほしくないことがあるのだから気をつけなければならない、それでは疑問に思ったことを聞いてはいけないのか。

「こうして話していくことで理解が深まるし、それが会議の意義だと思う。」  
尋ねられた本人はそう答えた。自分の疑問について答えを満たしたら終りにするのみでなく、誠意が必要であることを改めて感じさせられた。

#### ・実地研修

##### 1. ユダヤ人博物館

ワシントンD.C.市街にあり、ユダヤ人の風習、芸術、信仰を紹介しているのがこのB'nai Bith Kulzhick Museumである。ユダヤの歴史に沿って展示されているのは生活用品や宗教の道具、絵画などであった。案内の女性は我々に信仰している宗教を尋ねたりしながらこれらを紹介して下さった。誕生、結婚、死を重視しており、なかでも13歳という年齢は特別なこととして祝いごとをするとのことであった。

##### 2. ワシントン大聖堂

地下鉄に揺られること40分近くで駅に

着いたが、地図を頼りに大聖堂探しをしなければならなかった。ユダヤ教会と思われるドーム状の建物をながめつつ、閑静な住宅街を歩いて行った。そしてようやく、灰色の丈夫そうな大聖堂を見つけたのである。

ここは宗派や国籍を問わず、ジョージ・ワシントンが「首都に国家的役割を果たす教会を作ろう」と計画したのがその起源だという。建築様式にも特色があり、鉄柱を一切用いないゴシック建築の手法が使われているということだが、とにかく大きな聖堂にただ驚くばかりであった。全米の州旗がかかげられた本堂はとても広く、ステンドグラスも外の日光に照らされ美しいものであった。教会で祈りを捧げた後、クリスは聖書からの逸話が描かれている、として天井絵を説明してくれた。そこには神を信じない物が醜く、信じている物には救いが差し出されるということが描かれていた。パンフレットはさまざまな言語のものが用意されておりこの聖堂の趣旨の理解の普及に努めているようであった。

ちなみに私達が訪れていたとき、多数のテレビカメラを目撃したがこれはビル・クリントンが大統領選挙のための演説に来ていたということであった。

##### 3. Mal Wakin氏の講義

空軍士官学校の制服で現われたWakin氏のお話は戦いという状況に求められる道徳についてであった。軍人としての美德としては勇気、忠誠、服従、正直さが挙げられるとし、さらに「ミー・

ジェネレーション」には自己中心的な人間が多く、利己的でないことが重要だと説いた。また、アメリカの軍にはベトナム戦争の影響が色濃く残っており、その攻撃ぶりや女性・幼児に対する態度は“shameful example”としていた。人権に対する権力を考えるとき、倫理について考えるべきでそれは戦争とも深く関わっている、という氏は軍の教育が政治、心理、歴史など広範に及ぶことを紹介した。軍では20%が女性で黒人の採用も積極的であるという。

何故、人を殺す戦争という手段が選ばれるのか、それは道徳的にみてどうなのか、という質問について、氏はあくまで最終手段の立場であることを強調し、人権侵害を敵としていた。同時に「一般市民を避ける攻撃は難しい」という言葉が印象的であった。そういう意味でも学問の大切さがあるわけだが、やはり現場の方のお話は興味深く、活発な質疑応答が続いた。

#### ・ジェネラル・ディスカッション

「愛について」

バンダービルト大学のモダンな食堂で開かれた分科会では、その前日のジェンダーナイトを受けて愛というものを考えた。家族、結婚、婚前交渉、同性愛など次々と話は続いていった。同性

愛については興味本意で取りざたされることが多いが、アメリカ側から「自分は今はストレートであるけれども、将来同性愛者になることは否定しない。」という意見が出された。また、宗教と同性愛の制約についても意見が出された。また、愛というものに夢中になるのは人間の墮落した姿である、という意見や女性は家庭に入っているべきというよりは、家庭は共に創っていくものだ、ということも話された。婚前交渉についてその是非が話された時も素直な発言は続き、例えばケース・バイ・ケースでその都度、責任を持てばよいとする意見や、結婚まではそれを認めないとする意見も出て来た。時の経つのを忘れてしまうほどのひとときであった。

#### ・最後に

取り扱う内容がプライバシーに関わることもあり、どうなるか心配もしたが素直な意見が毎回聞けて大変嬉しく思っている。こうした分科会を持つことが出来たのは、一人一人の「人生」を真剣に考える姿勢の賜物であると思う。この分科会のアメリカ側のコーディネーターで、止むを得ず会議には出席できなかったベイジにも準備段階からアイデアを練ってきた仲間として感謝の意を表したい。そして、いつまでも人生に対して正直で真摯でありたいと思う。

## 日本におけるキリスト教

哲学と宗教という分科会テーマに基づき、Rajeshと松本とが共同でプレゼンテーショ

(松本 安代/Rajesh Krishnam)

ンを行った。Rajeshはフランススコ・ザビエルに始まる日本におけるキリスト教の歴史に

ついて、松本は自身がクリスチャンホームに育ったことから“二世”クリスチャンとして日本社会におけるキリスト教の受容についての考察を行った。

前日の分科会でユダヤ博物館を見学したこともあり、プレゼンテーションの中では自分にとって“宗教”とは何であるか、また“宗教”の強い影響下にある文化とは、何かそしてその文化で育つ人々にとって“宗教”とは何であるのかを考えるものとなった。

Rajesh、松本が各自のペーパーの中でも触れていたことだが、仏教・神道を中心とした宗教的背景を持つ日本人にとって、唯一神信仰であるキリスト教は異質なものとして映るのではないかという意見が出され、話題は

キリスト教文化論から日本文化論に移ることもあった。また分科会メンバーの中にカトリック、プロテスタント、ギリシャ正教の信者がいたため、それぞれについての違い、またアメリカと日本の教会そして信者についてといったことにも話が及んだ。

私見ではあるが“宗教”とは最もプライベートな事柄の1つであるため、なかなか話題にしにくく、ましてや議論など非常に困難である。しかし、今回のプレゼンテーションは“宗教”（この場合キリスト教）の違いは何であるのかといった話題であったから、お互いの“宗教”そして哲学の違いを話しあうということが気楽にできたように思う。

## 『戦争と平和』における人生の意味の追求

この論文の目的は、トルストイの長編小説である『戦争と平和』を主な材料に、その中の主要な登場人物がナポレオン戦争の激動の中でいかに生き、その体験を通してどのような人生の意義を追求していったのかを後付けることによって、哲学・宗教における最重要の命題の一つである人生の意味の探求に関して、何らかの回答を見出そうとすることである。

この論文では、まずその主要な論点が要約され、次に『戦争と平和』のあらすじに関する簡潔な説明がなされる。その後、『戦争と平和』の主要な登場人物のうち、ピエールとアンドレイに焦点を当て、その生き様と人生観の変遷語られる。そして、それを基にして、筆者自身の人生の意義に対する結論が、多彩な引用の助けを借りて説明される。

その論旨によると、人間の立脚すべき立場

(芝崎 厚士)

は自分自身という「個人」と、地球ないしは世界、あるいは宇宙といった言葉で表される「すべて」の2つであり、その中間に存在する家族・民族・人種・地域・国家といった日常我々が依拠しているものはすべて自己同一性の投影の擬似的な対象にすぎないということになる。そして、人生とは、「個」の持つ宇宙と、「全体」としての宇宙とを結び付けようとする決して到達することのない、従って永遠に続く無限の努力の継続がある、ということになる。

筆者の結論は、徹底した個人主義に基づいた世界市民的なアイデンティティーの創出にある。偽りや自己嫌悪を廃し、自分の本当にやりたいと思ったことをやり続けることでしか人間は成長し得ない、という観点から、彼は個人主義的な自己形成に議論の出発点をおく。しかし、彼はいわゆる個人主義に全幅の



信頼をおいてはいないようである。むしろ彼が主張したかったことは、個人主義という原理原則というよりは、どんな環境にあっても自己の周囲に対する認識・理解・判断を自分自身で行い、自己の選択を自分で選び取るだけの能力を養うことが大事であるということだったようである。

彼は個人主義に立脚点をおきつつも、彼自身の判断の結論として、日米の学生は世界市民的なアイデンティティーに基づいた地球的視野に立った行動を最初に起こすだけの条件を揃えているのだから、率先して実践を行う

べきだとして、それを「義務を使命に変えること」と表現している。この論文の最後の段階では、彼は個人主義的な認識から世界市民的な結論に辿り着き、最後に実践の段階でまた個人主義的な立場に立ち返る、という論理展開を見せている。

実際の話し合いにおいては、アメリカ側にとっては世界市民的なアイデンティティー観が、日本側にとっては個人主義的な認識論が、それぞれ議論の対象となった。また、その豊富な引用を元に、様々な人生論に関する本についての情報交換も盛んに行われた。

## 本当の「幸福」について

誰でも一度はこんなことを考えたことがあると思う。

「自分の人生の実りあるものにするには何をすべきなのか。」

少なくとも私自身は、いろいろなことに興味を持つけれども最終的にはすべての事柄が自分の人生の充実、という目的に帰着している気がしている。なぜ、私は自分にこんなにこだわるのだろうか。それは「幸福」なことなのだろうか。今回、私が発表したテーマを貫く問いかけはこんなことであった。私、という人間を改めて考える意味でも、そしてメンバー一人一人の人生が議論から伺えたという意味でも、勉強になる時間であった。この尊いひとときこそ「幸福」のそれだったのかも知れない。

さて、私の発表は夏目漱石の紹介から始まった。彼をどれだけ理解しているのかは分からないが、遺されている彼の日記や言葉、著作から彼の考え方を推察することはできる。従って私の彼に対する叙述は『こころ』を中心と

(遠藤 繁)

する著作に加えて彼の生きた時代背景への考察が基盤となっている。

彼が生きた明治という時代は俗に「上からの近代化」という評価が下されている。自分の年令とその明治の年号が歩を同じくしていたことからくる帰属意識と、権力への冷静なまなざし。彼の言動からはその双方を読みとることができるのだが、彼の著作にはさらに「我はどう生きるべきか」というテーマがときにストイックに書かれていたりする。例えば不倫ということと俗に言われている「徳」の狭間に悩んでいたりと、欲と倫理そしてエゴイズムのバランスを失うことについてであったり、いつも主人公は「どう生きるべきか」という問を発し続けている。彼がこんなに規範めいたものにこだわり続けているのは何故なのか。この答えとして私はその時代に原因を求めた。そしてよく彼が用いる言葉「高等遊民」の理想像ともその問いの答えは関わりがあると思うのである。

次に私はある学者の人間研究をとりあげた。

「私」に対する意識、すなわち自意識は13歳ごろに始まる、と説く彼は具体例として、自分だけが不幸な人間と思ひ込んだり、ニヒルを気どって素直に感情を表さないことを挙げている。

こうしたすべてを鑑みて私は「死」との関連を考えてみた。「死」とは未知のものであり、どうなっているのかは全く分からない。この「死」こそ自分へのこだわりを起こさせる原因ではないだろうか。かつて漱石は己れをすて去り天に従う、という意味で「則天去私」という境地に達した。こうした境地への到達も「幸福」と考えることはできないだろうか。

おそらくこうした問いは今後も自分のなかで続く気がする。「幸福」「死」など漠然とした言葉に自らも思案しながらRajeshのこの

質問で議論が始まった。

「人生の目的は幸福を得ることにあるのだろうか。」

さらにChristopherがこう続けた。

「僕は死を恐れてはいない。」

信仰するキリスト教の自分自身への影響を認めながら

「この世の中（ユニバース）を僕は受け入れている。人生とは永遠に続いていくものなんだ。」

と言うのであった。これを契機に各自が死生観を披露した。死んだらそれまで、おしまいである、という意見もあれば、死んだ人はどこかで自分を見つめている気がするという考えもあり、人生の稗の取り方にも様々な違いが現われた。時間をたっぷりかけて話し合い改めて「人生の意義」を考えだ時間であった。

## 生きる意味を求めて

(田中 剛)

論文など書いたことがなかった（いきなりこのようなお題目が与えられ）私は当初何を書けばよいのかわからなかった。リサーチをして本を読む時間というよりも自分のことを伝えたいと考えた。そして私は、最近会って、その人の生き様に感激したことについて書こうと思った。思い入れが強い分伝えたいことがたくさんあり、全体を通してまとまりをもたせるのに大変苦労した。いかに自分自身が毎日何をすればよいのかわからず悶々と過ごしているのだから思い知らされたのであった。

私が発表したのは名古屋で会った看護婦さんについてである。彼女は、日雇い労働者の健康生活を守るため、ボランティアワーカーとして毎週のように働いている方だった。彼女は芯の強そうなしっかり者のお姉さんといっ

た印象であった。ある時、私は彼女の告白を教会で聞くことになった。そこで私は彼女の一筋縄ではいかない過去について聞かされた。

彼女の告白によると、ある時、彼女は長い間、人生の支えでもあり人生の目的でもあった男性と、ある経緯で別れなくてはならなくなったのだそうだ。一途な彼女は毎日死ぬことばかり考えて生きてきたのだそうだ。このままではいけないと思った彼女は、インドヘマザー・テレサのもとに働きに行った。もちろんボランティアである。

そもそもボランティアとは何なのだろう。確かに正当な仕事に対して正当な報酬がもらえることが、少なくとも資本主義社会のイデオロギーでは健全な姿のあり方だと思う。だが実際の社会で、誰でも好きな仕事について

満足しているわけでもないし、政府の福祉政策にしろ、漏れは多いのが現実である。無償の救助は、好きでなければできないし、自己

の存在確認へも繋がるのではないだろうか。まさに『時代はノーブレス・オブリーシュ』なのであろう。

## 「哲学としての宗教—西欧文化における哲学と宗教の調和」

(Christopher Pixley)

Christopher Pixleyが、このレポートにおいて指摘したかったことは、以下のように要約できる。現代の西欧において、哲学は真理の探求を使命とし、一方宗教は神性 (diety) に対する崇拜を使命としており、両者は構造的に対立している。しかし、彼の意見によると、前者は相争う (conflict) ものではなく、補完し合う (complement) ものである。彼はその根拠を、17世紀の思想家、スピノザに求めている。

スピノザは、「神=自然」と見做し、科学や哲学によって自然を探求することはそのまま神に仕え、神の意図を明かにすることに他ならないということになる。このような視点に立つと、科学の発達には神性を冒瀆 (ぼうとく) するどころか、そこに近付くための手段ともなり得るということになる。したがって、哲学と宗教は相互補完し合うものだ、というわけである。

彼は、以上の論旨を、プラトン・マルクス

=アウレリウス・ガリレオ・アインシュタインなどと西欧の思想家達の豊富な例を引いて、議論をいっそう引き立たせている。

Chrisの発表は分科会の名称そのものにかんする、根本的な課題を取り扱ったものだったため、メンバーの間では、「哲学とは?」、「宗教とは?」という根源的な問いかけがなされた。Chrisの論旨に対する疑問としては、スピノザの論に従う限り、哲学と宗教の相互補完性をいくら唱えてみたところで、神を最上位に「存在」するものとしてとらえていることには変わらないのではないかと、といった疑問がおこった。また、神学をどのように位置付けるのか、ひいては神の絶対性と科学の (ある程度の) 相対性との関係をどのように説明するのか、といったことが話題となった。さらには、宗教自体の多様性をどのように認めてゆくのか、などについても盛んに議論が交わされた。

## アフリカ系アメリカ人に対する社会の圧力

(Dana Reed)

「公民権運動以前の世界or(アメリカ)or世の中特に、アフリカという国について私は知らない。」とDanaは言った。そして次のことを強調した「私はアメリカ人・私はデナ・リード」ポリティカル・コレクトネスが台頭してきても、それを私は言いたい。アフリカ系アメリカ人に対する社会の圧力には次の3つがあ

ると思う。1つめは先入観である。黒人に対する偏見は私にとって迷惑であるのだ。2つめは教育である。ふつうテキストは白人によって書かれており、それはつまり彼等の視点であるにすぎないのだ。だから私は黒人が大多数を占めるハーワード大学を選んだのだ。3つめは差別である。これには逆差別も含まれる。

仕事などの機会を得るにも苦難が伴うのだ。私はビジネスを学ぶ学生として、世界にとび出していきたいがそれには罪悪感を覚える。

発表はペーパーなしでディナが上に記した彼女の思いを淡々と述べていった。メンバーとの質疑応答を終始冷静に答えていた。白人を嫌う傾向が黒人にはある、と感じていること、特にディナがすごした高校はほとんどが黒人でテンションも高かったことが発表に加えて述べられた。同じマイノリティとしてのアジア系アメリカ人に対してどう感じるのか、という問いに対しても1人1人を見ていくことを彼女は強調していた。これに関してはアジア系アメリカ人の学生から、「Asianはunityをもっと強めるべきだ」という論調がある、ということが示唆された。

毎日鏡を見るたびに自分がアフリカ系だと

いうことを確認させられてるということ、法的にいくら変わってもメンタリティは変わらないということ、さり気ない口調で笑わずに語るディナの言葉は、アメリカという国で生きている彼女の日々直面している問題そのものであり深く考えさせられた。



「ユダヤ人博物館にて」 Dana Reed, Rajesh, Christopher, Pete Sakellariou Panayiditis, 遠藤, 田中, 芝崎

## 科学技術の新世代

### 総 括

分科会を通して感じたことは一口に「科学技術」と言っても、様々なアプローチがありうるという点である。提出された論文のテーマを見て頂きたい。これらはそれぞれ提出者の個性や立場と密接にかかわった形で提出されたと思われる。一言つけ加えればいわゆる理科系専攻の者はメンバー中一名にすぎなかった。何にしる科学技術という対象を特定の限られたフィールドとして扱わなかったことが結果として良かったのではないかと思う。

科学技術には様々な顔がある。国家利益の中心として、現代文明の基盤として、人々の福利を決める要素として、戦争を考える鍵として、そして「近代」を近代たらしめた役者

(猪刈 由紀)

として、科学技術を問うことはつまるところこうしたあらゆる問題を問うことであり、我々の討議はそのそれぞれに何らかの手がかりを与えるものともなりえたはずである。

総括をコーディネーターとして書いているわけだが、他のメンバーはここまで読んで何を思うだろう。彼らの総括は私のものとは全く異なる様な気がしている。とにかく時間が短かすぎたというのか私の正直なところである。この分科会を通してメンバー一人ひとりが何を感じたのかも含め、もっと話せたら良かった。議論の盛りあがりには申し分のないのだが持続力が今ひとつで短距離走といったところだろうか。



(左より) 猪刈 由紀, 高橋 博, 菅 武志, 平竹 雅人, Jin Gil Lee  
Binzee Gonzalvo, Rika Kanazawa, Anastasia Gregoire

私が他のメンバーに望むことはそれぞれ苦労して書き上げた論文とそれに対し関わされた議論から得たものを今後各自の中で発展させて行って欲しいという事だ。そしてまたいつの日か議論を再びまじえる時がきてほしい

とも思う。

最後に実地研修先として我々に貴重な機会を与えてくれたA.I.Daジョンストン氏ヴァンダービルト大学川村教授、アウワー教授に感謝の意を表したい。

## 実地研修

### 1) スミソニアン博物館

初回の実地研修としてスミソニアン博物館を見学した。日本で言えば上野の科学技術博物館といった所だが、なにげなくトマホークとSS20の模型が並んで展示してあったのがさすがはアメリカなのだろうかと思に残った。

### 2) Agency for International Development

ワシントンD.C.にある政府組織、国際開発局の事務所にてディレクターのDavid Johnston氏にお話を伺った。事務局は、発展途上国向けの技術協力を目的とし、当然ながら

その活動内容は科学技術にとどまらない。政府組織の場合いかにしてきめの細かな活動を可能にするかが大きな問題だが、事務局で働く人達の和気あいあいとした雰囲気は国家間の援助関係とは言えやはり基本は人と人とのつながりだと感じさせてくれた。

### 3) ヴァンダービルト大学川村・アウワー両教授

ナッシュビルではヴァンダービルト大学の川村、アウワー両教授にお話を伺った。まずロボット開発に取り組んでおられる川村教授に実際に研究室を案内して頂きながらロボット開発の最先端の様を見学した。続いて日

本の状況にも詳しいアウワー教授から技術開発競争や開発された技術の権利確保にまつわ

る問題など興味深いお話を伺った。

## Science and Technology for Global Security

---

(菅 武志)

科学技術はいろいろな目的のために応用され、我々の生活を豊かにしているのはいうまでもない。がしかし、それは特にアメリカにおいて国防、すなわち軍事技術に適用されていることも事実である。そして強大な力を持った軍産複合体が現れ、第三世界を中心に大量のハイテク武器が輸出され、第三世界の軍拡競争に拍車をかけていることも否めない。

科学技術の進歩とともに、この状況も少しずつ変化し新しい局面をむかえつつあるのである。以前であれば、軍事技術から民間技術へ転用されている軍事技術優位であったのであるが、今、その状況は逆転しつつあるのだ。すなわち、自由競争市場での民間技術の進歩は著しく、軍事技術へ転用されるという優位に立つようになったのである。

このことは何を意味しているのだろうか？ それは、民間企業による武器の開発、部品提供といったような武器提供源の多元化や武器開発、輸出競争を暗示しているのではないだ

ろうか。もし、各国がこのまま軍事的安全保障のみに固執し、多額の軍事費を使っていけば、民間企業は利益追求のために武器の開発輸出競争を行う可能性がある。もしそうなれば、世界がどうなっていくかは想像に難くない。

それでは、科学技術を何に應用していくべきなのだろうか。今、環境破壊や人口爆発など地球的安全保障を脅かす危機が山積しているのは知られているが、それに対する科学技術の果たす役割が大きいにもかかわらず、ほとんどその役割を果たせていないのが現状なのである。例えば、アメリカや日本において環境問題のための研究開発費の割合があまりにも低いことなどがあげられる。この分野において、アメリカと日本がリーダーシップを取る余地はおおいにあるといえる。

科学技術を何に應用していくかに、我々の未来がかかっているといっても過言ではないだろう。

## 科学は権威主義を乗り越えているのか？

---

(高橋 博)

歴史的考察、科学に潜む権威主義、知の営み全般と権威主義との関係、という三部構成で展開される。

第1部の歴史的考察においては、世界観の歴史的変遷、つまり、科学がいかにして世界（特に西洋）の人々の価値観の中核を占めるようになったのかを問題にしている。ここで議論の核となるのは、宗教と科学の対立で

### [概要]

本論文で高橋は、近代科学という壮麗かつ堅固な建築物に懐疑の一石を投じるといふ試みをしている。つまり、科学は客観性という衣を纏い、その権威主義的な側面を覆ってはいるが、決してその「合理的」な科学というものが、特権的な地位を占めるのではないことを明らかにしようというのである。議論は、

ある。近代科学が世界を席捲するまで、西洋の価値観は、キリスト教（カトリック）という軸を中心にして回転していた。（そこで求心力として働いていたのは言うまでもなく聖書であるが）。協会の絶対的権力の下、人々は社会の様々な領域で特定の価値観を否応なしに強要された。しかし、近代科学の登場により、この宗教に色濃く規定された世界観は終焉を迎え、代わりに、「合理的」で「客観的」な科学的価値観と言うものが人々の心を支配するようになる。つまり、宗教などという「非合理的」なものに対してあくまでも理性的に異義申し立てをする科学者、という構図である。しかし、こういった科学に対する素朴な見方は、クーンやファイヤアーベントといった科学哲学者によって相対化されることとなる。

第2部では、それらの哲学者が投射した光が、どのような陰影を科学落としたのかを考察している。最も重要な点は、科学は真理と内在的な親和性によって宗教に取って代わったのではなく、実際は、宗教における権力主義的側面を、客観性という外皮にくるんで隠蔽した形でそのまま保存してしまったということである。変わったのは、正統派か異端かという二分法が、科学的か非科学的かという二分法にすり替わったということだけだといえる。科学におすては、「事実」を証拠としてそれぞれの理論の正当性が議論されるが、この「事実」自体が理論に規定されるものであり（すなわち理論負荷的である）、近似という操作なしにはそれぞれの理論は両立不能なのだということが、あまりにしばしば忘れられている。真理を追求する主体（subject）たるものは、同時に自らを含めた共同体の成員に、真理にかしづく臣民（subjects）たる

よう強制するものなのだというフーコーの犀利な考察は、今も真実味を帯びて我々に迫ってくる。

第3部では、科学の基礎となる知の営みという大きな制度自体の権力主義的側面を検討している。知の営みは、2つの点で権力主義的である。第1に、科学や数学で主として用いられている言語に代表されるような言語体系は、まさにローマカトリックにおけるラテン語の現代版であるといえる。それを身につけていなければ、議論に参加することも、社会において重要な働きをすることも許されない。しかも、その言語は秘儀とか神託といった閉ざされたものではなく、万人の開かれたものであり、努力次第で誰でも獲得できるものであるため、見かけ上、権力を行使することなく、人々に公正なものと認知され、制度として定着してしまうのである。従って、いわゆる素人が科学技術政策などから疎外されていることも、至極当たり前のこととして認識される。第2に、知という制度は、実際には、先端の科学者やそれらの知見を利用できる地位にいる政治家・官僚を頂点に、科学的知識を持たない一般市民や生徒らを最下層に据えた、巨大なヒエラルキーを形成している。しかも、ローマカトリック協会が、人々に自らの「真実」をいわば押しつけたのに対し、科学においては、客観性に支えられた「真実」が、より快適な生活を保障してくれるものとして、極く自然に受け入れられてしまうのである。

これら一連の考察を経た後、結論部へと進む訳だが、実際のところこのような複雑な問題に結論を出せるほど筆者の考察は成熟しておらず、また、それらしい結論めいたことをいうのはある意味で無責任にも思われ、筆者

は問題を提起したという極めて都合のよい終り方で本論文を締めくくっている。ただ、ここで提起したわうな問題は、これからの世界を創っていくにあたって、欠くべからざる視点であるということ指摘することは、許されるであろう。

#### 〔議論〕

本論文に対する反論は大体次のようなものであった。「権力主義的というが、実際に権力主義的なのは科学技術の方で、科学自体は中立な存在であるはずだ。科学的知見を様々な技術に応用して悪用しようとする時点で初めて権力が介入するのであり、それが権力主義的になるかどうかは、それぞれの共同体が選択する政治形態によるのである。現に、この論文のような科学に対する反論が自由になされるということ自体、科学が中立であるということを証明しているのではないか。」

これに対する筆者の反論はなかなか反対派を納得させるには至らなかったが、以下のように要約できる。まず第一に、どのような政治形態であるかを問わず、科学は否応なしに我々の生活を、その最も基礎的な部分で規定するものであるという意味において権力主義的なのである。それはある意味で主体なき権力主義とも言えるが、逆に、無数の主体によって裏書きされた権力主義という側面を色濃く持っている。そこには、目的論的世界観から機械論・合理論的世界観への移行が内在しており、その移行によって自然を操作可能な対象として捉えることを可能にした時点で、すでに科学は自らの手で様々な権力の介入を必然的なものとしたと言えなくはないだろうか。第二に、科学について批判できるということは、科学の中立性を証明するのではなく、逆

に科学の「客観性」の神話に真実味を加え、それを補強すると結果となる、ということに真の問題点を潜んでいるのである。それはちょうど、新聞が新聞批判を載せることで自らの公正さを演出するという事態に似ている。新聞批判をする者は、純粹に批判を行なおうとするが、それが紙面に掲載されることが、常に新聞社との補完関係を形成し、結局は新聞の権力を補強する役目を担ってしまうというところに、彼らはどうしようもないジレンマを抱えているのである。これと同様のことが科学批判にも言えるのではないだろうか。

最後に一つだけ言っておかなければならないが、科学の「恩恵」を享受している我々が（自分も含めて）、日常生活の快適さを手放さない範囲で、ナイーブに科学批判をすることは、説得力に欠けるだけでなく、胡散臭くもある（実際、この原稿もコンピュータによってディスクに磁気信号として記録されて書かれている）。しかし、だからと言って現在の生活を捨てて、原始的な生活に帰ろうと提案することは何の問題解決にもならないのではないか。原始的な生活に戻ると言うことは、ベクトルを逆にするだけで、科学的世界観が支配する世界で生活するという事態を少しも変えることにはならない。我々はもうすでにこの世界にいるのである。我々が出来ることは、科学がもたらしてきた結果を冷静に吟味し、人間が地球という固有の場所で生活して行くために、どうやって科学という概念を広げ、あるいは限定し、科学を科学という名の全く異質で、柔軟性のあるものにしていけるかということではないだろうか。それは、徒に反科学的な反動を起こすことではないであろう。答えはどこか別のところにあるはずである。その意味で、本論文は何も解決してい



ないと言えるが、少なくとも、現状を変革する必要性について、各人が考えるきっかけを

作り出す役目は果たせたのではないかと思う。

## 新たな科学技術政策の黎明——「適合技術」を中心に

(Binzee Gonzalvo)

Binzeeは本論文において、科学技術政策の変革の必要性を「適合技術 (Appropriate Technology)」といった新たな潮流、また、科学技術教育における基礎教育の充実、という文脈の下で説いている。全体の構成は下のようになっている。

- (1) 科学技術政策の変革
- (2) 新種の「社会的」テクノロジー
- (3) テクノロジー教育

以下が、それぞれについての概略であり、Binzeeの主張の骨子である。

(1) アメリカ政府は技術開発に膨大な資本を注ぎ込んでいるが、その大部分は軍事兵器に充当されている。(合衆国の産業R&D投資の3分の1は防衛産業に流れている。)米国は日本の民間技術開発へのバランスのとれた支援態勢を見習う必要がある。すなわち、これからアメリカの舵を握ることになる指導者たちは、科学技術政策の転換の重要性、つまり軍事偏重の政策から民間の応用技術重視の政策へ移行する必要性を認識せねばならない。

(2) そのひとつの実践例が「適合技術 (Appropriate Technology)」であり、その眼目は開発と社会変革にある。先端技術分野で先進国が熾烈な開発合戦を繰り広げている間にも、発展途上国の問題はさらに深刻さの度合いを強めてきている。日本とアメリカは経済と技術の面において多大な影響力を誇り

(この2国で全世界のGNPの40%を占める)、科学技術分野における主導者の座を墨守しようと躍起になっている。しかし、日米両国は今こそ世界的視野で技術問題を捉えなければならぬ。

ATは、開発の遅れた国々をも視座に据えたユニークな工学技術の一形態である。環境管理の新しい概念として登場したATは、製造工程で生ずる廃棄物の極小化に焦点をおき、それぞれの地域の労働力と資源を可能な限り活用し、その住民が新しい技術を理解し、独力で管理・維持できるよう考案された。ATの推進者は、個人レベルの努力よりも、地域社会レベルでの全体的な努力に優位性を認める。ATはエネルギーの保護・管理だけでなく、均等に分散された、リサイクル可能な資源(太陽熱・風力など)の活用を促す。また、いまひとつ重要な特徴として、特許、特許権使用料、資本投入義務、といった、他者との競争を激化させるような要素が一切内包されていないということがあげられる。それは、全員が協力してより良い世界を創造していこうという理念の反映でもある。ATはまた、地域問題への現実的な解決法でもある。地球レベルの経済問題を解決する手段とはなれない代わりに、ATは飲料水不足、家庭燃料の不足、非効率な農法の改善といった地方に密着した諸問題の解決に有効な手段を提供する。先進諸国と発展途上国との溝を埋めることはできないが、天然資源の再配分を、特に途上国に有利な形で促進する点は無視で

きない。

(3) 米国が、科学技術に関して認識すべきもうひとつの重大な側面は教育政策に他ならない。Scientific America誌によると、経営・管理者、各方面の専門家といった、指導的立場につくであろう上位20%の養成において日米両国に差はないが、残りの80%の教育において米国は大きな遅れをとっている。一例を取っても、コンピューターの普及率の低さは深刻な問題であり、より多くの学生たちがこの技術と接する機会を増やすのは急務となっている。このような教育制度の遅れは、必然

的に経済実績の低迷に結びつく。また、企業がいくら生産過程の効率化・高度化を敢行しても、それが円滑に機能するかどうかは、基本的に、労働者の学習能力に依存しているのである。全市民を対象とした(科学)基礎教育の抜本的改善が不可欠な理由もここに存する。

以上の議論を踏まえ、Binzeeは日米のコミュニケーションの円滑化と地域の枠を越えた技術協力の重要性に言及し、本稿を締めくくっている。

## 「科学」という神話を越えて～現代の科学信仰批判～

(猪刈 由紀)

私が分科会討議の為に選んだテーマは「科学」あるいは「科学技術」という、一見日本人の間でも、また一言語の枠を越えたところでも、共通する概念が確立しているような漠然とした認識を問い直すことであり、またこの再考の作業を通して、できることなら現代という時代を見るに当たり新しい視点を探るというものであった。

この荘大な意図(流石に書いている自分自身恐縮するのを禁じ得ない)のもと論文の用意に励んだとだけ記して結果の方はうさく言及することは避け、会議中の討議の様子に話を移そう。大変難しいテーマではあったが自分が「科学」の問題を考える際、最も興味ある根本部分に正面からぶつかって良かったと思ったのは、分科会のメンバーの反応や指摘から私自身考えさせられる所が多かったからである。

まず痛感したのは、どんなに自分自身が疑いの余地なく持っている理解であってもそれが具体的事例によって示せず、どうしても抽

象的にならざるを得ない場合、共通の理解に達するのは極めて困難であるということ。勿論そのためのテクニクもこの場合には当然問題となってはくる。余談になるが希有の天才か学者・哲学者であるマイケル・ポランニーの著作がアメリカの大学購買部や一般書店でなかなか見つからないことに私は少なからず驚かされたが、これも彼の議論が具体性で押しきれないが故(だからこそそこに深遠さがあると私は思うのだが)なのだろうか。

討議は結局、科学性という妄想に現代の人間は(私自身も含めて)取りつかれており、社会機構そのものに対しても科学の影響は浸透している、という私の主張に対する疑問の連続に終始した。とどめの一声は「言っている事はなんとなくわかるが、何故科学自身を悪いかの様に言うのか。」純粋な科学そのものこそ適用という風に分離して考える意見が根強く、そうした分離は不可能と考える私の立場は厳しいものがあつた。しかしこの率直な一言は私自身の考え続けて行くべき点を

ついてはいた。すなわち私の議論の射程内には善・悪その他の価値判断は入ってはいない。「だから科学は悪い」と言っている訳ではないのである。こうした議論に於いては近視眼的に倫理の問題に及ぶべきではないとは今でも思っている。しかしつかはその問題にも

何らかの形で答えねばならないのではないかという事を感じさせられた。

おしまいにこの討論に参加し、積極的に意見をぶつけてくれたメンバーにありがとうと一言記したい。大変ではあったが良い経験だったと思っている。

## 「米国型近代化過程」に関する議論

『近代化』とは何かという議論が始まって米国での特徴、また覇権国家としての米国の権力の確立過程とその伝播方法など真に多岐にわたる討論がなされた。

特に生産→消費という構造の中で発達した環境問題などの社会の歪みを如何に是正できるのか、その手段としての消費→生産構造の構築にどのように経済的インセンティブを持たせるのかなどが実際の日米の経済システムの比較を通して行なわれた。消費→再生産というシステムを作り最終消費が目的とされた社会から、再生産を念頭に入れたまさにエコロジカルな連鎖システムの可能性について、同時に流通組織の再構築を中心に論考された。

これらの動きを可能にする前提条件として

(平竹 雅人)

科学と技術の発達が論ぜられ、科学技術開発の果たす役割と重要性が今日の経済的システムが歪みと限界をみせる中で、結果として再認識されることとなった。



第 3 部 エッセイ

## 「私にとってのJASC」

五所恵実子

「自分にとってJASCとは何だったのか」  
第44回のJASCが終わってから2か月が経ち、  
きっと今頃は参加した誰しもの共通した  
問いをそれぞれの胸のうちで反芻しているこ  
とだろう。そんな中で私自身、昨年そして今  
年と「ふた夏」に渡るJASC生活を振り返っ  
てみると、どうも私にとってのJASCとは  
「普通の学生生活においては到底かなわない  
であろう貴重な経験の数々を体験するチャン  
スを与えてくれたもの」であると同時に、  
「留学生生活を充実したものにし、一年間のア  
メリカでの生活を締めくくるいわば総まとめ」  
でもあったようだ。最初の意味は43回に参加  
が決まってから現在に至るまで機会あるごと  
に何度となく強く感じさせられていたし、自  
分でも十分に認識してきていた。だが二つ目  
の本当の意味には閉会式の翌朝みんなと別れ  
のあいさつを交わしたその時、まさに最後の  
瞬間になって初めて気付くことが出来たので  
ある。

それ以前から少し喉を痛めてしまっていた  
ためだろうか。前年度の43回JASC開始直後  
に運悪く声が出なくなった。まさに相互理解  
を深めるためには欠かすことの出来ないはず  
の手段を失った私は、せっかく与えられた会  
議中の1か月という時間を自分なりに悔いの  
残らないよう、精一杯充実させるために他の  
参加者と筆談で対話をするという道を選んだ。  
というより、それ以外に良い考えも浮かばず、  
これしか他に方法が無かったのだ。最初のう  
ちは戸惑っていたみんなも、私がいろいろと  
喋りたくても実際にそうすることが不可能だ

という事実に次第に気付き、状況を受け止め  
始めてくれるようになった。不思議、という  
か面白いことには、そのうちに誰もがいつの  
まにか私と会話をする時には自分もノートに  
ペンを走らせて筆談をする、といった具合に  
自然となっていたことだ。彼らにはちゃんと  
声があるにもかかわらず、である。きっと自  
分を相手と同じレベルに置くことによってよ  
り自然な対話が生まれるということを感じた  
のかもしれない。私も実際に自分が失って  
みて初めて、声を発することの出来ない人達の  
苦しみや悲しみを実感として分かるようにな  
れた気がする。

精一杯やったつもりだった43回のJASC。  
それでもやはり悔いが残ってしまった。やる  
だけやったのだから仕方がないということは  
分かっている。それでも、もっといろんな人  
と思いきり話をしたり語り合ったりしたかつ  
たし、みんなのことを知りたかった、という  
思いからECへの立候補を決心した。Electio  
n2時間前のことである。もうその時点まで  
に9月からのアメリカ留学が決まっていたか  
ら、可能性としてはAECに挑戦しなければ  
ならない。私は与えられた短い時間の中でど  
れだけみんなに私の思いを伝えられるかちょっ  
と心配だったが、それでも自分が過去2回の  
アメリカでのホームステイを通してどれだけ  
多くのアメリカの人達の御世話になったか、  
また今回日本で開催されたこの学生会議中に  
日本各地を訪問し、これまた多くの人達の親  
切を受けてどれだけ感動したことか、そして  
出来ることなら今度は日米友好関係において  
他の人のために何かしてあげたい、つまりた  
だ受けるだけでなく、今度は自分から与え  
たい、ということをもみんなにかろうじて聞き取  
ってもらえるくらいのかすれ声で、それこそやっ

との思いで語った。そして8月16日夜9時。私は二年目のJASCに向かっての第一歩を踏み出した。

10月の頭と2月末にワシントンDCから車で20分、お隣のバージニア州にあるMr. Albricht (Don)の家で開かれた2回のAEC Meetingと、学期中それぞれの大学でコンピューターのBitnetによって行う通信がAECのコミュニケーションの全てであると言っても過言ではない。普段10人が顔を合わせる機会が無いだけに、このMeetingの時ばかりはそれこそ1分を惜しんで議題が進められていく。大切なことはきちんと話し合ってみんなが理解しておかないと、後でBitnetで意見を交換したり採決を取ったりする時に話がややこしくなり、大変なことになるからだ。西海岸から東海岸までは飛行機の直行便ですら5時間半もかかる。授業がバッチリ入っている学期中、木曜の午後のクラスに出席せずに夜間飛行に乗り、翌朝の到着後ゆっくりと休む暇もなく、それからの金土日の3日間はまるで集中合宿のようにただひたすら食べて、話して、寝るの繰り返し。そして日曜の夕方の便でまたそれぞれの場所に帰って行くのである。DCに居ながらほんの1、2時間の観光をする暇もなく、空港のロビーで飛行機を待ちながらみんながもくもくと教科書を広げている姿は何とも印象深かった。

AECになって、ほんとうにいろいろなことを考え、感じ、そして学んだ。その中にはAEC一人一人の人間としての個性から感じさせられたものもあれば、アメリカの大学生としての彼らという面から教わったこともある。例えば、みんな自己主張が強くて他の人の話がまだ終わらないうちに自分の意見を言い始めてしまい、まさに“激しい”という表

現がピッタリの議論の中で、Kevinはいつも発言順の交通整理をするのに大変だった。

(私は、といえは10月のMeetingでは意見が飛び交う凄まじさとみんなの英語のスピードについて行かれず、「こんなんで私、ちゃんとやってけるのかな。」とかなり不安になった。)その一方で一人一人が、それぞれ自分が一番いい!と思えば他の人が何と言おうと気にせずどんどん異なった意見を出してくる御蔭で、時には自分には想像もつかなかったような良いアイデアがポンッと出てくるが多々あった。そんな時は10人が集まって議論し、そこから新しいものが生まれるというところが面白かったし、またそのこと自体に感動すら覚えた。AECの場合、JECとの一番の違いはとにかく一緒にいられる時間が殆ど無いということだろう。このため議論ではいかにして限られた時間の中で必要な事を処理していくかが求められ、最終的には制限時間がきたらたとえまだ他に意見があったとしてもそこで話し合いを止め、要点を押さえてあとは多数決を取らざるを得ない。議論の最中はかなり集中力が必要だった。

2月のMeeting後はそれぞれが連絡を取り合いながらも、あとは自分の受持ちの仕事で一人で淡々とこなさなければならない。なんだか他の9人がみんな責任のある大きな役をこなしている中で、私は何をしているのだろうか、Leeは今ごろJECの中でうまくやっているだろうかと思うこともしばしばだった。そんなこんなのうち、ZubinとMaeleenと私の三人は7月7日から他の人達よりも一足早くDC入りし、JASC Inc.で最後の準備にかかった。そしてこの日からJASC開始までの約2週間で、ようやく私はECとして仕事をしている自分を実感出来るようになりとても嬉し

かった。23日にアメリカ側の参加者、そして26日には飛行機の遅れとバスが道に迷ってしまったためにくたくたになりながら、それでもエネルギー一杯にアメリカに到着した日本側の参加者全員がHemrockに集まり、こうしていよいよ第44回日米学生会議が始まったのである。

その後の1か月はアッという間に過ぎてしまった。どんな時でも親しくなった人達と別れるのはとてもつらい。それが10か月の間共に同じ一つの目標に向かってがんばってきた友人となら、なおさらである。LeeにとってJECから離れることが身を切られるように辛かったように、私にとっては特にそれまで一番身近で働き、苦勞を共にしてきたAECのみんなと別れることがまるで心がもげてしまう位悲しかった。そしてコロラドでの出発の朝は本当に身体の芯から泣いてしまった。あれほど人目も憚らず心の底から泣いたのはそれまでの人生で初めてのことだった。朝5時、外はまだ暗く出発の時間がせまる中、みんなをバスに誘導しなくてはという気持ちの一方で不意に「空港でなく寮でみんなと別れなければならない」という現実気付き、そこで一気に力が抜けて床に崩れてしまった。バスが空港に着いた時はそれまでの諦めの気持ちも手伝って一応平静だったのに、Anastasiaが目には涙を一杯に浮かべて“Bye…”と言いながら私をギュッと抱き締めてくれた瞬間、私は“もう駄目。これ以上は無理だ。”と、もはや溢れる涙を抑えることが出来ず彼女にしがみついてわんわん泣いてしまった。「AECが、アメリカでの一年が、みんな私をおいて行ってしまふ。これが最後なんだ。別れなんだ。」バスに乗り込むKevinとAnastasiaの二人の姿を目で追いながら、一体この気持ち

をどうしたら良いのか分からず途方に暮れてしまった。頭の中が真っ白で何も考えられず、帰りの飛行機の中では10時間、ただの一度も席を立つことなくひたすら眠りぼーっとしていた私だった。……

今でもあの出発の日の朝のことを思い出す度、胸が“キュー”となってしまう。自分で納得して選んだ当然のことながら、就職活動は夏の最盛期を6・7・8月とアメリカに居たため一番良い時期を逸してしまい、今のところ(10月30日現在)私はこの春大学卒業後に自分が何をしているのか定かではない。が何よりも嬉しいのは、この夏は何の悔いもやり残しも無く、それこそ好きなこと、やりたかったことを思い切りやってこれたという爽快感である。それにしても振り返ってみれば何と忙しく、慌ただしく、しかしまた同時に充実していて思い出が一杯の一年だったのだろう。そしてこれはこの一年ずっと思い続けてきたことだったのだが、もし44thJASCがなかったら、もし44回の実行委員の一人としてAEC、JECのみんなと共に働くという機会が与えられなかったら、きっと私の留学はもっと単純或いは単調な呆気ない一年としてさらっと過ぎてしまったことだろう。そして更にもっとずっと振り返ってみるならば、昨年JASC中に声が出なくなってしまうということは実は不運ではなく幸運だったのかもしれない。というのもあの時まさに声を失った御蔭で、43回に参加するだけでなく44回をみんなで作っていくという貴重な体験をすることが出来たからだ。そしてその結果、43回の友人との深い友情を育てられた上に、自分にとって今となってはかけがえのない存在になりつつある44回のJASCの友人達に巡り会

えようとは、つくづく人生何が幸で不幸なのか分からないものである。

私はこれまで実に多くの素晴らしい人達との出会いによって自分の人生が満たされるのを感じてきたし、これらかもそうであって欲しいと思う。そして願わくば私という人間が他の人達にとって、たとえほんの一部であったとしてもその人の人生を豊かにしている存在であってくれたなら、私にとってこんなに幸せな人生はないだろう。そしてJASCはその大きなきっかけを青春時代の素晴らしい思い出と共に、私に与えてくれたのである。

## FRIENDSHIP

Though JASC had ended  
The friendship we made,  
The time and memories we shared  
Will never fade

Now we go back to our daily lives  
Studying at school or starting work  
There are so many things  
That we must overcome

Whenever you face difficulty in your life  
Whenever you feel despair over the future  
of the world  
Remember that you are not the only one  
Who walks on a long steep road

No matter how hard it is  
Believe in your way and yourself  
Do your best, put in the effort  
To make your dream come true in life

There are miles and kilometers between  
us, but remember

That I am and we are always here for  
you

To listen to your pain and sadness  
As well as your happiness

The experiences in summer we shared  
Are the beginning of everything  
And the friendship we found  
Is what we should keep growing

Emiko

## 第44回日米学生会議に参加して

増井早知峰

「この記憶」が「あの記憶」にならないうちに何か書き留めておくほうが私自身にとってもいいだろう。この会議に参加したことが私にとってどういう意味があったかは本当に分からない。いつになったら分かるのか、それも分からない。国際政治史の授業で「冷戦の終結がどういう意味を持つのか、10年もすれば後の学者が何らかの定義付けをするだろう」といっていたのを思い出すが、私にとってのこの学生会議参加の意味も、後の自分がどうにかして見付け出すのかもしれない。

それにしても、この会議で考えさせられたことは非常に多い。それはなにも「日米関係」とか「環境問題」だけについてはない。自分の生き方を問い直す機会であったし、人間という不気味な存在をいろいろな角度から問い直す絶好の機会となった。日米双方よりおよそ40名ずつ学生が集まり、1か月という時間を共にしたというこの独特の環境において



は、それ相応の独特の「考える材料」が自然と提供された。つまりそれは（エヘン、カッコイイ言い方をすれば）80人もの人間が集まれば、どんな生活が展開され、どんな秩序が模索されるのか、という社会学でもあり、若者としてナイーブな議論を戦わせながら、それを若者の特権として聞き直る〈老い〉への挑戦の態度であり、全く新しい異性と知り合え語り合えるという〈男女学〉の実験場であり、それぞれ異なった家族と人種背景と言語をもった人間が雑居をはじめたという恐るべき〈民族学〉あるいは〈文化人類学〉の実験場でもあった。そして自分がその実験台に乗る一人として、この独特の環境に身を置くことが出来たことの興奮と楽しみは、とても一言では表現でき得るものではない。

今でも一人一人の語るしぐさを思い浮かべるのは私独りだろうか。およそ20年という時間（30余年の方は言うまでもなく）は、一人一人の人間をこんなに魅力的な存在にしてきたのだと、参加者一人一人と話しながら痛感した。「今回会うまで全く違った環境に生き、全く違った言語を話して生きてきたのに、何と自分と同じような人間や社会に対する問いかけをしてきた人だろうか、この人は。」「同じ問題に対しても、問題だとするそのとらえ方や解決への考え方がこうも違うのだな。」夜な夜な話にふけりながら、自分が今まで考えてきた諸々のこと、体験してきた諸々のことを、何とか〈相手〉に伝えようと自分は必死だったし、それに応えてくれた〈相手〉も同じだった。会議全体を通して一番心から楽しいと感じたのは、このような個々の人間との〈コミュニケーション〉だった。1か月もの間、好んで自らを監禁した私達は、この意志疎通の自由、この最も贅沢な時間を一人一

人どれだけ創造的に自作自演できるかを試されたのだと思っている。

会議で取り上げられた様々な問題については、時間の都合もあるから仕方がないにしても、基調講演・発表につづく議論が不十分だったことが最も残念に思われる。もっと時間をとれば問題解決に近づくなどということはまずあり得ないだろうが（問題の早期解決が私達の目標ではない、と私は今でも信じている）、環境問題にしろ、民族問題にしろ、戦争と平和の問題にしろ、自分たちが何故このような問題を考えなければならないのか、自分にとってこれらの問題はどのような意味があるのかを徹底的に議論することを（本番の会議以前の毎週の定例会で試みられたように）本番の会議中にもアメリカ側の学生を含めながらできたとしたら、さらに興味深い会議となったと思う。私達は問題があるから話し合おうとするのではなく、問題だと感じ・考えるから話し合おうとするのではなからうか。私が今問題だと感じていることの数々は、別の人にとっては全く問題ではないだろうし、「ああ問題だ」と受けとめる事柄が、実はそんなに問題ではないかもしれないことがあるものだ。そのあたり、アメリカの学生と「問題意識」の違いをぶつけあってみると、実は「国際問題」の何が本当に問題なのか、見えてくるものがあるかもしれない。

私にとってはアメリカを見るのが今回で2度目だったが、前回の自分自身のアメリカを見る目と今回のそれとの違いに我ながら驚いた。前回のアメリカ留学の体験では、自分がこの異なった大地と風土と文化で生きていくのが精一杯であったし、自分の英語力も知識もアメリカという国を多角的に・批判的に・あるいは創造的に吟味するのに全く不十分だっ

た（今でもまだまだ不十分きわまりないにしても）。今回の学生会議は、アメリカの大学生とアメリカの3つの市町を転々と移りながら、アメリカの重層的社会を実際に見、そして彼ら学生と夜な夜なアメリカ社会について自由気ままに語り合えるという、前回の私のアメリカ見聞とは全く異なった性格をもつものであった。アメリカ側参加者自体の人種的・民族的多様性には、会議の早々から驚嘆させられた。人種のるつぼとか、サラダボールだとか言われるアメリカ社会であるが、アメリカン・デリゲーツといわれる彼ら「アメリカ人」の多彩な顔触れは、アメリカが初めてでない私にしても、思わずハッとさせられた。「何をもってアメリカ人というのか」という問いは、きわめて多くの学者や思想家が探究してきた根源的問いであろうが、末だ私自身自分を納得させられるような解答が得られないままである。今回の会議のテーマにも、「地球共同体」とか「共生」とかいうものがあつた。そして、いつも「異なった文化背景をもつ人々をいかに理解するか」「彼らといかに共生するか」という問いが投げ掛けられる。その答えとして、「互いに接近し、話をすれば理解できるだろう」と言うだろう。しかしアメリカ社会の実態は、この安易な答えに真っ向から反証を示している。私はかつて、アメリカという国ほど異文化理解に寛容な（というか理解のある）国はないと思っていたし、これほどの人種・民族の混交と接近があれば自然と相互の対話が生まれ、ひいては私達の言う「異文化理解」「相互理解」なるものが実現されるものと期待した。しかしそれは違う。このアメリカ社会における人種間の明らかな「棲み分け」の状態は、私達に、単に「話をすれば分かる」という人間理解の

ための処方箋の効き目が（それのみでは）いかにいい加減なものであるかを露呈している。今回の学生会議の討論自体においても、もし「話をしたから私達は分かりあつたのだ」とするのであれば、それはお互いの自信過剰か知的傲慢で終わってしまうと思う。そもそも英語での討論で、自分の気持なり、感情なり、考えなりが思いのままに相手（アメリカ人・日本人関係なく）に伝えられたと言える人がいるだろうか。人を理解しようとするとき、自分のコトバの特異性に気付かないまま、相手のコトバの土俵を過信することは、「理解」とは全く逆方向に進んでしまうことでしかない。私にはそう思える。私が執拗にも日本語で討論しようと働きかけたのはこのような気持からであり、それは「アメリカ人にも日本語で討論させて、自分の言葉で討論できないことがどんなに苦しいことか味あわせてやれ」というようなヒガミでは全くない。私達が英語を使うということと、アメリカ人の学生と話をするというこの環境の中に入ってきたことにより、日本での定例会における議論とは何か違った問題の捕らえ方や考え方が生まれしてきたのではないか、ということの自己確認、発見、さらなる議論への題材探し、といったような、その後の自分と相手との積極的な——違いを明白に確認した上での——意見交換・語り合いを提供出来るのではないかという考えなのだ。上にも述べたとおり、＜英語を使う時・人間＞と＜日本語を使う時・人間＞とで「何を問題と感じ、それをどう考えるか」が違ってくるといふ前提に先ず立ってこそ「日米学生会議」の議論らしくなるのでは、と思うのだ。

とにもかくにも、不十分だと思ったことはこれからの自分の課題としていけば良いわけ

であるし、同じ日米学生会議の皆と今回の会議で物足りないと思ったことについてさらに話し合うことだってできるわけだ。そのこと自体が何よりも頼もしい。人生について、人間について、アメリカについて、人種・民族、環境、ジェンダー……あらゆる事柄についてこれから話を続けていけるような友人（語り相手）たちの存在をこの会議で知り得たことは、自分の人生にとって大きな意味が確かにあったのだ。

最後に、今回のアメリカ滞在によって、私はあらためて一つの至極当り前でもっともなこと（それでいて非常に大切なこと）を再確認した、という実感がある。それは、アメリカという国がますます不思議で興味深い国に思えてきたと。そしてそのミステリアスなものの一つ一つ自分で探り続けていこうという思い。そしてそれが続くかぎりには、「アメリカなんて…」という紋切り型ではアメリカを理解したつもりにはならないぞ、という確信。それが続くかぎりには、アメリカが単純に好きになったり嫌いになったりできないだろうな、という予感。なぜなら、アメリカという国を思い浮かべるまえにアメリカの学生たち一人一人の顔と意見が思い浮かぶからであり、これこそまさに5年前の留学から帰った直後の私が持っていたはずの感覚であった。しかしこの感覚はどこかへ行ってしまっていたのだ。日に日に一人一人の顔が薄れ、湾岸戦争などを通して「国」としてのアメリカしか見えなくなってしまった私は、「アメリカは嫌な国だ」「アメリカの正義感はずるだ」としか言えなくなってしまっていた。今回のアメリカ滞在中、この「個人」と接する感覚（皮膚感覚にも似たもの）を取り戻したという実感は、何物にも代えがたい。いくら陳腐であるとい

われようと、一つの思いを固くした。（陳腐であるといわれるには、あまりにもしばしば忘れられることなのだ。ジョン・ダワー氏の『人種偏見』を見ても分かるように。）「一人一人の人間と、意見の対立をしようが一致を見ようが兎に角コミュニケーションをしようとするのは、怖いことだし勇気のいることではあるが（なぜなら、もともと不可能かもしれない「他人理解」にあえて挑むのだから）、私達の世界に平和とか秩序とかいうものがあるとすれば、それを直接的に実現するものではないにしても、決してそれを破壊するものではないだろう。誤解を恐れず言えば、もし「共生」というものがあるなら、それはコミュニケーションにおける徹々たる理解と数々の誤解・いざこざ・対立・不信をふくめた「格闘」を続けながら、それでいて一つの全体としてのバランスを崩さない（全体を崩壊に導かない）運動——物質における分子の運動みたいなもの——で機能し続ける「熱い」社会（分子運動による加熱が物質を熱くした！）なのだろう。」

こういう思いで、私は「個人」との皮膚感覚の接触、必死のコミュニケーションをこれからも続けていきたいと思っている。一人一人の顔を知ってこそ、アメリカを評価・批判でき、またアメリカとはなにか、アメリカとはなにか、という畏れ多い問いに私はあらためて向かい合うことができそうだ。学生会議の皆さん、沢山の刺激をどうも有り難う。

## JASCに恋して

高橋 香織

澄んだ空気と青い空、美しい自然に恵まれたコロラドスプリングスでの会議最終日の翌

朝、私は第44回の仲間達に再会を誓ってさよならを告げた。泣きながら抱き合う皆の姿を見ながら、私は不思議な気持ちに襲われた。それはシンプルな疑問だ。なんでこんなにみんな別れをつらがるのだろうか。また、きっと、会えるのに。正直なところ、泣き崩れるあるアメリカ側実行委員に対して、少々違和感を感じた。と同時に、自分は会議に思い入れが足りなかったか、感受性が足りないかのどちらかかも知れないなどと思った。そんな私の隣にいた、アメリカ側実行委員長のKevinが言った。「Kaoriも来年の会議の終わりには、きっと同じように激しい思いを持つんだよ」と。

新実行委員として第45回の日米学生会議の準備を開始してから一ヶ月が経った。JASCは伝統的に継続していくと定められた会議ではない。会議を開催する必要性を感じ、そして何よりもそれをやりたいんだという思いを持った新実行委員が、毎年、会議中に選挙されて次回の会議をゼロから作り上げてきた。もちろん今までに蓄積された知識や経験や伝統はある。けれど、会議の体裁も内容も全て新実行委員の、何を一体したいのかという意志次第である。私たちが9月に最初のミーティングを持ってから、試行錯誤を重ねて45回会議への道を模索している最中だ。参加者ではない、実行委員という立場に立って初めて分かってきたことも多い。44回の実行委員が今年の会議で実現させたいと努力して準備したものと、参加者としての私が会議で得たと感じるものを比較したりもしている。少々の方の違ひこそあれ、同じ理想を持った仲間達と、来年の会議を作り上げていく作業は楽しいものだ。JASCでのあの寝不足の日々が帰ってきたかのような忙しい準備活動の中で、

しかし、正直に言って、一体何で私はこんなに他のことに割く時間を削ってこのJASCの仕事をやっているんだろうと思う時がある。華やかなことばかりではない、いやむしろ90%が雑用ではないかとさえ思える準備活動に忙殺され、早口にはなるし、歩調さえ早くなって、「忙しい」が口癖になりつつある自分の姿をふと振り返ってしまう時がある。そんな時、私は44回の実行委員選挙の時に自分が持った初心に立ち戻ってみるのだ。それには、写真を引っ張りだしてきて見るだけで十分だ。そこには笑っているみんなの顔がある。行き詰まった議論に頭を抱えている姿もある。ピアノの周りに集まってビリー・ジョエルを歌っている幸せそうなみんなの顔。JASCという場で80人の人間が出会い、まさにグローバルな問題から個人的な事まで自分をさらけ出して議論したあの日々は、しっかりと写真に記録されている。写真でしか思い出せないような感情なんて本物じゃない、という人もいるだろう。本当に得たものは、心に焼き付いて離れないはずだと。それもそうだろう。しかし、一通り写真を見るのが、私がある一つの事を再び確信するのを助ける事もまた事実なのだ。それは、私はやっぱりJASCとJASC Cerが好きなんだ、っていうこと。シンプル過ぎて当たり前と思われるかも知れない。でも、「好きだ」という気持ちを持てたからこそ、自分の実力に対する少なからぬ不安を感じたにも関わらず実行委員になったのではなかったか。自分が与えられた44回という場で得た多くの事を、いやそれ以上によいものを、今度は自分が提供したい、その可能性に賭けたいと、あの時私は決心したのではなかったか。

経験したことはないが、今は妊娠を告げら

れた新婦のような気持ちだ。不安におびえ、期待に胸を膨らませて、自分の中に芽生えた45回日米学生会議という新たな生命を育てている。それは大きな可能性を秘めた生命だ。これから約10ヶ月かけて、私はこれと付き合いしていく。他の19人の実行委員と、多くの44回参加者からのボランティアと共に、産みの苦しみと喜びを味わっていくだろう。吉と出るか凶と出るか、来年夏の会議の新たな誕生をどうぞお楽しみに。でも、一旦会議が始まったら、主役は参加者だ。今は顔も名前も知らない来年の仲間たち。それは、今これを読んでいるあなたかもしれない。

## エッセイ「償いの季節」

芝崎 厚士

「私たちは他人とし口論から雄弁術を産みだし、自分との口論から詩を産みだす。」  
(イエーツ)

1992年7月22日、佐野元春は第8作目のオリジナル・アルバム“sweet 16”をリリースした。その一曲目“MR. OUTSIDE”の中に出てくるのが、「償いの季節」という言葉である。ぼくにとって、第44回日米学生会議で過ごしたアメリカでの「夏」は、自分にとっても周囲の人々に対しても「償いの季節」のはじまりに他ならなかったのだ。

あの頃、ぼくは自分を取り巻くあらゆる人間関係に関して一種の絶望感を感じていた。と同時に、何とかしてそこから抜け出そうとしてもがいていた。子供っぽい期待、無邪気な思い込み、幼稚な虚栄、偽りと偏見に満ちた自分自身と周囲の世界。ぼく自身が成長過程の途上でいろいろと問題を抱えていたのももちろんだが、それに加えて世の中というも

のがいかに冷たいのか、そして人間がいかに自分の事はがり考え、他の人のことを気に留めずに生きているのかを痛感していたのだった。

人生がそのような中でのゲームに過ぎないのだと割り切ってしまうのは簡単だ。しかしその時点で人は、何か大切なものに対して目をそらし始めることになる。物事にたいする根源的な疑問をひとたびやり過ごすようになると、もうそれから後は自分をごまかし続ける以外に辻褄を合わせることではできなくなる。社会の「ルール」という名の習慣に身を委ねてしまうと、自分にとって本当に大切なのは何だったのかが自分でも分からなくなり、自分自身の考え方や自分が従っている考え方を混同するようになってゆく。そんな風になってしまうと人は、突然真実を突き付けられたときに、どうしたらよいかわからずにうろたえてしまう。

「この社会に関する真理は恐ろしいものだ。ゴシップが王様だ。まるで「良心」という言葉は卑猥な言葉であるかのようだ。真実であるものは何であれ、人の心に付きまとい、夜眠れなくなってしまう。特にうそばちな生き方をしている者たちは、真理を聞かされると傷つくんだ。そこでいろんな陰悪な反応が返ってくるんだ。」(ボブ・ディラン、「バイオグラフ」)

時間を取り戻すことはできない。「人生はやり直しはきかないのであり、出遅れたら追いつくしかない」(寺山修司)。ぼくは自分が無為のうちに浪費していた時間がいかに莫大であったかに気付いていた。と同時に、現在の自分というものの人生における位置付けを

直感的に行っていた。それは会議に参加する半年以上前のことだった。出発点が決まったら、動き出すしかない。トルストイ、ドストエフスキーやバルザック、ボブ・ディランらがぼくの導き手となっていた。彼らの思想を僕がよく理解しているのかどうかは今でも疑わしい。しかし彼等の言葉を手がかりにして、ぼくは自分なりの生き方を貫こうとし始めていた。日米学生会議はそれを実践する場でもあったのだ。

ぼくには社会的経験が不足していた。「勉強」という言葉をもっと広い意味合いでとらえるべきだということを最初に教えてくれたのは、阿川弘之の小説に出てきた山本五十六だったが、この何年か、ぼくはそういう意味での「勉強」をする場を十分に経験していなかった。日米学生会議でぼくは、そのような場を久し振りに得たのだった。

ぼくはよく、頭を整理するために、「頭のいい人」と「勉強のできる人」とは必ずしも一致しない、という命題を考える。「頭のいい人」は世の中の仕組みをさっと理解してしまうがゆえに、地道で盲目的な努力がいかに（ある意味では）無意味であるかを悟り、それらに専心する人々を軽蔑する。「勉強のできる人」は、勉強によって得た知識を現実に応じてはめて考えたがるから、そのギャップにしばしば戸惑う。しかし既に地道に勉強（ここでは狭い意味の）をして知識を持っているがゆえに、それをよりどころとして生きてゆかざるを得ない。お互いに理解しあうことは想像以上に困難である。細部を思い切り捨象すると、芸術家と官吏といった批判を思い浮かべるとわかりやすいかもしれない（もちろん、「頭のいい人」同士、「勉強のできる人」同士の間でも超え難い断絶があり、それ自体

かなり大きな問題となっている）。

「学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざればすなわち殆し」（論語 為政編）

ぼくが自分の生き方のキーワードとしているのは、「すべてを知った上で笑いとばせ！」ということである。「勉強のできる人」とあると同時に、「頭のいい人」でもあるべきなのだ。静かな国に住む我々はそのような方向に自身を持ってゆくのに十分な条件を与えられているのだから、そうすることはむしろ地球的視野にたった場合、義務とさえ言い得ることなのかもしれない。ものごとを理解することはそれ自体が第一義的な目標ではなく、むしろ理解したうえでそれを自分自身に、いかに適用するか、自分以外の周囲がそれをいかに適用しているかを考えてゆくことが大切なのだ。確かに人生はある意味では情け容赦のないゲームであるかもしれない。しかしそのゲームに埋没する必要はないし、反対にそれに真っ向から背を向けてしまう必要もない。自分自身の意志でそれを受け入れてゆき、主体的に世の中と関わってゆけばよいのであって、そのどちらか一方のみを無理に取捨選択することはない。

世の中がこうであり、世界がこうであるから自分がこうであるなどと定義づける必要性をぼくは感じない。真実には二種類あり、一つにはその人が自分の心に忠実に行った言動のことである。もう一つは否定神学的しか語り得ない、人智の及ばぬなにかのことである。ものごとがはっきり割り切れて理解されているうちは、まだそのことが本当によくわかったことにならない。自分の行動原理を作り、社会的競争に適応してゆくことだけをよしと

すること自体が近代の呪縛であることにいち早く気付かないと、自分自身の人生を自分自身の手に取り戻す機会を、取り戻すことの必然性を意識さえすることなしに永遠に失ってしまうのが、現代の我々が持つ最大の危険なのである。

「それはまだ私にはつかめない。まだ、しかとあいまいではないからである」。  
(ガレット先生失言録)

ぼくは、ぼく自身の人生を自分の手に取り戻すためには、単なる知識のインプットだけではない勉強をすることがもっと必要だと感じていた。日米学生会議はそれを得る機会を十分に与えてくれている。ぼくは、この世の中にはぼくの知らないところで自分とはまったく違う環境の中で自分とはまったく異なった物の考え方をし、自分とはまったく違う生活をして生きている人がこんなにたくさんいるのだ、ということを経験的に納得した。それは日本にいても早晚気付くことができたのかもしれないが。この時期にこのような場で、そしてアメリカでそれを知ったことが、ぼくにとってどのような意味を持つのだろうか。

自分自身にたいするもうひとつの問いかけとして、「愛」とは一体なにか、ということがいまでもぼくにつきまとっている。「すべてを愛することは何者をも愛さないのと同様だ」と言ったのはトルストイだが、それでも愛は人間の相互理解のための根本であり、最終的な何かへたどりつくための希望となってくれるものである。そのことは、分科会のレポートでのぼくの議論の中心をなしていた。もちろん、うまく説明できたかどうかは自信

がないが。

今のぼくにとって、「愛」を言葉で説明することほど空しいことはない。なぜなら、それは実際の言動の中に反映されいない限り、現実のものとはなり得ないからである。

「実行的な愛というのは仕事であり、忍耐であり、ある人にとってはおそらく、まったくの学問でさえあるのです。しかし、あらかじめ申し上げておきますが、あなたのあらゆる努力にも関わらず、目的にいつか近付かぬばかりか、かえって遠ざかってゆくような気がするのを、恐怖の目で見つめるような、そんな瞬間でさえ、ほかならぬそんな瞬間にさえも、あなたはふいに目的を達成し、たえずあなたを愛して終始ひそかに導き続けてこられた神の奇跡的な力を、わが身にはっきり見出だせるようになるのです」。  
(F・ドストエフスキー「カラマーゾフの兄弟」)

「償い」という言葉の裡にあるのは、あらゆることに対する考え方を自分の言動で素直に表現することの大切さに気が付き、これまでにそのような言動を取らなかったゆえにぼくが迷惑をかけたか、傷付けてしまったあらゆる人々・物事に対する罪滅ぼしのような気持ちだと思う。

ぼくは反省はするが後悔はしない。それは起こってしまったことはもはや取り返しがつかないからだし、ぼくがその時点で最善を尽くしていたのだとしたら、それ以上ぼくの力量のおよぶところではなかったのだと思うしかないからである。これからはぼくは、様々

な失敗を繰り返すことだろう。しかしそれでも生き続けることによってしか、自分を育ててゆく方法はない。

「地上的な希望はとことんまで打ちのめされねばならぬ。そのときだけ人は真の希望で自分自信を救うことができる」。  
(F・カフカ「城」)

ほとくの「償いの季節」は一生続くことになるだろう。しかしそれは同時に、「真の希望」に従って生きてゆくことをも意味しているのである。

## 「グローバル」の時代を実感して

清水竜太郎

その言葉こそ自分の求めていたものであった。「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」という言葉のもつ意味は何も環境問題にとどまらない。政治、経済、社会から一つの人生にまでかかわる重い意味をもつように思う。

「グローバルに考える」とは、我々一人一人の価値観は違うけれど、人間の尊厳を守るという共通の姿勢から物事を考えることであり、「ローカルに行動する」とは、その理想の実現のために身近から責任ある行動をとっていくことである、と私は解釈している。

今年の米大統領選のキーワードが「経済優先」であることから分かるように経済は生活市民の暮らしに直接係わるものであり、グローバル・コミュニティの核である。貿易シンポジウムに於けるモック・トレードネゴシエーションでは今や国の尺度でははかれなくなったボーダレス経済の中では世界市場を相

手に自己革新していかなければならないと感じた。さらに発展途上国を含めた全世界の人々の幸福と進歩のためには知的所有権の国際的ルールづくりなど、制度の平準化の必要を説くことを通して未来への指針を実感した。経済の相互依存が安全保障を最も高めるものである以上、逆に自分だけ良ければという利己的で無責任な考え態度は許されなくなる。ここでも日本の果たすべきは自由貿易圏の拡大にあり、その前提である憲法における世界平和主義の精神の重要性が、極めて重要であると思った。又、全体に強く感じたのは日本たたきどころかアメリカにおける人々は、事実を認めようとする広い態度をもっているということであった。米国日産の工場の現地化の努力と成功はまさに「グローバル」の典型にみえた。工場は雇用を産んでおり、地域の市民の生活を支えていた。反面、ビデオでの外向け内向けの微妙な違いが偏狭な意識構造を示しているようで残念ではあった。

国家がつくられた幻想であるなら、障害や人種による差別も同様であろう。会議での討論と体や心を病んだ人々との交流を通じて程度の差こそあれ、どんな相手に対しても自分を完全に理解してもらい、又相手を完全に理解する厳しさを改めて感じた。だが不完全に向かっているかに努力できるか、その進歩を信じられるかが問われてくるのだと思う。民族フォーラムにおける60年代の闘志たちのきつい言動は本能的なものであり、それはどれだけ当時の（今も）社会的圧力が悲惨で、どれだけ公民権運動への意志が固かったかを物語っていた。それは最近の中道化した世代にとっては欠けている生身の強さであった。それでも我々には新時代の認識が必要であろう。差別は生まれながらもっている本性なのでは決



してなく、社会的教育によってつくられたものにすぎないのであり、だから変えられるものなのだ、と私は信じる。にも拘らず人は差別するのか。それは恐らくその方が秩序を保ちやすいからであろう。本当は個人の理念や能力、行動によってお互いを尊重し合えるはずなのに弱く愚かな我々は知らず知らずのうちに自己のアイデンティティを自己に付属する集団や文化、伝統、権威、そして血に求めてしまうのだ。一人一人が逃げずに問題を直視し、自らを意識改革せねばならない。そしてそれができないという固定観念を破る勇気を持たなければならない。我々が恐れなければならないのは「不可能だ」と恐れることそのものなのであると、私は強く訴えたい。

#### 第44回日米学生会議を終えて

甲斐 順子

第44回日米学生会議について、その活動に何の意味があるのかという問いに素直に答えようとするなら、会議の前と後での変化に注目しなければならない。最も明確に見えてくるのは参加者の変化であろう。参加者1人1人が第44回の会議を通して、個人的な視野や感覚、経験を広げていったのだが、それはJASCerだけに、また一か月という本会議の期間だけに留まっていなかったようだ。つまり考えてみれば当然のことだが、80人だけで会議を共有したのではなかったのだ。そのことを第44回の会期を終えてじわじわと感じている。

国際的な活動を続けているグループ・団体が日本にもたくさんあり、それぞれ独自のポリシーをもって行動している。JASCerの中には、それらの多様な団体の一員として活動

したり、関係を持っている人が多い。そんなJASCerに刺激を与えてもらったり、またはJASCの定例会などでそれらの活動を調べたり、知ったりして、感動や不安・現実を認識する。うれしいことに、そのような新しい人々や経験との出会いが今もつづいているのだ。我々をとりまく環境や社会は流動的で複雑で難解である。しかしその中で活動を続ける人達は、理想をかかげ、努力をし、生きることの意味を見出そうとしている。

第44回日米学生会議を通してJASCerがJASCerに見つけた変化は、以前として局所的なものかもしれない。しかし、会議に意味を見出そうとしてきた努力は、内在的な原動力となって、混沌とした社会に影響を与えていくことは疑えないと思う。よりよい社会にむけての変化や、大きな環境のうねりを期待するなら、もっと広く充実した人々のつながりを基盤としていかなければならないだろう。共通の理想を見出すことができるのだから。

Lee Silverman

The thing I remember most about JASC is the tears.

The closing ceremony stretched on and on because we were crying to noid to speak smothly. On the day the Japanese delegation flew back to Japan everyone was crying, and for the longest time no one would get on the bus to the airport. There were 79 of us, and I think I saw every one of us shed at least one tear.

The meaning of JASC is something that cannot be described with words. It is

much too personal for that. But somewhere within the midst of all the tears at the core of the emotion from which they sprang, I can feel it within me.

涙—それは自分の日米学生会議の一番思い出すことだ。はっきり話せないぐらい泣いていたためにclosing ceremonyが長引いた。日本側の日本に帰る日には皆泣いていたし、長時間誰も空港へのバスに乗らなかった。我々は七十九人だったし、各人の涙をこぼす顔を見たと思う。

日米学生会議の意味というのは言葉で説明出来ないことだと思う。個人的過ぎるからだ。でも涙の中のどこかで泣かせた感情の核心で自分の心に感じられることだ。

## JASCに参加して

阿古 智子

日米学生会議で過ごしたアメリカでの1ヶ月間は、今普通の学生生活に戻ってみて、何か特殊な世界だった様に思える。アメリカ、日本からの80人の見知らぬ者同志が会議を通じて出会い、約1ヶ月共同生活を送りながらいろんな問題について話し合う。今まで知らなかった者同志が、お互いを知ろうと懸命になる。まして参加者は日本とアメリカ、全く違った文化、習慣、生活環境を持つ所から来ているうえに、言語という壁があるのでどうしてもコミュニケーションするには大変な努力がいることになる。普段の生活の中でこれ程までに他人を知るために努力することがあるだろうか。

私にとってこの1ヶ月は数多くの感動を得ることのできた楽しい1ヶ月でもあり、又大変悩んだ苦しい思いをした1ヶ月でもあった。

80人の中で自分の存在とは何なのか、80人の中で自分は何が出来るのか、何をすべきか、そしていったい自分はこの中で何をしているのだろうか。私の頭の中はいつもこの問いかけに占められていた。

私にとって80人の中で自己を存分に主張し、行動するというはとても困難なことであった。JASCのメンバーは本当に自分の主張をしっかりと持っている。何事にも前向きに積極的に行動しようとしている。そしてそれぞれが様々な興味・関心を持っていて、一緒に生活した1ヶ月、私は毎日いろいろな刺激を受け続けた。こうした中で、私は自分をみつめ直すにはいられなかった。私はこの会議にどうして参加したのか。参加してはいるけどいったい何の役割を果たしているのだろうか。私がたくさんの刺激を受けている様に、私は他の人に何らかの刺激を与えているのだろうか。どう考えても私はまだまだ未熟であった。第一にしっかりと自分というものを確立していない。

自分の生き方、考え方、人と話す時に基礎となるのは、こういった自分の内にあるものであり、それはその人となり形成する一番大切なものでもある。私にも私なりの信条・生き方がある。それをもとに今まで生きてきたつもりであった。しかし、私の見ていた世界はまだまだほんの小さいものであった。その小さな世界で生きてきた私が、もっと大きな世界の中で生きてきた人達と話をした時、驚きと喜び、そして落胆の入り混じった複雑な思いと共に、私の世界を少しずつ広げていくことが出来た。この会議は、これからの進路、生き方を定めていく上で、本当に貴重な経験であった。

来年の実行委員もやることになり、今心の

中には希望と期待で一杯、と言いたいところだが、実のところ何とも言えぬ不安で一杯である。今年少し広がった世界のなかで経験したこと、感じたことをどんな風に今後生かしていくか。全て今の私にかかっている。来年の、そしてこれからの自分を考えると楽しみであると同時に、不安と恐しさで心が曇ってくるのだった。

ほんの1ヶ月間だった。いろいろ悩んだ。でも今ふり返ってみて、会議で出会った仲間のことを考えると心が暖かくなる。熱いものがこみ上げてくる。共に笑い、共に泣き、助け合い励ましあった日々がよみがえってくる。英語でのコミュニケーションがこんなに大変だとは思わなかった。自分の伝えたいことが適時に思った通り伝えられた事などほとんど無かった。それでも理解しようとしてくれた。言葉で伝える事の出来なかった分は、心でつかみとってくれた。

「十分に言い表せなくてとまどわせてばかりでごめんなさい。」

と私が落ち込んで言った時に、

「あなたの心の内にある美しさは言葉にしなくても読み取ることができる。自信を持っていいんだよ。」

と励ましてくれた友達の言葉、これからも先ずっと私を支えてくれるものとなるだろう。

このすばらしい会議での1ヶ月、日本での準備を含めて約4ヶ月間を単なる思い出にはせず、自分を高めていく上でも、まわりの人とのつながり、家族・社会・国際関係…あらゆるつながりを考えていく上でもきっと意味あるステップとなることだろう。このステップを乗り越え、成長した自分に出会えるか。確かに不安だが、必ず出来ると思う。会議を通じて出会った仲間がいつも応援してくれて

いる。他のみんなも必死でがんばっている。私達はそのことを感じ合うことができる。どんなに離れていても、ずっと仲間だから、この先もずっとずっと・・・。

## 前略、アメリカにて

久米 恵子

お元気ですか？日本は相変わらず蒸し暑いのでしょうか。こちらは暑いと聞いていたワシントンD.C.もそれ程のことはなく、むしろ強力すぎる冷房に凍えています。長袖のブラウスを着るだけでは飽き足らずにトレーナーをはおりつつ、環境フォーラムで資源の有効利用について考えている自分に矛盾を感じたりもします。

会議の日程も折り返し地点を過ぎました。毎日充実し過ぎなほど予定がつまっていて時々消化不良を起こしているのではないかと不安にも思いますが、このあふれる刺激をどれだけ敏感に感じとり続けられるか勝負だと思っています。

今までにあったイベントの中で一番印象に残っているのは“Race Forum”だと思います。いわゆる専門知識が必要ない分自分に近い問題として感じられるからかもしれません。この問題について目覚めるきっかけとなったのは、D.C.で聞いた4人の黒人による講演だったと思います。彼らはかなり感情的で、自分達が肌の色によっていかに差別を受けて来たかという体験を話すのに夢中だった為、あまりにも攻撃的すぎるという印象を受けた人が少なくなかったようです。私自信も確かに彼らは自分達の置かれた立場の苦しさに固執しすぎるあまり閉ざされた世界から出て来れないでいるのだと思いました。少なくとも

私達は彼らの問題を理解した上でその解決の為にはどうすれば良いのかを考えようという前向きな姿勢でいたわけですから“差別されている”という現状にこだわられ過ぎては希望を見出すことができないのです。彼らが自分達が感じている不合理を私達に伝えたかったのはわかります。が、では彼らが理想とする民族共存のあり方とはどういうものなのか。今までこの問題について私達が話してきた限りにおいては、違いがあるのは仕方がない。それならば、それがどのように異なっていて、その差はどこに端を発しているのかを理解した上で、あとはそのまま受け止めるしかない、という意見が多かったように思います。理想論に走っているなあ、とは我ながら思いますが、あの黒人のスピーカーのように自分の立場だけを主張しても、そこから発展するものはないと思うのです。

一つだけ、スピーカーだった彼らに感謝したいと思うのは、彼らが“激していた”故にいかにかこの問題がアメリカ社会の中で根深いものなのか、理想論では片付けられないことなのかを肌感じて理解できたことだと思います。日本にいて民族紛争の報道を聞いてもその深刻さや、何故彼らが自分の民族にそこまでこだわるのか、という根本的な部分についてピンと来ない部分が多いと思いますが、それはやはり日本では日本人というマジョリティがあまりに強大であって、私自信もその中に属している為に、自分が何民族であってそれが自分にとってどういう意味を持つのかという問題意識に薄いからなんでしょうね。恐らくアメリカという国にいて、自分とは見た目も個人的背景も異なる人に囲まれる為かえってその中で自分とは何か、という自意識が自我と正面から向き合わざるをえないの

ではないでしょうか。

民族問題、特に黒人問題など、日本へ帰ってしまえば日常生活とは何の関係もないようにも思います。でもこの“Race Forum”が今後の私の生活に与えたインパクトというのは二つの点で意義深いと思うのです。一つは日本にいるマイノリティの人々、つまりアイヌや被差別部落の人達、それに在日韓国人についてもっと目を向けねばと思うようになったこと。そしてもう一つは、マイノリティの身になって物事を考えることの大切さを実感したことです。“マイノリティの身になって考える”為には当然彼らの背景についての知識が必要だと思います。それはつまり、世界中にあふれる情報の中で目立たない日陰者になっている事柄にスポットライトをあてる、ということです。何故こうした事が必要なのか。それは知識が足りない為に不用意な誤解を招いたり、意図はないにせよ心ない言葉で弱い立場にいる人を傷つけてしまう、というような“無邪気な罪”を防ぐ為です。それからもし自分がどういう形にせよマイノリティになる機会があったか、(日本を出る、というのが一番手っ取り早いと思うけど)それは絶対に貴重な体験だろうな、と思います。一般的に、マジョリティよりもマイノリティの方が迫害や差別、そこまではいかないにせよ、多少居心地の悪い思いをするはめになるのは歴史、あるいは日常の経験からでもわかると思います。でもだからこそ、マイノリティに身を置くことによって人は強く優しくなれると思うのです。ほら、誰かも歌ってるでしょ、“人は悲しみが深いほど、他人にも優しくできるのだか〜ら”って。もっともこれは私自信が基本的にはマジョリティの立場にいて、例えばマイノリティになるにせよ一時的なこ

とに過ぎないであろうから言えるお気楽な意見かもしれないけれど

実際、今回の経験で、マイノリティの立場を考える重要性を深く感じて、様々な民族の共存する“多様性”を生かすべきだ、と口では言ってみても、日本へ多くの外国人労働者がやって来て、“多様化”して行く、という事態についてはあまり歓迎する気持ちになれないというのが正直な感覚です。ここが大きな矛盾だとは思っただけだね。

何だかずいぶんずらざらと書き連ねてしまったけれど、毎日本当に様々なこと、それも今まで私の頭の中に浮かんだことさえないような事について考えます。明日はメディア・テーブルのフィールドトリップがあります。このテーブルはフィールドトリップが多いし、ディスカッションも内容が濃いのでとても充実していると思います。今までこなしてきた中で印象に残っているのは、民族問題がアメリカのメディアの在り方にも影響を及ぼしていること。つまりメディア界の担い手の多くがいわゆる中産階級の白人であるということ。それからアメリカによる日本報道が日本によるアメリカ報道に比べかなり少ないこと。もう一つは、日米の新聞の構成の違い等から“客観報道”の為には何が必要か、という国のレベルを越えたメディアとしての問題について考えるきっかけを得たこと……でしょうか。言葉にするとあっさりしてしまうけど、私の頭の中では全てが入り混じってまさに“混沌”の状態と化しています。

毎日色々な行事があるけれど、実は一番有意義なのは、自由時間の個人的レベルでのつながりかもしれません。ここで出会った人達との交流があと2週間で終わってしまうなんてとても思えないし、決してそうなることは

ないと思っています。日本で定例会をしていた時に、誰かが、10年後に皆で会うのを今からとても楽しみにしていると言っていたけど、本当にそう。この夏の経験が皆の人生にどう影響していくんだろうと考えるとわくわくします。もちろん他人の事ばかりでなく自分の行き先についても考えなければならぬけれど…どうしたらJASCで得たことを最大限に生かせるだろう、と思案中です。

日本に帰ったら、国内のどこか静かな所へのんびり温泉旅行にでも行きたいです。どこか日本情緒たっぷりのおすすめ所は知らない？よく海外へ行って日本へ帰って来ると、あそここの国ではあであったのに日本はやっぱりだめだ、という風に、日本を卑下する人がいるけれど、私はそうしたくないのです。もちろん日本という国は、どうしようもない問題もたくさん抱えていると思うけれど、やっぱり魅力的な国だと思うのです。今の私の心境としては、来年アメリカの学生が来た時に“これが日本のいい所！”と自慢できるような事や場所をたくさん見つけておきたい、という感じです。

じゃ、長々と読んでくれてありがとう。残りの話は帰ってからまたゆっくりね。

## 「第44会日米学生会議を終えて」

高橋 直子

「第44会日米学生会議」との出会いは、実施要領を手にした時に始まった。それは言い換えれば、「地球共同体への一步——今果たすべき私たちの役割——」というテーマとの出会いであった。そのテーマを題に論文を書き上げた。そこには、歴史の正しい認識とともに学生としての自由な発想、創造力を駆使

して文化・社会の違いを乗り越え共存していこう、という信念を述べたのである。

五月からの毎週の定例会では、会議の準備として設けられた様々な討論会が、即ち私にとっては「日本学生会議」と思えるほど、刺激的であり勉強させられた。個人が違う、文化・環境が違うということは同じ日本人同士にもあてはまることであった。しかし、その違いは必ず乗り越えられるという信念に何の曇りもなく、むしろその違いを確認し合う過程に充実感さえ覚えていた。

他者への理解、違いの認識・寛容についての信念をゆるぎないものとして、いざ「日米学生会議」に臨んだ。しかし、その信念を見事に覆えされたのが、ハーワード大学で民族問題のフォーラムに参加した時であった。アメリカ合衆国の黒人の声を代表する各氏がそれぞれの視点・立場から人種問題について語った。それは、私のもつ表現法でしか描写できないが、熱く激しい語り部であった。彼らの怒り、憎しみ、恨み、葛藤などその類いに属するもの全てを彼らの表現方法で日米の学生に訴えた。

私の信念が覆えされたというのは、彼らとの出会いでなく、私の知らない自己の存在との出会いであった。各氏の講演を目にし、耳にする自分の意識は明らかに「理解」、「寛容」などという次元の域を越えていた。他者との違いを目の当たりにしてただ呆然としている自分に気付いたのである。

このフォーラムを通して本来ならば、人種問題について考えさせられたことを報告せねばならないのであろうが、私にはその余裕がない。私は人種や民族がどうあるべきかとコメントするよりも、まだ何よりももっと自分自信「寛容」な人間になりたいと思った。自

分のパーソナル・スペース——他者を認識しそれを許すことのできる意識の許容範囲の何と狭かったことか！——の拡充について、民族問題フォーラムをきっかけに考えるようになった。

「地球共同体」とは、私にとって未知の世界との遭遇である。「未知の世界」はどこにあるのか。それは、私のパーソナル・スペースの域の外にある他者との遭遇にある。つまり、「地球共同体への一步」は、私のパーソナル・スペースが広げられる一步であり、私がより寛容な人間になるための一步である、という信念に達した。

会議を終えて、最初の論文を読み返すと、それは明らかに「日米学生会議」を知らない自分が書いている。会議自体を、「地球共同体への一步」とし、会議後には「二歩」が始まると考えている自分がいた。しかし、今はそうではない。私にとって、私の知らない全てとの出会いがいつも「一步」なのである。

日米学生会議はその名の下に回を重ね、太平洋の平和・世界の平和に大きな遺産を残していくことであろう。そして、「第44回」のこの会議もこれで終わることなく、そのテーマが私たちの胸に焼きついている間はずっと開催され続けているものだと信じたい。

最後に、この会議のために格別な配慮をもって進行をすすめてくれた実行委員の活躍に心より感謝したい。どうも有難う。そして、「地球共同体」について一緒に考え、一緒に学ぶことのできた参加者みんなに感謝を捧げたい。これからのそれぞれの活躍に大いに期待している。「日米学生会議」を支えてくれている全ての人に対して、私たちのこれからの飛躍をもって感謝の意を示そうではないか。

西元 宏治

まず、始めに第44回日米学生会議に参加して、感じたことを文章にしようと思ったとき、書き始める前からこの文章がまとまりのないものになるような気がしてどうしようもなかった。何故なら、会議が終わって約5ヶ月がたとうとしている今も、夏の本会議に限らず、日米学生会議というものを通して自分が得たものがなんであるかということは、自分の中でも全くといっていいほど整理できていないし、それが出来ていない以上、きちんとした文章に出来るとは自分でも到底思えないからだ。現在、第45回日米学生会議の実行委員としてJASCに直接関わっているほくに、それが出来るようになるのは45回の本会議を終えて、JASCというものを距離を置いて見ることが出来るようになってからなのではないかと思っている。今のほくに出来るのは、せいぜいJASCのなかで考えたことや感じたことを羅列すること位なのではないかという気がする。そして、一番判りやすいような気がする。

まず、ほくがJASCに参加したのは、全くの偶然だった。大学に入って、同じような毎日の繰り返しにウンザリしていた、僕は何か自分を刺激してくれるものを求めていた。そんなある日、JASCのポスターを学校で見かけた。本当は、JASCでなくてもよかったかも知れない。ただ、説明会で手に入れた実施要項と報告書を読んだとき、何か新しいことが出来るのではないかと漠然とした期待感を抱いて、ただ、それだけの理由で応募することにした。

だから、5月の全体合宿で、初めてJASCあるいはJASCerというものに接したとき、

本当に驚いた。そこにいる一人一人が非常に個性的で、自分自信の問題意識をもっていることに感動した。JASCに参加できた自分が幸福だと思えた。ここで、新しい仲間からいろんなことを吸収しようと思った。JASCerとする議論は、すべてが新鮮で刺激的に感じられ、自分の思ったことを述べれば、皆が真剣に反応してくれることが心地よかった。全体合宿後に開かれる定例会は、いつも、楽しみだった。今まで知らなかったことを知り、興味を持ったことのないことに興味を持ち、すでに既成のものになっていたものに対して新たな視点が加えられていくのが自分でも分かって、面白かった。

しかし、定例会を重ね、フィールド・トリップで現場の働く方々の話を伺ううちに、定例会での自分の発言が浮いたものでしかないのではないかと思うようになった。ただ、知識をひけらかし、自分とは直接関係ない世界の難しい話をしている気になっているだけなのではないかと思うようになった。そして、本会議が近づきにつれて、その思いが強くなり、自分が日米学生会議という場所にいることの意味が分からなくなってしまっていた。

アメリカにわたって、ワシントンD.C.で本会議が始まったあとも、この思いは消えることがなかった。特に、ハーワード大学というアメリカの中でも非常に特殊な(?)場所で、日本では考えてみることもなかった矛盾を直に感じてしまい、自分に一体何が出来るかということばかり考えるようになった。確かに、学生である以上、自分が出来ることに本質的に限界があることは分かっているつもりだったし、現在存在している社会的な矛盾に早急な回答が存在するとは思ってはいなかったけ

れど、自分がしていることや言っていることが、そうしたことに無関係を装っていたり、無責任であることだけは避けたいといつも思っていた。しかし、今の自分を顧みてみると、自分が語っていることとそれを語っている自分との距離があまりにもかけ離れていて、どう理屈を付けてみても、そのふたつを繋ぐことが出来なかった。会議の目的として掲げられている高邁な理想と会議のなかの自分とに接点が見いだせなかった。

ワシントンD.C.を離れ、テネシー州に移ったのちも、そうした気持ちを引きずったまま、結局、会議の終わりまで消えることはなかったし、今でも消えることはないけれども、テネシーでの何人かの参加者とこの形にならない不満についてや自分が今までの生活の中で感じてきた矛盾について話す機会をたまたま持つことが出来た。そして、それをきっかけにして、なにがしか自分の中で整理をすることが出来始めたように思う。というのは、個々の人間の持つ問題や問題に対する認識というものは、確かに個人的なものであり、社会的な問題やそれらの解決に直接結びつきにくいものではあるけれど、そうした個人の抱える問題に対する共感がなくては、結果として、どんなに社会的な問題について真剣に語り合ったとしても、その議論は傍観者のそれに過ぎないのではないか、ということその頃から強く思えるようになったからだった。そして、会議に参加したということだけでは、確かに会議で話し合った様々な問題の解決に直接何の貢献も出来ないのは当たり前だけれども、今自分が語っていることと今の自分とのギャップを常に感じることによって、僅かでも傍観者の立場に陥ってしまうことは防ぎ、一人一人の問題に対する関わり方というものを見い

だすことが出来るようになるのではないかと思えた。それは、言葉にしてしまえば非常に当たり前で、陳腐にしか聞こえてこないものであるけれど、フォーラムやシンポジウムという議論の場ではなく、JASCという共同生活全体を通じて確かに感じられたのはそうしたことだった。

今まで書き連ねてきたことが、JASCを通してしか得られないことであるかと聞かれると心許ないし、JASCで得たことの全てなのかといわれても首を傾げざるをえないのだけれど、少なくともそうしたことについて考えることが出来たというのは確かなように思う。そして、また、ぼくが実行委員になったのも今年の会議で判然としなかったものをもっとはっきりさせたいという思うがあったからだった。

JASCに参加すると決まったときでさえ、JASCとの関わりがこんなに深いものになるとは自分でも思わなかった。今でも信じられないぐらいだけれども、なってしまった以上は、これからもJASCというものを通して得られるものを自分自信に問い掛けると同時に、出来る限り多くの人に伝える努力をしたいと思う。

Andrew Bodziak

JASCでの経験は、現在の私の日本に対する見方を形成するにあたって大きな位置を占めるものだった。JASCが始まる時、私は日本のことを冷淡で頑固で不可解な国と見ていた。だが、日本人参加者のおかげで今はこれらの予想はいくらか違っていたと言うことができる。

残念ながら、私の場合、これらの見方や日



本についての知識の多くがメディアや本によっていた。日本人の仲間と向き合い、友情を築く機会を与えられて、私は日本についてのより適切で人間的な視点を持つことができた。

日本人参加者とコミュニケーションを図ることが会議の中で最も難しいことだった。会議で話し合われたトピックは非常に綿密な考えと腹立たしい分析を必要とするようなものであった。時には議論はノーマルな範囲を越えてとても感情的なものになった。自分自信をうまく表現することは英語を母語とするものにとってもかなり難しいことであった。自分が適切だと思うように微妙な問題についても自分の感情を表現することができるので、私は時々申し訳なく思ったりもした。自分の意見を統一しようとしている日本人参加者のフラストレーションを感じることもできた。しかし同時に、彼らの英語のうまさに感動し、驚きもした。これは米国側に言葉の面での努力が必要であるという我々日米関係の重要な一面を表していると思う。一般的に言って日本語を学ぶ努力に欠けていることが二国間の理解のレベルを上げることの妨げになっているのだと思う。

会議の体験の中で最も重要な出来事を挙げろと言われても、一つだけではないとしか答えられない。それはある一つの特定の体験ではなく、関係を築き発展させていった一か月の会議全体だと言わざるをえない。会議の終りに、新しく出来た日本人の友人と自分が根本的には同じだということに私は気が付いた。奇妙な「日本の思考」ではなく、むしろ同じような問題についての異なる意見を確認できた。しかし、よくある意見の食い違いを除くと、私たちの基本的な関心や意見は同じだった。それは、友情であり、地球レベルの調和

であり、世界平和であった。JASCは、我々（日本と米国）が互いを理解する努力をすれば、両国とも現代世界の中で平和共存でき、全人類のために世界中で良い意味での変化をもたらすよう共に取り組むことができるのだということを教えてくれた。

（訳出 比企野慶子）

## 「存在」

野田 雄輔

ワシントンDCではレセプションに招待されることが多かった。特に、国務省で行われた立食パーティーは、それは豪華なものだった。最上階の広間は、まるで中世の王宮をイメージさせる空間を演出している。足が沈むほどふかふかした絨毯が敷きつめられ、天井には巨大なシャンデリア。中央には声明発表の演壇が備え付けられ、政府要人、VIP専用の広間であることを窺わせる。バルコニーに出ると、首都ワシントンDCが一望できる。ワシントンモニュメントから、ポトマック河まで目前に広がる美しい景色をカクテルで喉を潤しながら、堪能する。頬を撫でる風も心なしか涼しく感じる。身も心もすっかり開放された気分していると、隣では参加者の皆が写真を取り合うなどしてはしゃいでいる。自分もその仲間に加えてもらい、ほろ酔いの上気した顔を写真に収めてもらう。あちこちで笑い声と、陽気な会話が聞こえてくる。「人生最良の時であろうか」独り悦に入っていると、ポトマック河の上空に飛行機が降下して来るのが見えた。バルコニーの手すりに頬ずえをつくと、轟音にかき消されながら、僕の耳に入ってきた声があった。

「普通の人じゃ来れないところだよね…」

普通の人じゃ来れないところ——アメリカ政治の中枢を司る国務省は、勿論、その辺のBARや喫茶店に行く感覚で来るところではない。玄関口に整列した後、パスポートの提示を求められ、金属探知機で体を限なく調べられた。そうして僕等は国務省の最上階まで上がり、カクテルではろ酔いになった頭でワシントンの美景にみとれている。

「普通の人じゃ来れないところにいる、俺って一体誰だ。ここに来て何やってんだ」

そんな問いが、不意に沸き起こってくる。日米学生会議が長年培ってきた伝統と、先輩たちの尽力が今回、第44回の参加者である僕をここに立たせている。そう言い聞かせ、納得させようと努める。楽しいレセプションの場で、難しいことは考えたくない。しかしどうも釈然としない。雰囲気浸ろうとカクテルを飲み干す。そしてゆっくりと、景色を一望してみた。駄目だった。僕の脳裏に浮かんだのは、眼前に広がっている美しい首都、ワシントンDCではなく、その裏側の街であった。

僕等がワシントンDCで滞在していたところは、首都に対して丁度裏側に位置するハワードという街。黒人居住地区である。ハワードの街は、貧しい。犯罪発生率も高い地区だと聞いた。パトカーのサイレンがしょっちゅうこだましている。「一人では出歩かないように」大学のセキュリティが口を酸っぱくして言っていた。街の外れには廃屋同然の集合住宅が密集し、子供たちは壊れた消火栓から噴出する水で遊んでいる。ストリートに出る

と失業者とおぼしき男たちがいつもたむろしている。夜には麻薬の売人が徘徊する街となる。この街に来て初めて目にしたのは、ゴミ箱に埋もれて、虚空をみつめる老人の姿だった。

「このバルコニーからじゃ、ハワードの街は見えないよな。ハワードの住民たちは、ここに来て、こんなワシントンDCの景色を見ることがあるのだろうか。」

ぼんやりとそんなことを考えた。次第に酔いが覚めていく。自分は一体、どういうわけで国務省のレセプションに招かれているのだろう。再び問い直す。僕は何を思い、このワシントンDCの景色を眺めていたのだろう。誰とも口を開かぬままレセプションは終わり、国務省を後にした。その日、ハワードに着いたのは夜だった。スーツに身を固めた日本人とアメリカ人の集団。明らかにハワードの街にはミスマッチである。反対側の歩道から、道行く黒人が指さしているのが見える。立ち止まって、睨むようにこちらを注視している人もいる。無意識のうちに、日米の集団は足早になっている。ふと気づくと、集団がばらけている。横断歩道の信号機の下で、一人、黒人の老人が何かわめいているのが見えた。ひどく酔っているようだ。他の皆は彼にわめかれて、既に横断歩道を渡っていた。集団の最後尾にいた僕の前に、老人が立ちふさがった。酒で潤んだ虚ろな瞳。僕の姿が映ったらしい。歩道を渡ろうとすると、手を広げてこう言う。

「何故、スーツを着ている。アジア人かお前は。韓国人か、中国人か。お前は誰だ。」

この街に来て何をしている。誰だお前は！」

バットで頭をなぐられた様な衝撃が走った。

——「オマエハ ダレダ」

老人の顔を見つめる。一瞬、アルコールの臭気が鼻孔を突く。不精髭に覆われた口許からヤニだらけの歯がのぞく。よだれが垂れている。彼の手が僕の肩に伸びてきた。その刹那、「カッ！」僕の頭のなかで何かが発火したような気がした。老人の横を駆け足で走り抜け、一目散で部屋に帰った。ネクタイを締めたまま、ベッドに転がった。その夜、僕は途方に暮れた。国務省での豪華なレセプションで自分の存在を確認できなかったこと。そしてたった今、僕の前に現れたハーワードの老人に詰め寄られたこと。自分自信の存在に対して、あらゆるものが疑問を投げかけてくるようだった。会議はまだ始まったばかりだというのに——。

「僕は何者なのか。なぜここにいるのか。

何を求めてここに…」

どこか底の無い淵の中に吸い込まれていく錯覚をした。毛布を体に巻きつけ、海老の様に丸くなった。眠れなかった。パトカーのサイレンが鼓膜に張りついて、離れなかった。

日米学生会議は僕らに様々な形で、深い思索の機会をもたらす。その度に視点は「上」になったり、「下」になったりする。国務省のレセプションに出て、VIP気分でワシントンDCの景色にうっとりして終わるのもいい。けれど、その裏側にハーワードという街が存在する現実にも眼を向けることも必要だ。アメリカにいるから特別だということではない。日本にいても、同じことだ。自分自身の「日常の眼」を通してものを考えたい。僕らは

「普通のひと」であるはずなのだから。——僕の目の前に突如現れた老人。彼との短い出会いは僕にとって大きな意味を持つ。どんな政府の要人や、偉い人の言葉より、彼の問い掛けは胸に響いた。

あの日以来、僕はどんな問題を語るときでも、誰とどこにいても、自分自身を執拗に問い続けた。議論の場にあっても、「ではその問題を語る自分自身はどうなのだ、何をする者なのか」という、問いが僕を黙らせた。そんな僕の姿に誰も気づくことなく、また誰に打ち明けるわけでもなかった。会議は個人的な葛藤を繰り返して、終わった——。

東京に戻ってきた数ヶ月後。夏の思い出に整理がつき始めた頃、ある人に自分が会議中に独りで考えたことを全て吐露した。彼女は黙って話の一部始終に耳を傾けた。すると少し俯き、それから寂しそうな視線を僕に向けて言った。

「何で黙ってたの。話せば良かったのに。

みんなが周りにいたんだよ。かっこつけちゃってさ…」

僕は飲みかけのコーヒーを、一気に飲み干した。手の震えが、止まらなかった。

Jin Gil Lee

国際政治を勉強する学生として、ひどく形式主義的で効果のないブッシュ政権の日米構造協議の最終ラウンドに見られるような最近のエスカレートする日米貿易の緊張が、未来の暗示であり、また過去の不吉な回帰のように見えることを憂えて、私はこの第44回日米

学生会議にやって来た。このような状況下では、この種の会議の必要性は明白であり、私は高名なコスモスクラブで開会の言葉を聞きながら、その歴史的な重要性を思い起こした。私は、まるで私たちもこの新時代に同様の使命を負っているかのように、この会議と今や神聖でさえある1934年の会議の重要性を難なく関連づけることができること、私たちの経験は重要なものとなるであろうということに気付いた。このような印象がどれほど現実に近いのかは普通に考えても想像できるが、実際は、国際社会の日米双方の国益や目標という文脈での日米関係に対する（それは制度的、専門的な関係とは違うものと私は考えているが）日本の学生の考え方や態度を理解することに私はより興味を持つ結果となった。嬉しいことに、会議では十分なフリーディスカッションと（友人を作らないわけにはいかないほどの）多くの生活レベルでの交流の時間があった。「相互理解、友情、信頼を通して平和を育む」という会議の総合テーマに反映されているウィルソン主義的リベラリズムの理想と目的が、ほとんど無意識的なレベルでの会議の実際の性質であった。

両国の国民がそれぞれ相手に対し否定的な見方をしているということは意外ではない。「アメリカは日本人を排他的で姑息で自分勝手に国際的な責任を果たすことにも積極的ではないと考えている。」日本人はアメリカ人を「怠け者でわがままで浪費家で一方的な暴力行為をしがちである」と考えている。この会議の重要な点は、ホブズのイメージより協調の方が結局は良いという考えから、学生として地球市民としてそして人間として私たちが同じであることを強調し、文化的社会的経済的な違いはそれほど強調しないことにあっ

た。そして、相互の友情が後者でなくむしろ前者が将来の日米関係の基礎になるということを保証するのであろう。

多くの点で、私たちは、とりわけ冷戦政治、科学技術の変化、市場のボーダレス化、そして歴史的機会の遭遇から生み出された新時代の交差点にいる。1934年の日米学生会議の創始者の学生達がそうであったように、政治的にも経済的にも二国間関係において重要になるというふうに、私たちが築いた友情がこれから何十年後かには未知の試験に試されるという意味で、私がこの会議を歴史的なものとして述べたのは適切であろう。軍事戦略より貿易のほうが優勢になりつつあることが自明の事実である時代に、とりわけ日米両国の協調がほとんど全ての国家の経済的安定にますます必須となるので、第44回日米学生会議は重要であると言えよう。（訳出 比企野慶子）

## テネシーの夜

田中 剛

和文報告書の締め切りも近づき、JASCから3か月たった今、何が一番僕の心に残っているだろう。英語も80人の中では最低辺レベルであったし、基本的に自分はリーダーシップをとることができず集団行動のできない（人に従うことのできない）人間である。そんな僕としては、セッション外、つまり夜の活動でしか自分を活かすことができなかった。そう、小学校の放課後のように。（例外的に楽しめたのが、ボランティア・ワークであった。）当然インフォーマルな夜の話に、フォーマルな昼のセッションが消化されて出てくるのだから、昼間が無駄であったというわけではない。ただそれだけであったならば、この

夏はあまりに実り薄いものになっていたことは確かである。

ハワード大もコロラド大も、寮に大きなミーティングルームがあり、そこで話し疲れてそのまま床で寝てしまうのが常であったが、ミドルテネシー州立大では、小さなソファが3つほど、テレビ1台という小さな部屋しかなくて、全員が集まることなどとても無理があった。そこでは、ワシントンでの堅さやコロラドでの弛緩もなく、僕にとってテネシーは短い適度の緊張を与えてくれた場所であった。

テネシーでは毎晩のように、玄関の階段に座り込んでただべっていた。キャンパスの中ではひたすら緑が広がり、ところどころ街灯がともっていた。夜の暗さになれた目には、時々2人3人と寄り添って歩く人間の姿が白く見えた。僕は、人生の真実を探し出すように、その闇をじっと見つめていた。実際その断片が浮かんでいた。いつも、民族だの人種だの社会の大きな流れから、愛だの恋だのといった私的な話になり、4時5時になると決まってシモネタになり、あたりかまわずバカ笑いをしていた。

——人間が本当に生きていると感じるのは、オーガズムの時と人を殺す瞬間である。——こんなばかりしくも哲学的な命題（迷題？）が数多く導かれた。真友の少ない僕にも、心の琴線に触れる瞬間がしばしば訪れた。カラオケなんて大嫌いだったのに、チェッカーズの“Song for U.S.A.”を始め、日本の歌謡曲を2、3人で声を張り上げて歌った。

僕は基本的には懐疑主義者であり、唯物論者であり、結局頼れるのは自分だけという利己主義者である。僕には人望がなく自分勝手に頼りがいが無い。自分でもよくわかってい

るのに取って最後の日、実行委員の選挙に出た。自分をいじめるために。案の定僕は一人名前を呼ばれなかったのだが、そんな僕に対して、涙を流してくれる友がいた。「こいつ本気か。」と内心驚きながらも、いつしか自分も涙していた。

アメリカでの夢のような1か月半はあっという間に終わり、再び日本で普通の学校生活は始まった。留学への切なる望み。恋愛の不可思議さに悩む日々。だが何かが変わっていた。何か、より人生の一つのことに対して大切にできるようになった。同じ孤独な人間でも、「こいつは信じられる。信じてみようか。」と思う人がこの世に存在すること。たまに会って話すこと。そんなことが、僕の精神を安定させていた。

芥川龍之介の『トロッコ』のように、テネシーの夜の暗闇が、今でも僕の前に広がっているのである。

#### Zubin Gidwani

私のJASCでの経験と日本国内の旅行の経験に基づいて、日本人の良い面、悪い面についてコメントを頼まれた。

私たちの多くが、少なくともJASCが終わった現在、一般化、ステレオタイプ化が十分に相手を説明しているとは言えないことを認めていると思う。しかしながら、多言語の生活体験から私たちのコミュニケーション術にくらか違いがあることを発見したことについて話したいと思う。

JASCに参加して、実行委員として働くことは多くの個人間のコミュニケーション術を必要とした。二年間を通して、実行委員のメンバーは共に多くの波を乗り越えてきた。言

葉の壁を越えて意思の疎通を図ることは難しいことだ。単にフレーズを訳すだけが発言の本当の意味を伝えるとは限らない。訳し方はもちろんのこと、それぞれの言葉でのニュアンスやイントネーションが誤った解釈を生むこともある。私の出会った多くの日本人は概して、騒々しいアメリカ人の仲間より静かで内気だった。それは学問的な討論の場同様、普通の会話でも見られた。私たちは学生たちに沈黙を尊重することを言い続けた。二か国語が使用される場面では訳して考える時間が必要とされる。フランス語にしても、ドイツ語、ロシア語、そして日本語にしても、訳すには時間と努力が必要なのだ。沈黙は、訳す時間や意見を組み立てる時間を要求してるのだとも言えるが、反対、混乱、驚き、狼狽や、単に熟考を表すときもある。

私の経験から言うと、アメリカ人は素直に自分を表しがちである。学校では自分の意見を表すために声を挙げることを奨励される。私たちは大抵、関係ないことであろうとなかろうと取り敢えず発言する。アメリカ人は議論の拡がりや大切にするようだ。私たちが素直に結論や投票を求めて討論し、議論を戦わせがちである一方、日本人はもっと多くの時間をコンセンサス形成に割くようである。アメリカではなるべく多くの意見を出して、それから多数決で決定を下そうとする。少数派は反対意見を持ち続けるかもしれないが、決定は受け入れられる。日本式の政策決定過程は全会一致の賛成になるように導かれるようだ。多くの人がグループの利益を生む方へ進んでいくように黙っているようだ。反対意見は集団の利益に従わせられ、異端視されるようだ。

アメリカ人は社会進化論の最も良い例であ

ると言えるだろう。「適者生存」や反対者を圧倒することが生活のどんな面にも、特に個人間のコミュニケーションにおいてよく見られる。アメリカ人は自分自身の解釈を挟むために、他人の意見にしばしば割って入る。正しいエチケットとしては他人の権利と感情を尊重することとなっているが、それをどれだけ私たちは実行しているだろうか。実行委員は政策決定過程においてこの両者対立を経験した。部屋の半分は白熱して問題を議論していたが、残りの半分はだいたいそれを観察していた。発言されたことをより注意深く考える人もいた。論点を引っ掻き乱し、ミーティングを長くするのではないかという恐れから意見が十分に交わされないこともあった。これは良くもあり、悪くもある。考えていることを言葉にしなければ、繰り返しや無関係なことを付け足すのを避けることができるかもしれないが、同時に彼らは感情を表さないことになるかもしれない。感情はコミュニケーションの強力な手段となるが、自身の中で抑さえられても同様に強力であるのだ。発言されなかったことは発言されたことよりも時にはもっと多くのトラブルを生むことがある。反対意見を抑えてしまうことは時間通りに終わらせるための意見に従うことになる。もし思っていることを話さなかったら、それはこれから先もその感情を守り続け、同じことを考え続けることになるだろう。意見をグループに却下されてしまうことは恥ずかしいことかもしれないが、話さないで終わらせてしまうことは「もしあの時言っていれば…」と感情をより悪化させるだけである。

日本の人々のことを考えるために、私は日米関係の基盤であるコミュニケーションについての私の観察を表そうとしてみた。一般的

にアメリカ人も日本人も互いから学ぶこともできるし、また学ぶべきである。日本人は発言について注意深く、控え目になりがちである。必要なことだけを言うことによって会話は能率の良いものになる。しかし、礼儀正しく言えば、反対意見はしばしばそのまま残ってしまう。このような明らかな反対意見に欠けるのは当然のことだと思う。一方、アメリカ人は再確認することになろうと反対されようと、自分の思ったことを話すことを主張しがちである。これは意見の拡がり、多様化につながるが、しばしば無関係な話を付け加えたに過ぎないこともある。グループの原動力に関して言えば、私は沈黙の持つ力に注意し、そして建設的に自分の感情を伝えることを皆に勧めたい。自分の考えを発言する前に言わ

れたことを吟味し、合理的に考えるべきであるが、しかし有益な意見が加えられるのを妨げるべきでもない。さらに、表面の部分以上のものを読み取るべきである。沈黙は反対にも賛成にもなりうるのである。アメリカ人も日本人も反応がないというのは必ずしも意義がないことを意味するのではないことに気付くべきである。最後に私たちはコミュニケーションの基盤、すなわち、人間は社会的な存在であることを検討しなくてはならない。人間は個人的な理由からも儀礼的にも見知らぬ人に対しては遠慮がちになる。私はこの社交上の壁を取り払うよう勧めたい。他人に対して心を開くことは自分の弱点を見せることになるが、互いに頼り合う友情を生むことになるからである。 (訳出 比企野慶子)

## 第 4 部 共 同 声 明



## 共同声明作成にあたって

この共同声明は前回までにはなかった、第44回日米学生会議の新たな試みとして企画され、会議中から会議終了日に向けて参加学生の手で作成されました。ここでは、会議の議題から総合テーマ、民族問題、戦争と平和、ボランティアリズム、貿易、ジェンダーを取り上げています。開期中に行われたそれらに関わる行動・議論から私達が何を感じ考え、今後何ができると考えたかをまとめたものです。

これまでの学生会議報告書の中では、活動や話合いのトピックは記されていても参加者の意見・声が具体的に表われてこないくらいがありました。それを個々の心の内にだけでなく、文書の形で残すことにより、私達が考えたことを会議の外の人々に対して伝え、さらに会議を越えてもなお、私達がこれらの問題を考えていくように自らを喚起する、ということが声明作成の目標でした。

私達の間で必ずしも意見の一致が見られたわけではなく、既知の共同声明とはその性格がかなり異なるものとなるかもしれません。しかし、参加者がこの会議で何を考え、感じたかができるだけ具体的に表われているならば、この声明の使命は達成されたことになると思います。



共同声明作成にあたっては、学生が次のようなアンケートを作り、全参加者にすべて記述解答を求めました。

### アンケート質問事項

- テーマについて
- 1) あなたの考える「地球共同体」の概念はどんなものですか？
  - 2) あなたの国の地球共同体への責任・果たすべき役割はどんなものだと感じますか？
  - 3) 第44回会議の後、地球共同体形成に向けてのあなたの役割をどのように持続させますか？
- 民族問題
- 1) 本会議と民族問題フォーラムは、民族問題に対するあなたの考え方をどのように変えましたか？  
解決に向けて何らかの提案がありますか？
  - 2) 差別はどうして起きるのでしょうか？  
人種差別を緩和するためにあなたが日常生活の中でできるのは、どのようなことでしょうか？
  - 3) 会議の前には、人種差別をどう考えていましたか？

- ボランティアリズム
- 1) あなたにとってボランティアリズムとは何ですか？
  - 2) 学生としてローカルなレベルで私達が地球共同体のために貢献できるならば、どんな方法がありますか？
  - 3) 今現在の学業や役割をどのようにボランティアリズムと結びつけられますか？
  - 4) この国際時代には私達が生きていくためにできるボランティア活動とはどんなものがあるでしょう。

- ジェンダー
- 1) 成功している男性／女性とは？
  - 2) 男女間の理想的な関係を書いて下さい。
  - 3) それぞれの国で、ジェンダーに関係することで1つ変えられるなら、あなたは何を变えたいですか？
  - 4) 公的・私的なジェンダーの差別をどうしたら解決していけるでしょう？

### 「地球共同体への一步～今果たすべき私たちの役割～」

会議を通じて私達は第44回日米学生会議のテーマである“Exploring Our Responsibilities to the Global Community”について考えてきた。貿易・環境・「戦争と平和」そしてボランティアセミナーでの経験を補うために、私達は国家あるいは個人レベルでどの様に私達のグローバルコミュニティーに対する責任を果たすことができるかについて話し合った。私達は、“グローバルコミュニティー”の定義について、またどの様にして相互依存世界への意識を高めるかを話し合った。ある者は他国の法律・習慣を尊重することによる多角的・共存的な複雑な社会システムを想像し、またある者は国家の政府を監督する中央組織により世界が統治されることを望んだ。

私達が最初にぶつかった問題のひとつは、利己的な利益に直面した場合、果たして私達は世界の中での自分達の役割を認識し、それを実行できるのかどうかということであった。もし自己本位であるということが不変の人間の本質の一部であるとすれば、私達が個人的あるいは国家としての利益を、世界規模の意思決定の場に於いて優先させてしまうという態度は変えられるのだろうか。自己本意であることが人間の本質であるかないかに関わらず、私達はより私欲をおさえることができるようになるのではないか。私達は全人類にとっての問題の解決が、私達自身の利益にも結び付くという事を学ばなければならない。人種差別、戦争、公害や貧困などの問題は、全て私達の利己的な利益に由来するものである。これらの主な全地球的問題の解決には人道主義が不可欠である。

また、教育も地球共同体での役割認識のためには欠かせない。これは異なる国や民族に対して無知であることからおこる文化に対する誤解を取り除くことも含むものである。それぞれの国が異なった性格・民族的文化的背景を持つ。それ故国際化への道りは民族によって異なるのである。

さらに私達はアメリカ合衆国と日本が、地球共同体を築く上でどの様にリーダーシップを取れるかについて議論した。両国は大きな経済的・政治的力を持つため、相反する形ではなく共同で全地球的

な役割を果たすべきである。私達は文化的帝国主義の危険性に注意し、経済的には小国である地球共同体のメンバーを尊重しなければならない。

会議参加者は、日米両国が地球共同体をより良いものにするための様々な方法を提案した。私達は自分達が持つ様々な資源を人道的行為のために利用できるのではないかと考えた。例えば多国籍企業が、その利益で当事国の開発を援助したり、難民キャンプに寄付をする、といった事である。日本側・アメリカ側参加者のいずれも自国により積極的に技術・人権・環境問題解決のための行動を望んでいた。私達はアメリカの経済力の低下と日本の限られた国際政治への参加について考えさせられた。さらに自由貿易や保護主義が各国の利益となり、地球共同体を改善していくのかについても話し合われた。

個人的なレベルでは私達は日米学生会議参加者一人一人が、地球共同体のために何ができるかを討論した。以下に示すのは参加者からの提案である。

- 教育を通じた地球相互依存化の促進
- 人々の環境問題への意識を高めるために情報を提供する
- 日米両国の政治家選択に、より一層の責任を持つ
- 良い映像で人々に世界が抱える問題について知らせる
- それぞれの地元でできるだけボランティア活動を行う
- 日米学生会議参加者と連絡を保ち、情報交換を行う
- 会議中に自分が感じた事を友人とシェアし、自分の得たものに応じて彼らに影響を与える。
- 自分が未勉強である問題について学ぶことに最善をつくす、世界の現実の状況を学び問題解決について考える。
- PBF・APEC等の環太平洋組織の強化に努める
- 信頼・尊敬される日米間の仲介者となる
- より良い相互理解の促進のために自分のコミュニケーション技術を向上させる
- 教育と経験により偏見を取り除く
- 災害救助を手伝い、発展途上国の抑圧された人々が自立できるよう援助する
- 心を開き、ステレオタイプを持たない様にする

日米学生会議参加者として、私達は国の地球共同体に対する役割と同じ様に様々なレベルでの私達の役割を見つけた。—地球市民として、先に示した以外にも様々な方法で私達は新世界秩序とより固い、より良い形の日米間のきずなのために貢献することができる。そして世界的視点に立って考えるために私達は自分達の地球で活動しなければならない。世界的視点に立って考えるためには私達は個人的に変化について話し合わねばならず、その上個人レベルでの変化を起こさねばならない。この努力のなかで重要な部分は日米学生会議の目標に反映されている。それは、「相互理解、友情、信頼を通じての平和の促進」ということである。この目標は同時に、21世紀のより良い世界の創造に向けて共に歩まなければならない日米両国の相互依存関係の根底をなす基礎でなければならない。

## 地球環境フォーラム

地球環境フォーラムは8月4日、ハーワード大学で行われた。日本側からは日本大使館の環境問題担当官、西窪氏が招かれ、日本の過去30年の環境保全に関する政府の取組みについて話された。特に、日本が大気汚染に関する問題について、各地域で改善があったことを説明した。アメリカ側からは、地球サミットに参加した国連大使でもあるロバート・ライアン氏が、アメリカの環境政策について、また、地球サミットに対するアメリカ政府の見解を説明した。

午後は、3人の科学者を招き、地球温暖化問題について科学的な見地からの講演があった。特に、複雑な温暖化現象の原因、アメリカと日本のエネルギー政策、将来の新エネルギー資源の管理とその持続的発展の可能性について豊富なデータを用いて述べられ、この日のフォーラムは幕を閉じた。

8月10日の地球環境フォーラムは、中部テネシー大学で地域社会における環境問題について考える機会を設けた。招かれた講演者は、州の自然環境官、企業誘致に関わる組合の担当者、リサイクル運動に関わる人々であった。こうした、ワシントンDC、テネシー州で行われたフォーラム、グループディスカッションを通して参加者が共同声明として盛り込んだのは以下の通りである。

- 一 地球規模で起こっている環境問題は（地球温暖化、産業廃棄物の投棄など）簡単に解決される問題ではなく、短期的視野でなく、長期的に忍耐強く取り組まなければならない問題であることをまず、認識すべきである。
- 一 会議を通して、様々な角度から環境問題を議論してきたが、日米両国の学生が特に強調したいのは、リサイクル運動の普及である。ただ、現実には、リサイクルされた商品なり、生産物が、リサイクルでないものよりもコストがかかるという問題があり、これをまず、クリアしなければならない。
- 一 リサイクルも大事だが、今使用している物を可能な限り使う努力をしなければならない。
- 一 上記のような消費者側の意識革命と共に、政府がもっと介入し、企業が環境問題に真剣に取り組むよう働きかけるべきである。
- 一 また、学校教育においても授業などで、環境問題を真剣に考えなければいけない時期にきていることを、早くから子供たちに訴えていくべきである。
- 一 結局、環境問題への取組は各人のライフスタイルや意識の変革を促すものである。その際に、広く人びとの関われる媒体はNGOであり、“ACT LOCALLY THINK GROBALLY”の精神を新しい、環境問題に取り組むデータとして取り入れていく必要がある。

## 民族問題フォーラム

最初に民族問題フォーラムはハーワード大学で開かれ人種差別に加えてアフリカ系アメリカ人に焦点をあてた。私達が招いた講演者はいわゆるアファーマティブ・アクションを支持する方々4名であっ

た。彼らはマイノリティにも持っている力を発揮出来るように機会が与えられるべき、と説明した。性差や人種の違いに拘らず、平等の機会を与えられるべきなのである。このワシントンDCでのフォーラムは質疑応答で締め括られたが、そこではスピーカーの方々の人種差別に対する怒りを改めて考えさせられた。過去における闘争の話でそれを垣間見ることができた。このフォーラムの後、学生達は複雑な心境になったが、少なくとも民族問題に関する認識を高める一つの契機になったのは確かである。

ナッシュビルではハワード大学で開かれたフォーラムを受けてディスカッションをした。先の4人の講演者の情熱的な話に影響を受け、私達は強くより深いディスカッションの必要性を感じたのだった。日本側の参加者は特に英語によらないで自分の考えを話し合おうとした。そして日本語によるディスカッションが実現した。議論は白熱し、人種差別 (Racism) の定義からスピーカー達のやや感情的だった点、それに対する日本側参加者の反応など深い点について話し合いがもたれ、それは深夜にまで及んだ。

第2回のフォーラムではバンダービルト大学のフレンドシップ・コミュニティ・センターでワークショップを行なった。ここでは人種問題に限らず、友達として各々が自分のことや文化などについて考えを述べあった。はじめに詩や歌を披露し、自らのエスニシティについての態度を示す者、個人的な経験を語り、それが民族問題を考えるうえでの影響を示した学生など様々であった。

このワークショップでは「理想の社会」を皆で想像しあい幕を閉じた。あるグループは歌を作り、現在の人種問題や差別がなくなるための第一歩となるその小道について歌った。他のグループは絵を書き、また様々な「理想の社会」像を個条書きにした。このことは一見馬鹿げているようにも、そして幻想的に思えるものかもしれないが、この目的は明らかである。各グループで一人一人が差別の非人間性や非合理性に気が付いていったのである。

私達はこのフォーラムの結果、自分達は自らが持つ偏見を変えていく努力を続けていくべきだと感じた。そして例え、マスコミや歴史、政治や現実から悲観的な影響を受けても積極的に努力していくことを確認したのである。

最終パートでは私達はマニトウ・インディアン・クリフ・ドゥウェリングスを訪ねた。案内役を務めて下さったマイケル・リトル・ディア氏の助けによって由緒あるネイティブ・アメリカンの生活を見学することができた。始めに伝統的な踊りを見せて頂き、その後でネイティブ・アメリカンに関するビデオを見た。何人かの学生はそれが大衆向けになっていると感じたが、彼らの伝統的な料理の後でのマイケル氏の示唆にとんだお話にそんな考えも即改められたようである。主に60年代の自身のネイティブ・アメリカンを主導することについての経験を語られたが、それは現在もその生活の向上を目指す熱意となっているのであった。彼の思いやりと積極的に行動していく姿には多くの学生が感銘を受けていた。

\*            \*            \*

共同声明の作成にあたり先のアンケートにある質問を学生全員に投げ掛けた。

初めの質問 (会議参加前の人種差別についての感じ方) に関して、主に日本側の学生のほとんどは民族問題に関してそれほど意識が高くなかったようである。ある日本の学生はこう言っている。「自

分は、マイノリティに属したことはないので理解するのは難しい。知識としては知っているけれどもそれは経験としてではない。」アメリカ側の学生も何人かは歴史の前例や自分達の社会の中での強い影響から偏見や差別的な態度をとることをよし、としていた。

会議に参加してから、学生達は講演者たちの民族関係の改善に対する情熱に深く触発されたようである。

差別の主な理由としては他人より優位に立ちたいという欲求やステレオタイプを持つことへの好都合、力を持ったことを楽しむ自己満足や基本的な無関心といった人間の特性が挙げられた。また自分達の社会の影響や教育も挙げられる。大きな理由に相互理解の欠如とコミュニケーション不足がある。言葉や地理的な壁が災いしている。

最後に学生達は現実的な、民族問題解決のための方法を考えた。それは教育であり、個人のレベルで意識を広げていくことであり、他の民族の人たちと話してみることである。そして自分を常に見つめ続けていくことなのである。あるアメリカ側参加者はこのように表現している。「自分の行動と他人の行動に気を払っていることはとても重要である。人種偏見に立ち上がり、そして決して座わってしまうのはよそう。」

## 戦争と平和セミナー

アメリカとソ連のイデオロギー的な対立が終わって、国家間の関係も新世界秩序を作っていくべく再評価されはじめている。このセミナーでは学生達にこの新世界秩序のなかでの日米関係を話し合う機会を与えることとなった。

ワシントンDCではサンフォード・ゴットリーブ氏とマイケル・グリーン氏が冷戦下で二極に分けられていた世界の背景について説き、この過去をどのように未来へつないでいくべきかを述べた。かつてソビエト連邦とアメリカ合衆国は、多大な影響力の領域を求めて地球の規模で争っていた。グリーン氏によれば、合衆国の共産主義に対する封じこめ政策の結果、中国に近い日本はアメリカにとって戦略的に重要な場所となった。このようにして日本はその経済力を伸ばす一方で国際社会で受け身的な役目を果たしてきたのである。

ソビエト連邦の消滅は共産主義の脅威がまさに消滅したことを意味している。アメリカは新世界秩序の中で軍事的な役割を続けていくべきだろうか。ゴットリーブ氏は「国連のような多国間の組織が強化され、国際平和を保つために権威づけられるだろう。安全保障は多国籍でかつ多面的である必要がある。現在、多国家間の安全保障は安全保障理事会の5つの常任理事国的手中にある。湾岸戦争はこの5大国が協調し行動できることを示したが、今日のダイナミックな世界の変化を反映するためにはこの常任理事国にドイツと日本が参加すべきだ。」と提案した。さらに、加盟国は兵力と政策援助の努力に貢献していく必要があるとした。

グリーン氏は多極的な世界を支持しつつも、日米間の軍事関係を重要視した。もしアメリカが東アジアから撤退したらその地域は成り立っていかなかっただろう。誰がその真空状態を埋めていたのだろうか。第2次世界大戦時の日本の軍事化のために、日本と他の国々との間には今だに不信感がある。

大規模な日本の軍事化は望んでいないのだ。また日本も、PKO法案反対運動に見られるように、そのような役割をとることを望んではいない。話し合いのなかで、日本側からは軍事力の強化に対する懸念の声があがった。彼らはこのPKO法案が日本国憲法の第9条改正につながることを恐れていた。

話し合いを通じて、学生達からはさまざまな問題が指摘された。どのように貿易不均衡が日米の二国間関係に影響を及ぼすのか、アメリカは産業政策の採用を考えるべきではないか。平和の定義とは何かなどである。講演者によれば日米間の協調が重要であるので、様々な違いを乗り越えていく必要がある、ということであった。こうした話を受けて学生達は8つのグループに分かれ、より特定のテーマで話し合った。

このセミナーをもとに学生有志の発案で、より個人的なレベルでの戦争と平和を考えるセミナーが設けられた。テーマは広島と長崎であり、社会に与えた影響や第2次大戦中の日本軍のアジア諸国での行為について話し合われた。この話し合いによって戦争の悲劇と現実が浮き彫りにされた。

安全保障を考えると、そこには脅威を同時に想定している。ある理論は2種類の脅威があることを説明している。一つは「通常型」、もうひとつは「非通常型」である。このことを深く考える前に次のことを考えなければならない。「我々は通常と非通常という境界線をきちんとひくことができるだろうか。」私達はグローバルな問題、例えば環境破壊や人口増加、資源の枯渇という一国だけでなく他国にも影響を与える問題を考えると、その曖昧さを否定することはできない。今後10年でこれらの問題が国家を悩ませることになる可能性は大きいのである。

また、地球共同体を達成することは可能だろうか。現実的にみて、国益を除くことは困難であるが先に挙げたような問題を地球的分野で考えていくことは大切である。解決のために私達は3つの概念を提案する。1つは教育である。なぜある状況がおこるのかを理解することは重要なことである。また政治行動と関わる点で、哲学を学ぶことも適切だろう。2つ目は外交である。2つの国家がたとえ対立していても、コミュニケーションを政府レベルで、あるいは個人レベルで続けることは双方にとって死活的なこととなる。3つ目は「国民国家」や「主権」というような概念と関係している。現在は国家間の相互依存が深まっている。このことと合わせてなぜいま「国民国家」が求められているのだろうか。

これに加えて国連の再強化を提案したい。5大国のシステムが適切かどうか検討すべきであろう。平和への願いは万国共通のようである。このことを心に留めながら、避けられるべき軍事紛争で核兵器が禁止されるべきである。日本とアメリカは紛争と国益の起源を研究する組織を創立し、協力して働きかけていくべきである。現実を分析するだけでなく自分自身を見つめ変化を起こそうとすることは大切であろう。

このセミナーが学生達にとってより「戦争と平和」を深く考えていく契機であることを願う。世界はめまぐるしく変化し、よりグローバルになってきている。国益も自国だけでなく国境を越え国際的になっている。このような中で私達は自分たちの責任を考えつつ、平和と安定を守っていく必要がある。以下は私達の考えであり、提言である。

- ・他国に影響を与える権利は存在するが、主権の侵害とそうでない場合との境界線はあいまいであ

る。そのため、何が正しいのか判断することは難しい。

- ・「非通常」の脅威はそれが新しいものでも歴史的に存在していた。問題は「国民国家」や「主権」についてこの重要な時代に再検討できるかどうか、ということである。私達は国民国家システムが永久のものではなく、現代に特徴的であることに気が付くべきである。
- ・平和な世界を創るために多くのことをしなければならない。戦争の不在が平和には必要である。軍事的行動から人類を守り、物理的な力の行使を止めさせ、平和な社会を創るべきである。

## ボランティアセミナー

ボランティアセミナーは第43回日米学生会議に由来する。温かく親切なもてなしを日本各地の地域社会から受けたのに対し、自分たちは何も返すものがなかったという思いからSapporo Agreement（第44回会議開催のための協約）では、ボランティアの考え方やそれを日頃の生活に受け入れるきっかけを作ると同時に、日米学生会議を受け入れて下さる地域社会への小さな恩返しという目的でボランティアセミナーがプログラムにもり込まれた。ボランティア活動は多くの参加者にとって初めての体験であり、反応は様々だったが多くは肯定的なものだった。ボランティアの定義自体も個人によって異なった。ある参加者は「ボランティアリズムとは他者の生活や生活様式、生活環境をより良くする手助けをするために時間を使うこと」としている。それぞれ少しずつ異なった定義であったが、他者を助け、自分自身よりも他人のためであるということでは同じであった。

ボランティアセミナーの一つの目的は、参加者に他人のために何かをしたときの達成感を味わってもらい、それぞれが自分の大学、場所へ戻った時にボランティアを生活の一部にするステップにすることであった。

第44回日米学生会議では開催地3か所で様々なボランティア活動をした。多くの参加者は、自分が現在地域社会にしている以上のことをできるのだということを見つけた。ボランティアリズムのゴールは地球レベルであるが、現実的に言って、各個人はローカルなレベルでしか活動できない。「どうやって地域のレベルでボランティアができるか、そしてその努力を自分たちの責任と結び付けることができるか」という問いが私たちの心に浮かんだ。

自分が強く関心を持っていることをやっていくのが大切である。ボランティアの報酬は喜びであり、金銭的なものではないとある者は気付いた。しかし、ボランティアには時間が必要である。学生として、大学構内やその近くでボランティアを行なうことが一つのコンセンサスであった。学内のボランティア活動に参加するのが手取り早い方法である。教育上の配慮、例えば卒業までの必修としてそのような活動を取り入れるのが良いとする意見もあった。結局、自分の身近な所での活動が良いと思われる。重要なことはその活動に自分自身が興味があるということである。

会議では机上の空論をするだけではなかった。私たちは地域社会に貢献するために地域社会でできることを求めて実際に町へ出た。小グループに分かれて、実体験ボランティアリズムを考えた。「ホームレス」「障害者」「老人」「子供」「地域社会の要請」の5つの分野に重点を置いた。

ワシントンDCでは、2グループが食料配給施設を手伝い、心の病を患う人々の施設を訪れたグルー



プ、老人ホームを訪れ日本文化を紹介したグループ、そして低所得者居住地域の掃除やペンキ塗りを  
行い、そこに住む子供達に自分たちの住む町を改善する方法の例となったグループもあった。

テネシー州ナッシュビルでも似たような活動を行なったが、いろいろな活動を経験するためそれぞ  
れ前回とは違った活動を行なった。ホームレスに緊急の食料を配るだけでなく、長い目で見て彼らを  
助けていこうとするプログラムに感動したグループ、地域の子供達に日本文化を紹介したグループ、  
障害を持つ子供達の施設の遊び場修理を手伝ったグループ、老人ホームを訪れたグループ、虐待の犠  
牲になった人への募金を集めるために開かれるバザーのセッティングを手伝ったグループとそれぞれ  
であった。

コロラドスプリングスでは、環境フォーラムを兼ねて、80人が2グループに分かれて国立公園の整  
備をし、達成感とチームワークを得ることができた。

このような様々な活動で人々へ貢献しながら、私たちは地域社会そのものについて多くを学んだ。  
こうして私たち第44回日米学生会議は真に「Exploring Our Responsibilities to the Global Comm  
unity」であったと言えよう。

以下が、私たちの提案、コメントである。

- ・私にとってボランティアは短時間で終りのものでなく、地域奉仕の一つの在り方である。
- ・学生として、興味を持った様々な事柄を試し、最も情熱を持ってできることをやるべきである。
- ・私たちの力はその若さとエネルギー、理想主義と融通のきく生活の中にあるので、地域レベルでボ  
ランティアすることによって地域社会へも貢献できるはずである。
- ・私にとって、ボランティアとは社会の貧しくて十分な援助を受けられない分野へ自分の時間と持って  
いるものを捧げることである。
- ・それぞれ何を選んだとしても、皆がそれを継続的にやっていくことを望む。
- ・ボランティアとは、他者を手助けするために自分が心の底から情熱を感じることに、自分が気に掛け、  
興味を持ったことに従事することである。

## 貿易シンポジウム

日本とアメリカ合衆国は相互に利益をもたらす状態を作るために、異なる法規と商習慣について調  
和を計るべきだ。以下に示す問題については有効な協議を通じて解決されるべきである。これらの協  
議は

- a. 検査・技術的基準
- b. 競争の監視（すなわち独占禁止）
- c. 環境基準
- d. 経営慣行

などの改善に関しての履行と同様に、類似する法規と基準についての妥協を含むものとなるであろう。

国際的な調和への障害を取り除くために、私達は以下の様な国内問題を解決しなければならない。

アメリカ合衆国は過剰消費、企業の短期間での利潤追求を求める姿勢、そして連邦政府の過剰な財政赤字に対処しなければならない。同様に日本はカルテルの実施や非競争的慣行、働きすぎ社員に見られる様な労働慣行や、輸出重視経済が輸入品の国内需要をまひさせていること、等に目を向けなければならない。

私達は、地域経済ブロックの形成の可能性も視野に含め、GATTでの成功を確実にすることにより、世界的自由市場経済を整えるべきである。それらの経済ブロックは、例えば北米自由貿易圏、EC、東アジア経済地域などを含むのである。

## ジェンダー

ジェンダーナイトでは、まず8人の参加者により、以下のようなプレゼンテーションが行われた。  
△人工中絶に関して、米国では賛成・反対の意見があるが、それらは社会的背景や経験に深く根ざしている。反対派が中絶は胎児の権利を侵害するものであると主張している一方、賛成派は中絶の禁止は女性の権利を侵害するものであると主張している。しかしながら、日本においては歴史的・宗教的違いにより、人工中絶は一般的に受け入れられている。例えば、仏教は一応反対の立場を取っているものの、米国の宗教団体のような政治的影響力をもっていない。

△レイプについては、米国の大学構内におけるレイプに対する論議が高まっている。ある統計によると、女子学生の6人に1人は在学中にレイプあるいは未遂の経験をする。米国ではデートレイプ、知人によるレイプ、夫婦間のレイプ、見知らぬ人のように分類して論じられるのに対して、日本ではそのような区別はなされておらず、議論自体が公の場ではあまりなされていない。

△同棲については、カップルごとに様々な意見があり、結婚、ライフ・スタイルなどに対する伝統的な考え方の違いにより、日本と米国では大きく異なる。日本においては結婚は当人同士だけでなく2つの家結びつけることを意味するが、同棲では、それが不可能となる。米国では同棲は結婚の準備段階とみなされている。同棲を不道徳とする見方もあるが、大多数の米国人はそれを容認している。

△また、日米両社会における男女の役割の変化についても論じられた。米国では男女の典型的な役割は変化しつつあり、政治的な論争となっている。日本でも同様に変化しているが、それは主に若い世代の間でのことである。

米国での男性問題は、男性の再定義、男性間のコミュニケーションの見直し、男性の役割の見直しなどが中心である。ここ数年メンズ・サポート・グループが大きな注目をあびている。日本では男性は強く感情を表さないといったステレオ・タイプを打ち破ること、労働時間を減らして、家族とすごし家事をする時間を増やすことが中心である。

日本では家事は女性の仕事と見なされている。若い世代はこの点についてより柔軟になってきているとはいえ、ほとんどの家事はいまだに女性によってなされている。結婚後も仕事を続けようとする女性の大半は、夫にも家事を共有してほしいと思っている。これはアメリカでも同様である。

日米両国において、女性が社会経済の中で大きな役割を占めつつある中、性的差別やセクシュアル・

ハラスメントはますます注目を集めている。女性の社会進出により、経営や交渉に違った視点もたらされるであろうし、そのことは相互依存の高まる社会にポジティブに貢献していくであろう。

プレゼンテーション後、1対1の日米のペアでのディスカッションが2回と、小グループディスカッションが行われた。ジェンダーについてのアンケートに対する回答によると、うまくいっている男女とは、彼らのしたいことをし、人生を楽しみ、幸せであると多くが感じていた。パートナー同士が尊敬しあい愛し合い信じ合える場合にその関係はうまくいく。お互いにとって有益なパートナーであるために働くことは、お互いを高めるといえる。

日米の間では、伝統的男女の役割についての感じ方が違っていたが、男女関係における問題を考えていく際には、もっと様々な点で、コミュニケーションの改善が可能だと参加者は感じていた。家庭内、社会での男女の役割を再評価しようという意見や、ステレオタイプをなくすために、差別についての教育や、社会の注目を高めようという意見が聞かれた。特にある日本側参加者は、組織的な人事部の中で働くことによって、また性別役割分業の現状改善、企業社会での役割交換を望む共働きの人々をサポートすることによって、不公平雇用の実状に挑みたいということを書いてきた。アメリカ側では、人種主義者に対するより厳しい処分、中絶についての自由な選択、そしてジェンダーによる差別を解決するために家庭内でジェンダーの役割について教育するなどの意見があがっていた。

以下にあげるのが参加者からのその他の提案である。

- ・ 日米それぞれのジェンダーの関係というのは文化的に束縛されているものだ。  
家庭で子どもを育てたい女性に反対はしない。男性が子育てを終えた女性に機会を与えないことには反対だ。
- ・ 組織の役職と政治にもっと女性を増やしたい。  
男女が一語になって働く機会があるようにしたい。  
もっとお互いの言葉に耳を傾けたら良いと思う。
- ・ 原因の多くは文化にあると思う。社会構造を変えなければ、ジェンダーによる差別は続くだろう。性差ではなく個人の能力・長所に価値をおく必要がある。
- ・ 女性は、男性との関係のプライベートなところから、みずからの状況を伝えて、それをメディアを通して公の意見にもっていきようにすべきだ。男性も、女性の問題ではなく自身の問題だと気付かなければならない。

## 結 び

この共同声明は、第44回学生会議の中で昼夜を問わず繰りひろげられた議論のごく一部を、会議及び学生の意見に関心を持たれる全ての方に向けて発表するものです。

「相互理解、友情と信頼を通しての平和の増進」という学生会議創設時からの理念のもと、参加者として私達は「地球共同体への一歩——今果たすべき私たちの役割」というテーマに立ち向かいました。声明に読みとれるように、いずれの議題についても全参加者があらゆる点で合意するというこ

はありませんでした。私達がここで目指したものは、それぞれの国の代表者として議論することでも、合意を求めることでもなく、それぞれの問題について各人が自らに問いかけ、会議終了後もその姿勢を保ち、あるいは次に向けて何らかの行動を起こすということだったのです。

さらに共同声明原文（英文）の結びには、「この声明は私達が学生をして国際外交の参加者であり、活動的なオブザーバーであることを認識させるものである。さらには世界の将来を導く責任のある者となることを心に刻む。」とあります。各人の体験に加えこの声明によって私達の今後の思索と行動はより活性化することでしょう。

＊要約（共同声明の原文は英語）：長野 宇能、比企野慶子、遠藤 繁  
増子 聡、野田 雄輔

## 補 遺

### THE JAPAN-AMERICA STUDENT CONFERENCE

日米学生会議

2nd Floor • 606 18th Street, N.W. • Washington, D.C. 20006 • (202) 289-4231 • Fax (202) 789-8265

---

#### Welcoming Remarks from President George Bush

*"I am delighted to send warmest greetings to the student-organizers and delegates from the United States and Japan who are gathered in Washington, D.C. for the 44th Japan-America Student Conference.*

*Since the first Japan-America Student Conference was held 58 years ago, hundreds of young people from our two countries have met to explore issues of common concern and to learn from each other. Whether its participants discuss the differences that make each of our countries unique or celebrate our many shared values and interests, this conference merits distinction for successfully upholding its motto: "Promoting peace through mutual understanding, friendship, and trust."*

*I commend all those who are associated with the Japan-America Student Conference for your dedication to strengthening the friendship that exists between our two countries. As I recently reaffirmed to Prime Minister Kiichi Miyazawa-- who has taken part in this conference on two occasions-- the American-Japanese partnership is as important and as vital as ever because of our mutual commitment to global peace and prosperity. I am pleased to know that you will be addressing these issues as you discuss the theme of this year's conference, "Exploring Our Responsibilities to the Global Community."*

*You have my best wishes for a memorable and successful conference."*

#### Message from Prime Minister Kiichi Miyazawa

*"As one whose own first involvement in Japan-U.S. relations was under the auspices of the Japan-America Student Conference in 1939, I can tell you honestly that it was one of the formative events of my lifetime. As Japan's Prime Minister, I am also aware of the key role that this enduring grass-roots exchange program plays in building the foundations that support our global partnership. Having stood in your shoes more than 50 years ago, I sincerely hope that you will take full advantage of your participation in the Japan-America Student Conference."*

---

OFFICE OF THE MAYOR  
WASHINGTON, D. C.

# Proclamation

## JAPAN-AMERICA STUDENT CONFERENCE DAY

JULY 29, 1992

WHEREAS, it is one of the responsibilities of the Mayor of the City of Washington, D.C. to recognize occasions of outstanding significance; and

WHEREAS, the District of Columbia has attracted and will host the 1992 Japan-America Student Conference; and

WHEREAS, it is a pleasure to recognize and welcome such an outstanding and unique activity to the City of Washington, D.C., as well as to herald the fact that this year's 44th Annual Conference takes place for the first time at an Historically Black University - Howard University; and

WHEREAS, Washington, D.C. salutes the 1992 Japan-America Student Conference, whose theme is "Promoting Peace through Mutual Understanding, Friendship and Trust";

NOW, THEREFORE, I, THE MAYOR OF THE DISTRICT OF COLUMBIA, do hereby proclaim July 29, 1992, as "JAPAN-AMERICA STUDENT CONFERENCE DAY" in Washington, D.C. and call upon all the residents of this city to join me in supporting this noteworthy activity.



*Sharon Pratt Kelly*  
SHARON PRATT KELLY  
MAYOR

City of Colorado Springs, Colorado

# Proclamation

## JAPAN-AMERICA STUDENT CONFERENCE WEEK

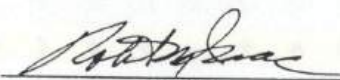
August 16-22, 1992

- WHEREAS, the Japan-America Student Conference (JASC) is holding its 44th annual month-long conference in July and August; and
- WHEREAS, 88 university and graduate students will join the 1992 Conference being held in Washington, DC, Nashville and Colorado Springs; and
- WHEREAS, the theme of this year's Conference is "Exploring Our Responsibilities to the Global Community"; and
- WHEREAS, founded in 1934, JASC is the oldest university exchange program between the United States and Japan; and
- WHEREAS, student organized and student run, JASC has contributed leaders to both countries who, after an intense month of interchange on U.S.-Japan issues as university students, are now making important contributions to the formal and informal dialogue between our two nations; and
- WHEREAS, JASC students will arrive in Colorado Springs on August 15 and will be in our city until August 23, 1992.
- NOW, THEREFORE, I, Robert M. Isaac, Mayor of the City of Colorado Springs, do hereby proclaim August 16-23, 1992 as

## JAPAN-AMERICA STUDENT CONFERENCE WEEK

in Colorado Springs and welcome the JASC students to our community.

IN WITNESS WHEREOF, I have hereunto set my hand and caused the Great Seal of the City of Colorado Springs to be affixed this 14th day of August, 1992.

  
Mayor



## 第44回日米学生会議：主催、後援、賛助団体

主 催 財団法人国際教育振興会

後 援 外務省

国際教育交換協議会 (CIEE)

日米文化センター

### 賛助財団

財団法人石橋財団

財団法人神戸日米協会

財団法人国際コミュニケーション基金

社団法人証券投資信託協会

社団法人信託協会

社団法人生命保険協会

財団法人日商岩井国際交流財団

社団法人日本医師会

社団法人日本歯科医師会

社団法人日本自動車工業会

社団法人日本証券業協会

財団法人庭野平和財団

財団法人三菱銀行国際財団

財団法人吉田国際教育基金

### 賛助企業および賛助者

旭硝子株式会社

株式会社あさひ銀行

アサヒビール株式会社

味の素株式会社

アメリカンエクスプレス

株式会社伊勢丹

伊藤忠商事株式会社

株式会社イトーヨーカ堂

エーザイ株式会社

エッソ石油株式会社

大阪ガス株式会社

株式会社大林組

オムロン株式会社

鹿島建設株式会社

カルテックス・オイル・ジャパン株式会社

川崎製鉄株式会社

関西電力株式会社

キッコーマン株式会社

九州電力株式会社

協栄生命保険株式会社

共同石油株式会社

キリンビール株式会社

株式会社神戸製鋼所

国際証券株式会社

株式会社さくら銀行

三洋証券株式会社

三洋電機株式会社

株式会社三和銀行

株式会社島津製作所

新日本製鉄株式会社

住友海上火災保険株式会社

株式会社住友銀行

住友金属工業株式会社

住友建設株式会社

住友商事株式会社

住友信託銀行株式会社

住友スリーエム株式会社

住友生命保険相互会社

住友不動産株式会社

株式会社西武百貨店

積水ハウス株式会社

セコム株式会社



ゼネラル石油株式会社  
ソニー株式会社  
株式会社第一勸業銀行  
第一工業製薬株式会社  
第一生命保険相互会社  
大正海上火災保険株式会社  
大成建設株式会社  
ダイハツ工業株式会社  
株式会社大丸  
株式会社大和銀行  
大和証券株式会社  
武田薬品工業株式会社  
株式会社竹中工務店  
中外製薬株式会社  
中部電力株式会社  
デュボンジャパンリミテッド  
株式会社電通  
東京海上火災保険株式会社  
東京急行電鉄株式会社  
株式会社東京銀行  
東京電力株式会社  
株式会社東芝  
東燃石油化学株式会社  
東洋信託銀行株式会社  
凸版印刷株式会社  
トヨタ自動車株式会社  
ニッカウキスキー株式会社  
日興証券株式会社  
日産自動車株式会社  
日高岩井株式会社  
日本アイビーエム株式会社  
勸角証券株式会社  
株式会社日本興業銀行  
日本航空株式会社  
日本信託銀行株式会社  
日本生命保険相互会社

日本電気株式会社  
日本郵船株式会社  
野村証券株式会社  
株式会社長谷工コーポレーション  
株式会社阪急百貨店  
株式会社日立製作所  
ファイザー製薬株式会社  
株式会社富士銀行  
藤沢薬品工業株式会社  
富士ゼロックス株式会社  
富士通株式会社  
富士写真フィルム株式会社  
香港上海銀行株式会社  
本田技研工業株式会社  
松下電器産業株式会社  
マツダ株式会社  
株式会社松屋  
丸紅株式会社  
三井信託銀行株式会社  
三井物産株式会社  
三井不動産株式会社  
株式会社三菱銀行  
三菱重工業株式会社  
三菱商事株式会社  
三菱地所株式会社  
三菱自動車工業株式会社  
宮澤喜一  
明治生命保険相互会社  
安田火災海上保険株式会社  
安田信託銀行株式会社  
安田生命保険相互会社  
山一証券株式会社  
山種証券株式会社  
雪印乳業株式会社  
株式会社ラインズコーポレーション  
株式会社ロイヤルホテル

## 第45回日米学生会議のお知らせ

第45回日米学生会議は1993年7月26日から8月22日まで4週間にわたり、東京・福岡・関西で行われる予定です。

日米学生会議は1934年、太平洋戦争の危機を感じた学生たちによる日米両国の平和への貢献という理念をもとに創設されました。以来半世紀以上を経た今、単なる二国間の相互理解を越えて、世界の調和と共生のために私たちがいかに行動していくべきかについても理解を深めて行きたいと思っています。学生として自分たちなりの解答法を模索していこうと、第45回の総合テーマは“Sharing Our Visions and Working for Harmony in the Global Community” 地球共同体への展望と実践～私たちのめざす調和、そして共生～としました。

会議はこの総合テーマの下、10の分科会ははじめ多くのプログラムから成ります。日米80名の参加者が、寝食を共にする約1ヶ月間の会議の中では、文化、生活習慣、価値観など様々な違いを経験することになります。これらの違いをお互い認めることが相互理解の第一歩となり、さらに学生という立場から素直な意見を交換することにより理解が深められることでしょう。

なお、分科会、フォーラム、ワークショップ、シンポジウムは以下のものを予定しています。

分科会：芸術と社会、法と政治、哲学と人生、現代のマスメディア、ビジネス、健康と社会、食糧と生活、今日の教育、科学技術の功罪—世界情勢への衝撃、経済開発

フォーラム：戦争と平和、被差別少数者問題、環境

シンポジウム：貿易、新国際秩序

ワークショップ：コミュニケーション、ジェンダー

以上の他に会議という枠を越えて社会へ知識と体験を求める為の現地研修や、日本の地域社会を知り、参加者同士の交流を深める為のホームステイやボランティア・ワーク、会議を通して得た理解を社会に向けて発表する共同声明などを企画しています。

第45回日米学生会議を共につくって下さる方々のご参加をお待ちしています。

第45回日米学生会議実行委員

日本側実行委員長 平竹雅人



第45回日米学生会議実行委員会

## 編集後記

第44回日米学生会議日本側報告書ができあがりました。編集作業が遅れ、関係者の皆様には大変ご迷惑をおかけ致しました。今回は「会議に参加しなかった方々にも疑似体験して頂けるような報告書」をテーマに編集しましたが、そのためには従来の報告書を再検討し、渡米前から構成のアイディアを出し合ったりすることが必要でした。

新しい試みに関しては、全く白紙の状態から始めなければならず、暗中模索でした。原稿も思うように集まらず、編集は停滞を余儀なくされました。しかし、この原稿の遅れについては、怠惰もあるでしょうが1つに「伝えたいことを上手く言葉に出せない」ということがあったようです。夏の経験から何を伝えてよいか考えさせてしまう。会議にはこんな側面もあるようです。

しかし、編集に携わる中でもいろいろな出会いがあり、発見がありました。特にこの報告書の作成にあたっては、レイアウト、字体、紙質といったことにまで及ぶ私たちの要望に対して、最大限実現するようにはからい、協力して下さった、くにたち工房の大野一男氏には感謝の気持ちでいっぱいです。

この報告書を会議に参加した全ての皆さん、昔学生だった頃何かに情熱を傾けて成し遂げた充実感を味わった方々、これから日米関係を自分のこととして考えようとしている方々、すべてに贈りたいと思います。そして会議実現に向けて様々な形で支えて下さった、主催の財団法人国際教育振興会の方々と賛助して下さいました財団や企業の方々にもこの場を借りて御礼申し上げます。

会議を創った一人の学生として、私は言葉では言い表せないほどのことを多く学びました。この経験を大切にしながら、いつしか学生であった頃を懐かしむようになった時、そっこの報告書を開き様々な思い出に身を委ねる贅沢を味わおうと思います。

遠藤 繁

### 第44回 日米学生会議 和文報告書

発行日 1993年5月15日

編集者	遠藤 繁	佐野日出之
	磯部 聡子	増子 聡
	長野 宇能	野田 雄輔
	比企野慶子	猪刈 由紀
	白石 史朗	松井 恵一
	堀部 智	リー・シルバーマン
	鳥越あすか	清水竜太郎

発行 〒160 東京都新宿区四ッ谷1-21  
財団法人 国際教育振興会内  
日米学生会議事務局

印刷 く に た ち 工 房